

---

# シノキズ - 織豊鬼伝 -

m+y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シノキズ - 織豊鬼伝 -

### 【Nコード】

N29150

### 【作者名】

m + y

### 【あらすじ】

一瀬今日也いちのせ こんにちは、生まれつきの灰色の髪と藍色の瞳を除けば、いたって普通の高校生。だが、言いようのない焦燥感とその理由を見出せない苛立ち、何かの予感のようなものを感じて生きてきた。

そんなある日の夜、人の姿をした人ではない化け物「鬼」に襲われ、気がつけばそこは……安土桃山時代。どういうわけか、約四百年前の日本にタイムスリップしてしまったのだ！

人の血を吸う生き物「鬼」と、彼らを狩る「鬼打隊おにうち」との戦いに巻き込まれながら、今日也は元の世界に戻る方法を探す。

だが今日也自身もまた、ある人物の生まれ変わりとして、鬼の歴史の中に深く関わっているのであった……。

本格的に小説を書くのも投稿するのも初めての初心者です。それでも温かく見守ってくれたら感謝です。感想ご意見随時お待ちしております。

## 〈登場人物紹介〉（前書き）

キャラクター紹介ということにはしていますが、若干ネタ明かししてしまっているのでご注意ください。m + yが堪え性のないものですから；ここはスキップしていただいても全く支障はないと思います。

m + yの文才のなさ故に「登場人物が多い！ 話の流れについていけない！」となった場合にこの章で確認していただければ幸いです。

## 〈登場人物紹介〉

いちのせ  
一瀬 今日也

この物語の主人公。那覇で母親と二人暮らしの高校三年生。生まれつきのグレーの髪と藍色の瞳をもつ。言いようのない焦燥感と苛立ち、何かの予感のようなものを感じて生きてきた。ある夜、「鬼」に襲われ、気がつけば四百年前の安土・桃山時代にタイムスリップしていた。現代に戻る方法を探す中で、戦いに巻き込まれていく。真っ直ぐで根の真面目な性格で、動体視力と反射神経が異様なくらいに優れている。

\*

えんじ  
沿寺 丹優

この物語のヒロイン。鬼打隊おにうちの創始の頃から携わり、「揺り籠」からの長きに渡る知識をもつとされる沿寺家の当主。薬学に長け、鬼を救う手立てを探し続けている。元貴族の出で、聡明で心優しく一途な、可憐な少女。帰る場所のない今日也に手をさしのべる。

\*

かじ  
加治 張

元鬼打隊（実動班）の一員。常に覆面をしているためその素顔は

分からない。短気で口は悪いが、熱い一面も見せる。腕つぶしの強さは確かで、大矛「火竜」を片手で軽々と扱いこなす。用心棒などの仕事をしながら、丹優の元に身を寄せて暮らしている。

\*

高村 成実  
たかむら なりさね

先代副隊長を伯父にもつ元鬼打隊の一員で医者。父親が異人、母親が日本人のハーフ。自身が編み出した「高村活心流」の使い手で、木刀と柔術で戦う。皆からは「なるみ」と呼ばれている。賑やか好き悪戯好きな自由人で、ムードメーカー的存在の青年。でも、どこか一裏ありそう……。

\*

右手 周助  
うでて じゆうすけ

先代副隊長を伯父にもつ、元鬼打隊（隠密班）の一員。諜報や追跡に長ける。伯父から受け継いだ、突きに特化した流派「右手鳴雷流」の使い手。勝気で活発な性格。ちなみに、成実のいところにあたる人物である。

\*

刀納 宗一郎  
やしの せういちろう

鬼打隊軍師にして、隠密班を束ねる立場にあつた人物。一撃必殺の「刀納暗殺流」を扱う。当時の鬼打隊隊長に深い忠義を感じており、隊を第一としてきた。美青年だが常に無表情で、性格も寡黙で四角四面、その実思慮深い。原因不明の病気により徐々に視力を失いつつある。

＊

鬼頭 慶史

タイムスリップした今日也が最初に出会い、彼の命を助けてくれた青年。呉葉という少女と日本各地を放浪している。鷹揚でマイペース、面倒見の良い性格。争いごとを好まず、峰刃の刀を用いた、防御・捕縛中心の「近衛兵流」を扱う。丹優や鬼打隊のメンバーとも顔見知りのようだが……？

＊

宿地 走真

再三今日也が似ていると言われた少年。今日也の前世とされる。先代鬼打隊長の養子で、丹優の護衛を勤めていた。小太刀と盾のついた手甲で戦う「零式流」の使い手。文武芸道多岐に優れるだけでなく、鬼の気配を数里先からでも察知できた。我侂で皮肉屋だが、実際は根は優しく不器用なだけ。没年十八歳。

＊

秋臣 あきおみ  
一 はじめ

鬼の大元 元シの一角「秋臣」の生き残り。群青鬼側についているが、気分屋で奔放としており、今のところ今日也たちに害を加えようとはしていない。飄々として人を喰ったような性格。居合いの達人で、「鬼立一刀流」という抜刀術の流派を扱う。鬼化すれば血が猛毒に変わる。

\*

坂本 徹 さかもと とおる  
「荒高」 あらかたか

元鬼打隊実動部隊班の長で、剣豪とまで呼ばれた人物。日本刀二振で戦う「灼向二刀流」を扱う。刀の鍛冶技術にも優れ、また走真の教育係でもあった。今はシとなって群青鬼側についてしまっている。唯我独尊、自信家で好戦的な性格。

\*

土方 七曜 ひじかた しちよう

群青鬼のシにして、現在の緋力の研究における第一人者。屈強な体躯の修行僧のような男だが、物静かで厳格、主に対しての忠誠心に厚い。また、先見や人の心を読むことに長け、長刀を駆使して戦う。



\*

群青鬼 ぐんじょうき

不死身とまでいわれる元シの一人。息をのむ程の絶世の美女で、その瞳は青い。鬼や緋力の元手とされる人物。その美しさや少女のような無邪気さや無垢さとは相反して、同族以外には極めて冷酷で残虐。

## 〈登場人物紹介〉（後書き）

それぞれのキャラの詳細は、《キャラクター紹介》でもぼちぼち載せています。

お話を読まれていない方にはネタバレになったりもしますが……興味がありませんでしたらそちらもどうぞ！

一話 始まりと呼ぶにはあまりに不遇（前書き）

はじめまして。 m + yと申します。

「シノキズ - 織豊鬼伝 -」は m + y の処女作になります。ちなみに「織豊鬼伝」は「しよくほつきでん」と読みます（織田&豊臣の時代を指す言葉ですね）。

小説の本格的な執筆&投稿は初めてで至らないところもたくさんあると思いますが、少しでも興味を持って下さる方がいらっしやれば嬉しく思います。

それでは「シノキズ 織豊鬼伝」、どうぞ。

一話 始まりと呼ぶにはあまりに不遇

よく研がれたナイフのような爪が、俺に振り下ろされる。

直撃したら、まず間違いなく頭部がパツクリいくなあ……なんて、他人事みたいにぼんやりと思う。

人生つて、思いがけず不遇。

こつこつ最期ってアリかよ……。

……ん？

そもそも、いつから始まっていたんだっけ？

【今日也】

燃え上がる炎。

肌をなぶる熱気。

怒号と悲鳴。

赤焼けの空。

むせ返るような血の臭い。

赤黒い血溜り。

頬をそつと何かが撫でた。

ひとひらの雪の欠片。ああ、そうか。初雪か。

そして、微かに響く、慈しむような声。

「 タンユウ」

「 いちのせえええええつ！！」

「 タンyどうわっ!？」

降って沸いた怒鳴り声と後頭部への衝撃に、俺、一瀬いちのせ今日きょう也やは思わず間抜けな声を出してしまった。半分覚醒、半分まだ寝ぼけた状態で、それでも反射的に体を起こす。そこには

ゆらり。怒りのオーラをバックに俺の席の脇に立つ、仁王立ちの担任の姿。片手には出席表のバインダーを持っている。

蒸し暑さで汗ばむ頭をおさえた。じんじんと痛む。ああ、あれで叩かれたわけか……って、絶対角で叩いたたる教育委員会とかPTA訴えるぞ。

教室内からはかみ殺した笑いがこぼれる。前の席の関口せきぐちはやれやれといった様子だ。

「 やっとお目覚めか」

「 ……あ、はい、おはよう、ございます……?」

「 もう帰りのホームルームなんだよ。金輪際寝んな一瀬」

「 ……す、すいません?」

「 目を閉じて考えてただけです!」なんて、今日び小学生ですら言わないか。一瞬ひらめいた言い訳は、喉の奥に押し込めておいた。担任は俺を鋭く一瞥して教卓に戻り、何かの話の続きをし始める。時期も時期だから、進路とかそのあたりのことだろう。

「 おい、関口」

俺は姿勢を低くして前の椅子を足で小突く。関口が肩越しに視線をよこした。

「何かあつたら起こせって言っただろ」

「いや、こんな最後の最後で寝るとは思わねえってフツ。しかも何回も起こそうとしたっての」

関口も小声で返してきた。

関口とは高校一年からの付き合いだ。初めは俺のことを怖がつてた節があつたけど、今ではその第一印象はすっかり払拭された。

「何のために後ろ兼お前の席の近くにしたらと思ってんだよ、クジ改ざんしてまで」

「……って、あの席替えの時イマイチ数が合わなかったのはお前のせいかよ！」

俺は人差し指を口の前に突き出す。静かにしろ、のサイン。関口も渋々声のトーンを落としたりした。

「というか今日也、お前最近居眠り多すぎねー？ 世の受験生が知つたら怒り狂うぞ」

「うーん、寝不足気味なんだよ、ここんところ夢見が悪くて。そういうわけだから 友達なら俺の学校内での昼の安眠を守れ」

「俺は専属のモーニングコール係か！」

それはそうとき、と関口はもう諦めたように続ける。

「何なんだよ『タンユウ』って。お前毎回寝言で言ってるけど？」

「そんなの、俺が聞きたいっての」

苦笑しながら、ぼそりと俺は呟いた。

部活帰りの、夕方七時半。

俺と関口は取りとめもない話をしながら帰路についていた。関口が押す自転車チャリの車輪が小さく鳴っている。

もう秋もたけなわだというのに、ここ、那覇ではまだ夏の余韻が色濃い。制服移行期間ということもあつて着ていた長袖のシャツを捲し上げ、ネクタイを思いっきり緩めても……暑いものは暑い。

「鬼センにますます嫌われたなー、今日也」

からかいの口調を含ませて関口が言った。無関係だと思つて。

鬼センつていうのは、俺たちの担任兼生活指導のニックネームだ。厳しい、怖いで有名だから「鬼先生せん」というわけだ。

俺は別にそこまで思わないんだけどなあ。むしろこの草食系の教師陣の中でよくぞあんなタイプが生き残っていた、ジユゴンと並んで国の特別天然記念物に指定されるべきだろ、とまで思っていたり。

「元々だろ。これ以上落ちるところないって」

それに慣れてるといえば、慣れている。関口の話に相槌を打ちながら、俺は内心そうこぼしていた。

……髪も目もこんなだし。

上目で自身の前髪を見やれば 見事なグレー。正真正銘の地毛。生まれつき瞳も若干青い。カラコン入れてるんじゃないかってよく言われる。

この外見のせいで、俺は昔からよく目をつけられた。主には先生と、後は不良とかに。



その上小さい頃から、予感にも似た焦燥感と不安が付きまとっていた。おかしな夢も同様に、だ。

特に酷かったのが中学時代。父親が亡くなった翌年のこと。その言い知れない苛立ちを外に向けていた時期があったのだ。そのせいで、今でも俺には「不良」のレッテルが残っている。

うーん、何ていうか、生き急いでたのか？ 盗んだバイクで走り出したい、壊れかけのレディオな年頃だったのか？

とにかく、それも徐々に落ち着いてきて。母親の梗子（いしご）さんとの二人暮らしも慣れてきて。そこそこ良いとこの高校に入って、相変わらず一部の教師と不良に目をつけられながらも友人たちもできてまあまあ普通の生活を送れるかなと安堵していたら、最近またあの変な夢を見るようになったのだ。

内容は覚えていない。ただ「タンユウ」という単語だけしか。

（タンユウ、うーん、タンユウねえ……）

「おい、おい、今日也！」

関口に呼びかけられて、俺ははっと我に帰る。チャリのベルを鳴らしまくりながら俺を呼んでいたみたいだ。近所迷惑だぞチリンチリンチリンチリンやっけると。

「……あ、ごめん。何だったっけ？」

「はぁー、聞いてないと思った」

気づけばちょうど俺たちがいつも分かれる道まで来ていた。関口はチャリに跨りながら俺に念を押す。

「明日大会なんだからな、寝坊すんなよ」

俺も関口も同じ陸上部だ（俺は走り高飛び、あいつは中距離専門だけ）。3年はそろそろ引退試合や最後の大会を迎える時期なのだ。

関口は、じゃ、と軽く手を挙げてペダルを踏む。俺も「ああ」と答えてその背中を見送った。

いつもと変わらない軽い挨拶。

別れって、そんなものだ……。

辺りの電灯がとつくに点く時間帯を迎えている。

俺は膨らんだスポーツバッグのストラップを肩にかけ直す。と、そう行かないうちに、ズボンのポケットに入れていた携帯が小さく振動した。取り出せば、液晶画面の「一件メールあり」の文字が眩しい。開くと予想通り、梗子さんからだった。

『From: 梗子さん』

件名: そうめん

ソーミンチャンプル作るつもりだったのに、そうめん買うの忘れちゃった。

ごめんけど買ってきてくれる？（笑）『

……。

『From: 今日也』

件名: Re: そうめん

了解です。帰り少し遅くなるかもしれないよ』

ソーミンチャンプルー作るのにそうめん買い忘れたって。そんなのアメリカンドッグにソーセージがないみたいなので、チャーハンのご飯抜きみたいなものと同等だろう。この人どこまで天然なんだ。というか（笑）で済ますなよ。

そこでふつと笑いが浮かんで、俺は携帯を閉じた。

でも、あんな風に抜けてのほほんとしているようで、親父が死んでから俺を女手一つで育ててくれた。案外しつかりしているのだ、この母親は。

さて。スーパーか、はたまたコンビニにという手もあるが、このまま行くと遠回りになる。近道するか、と俺は方向転換をした。そのまま裏道へ。

薄暗い通りの端には、放置された自転車が十数台。チラシやら空き缶やらのゴミが散らかっている。頼りない電灯の明かりには羽虫が群がる。人通りはない。

平たく言えば、いかにも「ここは夜は女性一人では危ないですよ！」と言わんばかりの裏道だ。男の俺が痴漢だの変質者だの気にする心配はないんだけど。

だが、ここを抜けたら近くのスーパーの裏側に出られるのだ。ピバ、ローカル人の知恵。

意味なく転がっていた空き缶を蹴る。

少し急ごうか、その分夕飯が遅くなるし。部活後の空きっ腹を感じながら、俺がもう一度バッグを肩にかけ直そうとした時

その時、何かの違和感に触れた。

俺は思わずペースを落とす。歩く度に、その先の闇の濃度が増えていく気がして。

辺りの空気が急に凍りついてしまったかのような。音が潮のように引いていく。

誰もいない暗い通りの、さらに暗い場所。

放置自転車の陰。

丁度、さつき蹴った空き缶が転がっていったあたり。

俺は立ち止まって、無意識にそこに視線が留まって目をこらす。

「……！」

突如、影がゆらりと蠢いて立ち上がる。そこに沈むようにして蹲まっていたらしい。

俺は驚いてびくりと肩を震わせた。

沈殿した闇にゆっくりと浮かび上がるように、「それ」は俺の前に現れたのだった。

……それは、人？ けれど、普通の「人」には見えなかった。

くたびれたパーカーとズボンを着た、一見ホームレスともとれる小柄な男。目深に被っていたフードがはらりと落ちる。

その顔は、暗闇の中でも分かるほど白く、頬はこけ、目元は落ち窪んでいて、生气というものが感じられない。何よりも目を引いたのは、不気味な程に光る青白い瞳だ。

そいつはニツと笑う。否、笑ったのではない。その口から覗くのは剥いた牙だ。人間の犬歯というよりは、肉食獣のそれを連想させた。

まさしく、「化け物」と言うにふさわしい相貌だ。

そいつはふらふらと覚束ない足取りながらも、俺の方ににじり寄ってくる。自転車に当たってガシャンと音を立てる。

お、おいおいおい、何だよこいつ。

何でこっちに来てるんだよ。

まずい。ヤバイのに遭遇した。

逃げる。

逃げる逃げる逃げる！

頭の中で警鐘が鳴り響く。本能が危険を知らせているのに、焦りと相反して体は硬直してしまっていた。足は地面に縫い付けられたかのように微動だにできない。

そうこうしているうちにも、それは近づいてくる。まるで、恰好の獲物に狙いをつけた猛禽類のような目つきで。

そいつと俺との距離は、十歩程。

血の気が引く。

鼓動が早くなる。

息ができない。

それでも、その眼から視線を逸らせない。仄青く発光するその眼から。

不思議なことに　パニックになっている俺のどこかで、この状況を冷静に傍観しているもう一人の俺がいた。

後、七歩。

( 何を怖れている？ )

奴は枯れ木のような両手を伸ばす。袖口から覗くその指先に生える爪もまた鋭利で、手全体は赤い結晶のようなもので覆われている。

後、五歩。

( 焦りも、不安も、不可思議な夢も、そうだろ？ )

( ずっと前から、あんたはこれを予感していた筈だ )

やっとの思いで足を動かしても、実質半歩後ろに下がっただけにすぎない。

( それがようやく始まるに過ぎない )

奴は一度体を引く動作を見せ……その瞬間

( さあ、変わるぞ。全てが )

何の前触れもなく俺に飛び掛ってくる！

それまでの緩慢な動きは消えた。突進してきたのではない。それこそ一足飛びで俺の元に飛び込んできたのだ！

「……っ!?!」

その牙が、爪が、飢えた視線が、全てが俺に向けられている。

直面した死の感覚と、溢れるばかりの野生の殺意が肌に突き刺さる。

凶器と狂気が迫ってくる。

その一連の動きは、きつと目にも留まらぬ速さなのだろう。だが俺には全てが、スローモーションのように感じられていた。

よく研がれたナイフのような爪が、俺に振り下ろされる。

ああ、俺

死んだわこりゃ。

一話 始まりと呼ぶにはあまりに不遇（後書き）

……ソーマンチャンプル。国語の「ヤドカリ探検隊」を読んでか  
らずつと食べてみたかったんです（笑）

m + yの拙作を読んで下さり、ありがとうございます！  
これからもどうか温かく見守って下さいませ。

ちなみに、アドバイスを受けてこんな感じのロゴも作ってみました

> i i 3 0 0 3 0 — 2 7 2 7 <



## 二話 タイムスリップ？

「じついつの、何て言うんだっけ？ えーっと、そう

まさに、「青天の霹靂<sup>へきれき</sup>」だ。

### 【今日也】

目の前で、一瞬の火花が散った。

鼓膜を震わせたのは金属が打ち合う音。

眼前で寸止めされた鋭い爪先と、俺の皮膚に触れるか触れないかのぎりぎりでそれを受け止めた、銀色の物体。

何が起こったのか、すぐには分からなかった。

ふっと足に力が入らなくなってその場に尻餅をついてしまう。耳の端で、滑り落ちたスポーツバッグの重い音がした。今で落ちてしまったのか、足元には伊達眼鏡（目の色のカモフラージュ用）が

転がっている。

「……………?」

俺と、さっきの化け物の間に、立ちふさがっている人物がいる。

男だ。背はそこそこ高い。着物を着てい

「おい、あんた!」

「はいっ!?!」

急にその男から声をかけられて、俺は条件反射で返事をしていた。その人物が喋れるということすら、頭からすっかり抜け落ちてしまっていたのだ。声からして、まだ若い。

「怪我は?」

「ないです! と思います……………?」

「そりゃ何より!」

その語尾と共に、男は腕を大きく払う。再び金属の甲高い音を立てて、続いてジャラという音がして、あの化け物は大きく後退した。そこでようやく気がついたが、どうやらその男が持っているのは……………刀? 刀だ。それも日本刀。

つ、つまりこういうことか あの怪物の爪が俺の頭を切り裂く寸前に、あの男が日本刀で受け止めてくれて、鏝迫り合いの末に化け物が押し負けて弾き飛ばされた……………?

それはバランスを崩しながらも、獣のように四つ這いになって地を掻き、踏み止まった。再び、ぐわつと牙を向く。もう一度飛び込んでくる それを予感させた矢先!

肉を貫く鈍い音がした。

「ギイイイイイヤ、ア……………」

苦痛の呻き声を上げて身悶えたのは、その化け物だった。

何が起きたのか　それはそいつの首から、男の手の中にある刀へと視線を辿らせれば分かることだった。先ほどの「ジャラ」の音の正体だろうか、刀の柄には鎖がついていて、その鎖の先には小刀がついている。さつき男が大きく腕を振り払った瞬間にその鎖を操り、先端の小刀をあゝの怪物の首に命中させたのだ。

間髪入れず男は後ろに回りこむ。

俺の耳に、ぽつりと漏らした男の言葉が届いた。そんな気がした。  
「……ごめん」

そして、刀身をそいつの首根に叩き込む！

一瞬の出来事だった。

ガツともバキツともいえない音が響く、一発で首の骨が折り砕かれた音が。

「ガツ……」

短い悲鳴を上げ、そいつは地面に吸い込まれるように倒れ伏した。死んだ、のか……？

その時、不思議なことが起きた。

その倒れた体に徐々に輝ひびが入り始め、すぐに鋭い音を立てて砕け散ってしまったのだ。ガラス片のように粉々に。その破片はまるで血そのもののように赤い。そして一陣の風に吹かれて、赤い灰とも塵とも砂ともいえない姿になって崩れ落ち、夜の空気の中に溶け込んで消えていったのだ。最早跡形もない。

息を吐き出す。自分が息をすることさえ忘れていたと気がつく。

状況はよく分からないが、それでもとりあえずは助かったという安心感からきた錯覚なのだろうか。その消え失せた最期を見ていると、俺はなぜか心の隅に悲しさともやり切れなさとも言えない感情がこみ上げるのを感じたのだった。

鏝鳴りと、鎖を巻き上げる音がした。

「心配がすると思って来てみたら……」

その奇怪な死を見届けた男は、刀を腰にさした鞘にしまって、溜息混じりに小さくこぼした。その視線を、未だに腰が抜けている俺に移す。

「あんた、本当に怪我してないか？」

「し、してないです……」

「どつか咬まれたり引っ搔かれたり斬られたり……」

「いや、大丈夫です」

「ならいいけど。極稀に、そこから感染うつする場合もあるから」

男はそう言って俺の前にまでやってくると、屈みこむようにして左手を差し出した。俺は反射的にそれを掴んで、ようやく立ち上がることができた。

「あ、あの」

「ん？」

「助けてくれて、ありがとうございます……？」

「ああ、いいってことよ」

男はにかつと笑ってみせた。

「にしてもあんた、何かおかしな格好だしさ」

「は、はあ……」

いや、おかしいってスタンダードな学生服だと思っただけ。

「こんな時間に」

まだ夜の八時過ぎだろ。若者から言わせれば街に繰り出してこれからが本番オールナイトだぜ、みたいな時刻じゃないか？

「一体、何してたん……」

不意に男の言葉が途切れる。丁度、雲に隠れていた月明かりが俺の目元にかかっていた。

「……あんた、その髪、その目……」

男は目を見開いていた。

あ、そっか、暗かったからよく見えなかったのはあっちも同じだったのか。確かに……変わった色ではあるけれど、別にそんなに食い入るように見る事とか？ ブリーチしてるとかカラコン入れているとか、粋がってるねー少年、くらのノリで流してもいいんじゃない……？ それよりもさっきの何かよく分からん化け物との戦いに動揺するべきだろ。

何ともいえないこの間が、次第にいたたまれなくなってくる。

「あの！」

俺は思わず声を上げた。もう限界。

「助けてもらって悪いんですけど、俺もう帰らないと」

もの凄く失礼ではあると思ったが、俺の第六感が「これは面倒ごとになる前に早々に立ち去るべし！」と告げていた。

何か嫌な予感！ さっき起きたことは夢、幻覚、最近の寝不足のせい！

男が喋る隙さえ与えず、俺は慌しく眼鏡とバッグを拾って、それ

じゃあありがとうございます、と足早に立ち去るごと

ジャリ

……じゃり？

咄嗟に自分が立っている足元に目を落とす……何故に、土？ 地面？ ここ、コンクリートの道だったのでは？

そこでやっと俺はこの状況の変化に気がついた。はっと顔を上げる。

俺の急な言動に目を瞬かせていた男の背景。それは、夜空の下、雑木林と隣接する、ひっそりと息を潜める人気のない家通りだった。どういうわけか、全てが簡素な木造の長屋みたいな家ばかりだ。

一瞬、京都の映画村を思い浮かべたりもしたが、それにしても、ところどころ寂れてるっていうか。それ以前にここは沖繩だし………て、はあっ!？

慌てて後ろを振り返れども、そこに俺が先程まで歩いて来た通りはなく、もちろん電灯も電柱も放置自転車もなく。同じような質素な家が並ぶ通りがあるだけだった。

……え、嘘だろ、おい。

……いや、ないないないっ！

おいおいおいおい、これは何かの冗談か？　じゃなきゃ悪い夢か  
関口起こせこのヤロー！

俺は再びがばつと男の方に向き直る。頭の中が既にオーバーヒート状態の俺は、よほど凄い剣幕というか形相だったのか（傍から見ればただの変人）男は目を丸くしている。

そ、そういえば、こいつ着てるの、着物じゃん……。さっきはスルーしてたけど。着物に刀って……。これは何かのよく分からないコスプレなのか！？

「こ、こ、ここは……？」

まるで壊れた機械みたいな片言しか出てこない。口の中が乾ききっている。

男は呆けたような心配するような顔をしていたが、特に不快そうな態度をとるでもなく答えてくれた。

「ここ？　山城だけど？」

「やま、しろ……？」

「そう、山城」

（どこだよそれーっ！？）

心の中では絶叫を上げていたが、実際は口をぱくぱくと動かしているだけ。

「えっと、ここは、那覇じゃ……？」

「……なは？」

「いやいやいや、那覇ですよ、那覇！　沖縄の！　日本の最南端の

島！」

「おきなわ……?」

男は首を傾げたままだ。あんな地理の日本の県名問題で、北海道とならんで誰でも即答できるサービス問題の県を知らないのか?!? 「んー、最南端って……薩摩とか大隈しかおれは知らないんだけど」 さつま? おおすみ? それこそ知らねーよ! た、頼むから日本語で話してくれー!

……ちよつと待てよ。「さつま」はどっかで聞いた気が……。  
確か、時代劇とか大河ドラマで……。

背筋がすつと冷たくなる。嫌な予感しかしない。  
いやまさか。  
でも。

でも、考えられる可能性は……。

……タイムスリップのわあああああつ!

言わんぞ、てこでも口に出さんぞ! 言ったら最後、そんなファンタジーを認めてしまうことにいいいいいい!

「人間光より早く移動できたら時を越えられるらしいよ」なんて話程度にしかそんな現象頭の中に留めていないというに!

大至急事実確認! 俺は拳手をする。

「……あの」

「ん?」

「今、何時代ですか?」



一瞬の間。

「ん？」

「いや、今何時代ですか!？」

「何時代と言われてもなあ……………」

男は人差し指で頬を搔いた。そういえば、何とか時代って後々誰かがつけたんだっけ？

「天正ではあるけど」

頼むから西暦で言ってくれー!! その前に平成はどいつた!？

だ、だったら

「えーっと、なくようぐいす平安京っ!」

とにかく片っ端から有名どころを言っていこう。数打てば何とからだ。

「随分昔の話を持ち出すなあ」

「……………つ、じゃあ、江戸! 幕末! 明治維新!」

「……………?」

行き過ぎたかつ!？

「織田信長!」

「あれは四、五年前に本能寺で死んだだろ」

惜しいっ! でもよし近づいてきた!

「豊臣秀吉!」

「ああ、それなら知ってるけど……………。大閤を呼び捨てかよー」

ははは、と男は笑った。

「……天下統一は!？」

「まあ、したって言っただいいんじゃないのか」

「……」

と、いうことは……？

戦国時代よりも後、江戸時代よりも前ということか？ 懸命に頭の中から日本史の知識を引っ張り出す。残念ながら俺が取っているのは世界史なもんで。

確か豊臣秀吉のいた時代は「安土・桃山時代」。徳川幕府が出来ていない様子からして、つまり、豊臣秀吉の、天下統一前後の時代……？

信じられないだろうけど。

理由もさっぱり分かんないけど。

俺は、どうやら、約四百年前の「安土桃山時代」にタイムスリッブしたようだった。

こんな、さんはいつ！ みたいに急に飛んでいいものなのか！？  
もっとこう、時空の歪みとか、突然の光とか、未来に行く車とかね……。

いくらなんでも設定に無理がありすぎるだろ……。

俺は、ははつと乾いた笑いをこぼすしかなかった。マジで笑えないけど。

## 二話 タイムスリップ？（後書き）

てなわけで、主人公は気がつけばタイムスリップしてました（笑）  
ちなみに今日也がタイムスリップした時代は、安土桃山時代の天正  
15年（1587）という設定です。

き むかしむかし…… (前書き)

「むかしむかし……」シリーズは、本編とは別に進行しています。

壹 むかしむかし……

【呉葉】

昔々、まだこのお国の中心が平安の都にあった頃のお話。

ある時、海の方こうから奇妙な石造りの箱が渡ってきて、人々はそれを「揺り籠ゆかりかご」と呼ぶようになりました。

そして、その「揺り籠」を開けたことによって、やがて五体の鬼が生まれるのでした。

それが、そもそもの始まり

鬼の、シの、緋ひ力の、鬼打隊おにうちの、長きに渡る人と鬼との戦いの、そしてわたしたちの……。

全ての、始まりだったのです……。

### 三話 新世界

一瀬今日也<sup>いちのせ きょうじ</sup>。高校三年、十八歳。  
ただいま安土・桃山時代にタイムスリップ中。

「神の行いは時に、人の理解も予想をも超える」？

……超えすぎだろ、いくら何でも。

【今日也】

俺が思っていた以上に、神様とか運命っていうのは理不尽にできているらしい。

そうでなければ、学校帰りにスーパーへちよつと楽しんで近道しようとした少年に、「化け物の襲撃」や「タイムスリップ」なんて仕打ちはしない筈だ。

俺の命の恩人。あの後、そう呼ぶべき例の男に「立ち話もなんだから」みたいなノリで引つ張って連れて行かれ、しばらく歩いてたどり着いたのがここ。

あちらこちらの提灯の明かりと、賑やかな声や音色で満ちた通りの一角。辺りには店が立ち並んでいて、先程の寂れた家通りとは対照的だった。夜空の月も、心なしか遠くなった気がする。

人の通りも多い。やはりというべきか、みんな着物を着ていた。それを見てしまえば、タイムスリップを嫌でも認めざるを得なくなってくる。夢と片付けるには、感覚も周囲の景色もはつきりしすぎていた。

ついでにもう一つ言わせてもらえば。

(……何か俺、浮いてないか？ 存在全てにおいて) さつきから、好奇と驚きと薄気味悪さがない混ぜになった不躰な視線をひしひしと感じているのだ。その気まずさの一因でもあるグレーの髪をがしがしと掻いて、今や俺の全財産となったスポーツバッグを抱え直す。気分はまさに公開処刑の当事者。

ふと、少し先のあの男の背中を見遣る。

ここに来るまでに軽い自己紹介は済ませてあった。

男の名は慶史<sup>けいし</sup>。苗字は「きとう」だと言っていた。

提灯の淡い赤や橙の光の下に映る姿は、男というよりは、青年という方が正しいかもしれない。

鳶色の髪を頭の上で一つにまとめて結っている。濃い緑の着物に毛皮の袖なし(現代で言うならチョッキ?)、暗い茶の野袴(ズボン?)の格好だ。右腰に挿してあるのは、先程の鎖のついた日本刀。

じっくり見たわけではないけれど、女性好きのする人懐こそうな顔立ちをしている。それでいて、きりつとした眉と着物から要所要所覗く締まった体がどこか精悍そうな印象も与えた。

慶史（気楽に呼んでくれ発言があったので遠慮なく）は、刀の柄に手を預けて、随分リラックスした様子で歩いている。

それにしても、と俺はもう一度周囲を見回した。何かこう、時代劇の宿場町というか花街のワンシーンを思い出させるなあ……花街！？

「おー今日也、二二二、二二二」

呼びかけに慌てて視線を戻せば、慶史は指をさした宿屋に入っていくところだった。見たところそこそこ大きく立派な所だ。

俺は多少戸惑いながらも慶史の後を追った。

それから少しして。

慶史が泊まっているらしい一室で、俺たちは少し距離をとるようにして向かい合わせに座っていた。

小奇麗に整えられた室内にはぼんやりと明かりが灯っている。奥にもう一部屋（寝室だろうか？）あるようだが、襖が閉まっている中の様子は伺えない。

荷物を隅に置いて、俺はとりあえず正座。慶史は慶史で、刀を脇に置いてのんびりと胡坐を掻いている。

そうこうしていると横の襖が開いて、女中さんらしき人が一礼して入ってきた。慶史と俺、それぞれの前に料理ののった膳と、銚子



と盃を置いていく。慶史が「ああ、後は自分ですから」と言つと、また静かに一礼して出て行つた。

襖が完全に閉まり切つた時、戸の向こう側のこそそとした声を拾い、無意識に耳を敬そなたてる。

(何です、あの可笑しな格好をしたかげまは)

(さあ、でもきとう様は倍払つて下さっているのです……)

(……『かげま』?)

かげまかげまかげま……はて、どこかで聞いたことがあるような、ないような……。悪口を言われているんだろつな、とは分かるのだが。

直後、俺の頭の中の広辞苑がばんつと大々的に開かれる！

陰間かげま 男しようち、ちがああああうつ！！

「ご、誤解です俺は別」

「待てつて！」

「にうわつ!?!」

慌てて立ち上がり襖を開けようとした瞬間、急に足を引つ張られて俺は前のめりに倒れこんだ。そのせいで鼻の頭を強かに打つて、ちよつと涙目になる。

さっきまで飯だ酒だと喜んで座っていた筈の慶史が、俺のズボンの裾を掴んだことが原因らしかった。いつの間にかこっちに来たのやら。

「脅かすなよでかい声だして」

「いや、でも、俺、陰間そんなんじゃな……」

「言わせとけつて」

「言わせとけないって！ 俺の中の男としての何かが失われる気がするー！」

ファンタジーの次はBLか！？ 意地でもそんなストーリーにしているものかっ！！

「隣の部屋で寝てるんだって」

誰が？ と問うのは忘れていたが、とりあえず誰かが就寝中ということで、俺は体を起こして渋々ながら大人しく座った。それを見届けて慶史も膳の前に座り直した。「忙しい奴だなあ」と小さく笑いながら、手酌で酒を飲み始めている。

「とりあえず食べよ。話はその後だ」

はあ、じゃ、じゃあ、お言葉に甘えまして……。

俺は流されるままに、いただきますと手を合わせて箸を取るのだった。

普通に考えれば、襖の向こうの歩き去っている女中の声が聞こえるわけではない。いくら現代のと比べて造りが薄いにしても。

それなのになぜ聞こえたのか。そして慶史にも聞こえていたであろうこと。その時は頭が一杯過ぎて、俺は不思議にさえ思わなかった。

「なあ、その刀って……本物？」

「ん？ あー、本物が偽者が微妙なところだな。峰刃だから」

「……へえ」

何だか見慣れない和食を租借していたが、はつきり言って食欲は沸かないし、実際何を食べているのかもよく分からなかった。未成年だから、もちろん酒の銚子にもノータッチだ。

時折会話を交わしながら、しばらくして夕食を終える。

「……一つ、聞いてもいいか？」

慶史の言った通り両者とも腹は満たしたようだから、そろそろ「食事の後」の話題に触れてもいいだろうか？ 俺がおずおずと切り出すと、「んー？」と返す慶史は盃に口をつけようとしているところだった。

「さっきの、あれ……一体何だったんだ？」

慶史の手がぴたりと止まる。それまでにこやかだった表情が俄かに厳しくなる。そのせいか、部屋の空気が一瞬にして張り詰めたものに変わった。

皆まで言わなくても、「あれ」が何を示しているのか分かったのだろう。

生気のない肌。

こけた頬。

落ち窪んだ目。

青白い瞳。

肉食獣のような牙。

鋭い爪。

そして、あの奇怪な死に方。

人のようでは人ではない、異形の化け物……。

「あれは

」

慶史は、飲み干した盃を膳に置いた。

固唾を呑み、次に続く答えに知らず俺は身構える。

「鬼だ」

「……………はい？」

「は？」

先刻の重苦しいシリアスな雰囲気が一転、この一言だけでぶち壊しになったのは言うまでもない。

「だから、鬼」

「おに？」

「そうそう」

「この『鬼』？」

「そう、その鬼」

俺の気の抜けた顔を見て、慶史自身は信じられないといった反応だ。

「……………ここ、笑うところでした？」

俺、対応を間違えたのかな……………？

まさかそんな中二病みたいな単語が出てくるとは思わなかったのだ。第一、鬼のイメージなんて、せいぜい節分のやつとか「悪い子はいねーかー」ってやつとか、俺にとってはそんなもんでしかない。「お、鬼と言われましても……………」

意味なく敬語になって聞き返せば、慶史は拍子抜けしたように頭を掻いた。

「あんた、気がついてないのか……………？」

「何を？」

「いや」

「鬼は、夜になると現れ、血を求めて人を襲う。自我もなければ理性もない。奴らにあるのは、血への乾きと殺すという本能だけだ。さつき今日也を襲ったみたいにな」

慶史は仕切り直したかのように言葉を繋ぐ。

聞く限りでは、鬼というよりは西洋の吸血鬼に近い印象だ。

「もう何百年も昔から存在している」

近頃はずっと見なかったんだけどなと、慶史は意味深にそう呟いた。

「でも、あれは人間じゃ……？」

鋭利な牙も爪もあんな獣みたいな動きも、確かに人間は兼ね備えていない。とって、人間に見えなくもない。その曖昧さが、俺の中でのあの存在への判断を鈍らせていた。

慶史はもう一度酒を注ぎ足して、盃を口元に運ぶ。ぼそりと口の中だけで何かを呟いた気がしたが、それを俺が言葉として認識するよりも前にはつきりと告げた。

「あれは『鬼』だよ、間違いなく」

その伏せた瞳に哀れみの陰が垣間見えたが、それもほんの一瞬のことだった。

未だにぼかんとしている俺を尻目に、慶史はしきりに首を傾げる。

「いやあ、知ってると思ったんだけどなあ」と。

いや、俺が知るわけないだろ。あれは常識的なことなのかここまでは。

「まあ、それはひとまず置いて」

えっ！？ 鬼の説明それでおしまい！？

「それで、だ」

おれも一つ聞きたいことがある、と慶史が切り出した。

「今日也さ、一体何しにここに来た？」

「……」

「あそこで何していた？」

「……」

「だんまりかよー」

それで今後の身の振り方が変わるんだけどなあ、と慶史は困ったように零す。……それは一体、どういう意味で仰っている？

答えられるものなら答えたい。でも、未来からタイムスリップしてきました！なんて明かしていいものやら。唯でさえ「怪しい人物」なのに、ここで更にこんな突拍子もないことを口にしていいんだろうか。言ったが最後、信じてもらえないのはもちろんのこと、慶史の言う「今後の身の振り方」が百八十度変わる気がする。

さながら地雷原の中を歩くように、俺は慎重に言葉を選ぶ。せめて九十度までには軌道修正を図りたい。

「その、俺もよく分からないというか……」

「分からない？」

「気がついたらあそこにいたっていうか、よく覚えて  
「転んで頭かどつか打って抜けちまったのか？」

そんな学生証を落としたのと同じノリで記憶を扱うなよ。

いや、これが今のところ一番無難じゃないか？ 近からず遠からずではあるが、嘘はついていないわけだし よし、これでいこう。んでもってこのままあやふやにしておこう。

「かどつかは知らないけど。とにかく覚えてないんだ。だからどこから来たとか、何でここにいるとか、あそこで何をしていたのかとか、俺には分からない」

「記憶がないってか？ どこから来たのか、何で来たのか、それも分からずか……」

ふーんと慶史は盃を弄びながら、先程と変わらない口調でぼつりと漏らす。

「その割に自分の名前は覚えてるんだな」

ぎくり。冷や汗が肌を伝う。動揺がとっさに顔に出なかった俺、マジで偉い。

「ま、それはそれでいいんだけどさ」

慶史は殊更軽い口調で流した。見逃してもらえたのか、それとも細かいことは気にしないだけなのかは不明。

「うーん、問題はこれからどうするかだよなあ」

今度は腕組をして盛大に唸り始めた。あれー、いやでもな、ふむ……と慶史はなにやら自問自答を繰り返している。

俺はただ黙ってその姿を見つめていた。刑の執行を待つかのこ  
く。

……結局、俺はこれからどうなるわけ？



## 四話 思案

「……こりゃあ決まりだな」

【今日也】

薄い布団の上に身を横たえていた。

夜はとつくに更けている。ひっそりと寝静まる室内。仄かな月明かりと目をさす液晶画面のライト以外に光はない。

画面端に無情にも浮かぶ「圏外」の文字。しばらくいじっていたけれど、何をやっても無駄だと思い知り、俺はため息と共に携帯の電源を落とす。

（ま、助けたからには放つたりはしないさ。今日はもう寝な、  
疲れてんだろ？）

あの後慶史けいしに親切にも布団と寝巻きを用意してもらった。当人は襖で仕切られた奥の部屋だが、物音がしないところからするともう

寝たのだろうか。

一方俺は先程の部屋の隅で横にはなっているものの、眠気はいっこうに訪れない。

今日一日の間に俺の人生はあまりにも激変し過ぎた。

何でこんなことになった？

何で俺はこんなところに来た？

一体どうやって？

慶史が言ってた鬼って何なんだ？

これからどうしたらいいのだろうか？

帰れる方法はあるのか？

俺がいなくなつてあつちはどうなってる？ 梗子さんは？ 学校

のみんなは……？

さつきは事細かに考える暇も余裕もなかったが、いざ事が落ち着いて静けさと一人の時間ができると、それまで押し隠されていた思いや不安や疑問が一気に襲ってくる。

と同時に、あの時 鬼という化け物と遭遇した時の光景が、恐怖が、蘇ってくる。

恐ろしかった。

あの殺意が形になったような化け物が。

あんなにも間近で感じた死が。

それを難なく倒してしまった慶史が。

そして……それをどこか冷静に見ていたもう一人の自分が。

この言いようのない感覚は、俺が常にどこかで感じていたものと似ていた。言い表せない焦燥感、原因の分からない苛立ち、漠然と

した予感……。

耐え切れなくなり思わず顔を覆えば、視界は完全な闇に包まれた。俺は何度目かも分からないため息を漏らす。

ふと、静寂の中で、先程の慶史の言葉が思い出された。

( 鬼は、夜になると現れ、血を求めて人を襲う。自我もなければ理性もない。奴らにあるのは、血への乾きと殺すという本能だけだ…… )

( さっき今日也を襲ったみたいにな )

( もう何百年も昔から存在している )

( 近頃はずっと見なかったんだけどな )

『でも、あれは人間じゃ……？』

彼がぼそりと呟いた言葉。

( まあ、あの状態でも人間と呼ぶのなら…… )

( でも、やっぱり )

( あれは『鬼』だよ、間違いなく )

【慶史】

もう少しで夜が明ける。おれは布団の上に横になって頭を肘で支え、窓の障子越しにうつすらと透ける静かな光を眺めていた。

昨夜、鬼の気配を感じて駆けつけた先には、予想通りの鬼と

不思議な少年がいた。名は、一瀬いちのせ今日也。

その格好や雰囲気や言動にはおかしな点ばかりあった。

まるで毛色の違うひな鳥が紛れ込んだかのような、溶け込めない違和感があったのだ。異国の者かとも思ったが、名やこの国の言葉を話しているところからすると違うようだ。姓があるということは、身分はしっかりした者の筈なのだが。

そういったこともさることながら、何よりもおれを驚かせたのは、今日也の容姿だった。

灰色の髪。藍色の瞳。

これって……。

とにかく置いておくわけにもいかなかったから、今日也を宿まで連れて帰った。今日也はひどく混乱してたし、事情も聴かなければいけなかったから 彼の素性を考えれば。

ところが困ったことに、どこから来たのか、どうしてここに来たのかなどは覚えていないというのだ。その上「鬼」のことも知らな

いという。知らないフリか、あるいは元々知らないのか。  
何か事情があるのは間違いない。

(どうしたもんか……)

放っておくわけにはもちろんいかない。そんなことをしたが最後、  
山だか川辺だか通りの片隅だけに今日也の死体が転がるなんてこと  
になりかねない。

といって故郷に連れて帰ってやるうにも、何も覚えていないと言  
い張るのならそれも無理だ。

おれたちと一緒に旅をさせる。確かにできなくはないのだが……  
まあ、こっちにも色々事情がある。

あるいは あそこあそこに連れて行くという手もあるのか？

少し心配はあるが、今日也が危険な存在でないのはとうに分かっ  
ている。

気取られないように警戒していたが、杞憂のものであったからだ。  
この一見風変わりな少年には、敵意もなければ殺気もない。武器も  
なし、だ。

仮に連れて行って害を加えるようなことをしたら、口よりも手、  
手よりも刀が出る性質タチらしい「奴」が黙ってはいないだろうし。

それにあそこならば、今日也の助けになれるかもしれない。俺と  
行動を共にするよりはずっと良い筈だ。

「……こりゃあ決まりだな」  
俺は小さく呟くのだった。

貳 むかしむかし……

【呉葉】

「揺り籠」から生まれた五体の鬼たちは、やがて「元シ」と呼ばれるようになります。

「元」はその文字から分かるとおり、始まりや起源、始祖を表しています。

つまり、全ての鬼たちの大元である、ということなのです。

京で最も力を持った、酒吞童子の赤の鬼。

戸隠・紅葉伝説の紫紺の鬼。

心虚ろな無、銀の鬼。

不老不死とまで言われた、青の鬼。

そして、

裏切り者と呼ばれた、金の鬼。

この五体の鬼たちが……。

五話 「運がよければ斬られないから」

ん？ どういう意味って？

そのまんま。言葉の通りだろ。

「運が悪ければ斬られるかも」って言った方が良かったのかー？

【今日也】

燃え上がる炎。

肌をなぶる熱気。

怒号と悲鳴。

赤焼けの空。



むせ返るような血の臭い。

赤黒い血溜り。

頬をそつと何かが撫でた。

ひとひらの雪の欠片。ああ、そうか。初雪か。

そして、微かに響く、慈しむような声。

「 タンユウ」

断片的で、朧気な……あの夢だ、また。

どうやらいつの間にか眠っていたようだ。瞼ごしの霞んだ光で、意識が浮上する。

まだぼやけた俺の視界に見慣れない天井が映る。……あれ？俺の部屋こんなだったっけ？

違和感を覚え思考が一時停止……フラッシュバックと共に再開。昨夜のあの出来事が次々と頭の中で展開されていく。

ああ、そうだ。俺は、今……。 「実は夢オチ」とか……今更無理だよな。

じわりとせり上がってくるこの気持ちには、不安、落胆、失意、

怖れ、疑問、一体どの言葉がふさわしいのだろうか。あるいはその全部かもしれないし、どれもが当てはまらないかもしれない。そんな複雑で不定義な感情が、飲み込めない喉の奥につかえていて、胸が息苦しい。

俺は深くため息をついて、両手で顔を覆う。指の隙間から差し込む光は明るい。

そういえば、客間で寝させてもらっていたんだ。いつまでも現実逃避しているわけにはいかないから、俺は一旦とにかく起きようと手をのけ体を起こそうと

そんな俺の顔を覗き込む両目！

「えうおっ!？」

俺は飛び起きて、這うようにして壁際まで後退する。

し、心臓が口から出るかと思った！ いや、下手したら臓器という臓器が！

未だ鼓動の速さは収まらない。その両目の主を慌てて確認すると、先程まで俺が寝ていた布団の脇にちよこんと座る姿を見止めた。

小さな女の子だ、だいたい六歳くらい。水色の稚児衣装に、切りそろえた髪をひとつに結んでいる。市松人形のようにくりりとした目は好奇心に満ちており、こちらをじっと見つめている。朝の日差しを受けて、少女の瞳が紫黒にきらりと揺れた気がした。

ガラッ

それと同時に襖が開く。思わず肩がびくりと上がる。

「お。起きたか、今日也けふ」

そう言っつて部屋に入ってきたのは、昨夜俺を助けてくれた青年慶史けいしだった。

「……お、はようございます」

「そんなとこで何してるんだ？」

「あのね慶ちゃん、この人うさぎみたいにぴょーんて飛んで、むかでみたいにはつていったんだよ」

鈴の転がるような声で少女は楽しそうに話す。こら、そんなこと報告しなくていい！

「呉葉くれはが驚かしたんだろ。悪いな、今日也」

「……いえ、こちらこそ？」

「その子は呉葉」

紹介が遅れたな、と慶史は目でその少女を指す。呉葉と紹介されたその子は愛らしい笑顔をこちらに向けて、「おはよー」と片手を俺に突き出した。

つられて俺も同じポーズで挨拶を返す。昨日の晩「隣の部屋で寝てる」って言っつたのはこの子のことだったのか、と妙に納得しながら。

慶史はこちらにやって来て、呉葉の隣に腰を下ろした。

「慶ちゃんどこ行っつたの？ それなーに？」

そう言われれば、慶史は手に風呂敷で包まれた何かを持っている。

「これ？ これは今日也のだよ」

「俺、の？」

慶史が風呂敷の結び目を解けば、青い何かが垣間見えた。未だ部屋の隅で固まっている俺に、それが「ほい」と軽く投げてよこされた。反射的に受け取る。畳まれた布のようなそれを開くと

「……着物？」

肩口と袖口に菱形の模様が入った、紺色の着物だった。

「ああ。昨日の格好じゃ、ちょっと人目を引きすぎるからな」

確かにもって尤も。それは十分痛感させていただきました。何てったって公開処刑だったからね。

それから続いて似たような色の袴も渡される。俺は少し困惑してその二つを交互に見遣り、最終的に慶史に終着する。

「そっちの部屋で着替えてこいよ。そろそろ朝餉の支度もすむだろうし」

「あ、ああ……」

とりあえず布団を畳んで端において、慶史に言われるままに俺は隣の寝室に入った。

剣道をやっていたことがあったので、着付けはそこまで苦労しなかった。肌に触れるのは、普段は着ないような麻の生地だ。合成繊維に慣れている俺にとってはちょっと新鮮。

着終わると、俺はおずおずと襖を開けた。

おい、何でこんなに気恥ずかしいんだよ……。妙に和装コスプレをしている気分になる。

「お、着終わってたか」

座敷では既に三人分の朝食の膳が整えられていた。丁度、呉葉の箸の持ち方を慶史が正してやっていたようだ。

「一応……」

「よし、じゃあ後は」

そう言つと慶史は、脇に置いていた鎖のついたあの日本刀でなく、もう一つの小さめの刀を手に取った。立ち上がって俺の前にやって来る。

「……？」

脇差というのだろうか？ 慶史はそれを俺の腰に挿した。まるで最後の仕上げの一筆を置く画家のように。木刀や竹刀とはまた違つた、ずしりとした鉄の重みがした。

「よし」

「……よし、じゃねえよ！」

あまりにも自然な流れに、俺は反応するのが一拍遅れてしまった。

「何勝手に挿してるんっすか！？」

「おい、取るなよ！」

「いらないつて！」

「そりゃあおれのお下がりだけどさ」

「そういうこと言ってるんじゃない！」

銃刀法違反だつて！ いや、今ここにそんな法律はないけどね！

脇差を返そうとする俺と、それを押し留める慶史との押し問答が続く。呉葉は箸をぱかぱかとさせながらそれを楽しそうに見ている。

と突然、慶史の表情が真剣味を帯びた。

「あいな」

「道中、身を守れるものが必要だろ。昨日みたいなことが起らないとは言い切れないんだから」

昨晚のことが改めて思い返される。狂気に満ちた「鬼」というあの化け物のことを……。

「いざって時のために、持っていて用心に越したことはない」

うー、確かに。あまりの正論に返す言葉がなくなる。俺の沈黙を肯定と解釈して、慶史は「じゃ、そういうことで」といつて俺の腰に脇差を差し直したのだった。……何か丸め込まれた気がしないでもないけど。

俺は渋々と腰の刀に視線を落とす。シンプルな黒鞘の脇差だ。濃い緑の柄にそつと触れれば、武器の持つ冷たさというやつがじわりと伝わってくる気がした。

「そつえば」

それを誤魔化すように、俺は視線を戻しさつきから引っかかってきた慶史の言葉の意味を尋ねる。

「道中って？」

「ああ、朝餉を食って準備が整い次第、ここを発つ」

「発つ？」

「どこにー？」

呉葉もそれに加わる。

「今日也の助けになってくれそうな人を知ってるんだ。そこに向かおうと思う」

……俺の助けになってくれそうって。いくらなんでも未来への帰り方までは無理ではと思ったが、俺の命を救ってくれた上にそこまで考えてくれていたとは。今心の中でこの青年を拝み倒しているところだ。マジであんたは神様、仏、聖人。



呉葉は馬上で足をぶらぶらとさせている。舜月しんげつという名の慶史の馬なのだそうだ。競馬の中継でしか見たことのない俺でも、それが随分と立派な馬であることは分かった。慶史は歩きながら手綱を引いている。

俺はというと、慣れない徒歩の旅と慣れない草鞋わらじに苦戦しながらも（もう既に靴擦れが酷い）、二人の後をついて歩いてきた。今は慶史がくれた着物に、頭に被り笠を被った格好だ。日の下では俺の頭の色も目も余計に目立つと、慶史が気を利かせてくれたのだ。元の制服や靴はとりあえずはスポーツバッグの中にある。

道中色々な話をした。慶史の話では、慶史と連れの小葉は現在日本各地を旅して（放浪して？）いるそうだ。

すぐに二人とも馴染んだが、俺はあの日以来「鬼」のことについては聞いていない。慶史も、俺の過去については詳しく詮索してこなかった。

歩き通して足がすっかり疲れ切った頃には日も暮れており、俺たちは町の宿で一泊した。

翌朝、先に宿を出て馬と荷物を見つつじゃれてくる小葉をかまっ  
てやっている、少し遅れて支払いを済ませた慶史が出てきた。金  
のない俺はすっかりヒモ状態で申し訳ない……。

「今日也、ちよつと」

何事か慶史が手招きをしている。そうして差し出された手には畳  
まれた和紙……手紙、いや、書状といった方が正しいかもしれない。  
よく分からないながらも俺はそれを受け取る。

「今日の昼前には着く。先に渡しておく」

「これ、何？」

「会ったらこれを渡してくれ。大体の事情は書いてある」

「ああ、ありがとう……」



慶史の知り合いへの紹介状、といったところだろうか。「落とすなよ」と慶史に念を押されたので、俺は書状を懐に入れようとする。

「でも」

「……？」

「できればすぐ出せるようにもしておけよ。見せられればいいんだけど。ま、運が良ければ斬られないから」

にっこりと微笑んで慶史は言う。爽やかで人懐こそうな笑みだ。そして俺の横を何食わぬ顔で通り過ぎていく。

「………ん？ 斬られる？」

今、斬られるっつった！？

「………え、ちょ、今のどういう意味だよ！？」

さらりと爆弾投下で残された何だかすごく不穏な一言に、俺は慌てて慶史に詰め寄るのだった。

## 六話 タンユウ

降って沸いた災難。

そういうことはあらかじめ言っといてほしかった……。特に

命に関わることなら、尚の事。

【今日也】

「おれたちはここまでだ」

慶史けいしは苦笑いをしながら、「ついて行ってやりたいんだけど……」  
と気まずそうに頬をかいた。

「どうしても済ませなければいけない事があるから、途中までしか連れて行けない」という事情は聞いていた。慶史の「済ませなけ

ればいけない事」が何なのかまでは聞けなかったけど。心細くはあるが、ずっと頼りっぱなしではいけない。ここまでもらったのだから、それだけでもう十分だ。

「じゃあね、今日ちゃん」

「ああ」

「ま、またじきに会えるさ。心配するな」

慶史は前に座っている呉葉くわはを抱え込むようにして手綱を持ち、いつもの明るい笑顔で言った。

「色々とありがとう」

慶史が左手を上げて俺に答える。そして手綱を引きながら舜月しゅんげつの腹を軽く蹴ると、常足なみあしで駆け出す。馬上の二人の背が遠くなっていくのを、俺は見送った。静かな寂寥感と、言い表せぬ感謝を込めて。

俺が二人に再会するのは、それから一年後のことになる……。

で。

「……っ、キツッ」

俺は今、予想以上に骨が折れる山登りを余儀なくされている真っ最中である。

何でかという。それは先程の感動(?)の別れよりも前の会話に遡ることになる。

慶史の言った通り、昼頃には目的の場所に到着した。

だが俺は「え? ここ?」と思わず聞き返さずにはいられなかった。悠然と佇む、とある山の麓に案内されたからだ。

そこでは一匹の濃いグレーの犬が待っていた。大きさは子牛程ある。その野生的な出で立ちに、初めは狼だと信じ込んでいたくらいだ。慶史が言うには、東雲しののめという名らしい。

「とにかく山を登ってくれ。東雲が案内してくれる。順調に行けば、まあ日が暮れる前には着くだろ」

何それすつげえアバウトじゃんっ!!

良くも悪くも細かいことは気にしない丸く楽天的な慶史の性格に、俺は乾いた笑みで答えるのが精一杯だった……。

という経緯で、俺は東雲の後を追って山道をただひたすら登っているのだ。

山の中では邪魔な笠は、ここまで来て人目につくこともないだろうと思い、スポーツバックに吊るして一緒に運んでいる。草履は少し滑るので、部活で使っていたスパイクシューズに履き替えた。

それにしても

「慶史の知り合いって……仙人？」

そんな俺の独り言を聞いてくれるのは、今のところ東雲（犬）だけだった。

あれから随分歩いた気がする。日の高さも登り始めた時より大分変わっているし。

俺は、丁度程良く開けた場所に出てきて、そこで一休憩することにした。大きく息を吐いて、手近にあった岩に腰を下ろせば、東雲も俺の側に座って袴に鼻先をくつつけてくる。何故かかなり懐かれているようだ。

ぐつと伸びをして、それから深呼吸をする。濃い緑が新鮮だ。

秋の風は、汗で湿った俺の背を冷たく撫でる。揺れる木漏れ日と、遙かな澄んだ空が見える。かなり遠く離れたところから聞こえるのは、かすかな水のせせらぎ。小川の上流か、小さな滝か、湧き水が出ている場所でもあるのだろうか。

余計喉が渴くな、などとぼんやり思いながら、俺はゆっくりと瞼を閉じた。自然の色に、音に、匂いに、空気に……驚く程に俺の心を落ち着かせてくれた。

どれくらいそうしていただろうか。俺は目を開けて、よし、と小さく気合を入れた。それに合わせるように東雲も体を起こす。

辺りが開けてきたということは、そろそろ小屋か庵くらいあるのを期待してもいいんじゃないか？俺は再びスポーツバッグを肩にかけて立ち上がり、出発しよう

空気が変わった。

俺は直感的に何かを感じ取り、立ち止まる。

何なのかまでは分からない。

俺は無意識に身構えていた。東雲も耳をピンと立てている。

何か、来る……？

周囲の音が引いていく。

俺がある一点に視線を集中させたその刹那

！

低く唸るような音がした。世界のスピードがひどく遅くなる。茂みを割り裂き、回転しながら飛んでくる物体。それは狙いを定めたかのように俺に向かってくる！

「　　っ！？」

俺はその正体を確認する間もなく、反射的に頭をそらし、後ろに倒れこむようにしてかわす！

顔擦れ擦れを影が通過し、派手な轟音が後方で響く。背中から倒れこんだ俺の視界の先に、細い木を何本か切り倒してやっと停止した銀色の塊が見える。

……な、何だあの馬鹿でっかい刀は！？

それは

刃が異様なまでに巨大な矛だった。

無残に一刀両断された木の断面。後少しでも反応が遅かったら、ああやって真っ二つにされていたのは俺だったかもしれない。

東雲が激しく吠えている。

それに呼び起こされるように、頭の中で慶史のあの言葉が蘇る。

（　　できればすぐ出せるようにもしておけよ）

（　　見せられればいいんだけど。ま）

（　　運が良ければ斬られないから）

（　　斬られないから）

……こ、こついうことか……っ！？　よく状況が分からないけど……！

「しよ、書状!!」

俺は慌てて懐から慶史が渡した書状を引っ張り出す。

慶史、今ならあんたが言いたかったことがよく分かる！ でもそ  
ういうのはもっと早く言ってくれ！ 今だけあんたを恨むっ！

急に……視界が反転した。

同時に、腰のあたりを引っ張られる感覚。

今まで空を向いていた筈の俺は、気がつけば地面にうつ伏せるよ  
うにして押さえつけられていた。書状を持っていた手を捻り上げら  
れる。

「……つつ!?!」

その痛みを訴える声に被さるように響くのは、地に突き立つ鉄の  
音。

……俺の顔の、ぎりぎり皮一枚差の地面に、刀が突き刺さってい  
た。それが俺の脇差で、いつの間にやら腰にさしていた刀を抜き取  
られていたことによく気がつく。

何とか首を曲げて見上げる。その先には

「てめえ、何者だ……」

片膝で俺の背を押さえつけて片手を捻り上げ、かつ俺の顔の真横  
に刀を突き立てて凄む、覆面の男がいた。

突然の出来事に言葉を失っていると、その覆面男は俺の手にかけ  
る力を更に強くした。

「何者だって聞いてんだよ」

低い苛立った声だ。覆面の奥の鋭い目が俺を睨む。顔を隠しているせいで表情が見えないだけに余計に怖い！そしてマジで折れるっ！

「痛たたたたっ……何者かって一瀬今日也十八歳沖縄県那覇市公立黒曜高校三年一組出席番号二番慶史に言われてここに来て部活は陸上の走り高跳び今は母親の梗子さんと暮らしている一瀬今日也！」

あまりの痛さに言ってることが順序も何もかもめちゃくちゃだ。下手なプロフィール紹介みたくなっている。

「……慶史、だと？」

だが、男の手の力はそれで若干緩んだ。今の支離滅裂な言葉の羅列の中でよくその単語だけ聞き取ったな！

「そう、慶史！」

俺は必死で掴まれている手に握られた書状をひらひらとさせる。今さっきのでこれを落とさなかった俺はマジで栄誉勲章もんだ。

「……」

男が刀の柄から離れたもう一方の手で書状を抜き取る。しばらく黙り込んでいたが、やがて、手が解放された。膝もとけられる。後ろ手に捻られて倒れていたのによく見えないが、どうやら男は立ち上がったらしい。

よし、やっと解放された、手首いてー、と俺が安心して体を起こそうとしたのも束の間。

「ぐうえっ」

「動くな」

すぐに背中を押さえつけられて、俺はつぶれた蛙さながらにまた地面に突っ伏す。

……押さえつけられてるっていうより、踏まれてる！ 思いつき



り踏まれてる！！ 何だこの屈辱感！

(お、ちょ、ちょっと……っ!?)

足に加わる力が増していく。背骨が軋んで悲鳴を上げる。

(……い、息が、できな、ヤバ、このままじゃ……)

「張、急にどうしたの!? 東雲も……」

その時、柔らかな、澄んだ少女の声が届く。体勢が体勢だけに視界には入っていないが、もう一つ気配が増えたのは分かった。

「おかしな気配がするとは思ったが。こいつ、慶史がどうとかって

……」

「……慶史が?」

ぱらりという紙擦れの音。どうやら書状を掲げて見せているらしい。

「張はやり方が少し乱暴なんだから……」

これを「少し」と呼ぶのデスか……。

「……足をどけてあげて」

「でもよ」

「張」

渋る「張」と呼ばれた男に、諫めるような少女の鶴の一声がかかる。

ようやく俺の背から圧迫感がなくなった。両手を地面について、激しく咳き込む。窒息するかと思った。死因が「この男の力加減の間違いでした」なんて、冗談じゃない。

「……ごめんなさいね」

側にまでやって来た少女は、氣遣わしげにそっと俺の肩に触れる。

布越しに伝わる手のひらの温かさを感じる。

どうしてだろう、何だかとても、懐かしい……？

「……あなた、大丈夫？」

「あ、た、ぶん……」

俺はそう言って顔を上げる。黒目がちの優しげな瞳を捉えた。あちらの表情が一瞬で驚いたものになり、少女は震える声を紡いだ。

「……………そう、ま？」

その姿が、声が、温度が、いつかの遠い記憶と重なった。

走真。

すっと、その声は俺の中に落ちた。

落ちて、浸透して、満たしていく。

そして、唐突に理解した。心がそうだと告げていた。

ああ、俺がずっと呼び続けていたのは、君だったんだ……。

自分でも知らないうちに呟いていた。

「……………丹優」

## 六話 タンユウ（後書き）

やっと一章の終わりに漕ぎつけられました……。

「鬼」や「タンユウ」や「走真」など、まだまだ謎がたくさん残っています。これからのお話でもう少し説明を入れていきたいと思っています。できたら戦闘シーンとかも書けたらいいなど。

参 むかしむかし……

【呉葉】

でも、鬼の始祖「元シ」たちは、元々人であったとも言われていません。

「揺り籠」によつて、鬼に変えられたのだとも……。

その真のところは分かりません。

「揺り籠」の中身が何だったのか、それを知る者は誰一人としていないから……。

彼らについて、もう少し詳しくお話しましょうか？

例えば彼らの名前、とか。

京で最も力を持った、酒吞童子の赤の鬼

「秋臣」あきおみ

戸隠・紅葉伝説の紫紺の鬼

「呉葉」くれは

心虚ろな無、銀の鬼

「刀納」とうのう

不老不死とまで言われた、青の鬼

「群青鬼」ぐんじょうき

そして、

同胞を裏切ったとされる、金の鬼

「鬼頭」

## 七話 浅き夢見し

世界が、赤一色に塗りつぶされた。

燃え上がる炎。

肌をなぶる熱気。

怒号と悲鳴。

赤焼けの空。

むせ返るような血の臭い。

広がる赤黒い血溜り。肌を伝って滴り、地面を染めていく。

頬をそつと何かが撫でた。

目をこらす。ひとひらの純白の雪の欠片が舞い降りていた。

ああ、そうか。初雪か。

そして、微かに響く、慈しむような声。そつと呟いた。

「丹優」

最期に、君が見ていた世界の一片に、触れることができた気がしたんだ……。

これは夢……なのだろうか？  
それにしても、ひどく心が痛む夢だった。

【今日也】

「き、きろ」

……。

「お、きろ」

……？

「起きねえか!!」

はっと目を開けば 直下に迫る鋭利な切っ先！

「……!?!」

条件反射。体を半転させる。考えるよりも先に動いていた。  
耳元に降る鈍い鉄の音。おそろおそろ視線を横に移すと、ほんの  
さつきまで俺の顔があった場所には、無骨に光る刀……なああああ  
あああああつっ!?!

ドタドタと無様に転がって俺は飛び起きる。

「……ほう、まぐれでかわせるわけじゃねえようだな」

(こ、この声は……)

ぎこちなく首を向ける。そこには　あの覆面の男が胡坐をかいて座っていた。

たらりと嫌な汗が流れる。こいつに殺されかけたのは、まだ記憶に新しい。

俺の混乱を他所に、その男は淡々と床に突き立ったままだった刀を抜いて鞘にしまう。下手すれば人様の顔のど真ん中に大穴があいていたかもしれないというのに何だその腹立たしいまでの平然さはい？

「……な、何やってんだよーっ!？」

驚愕と非難が入り混じり、ようやく声帯が起動した。俺は慌てて後ずさりし、その危険人物と必死で距離を取ろうとする。

「ああ？　起きねえからだろ」

「だからって何で刀それが出るんだっ!？」

「うるせえ、騒ぐなやかましい」

き、鬼畜め……。そしてその刀、俺が慶史からもらったやつ……預かってくれ　いや、没収されてるのですかね？

「おい」

その話は終わったとばかりに、男は低いくぐもった声で俺を呼ぶ。無視シカトなどしようものなら、次なる暴拳に遭いかねない。渋々顔を向けると、男は脇に置いてあった古びた木箱の蓋を開けて、俺の前に差し出してきた。それが刀箱であると、中身を見て分かった。

中には　紺鞘の、一振の日本刀。いや、それにしても随分短い。銀鍔にはめ込まれた深い青色の石が、どこか「日本」刀らしか



らぬ雰囲気を醸し出している。この刀に僅かな既視感を覚えた気がしたが、それも一瞬のことだった。

「取れ」

「……？」

「とつとと取れ！」

いつまでも固まったままの俺に腹が立ったのか、男は声を荒げた。弾かれるように俺は箱の中の刀に手を伸ばす。思っていたより重かった。

分かったよ！ 取りましたこの通り！

……で？

顔布の奥の鋭い瞳が、探るように俺を凝視している。

「……お前、何ともねえのか」

「何が？」

「何か変わったところは？」

「別に？」

「……」

「あ、やっぱり嘘」

「何だ」

「ちよつと、ていうか……かなり痛いっ！」

耐え切れず、その刀を放るように箱の中に戻す。初めは何ともないと思っただが、徐々に手のひらを刺すような熱いとも痛いともいえない感覚が増えてきたのだ。何だよ、これ……。

未だに痛む手のひらをこすり合わせていると、男は何故か不機嫌になって蓋を閉めた。

「分かった。もういい」

「……あのー？」

俺の問いかけに男は完全無視で、「全く、冗談だろ……」と両手で頭を抱えて、それ以上何も言わず、刀箱を右に抱え俺の刀を左に持って立ち上がるとそのまま出ていく。

パタン。障子が閉まった。

……………え？ エー……！？ 結局何がしたかったんだ！？

俺はまだ覚醒しきらない頭で、男が去った方向に虚しく手を伸ばすのだった。

## 【張】

(つたく、どうなってんだよ……………)

俺は軽く舌打ちして部屋から歩き去る。薄い戸一枚隔てた縁側には陽光が満ち、皮膚を削られるような痛みと軽い眩暈を覚える。俺は再び舌打ちした。

走真まゆまに瓜二つの、「瀬今日也せけふ」 慶史けいしの書状にはそうあった

らしいとかいうあの餓鬼。有無を言わず取り押さえたもんだから顔なんて見ていなかった。だから、気がついた時はえらくたまげたもんだ。他人の空似にしちゃあ似すぎていた。

おまけにそいつは、丹優たんゆうの名を知っていた。極々限られた関係者しか知らねえつてのに。慶史が教えたからにしても、まるで昔生き別れた奴とようやく再会したみたいなああの言いようが腑に落ちない。

だが。

万に一にも走真がここにいるわけではない。

あいつは「あの日」、死んだんだ。俺や丹優がその最期を看取った。

じゃああの餓鬼は、一体……？

次第に頭の中がこんがらがってきて面倒だと、一番手っ取り早く確認する手立てを携えて、俺はわざわざあの餓鬼のところに向かったのだった。

で、その結果。

視線を小脇に抱えた刀箱に落とす。

この小太刀は、走真以外には柄を握ることさえできねえつてのに、昔、あれを迂闊にも持った敵がどうなったかを見たことがある。そんな物騒な代物を、短い間だったとはいえあの餓鬼ひよいと持つちまいやがった……。

今の俺はまさに苦虫を噛み潰したような顔をしているのだろう。

あゝ余計まどろっこしくなっちゃまった！ その上『しばらく面倒見てやってくれ』だと！？

確かに、慶史と走真に直接の面識はなかったと聞く。とはいえ慶史、知らなかったとはいえ面倒事を持ち込むんじゃねえよ！

心の中で悪態をつく間に気がつけば、丹優の部屋の前まで来ていた。さつき見た時は、慶史からの書状をえらく真剣に読み返していたが……。

「丹優」

このことを丹優にも伝えておいた方がいいだろうと、俺は障子越しに声をかける。返答はない。刀箱を抱え直す。

もう一呼んでみたが反応は同じだった。これ以上日に当たるのはごめんだと、俺は肘で障子の戸を開けて中を覗き込む。そこには誰もいなかった。

庭か？ 勝手場か？ それとも薬草でも摘みに行ったのか？

……どこ行っちゃまった？

俺はますます顔をしかめた。

### 【今日也】

あの覆面男が出て行ってからしばらく経つ。何をどうしたらいいのか分からないまま、俺は一人寂しく取り残されていた。

何気なしに辺りをぐるりと見渡す。

だいたい六、七畳くらいの和室だ。本棚がいくつか置かれてあり、年季の入ったような書物が几帳面に並べられてある。蔵書部屋か何かだろうか？

その部屋の真ん中に敷かれた布団。俺は眠っていた（というより気を失っていた？）のか。元々枕があるべき筈のところにくつきりと残った刀の跡に、改めて背筋が寒くなった。

先程の騒動とは違ってかわって、今は静けさが室内に満ちていた。

俺は壁にもたれて、深いため息をつく。

さっきの一件のせいどこか遠くに行ってしまったものが、波が寄せるようにまた戻ってくる。

夢を、見た。いつもは覚えていないのに、何故か今回ののはつきり覚えている。悲鳴、熱、息苦しさ。そして真つ赤な世界の中の、ただ一欠けらの白。これは 本当はただの夢なのだろうか……？

俺が目を閉じてそう考え込んでいると、控えめに障子を開ける音がした。

……まさか、また覆面男あいつが戻ってきたんじゃないよな？ 俺が逃げないように罫とか、仕掛けにきたとか？

俺は少し緊張して、その音の先を目で追う。そこには

「……あら、目を覚まされたのですね」

少し京都の訛りがある澄んだ声。俺が「丹優」と呼んだ少女が、そこにいた。柔らかな所作で部屋に入り、戸を閉める。俺の様子を見に来てくれたのだろうか。

「昨日からずっと気を失われていたので」

「……え？ そんなに!？」

「でも、特に大事がないようで良かったです」と穏やかな微笑みが俺に向けられた。

一、二時間くらいのことだろうと思っただけに俺はたじろいでしまう。

「それから、これ、あなたのでしょうか？」

そうして差し出されたのは、少女の手に抱えられていた俺のスपोर्टバッグだ。俺は礼を言っただけを受け取った。

少し気恥ずかしいようないたたまれないような、それでいてどこか心が落ち着くような、妙な気分だった。

戸を開け放つと、午後の日差しが室内に差し込んでくる。その陽だまりを甘受するように、俺たちは部屋の入り口の近くに座っていた。

少女は沿寺丹優えんじたんゆうといった。

本当に彼女の名前が「タンユウ」だと知って驚いた。けど同時に、分かっていた気もした。

淡い青紫の着物に渋い藍の袴。流れるような黒髪を一つに結び、さした白い花のような簪が、光に照らされてきらきらと輝く。物腰が柔らかで雰囲気もどこか温かい。「可憐」という言葉がぴったりだと思った。

「今日也さん」

初めて会った時に見たのと同じ、黒目がちの優しげな瞳を俺に向けて、丹優は話しかけてきた。

「慶史からの書状で、大体の事情は聞いています」

そう言っって懐から書状を出して俺に手渡す。そよ風に触れて紙がはらりと音を立てた。

慶史の言っってた知り合いは 丹優のことだったのかと納得する。いや、あの覆面男はどうだか知らないけど。

受け取っって開いたはいいもの……この時代の達筆な字は判読不能。俺はとりあえずそれを手に持っているだけだ。

「慶史が、鬼と、それからあなたを見つけたと……」

「助けて、もらった」

「それから、記憶をなくされているそうですね」

「……ああ、はい」

誤魔化して伝えた内容だから、少し返事が遅れた。

「……無理に聞き出そうとは思いません。話してもいいと思えた時に、本当のことを聞かせて下さい」

「……ああ、え？」

俺は思わず丹優を見返す。

「ここ」と丹優はその細い指で書状の文の一箇所を指した。

「ここに『そう言わざるを得ない事情があるようだ』と書いてあったんです。』でも鬼のことは本当に知らないようだし、敵ではないから』と……」

丹優の声には責めるような様子は感じられない。

「……結局、俺の見え透いた嘘は慶史にしっかり見抜かれてたわけですね。」

「俺、は……」

誤魔化すべきか？

曖昧にしてしまおうべきか？

それとも何か別の言い訳を？

不測の事態にどう答えたらいいのかと考え、若干の焦りと困惑で言葉が途切れる。

不意に、丹優と目が合った。

どこまでも寛容でひたむきなその眼差しに、不思議と迷いは薄れていく。

同時に、何故だか泣きそうなくらいに懐かしくなった。

こんなこと、前にもあつた気がするんだ。こんな風に二人きりで、やはりこんな風に俺は何か大事なことを彼女に打ち明けようとしていた気が……。

丹優とは会つたばかりなのにそんな思い違い、やっぱり可笑しいよな。自分で自分をそうせせら笑つた途端、胸のどこかがチクリと痛んだ。

「俺は

」

俺は、覚悟を決めて話すことにした。今。



七話 浅き夢見し(後書き)

もう少しだけこんな感じが続きます。  
よろしければお付き合いですませ。

## 八話 彼(か)の刀

さあ、どこから話そうか……。

信じて、もらえないかもしれないけど

### 【今日也】

今から約四百年後の日本、沖縄というところで母親と暮らしていたこと。

自分は高校生で、学校帰りに「鬼」という化け物に襲われたこと。何故だかは分からないけど、気がつけばこの世界に飛ばされていたこと。

鬼に殺される絶体絶命のところを慶史に助けられたこと。そして、慶史の助けを借りて、丹優の元にこうしてやって来たこと。

俺は今までのことを全て話し終えた。

話し終えた後は、裁きを待つかのような不安と気まずさが心に残った。さすがに無理がある話だと当事者の俺ですら思うのだから。ましてや他人からすれば……。

だが、丹優<sup>たんゆう</sup>は俺の予想を裏切った。良い意味で。

「……そうでしたか。でも、あなたがここまでご無事で本当に何よりでした」

「……………へ？」

「どうかしました？」

「え、え？ 信じるのか？」

「ええ」

「いや、でもさ、普通は信じられないんじゃない？」

「決して嘘をついている目ではないですから、あなたの目は」

それに、と言う丹優の口元にえくぼができる。

「『普通』は人によって違うでしょう？ あなたが本当のことを言っていると感じるのは、わたしにとっては『普通』のことですよ」「適当に合わせようといった素振りも疑いの眼差しもなく、丹優は至極真面目な様子だった。知らずに強張っていた体から力が抜けていく。」

「わたし、あなたが『おきなわ』に戻れるようにできる限りの力を尽くします」

丹優は励ますように胸の前で両手の拳を握った。

ああ、こんな反応、意外すぎだったの……。純粹っていうか、疑

うことを知らないってどうか。俺は思わず笑ってしまっ。

「……変わってるって、言われたりしない？」

「そういえば、よく言われますね」

丹優も小さく微笑んだ。

（ あんた、変わってるってよく言われなにか？）

（ そういえば、よく言われる気がしますね）

その光景が、いつかの幻影と不意に重なる。

（ 走真ハジメ）

「……そうま」

「え？」

俺は無意識に言葉を発していたらしい。突拍子でもない自分の咳きに気がついた時には、もう引っ込みがつかなくなっていた。言い訳をしようとしてしどろもどろになる。

「あ、急にごめん、えっと、さっきそう言ってた気がしたんだけど。」

『そうま』って……」

「……」

丹優が俯く。えっと、と言葉を探しているようだ。

「……近衛兵」

「このえ、へい？」

「私の護衛とか、後は屋敷の警護をして下さる人のことです。わたしたちはそう呼んでいました。慶史けいしも、以前はわたしの近衛兵だったんですよ」

……それは初耳だ。慶史って、何かと謎が多いよな。爽やか好青年のくせに。

というか、護衛がつくって、丹優はどっかの良い家のお嬢様なのだろうか。だとして何で山暮らし？ と少し疑問に思った。

「……走真も昔、わたしの近衛兵でした」

そこで丹優の顔が少しだけ曇る。

「ですが、四年前に、亡くなりました……」

「……あ、ごめん」

不謹慎だったと俺は慌てて謝るが、丹優はいいえ、と首を横に振る。

「それで、あなたが、その人によく似ていたので思わず……」

「ごめんなさいねと丹優は続けた。別に丹優が謝ることではないのに。」

「今日也さん」

少ししんみりしてしまった空気を変えるように、丹優は明るい声で俺に呼びかけた。

「帰る方法が見つかるまで、良ければこちらにいらして下さい。遠慮なさらずに」

「え……？」

思ってもみなかった。

だがこの世界では行く場所も帰る家もない俺にとっては、本当にありがたい言葉だった。厚かましいかもしれないが、ここは素直に甘えさせてもらおう。

「ありがとうございます。ご厄介になります」と頭を深く下げると、丹優は「そんなにかしこまらないで」と笑ってすっと立ち上がる。そろそろ夕食の支度をしなければいけないのだという。

俺がもう一度礼を言うと、丹優も一礼して返した。  
廊下の奥に消えるその細い背中になにか声をかけようとしたが、結局言葉が見つからなかった。

【張】

「どこに行ったかと思えば、うちの姫さんは……」

丹優と例の餓鬼の姿を見つけた時の俺の第一声がそれだった。と  
いって、邪魔する程野暮でもなく、俺は黙って踵を返した。

衣擦れの音を耳が捉えて俺は目を開ける。囲炉裏の前の円座に座  
って、腕組みをしてあれこれ考えていたのだが、少し眠ってしまった  
ていたようだ。普段この時間帯は起きていない分、どこか眠気が抜  
け切っていないせいだ。

思った通り、見止めたのは勝手場に向かう丹優の姿。何やら色々  
考え事をしてるようで、声をかけると驚いたのか小さく肩がはねた。  
「……張、部屋で寝ていると思うていたけれど。大丈夫なの？」  
「何ともねえよ」

日が徐々に傾き始めたおかげで、俺も大分楽になっている。

「話は済んだのか。あいつをここで世話すんだろ？」  
丹優は少し目を見開いたが、「聞いてたのか」とも言わずに頷い

た。

ふと、丹優の視線が俺の隣に置かれた物に止まる。それを挟んだ俺の横側にやって来て、静かに膝を折る。

「……これを、持ち出したの？」

丹優は刀箱の木の表面を細い指で愛おしむようになぞった。長い睫毛が、目元に影を落としている。

「ああ。それでだ、丹優。さっきこれを試してみたんだが、あの餓鬼、持ちやがったぞ」

そこで丹優がはっと顔を上げる。細かい説明はいらないだろう。

「本当に……？」

「ああ。あんまり長いことは持つてられなかったみてえだがな」

「……そう」

丹優はかるうじてそう言葉を発したように見えた。そりゃあそうだろうな。なんせこの刀は

「なあ、思うにあいつ、走真の生まれ変わりなんじゃねえか？」

俺の考えを告げると、丹優の瞳が大きく揺れた。

「俺は信仰心もねえし、輪廻やら転生やらの考えに入れ込んでるわけでもねえが……。もしそうだとしたら何もかも納得がいくだろ」

雰囲気こそ多少違いがあるが、鏡合わせのようなあの相貌。覚えのある気配。手にすることを許された例の小太刀。「生まれ変わり」の唯一の問題が年齢だったが、未来から来たかどうかを前提とすればそれも合点がいく。

「丹優も少なからずそう感じたんじゃないのか？」と問うと、丹優は肯定もしなかったが、否定もしなかった。だが、見てれば分かる。姿形だけじゃない。あの餓鬼の中に時折、奴の面影が垣間見え

る瞬間があつた筈だ。

「……まあ、確信はねえがな。だが、何の理由もなしに思いつきだけで言ってるんじゃないよ」

今のところ、話すべきことは全て話した。俺は刀箱を持って円座から腰を上げる。

「何にせよ鬼に、俺たちに関わっちまったんだ。これから色々面倒事が増えるのは確かだぜ」

張、と声をかける丹優を背に、俺は「これ、ちゃんと戻しとくとだけ言っておいた。」

### 【今日也】

太陽が木々の奥に沈んでいくのを、縁側に腰かけぼんやりと眺めていた。どこからか東雲しのめがやってきて、尻尾を左右に揺らしながら俺の膝に鼻先をのせている。

「……悪いこと聞いたかな」

先程の丹優の憂えた背中が、心にずっと引っかかっている。クン、と東雲が鼻を鳴らした。

「東雲、てめえに随分懐いてるじゃねえか」

その時、廊下の向こう側からくぐもった低い声がかかる。



そちらを向くと、あの覆面男が佇んでいた。

さつきは慌しかったので観察する暇がなかった。長身の体格のいい男だ。肩にかけて竜の鱗のような模様の入った褪せた赤の着物に、渋い茶の野袴姿だ。俺を殺しかけたあのでかい矛は今も持っている。さつきは小脇に抱えられている。一体いつまでそれ持ってたんだよ!?!?。

改めて　彼は名を加治張と名乗った。

「その犬は走真のだったからな」

ずかずかと歩み寄ってくる奴に、自然と俺は警戒態勢に入る。こいつは今現在俺の危険人物リストのトップに踊り出ているのだから。

「丹優と話してたな」

「……ああ」

「走真のことは聞いたのか?」

「少しだけ」

張は俺の横に刀箱を置くと、それを挟んだ位置に胡坐をかいて座った。

「なら話は早い」

「……何か、その走真関係のこと?」

この人って本当に藪から棒の会話するよな……。

「走真　正確に言えば、宿地走真しゅくちそうしんっていうんだがな。鬼打隊先代おにうちたい隊長の養子むすこで、丹優の近衛兵このえへいだった」

ちょっと待っていつ!　しゅくち?　おにうち?　たいちよう?

な、何か新出単語が出てきた……。

混乱する俺に、奴は更なる追い討ちをかけてくる。張の瞳の奥の

鋭さが増した気がした。

「で、お前は、恐らくその走真の生まれ変わりとやらだ」

「……………はい？」

ん？ な、何ダツテ？ 俺はついに耳までおかしくなったんだろ  
うか。

「ああ？ てめえ、俺様にもういっぺん言わせんのか。いいか、お前は走真の生まれ変わりで」

「ストップストップストップ！ マジでストップ！！」  
俺は慌てて口を挟む。

確かにすごく似ているとは言っていたけど、だからってそんなに生まれ変わりとかが！ タイムスリップに鬼に、その上「転生」ネタを被せる気か！？ いくら何でも詰め込みすぎだろ欲張りすぎだろ！

「もう要領オーバーだって！ それに単に似てるっただけだろ！」  
「意味分かんねえこと言ってるじゃねえよ。ただ見てくれが似てるだけでンなこと言っただけだよ」

張は両手を突き出して「待った」サインを送っている俺を放つて、箱の蓋に手をかける。中にはやはり、あの紺鞘の刀が納められていた。張はその刀に視線を落とし、話は一方的に続けられる。

「鉄東矢てつとうし この小太刀は走真の形見刀だ。どこで手に入れやがっ

「たんだか、あいつが昔から持ってた」

「ということとはこれ……い、遺品だったわけか？」

「先程の丹優の表情を思い出し、俺は何だかいたたまれず悪い気がしてきた。」

「ンでもってこいつは、走真以外の奴には持てねえ代物だ」

「持てないって……？ 普通の刀にしか見えないけど？」

「あア？ そこのぼんくらと一緒にすんな」

「この刀……なんかあんのか？ 持てたらとんでもなくすごいわけ？  
俺はイマイチ状況についていけない。」

「名剣エクスカリバー、みたいなの？」

「えくす……？」

「いや、何でもありません」

「冗談はさておき、俺は改めて反論しようとするが、張に先を越された。」

「これをそこの奴が迂闊に使おうとしたが最後、二度と刀が振れねえような腕になる……」

「何を」

「小太刀一本で大きさと言おうとした俺は、思わず言葉に詰まっ  
てしまった。この刀の柄を握った時のあの痛みと熱をまだ覚えてい  
たからだ。」

「それをてめえは持った。それが何よりの証拠だ」

「……」

「はいそうですかと信じる気にはもちろんなれない。こんなこと、  
タイムスリップと同じくらいありえない話だ。それに、写真もビデ

才もないこの時代、そいつと俺がどれだけ似ているかなんて分かりっこない。その証拠の主たる「てっとうし」というこの刀の凄さも

でも、もしかしたらあの夢は　と考えてしまっ自分がいた。

黙りこんだ俺を見て、張は静かに呟いた。

「てめえにも話すべきかどうかは悩んだが……。でもよ、いざって時にてめえ自身のことが分からねえってのは怖えもんだ。だったら可能性のひとつかふたつ、あらかじめ知っておいてもいいだろう」

「まあ、一考えとして頭のどっかに置いときな」と話を終えると、張は箱を抱え上げ、代わりに何かを置いて立ち上がる。床を打つ硬い音がした。

「もう少ししたら飯だ。お前も来い」  
と言い加え、張は廊下を歩き去っていった。

張が徐に置いていった物　それは、慶史がくれたあの脇差だった。返して……くれたんだろうか？

東雲はまだ俺の膝に顎をのせて、こっちをじっと見上げている。

顔を上げれば、目に飛び込んできたのは赤焼けの空。

その色が、あの夢の空の色と少しだけ重なった。

## 八話 彼（か）の刀（後書き）

走真の刀の名前で散々悩みました……。いつかこの刀の名前の由来とか、「走真以外が持ったらどうなったのか」についても書きたいと思っています。

それにしても、なかなか戦闘シーンに行き着けません。タグに「戦闘」って書いたのに（汗）

## 九話 ひさかたの光

梗子<sup>かあさん</sup>さん。

息子はこっちで元気にやっています。

この前ソーキそば作ろうとしたけど、豚<sup>ソーキ</sup>の角煮がなくて無理でした。

こっちの人があんまり肉食べないこと、すっかり失念してました。

もつただの蕎麦だろこれじゃあ……。

【今日也】

山の開けた場所に建てられた小さな屋敷。それが丹優<sup>たんゆう</sup>の住まいだ。そこで厄介になり始めた俺は、丹優に本当に良くしてもらって

た。衣食住と温かな心遣い、あの蔵書部屋まで俺のためにわざわざあけてくれたのだ。

それなのにただ飯食らい……はあまりにも不甲斐ない。というところで、俺は出来る限り手伝いをするようにしていた。元々、梗子きょうこさんとの二人暮らしで家事は慣れてるし。

……と思ったが甘かった。

現代と違って、電気もなければガスもない。水道だってない。

火にいたってはおこすところから始めないといけない。なくなっただけ分る文明の偉大さ、昔の人たちのタフさだ。

こんな風に生活が百八十度変わって、初めは本当に大変だった。

それでも要領を得れば何とかなる。順応はまさしく人間の美点だと実感した。

合間に、色々な話を丹優とした。

俺は、梗子さんのことや、学校や部活のこと、あとは生まれ育った那覇について。

俺の話や未来の品物に、丹優はいつも興味深そうにしていた。例えば、携帯、それで撮ったエメラルドブルーちゆうの美ら海の写真（丹優は海を見たことがないらしい）、制服やスパイク、伊達眼鏡 現代では何の変哲もないものに。

大人しそうに見えて丹優は、学者肌というか、人一倍知的好奇心が強いようだ。

数学Bや生物の教科書も眺めては不思議そうにしていた。逆に、古典や漢詩については俺の方が教えてもらうことが多く、やたらそっちの宿題ばかりが進んだ。

丹優についても少し聞いた。代々「沿寺えんじ」の家は薬学に通じているらしく、丹優も薬学者だという。確かに、東雲を伴って薬草を取

りに行ったり、薬研やげんや釜かまを使っている姿を何度か見かけたことがある。その時には決まって、薄荷はくわに似たすつとする匂いが丹優からするのだ。

タイムスリップしたことや、鬼に殺されかけたことが嘘のように、平和に毎日が過ぎていった。俺もこのままいけば主夫が板についてくる気がする。

そうして、もう一週間くらい経つ。

もう九月の終わりだというのに、その日は随分と日差しが強かった。

張ちやうは朝から部屋へやに籠こもっている。

丹優が言うには、張は太陽の光が駄目だめで、時々寝込んでしまったりしい。だからあの男は日が落ちるまで部屋で寝ていることが多い。夜になればようやく出てきて何か色々やっているらしいけど。もう完全な夜行性、生活リズムがホストのそれだ。

張もやっぱり人の子なんだなあ、あいつにナイーブは似合わないなあなんてしみじみ思いながら、俺は箒ほうきで庭を掃はきいていた。少し離れたところで、今日けふも東雲しのめが大人しく伏せている。

「今日也けふ」

背後から澄んだ声がかかる。振り返ると、縁側に出た丹優がいた。丹優はまだ敬語癖けいごへきが抜けないが、俺のことを今日也と呼んでくれるようにはなった。

「ごめんなさい、お掃除までしてもらって」

「いや、俺がしたくてやってるだけだから。どしたの？」

「その」



「？」

何か別の手伝い事だろうかと思っていた俺にとって、丹優のその言葉は思いがけないものだった。

「もし迷惑でなければ、私とお出かけしませんか？」

### 【丹優】

丁度今日也が上つて来た方角とは真反対の位置に下れば、田上たがみ先生の村がある。そこにはよく薬を売りに立ち寄っていて、お返しにと村の人からお米や畑で採れた作物を頂いたりすることもある。

今日也を同行させようと思ったのは、何より今日也にとって良い気分転換になるかもと思ったから。それに「おきなわ」に帰る手立てを探すには、屋敷の中にいるよりも人里に出た方がずっと良い筈。本当はもう少し遠出をしてあげたかったけど、それはまたの機会になりそう。

わたしと今日也は東雲を連れて、一時程かけて山を下った。足元が、自然の道から徐々に踏み慣らされた山道、そして人の手が加わった石階段へと変わっていった。

薬や用具を入れた行李こぶりは今日也が持つてくれているから、わたしの手持ちの物といえば胸元にさした懐剣と、山中での万一を考えて肩にかけている弓と矢筒だけ。隣を歩く今日也に、わたしはもう一度謝った。

「ごめんなさい、ずっと持ってもらって」

「別にいいよ。それに、そっちこそ色々考えてくれて  
ありがとう、と今日也は笑う。

緑の中に着物の紺が濃く映えた。今は頭を手ぬぐいで巻いて隠しているけど、髪は灰色。藍色の切れ長の目。一見少し冷たい印象を与えるかもしれない。でも、根は真面目でまっすぐで、人を気遣ってくれる優しい人。行李を担いでくれる背中は何だか頼もしい。

今日也が走真（オシノ）の生まれ変わり……。

あの日の張の言葉を反芻する。それが本当かどうかは分からないけれど、とても似ている気がするの。姿だけではなくて、その心の奥底にあるものが。

「丹優……?」

少しぼんやりしていたみたいで、我に返ると今日也がこちらを不思議そうに見ていた。そこでやっと彼をじっと見つめていたことに気がつき、わたしは慌てて前を向く。少し頬が熱い。

そういえば。

「鬼」のこともそうなのだけれど、わたしはずっと心に引っかかっていたことを今日也に聞いてみることにした。

「そういえば」

「ん?」

「慶史（けいし）はどんな様子でした?」

「どんなって……?」

今日也は首を傾げる。

「元気そうだったと思うけどな。あつという間に鬼ってやつを倒すくらい強いしさ。今は、連れの小さな女の子とあちこち回ってるら

しいけど」

「……え？」

私は思わずそう聞き返してしまった。

鬼と戦い、そして今日也をここまで連れて来た。それだけでも随分骨が折れただろうと思っていたのに。

……各地を旅している？ そんなことが、今の慶史にできるの？

「……足は？」

「あし？」

「左足は、大丈夫なのですか？」

「左足？ いや、普通に歩いてたし走ってたし、馬にも乗ってたけど……慶史、何かあんの？」

今日也は困惑したように口早に言った。気取られないようにしたつもりだったけど、やっぱりわたしの顔に出ていたみたい。

「丹優？」

黙り込んだわたしを、暗い青の瞳が覗き込むように伺う。

「いえ、気にしないで」

わたしは両手を胸元で横に振り「何でもない」と言って、次の石段へと歩を踏み出した。今日也は何か言いたそうだったけど、それ以上は聞いてこなかった。

慶史は昔、利き足の腱を切られて左足が不自由になってしまっていた。何が起こったのかは教えてくれなかったし、あの時はわたしも幼かったからよく理解できなかったけど、それが原因で近衛兵を辞めざるを得なくなっただことは知っている。

もう随分会っていない。今は志摩の知り合いの下で療養をしていると聞いていたけれど……。

いつもそう、慶史あなは大事なことは隠してばかり……。少し困ったように微笑んで、それでも何も答えてはくれずに行ってしまう……。

わたしの知らないどこか遠くにいる慶史に、心の中でそっと呟いた。

## 九話 ひさかたの光（後書き）

志摩は現在の三重県のことです。

それにしても、慶史がどんどん謎の多い人物になっていってる気がします……。

十話 予兆

もういーかい？

鬼さん鬼さん、まーただよ。

もういーかい？

鬼さん鬼さん

もういいよ。

【丹優】

程なくして村に着いた。穏やかな山並みを望み、昼下がりの光を浴びて田の穂が黄金色こがねに揺れている。その上を泳ぐようにとんぼが

数匹飛び交っていた。

でも、長閑なこの情景の中の何かが、いつもどこか違うような……？

まず、村の長の田上<sup>たがみ</sup>先生の元へと向かった。

田上先生は父の古い友人らしく、以前は漢学に携わっていた方だと伺った。今なお「先生」と呼ぶ人も少なくない。

先生には、四年前にわたしがここを頼ってやって来た時に大変お世話になり、今でも村に下りる都度に色々親切にして下さる。

お屋敷を訪れると、玄関先に初老の男性が立っていた。この方が田上先生。わざわざ出迎えて下さったようで、挨拶と今晚先生の下に泊めて頂くお礼を述べて、それから今日也<sup>けふのち</sup>を紹介した。穏やかな談笑が後に続く。

「その後奥様はどうですか？」

「ああ、丹優<sup>たんゆう</sup>さんの薬のおかげで、大分調子も良いようで」

「良かったです。また同じものをお作りしますね」

これから一通り村を回るの、「それではまた後で伺います」と一礼した。

「丹優さん」

その場を後にしようとしたわたしを、田上先生が不意に呼び止めた。振り返ると、先生はその優しげな表情を曇らせている。

「……少し、よろしいかな？」

そして、気まずそうに今日也をちらりと見た。

その視線を感じ取って気を遣ってくれたのか、今日也は「俺、ちよっとこの辺りぶらついとく。また後で来るよ」と行李をそっと置

いて頭を下げ、わたしが呼び止める前に屋敷の外へと出て行った。

奥の座敷に案内され、田上先生と向かい合うようにして座っている。日の光があまり入ってこないためか、室内は心なしか薄暗くも感じる。

「お話、とは？」

わたしの問いかけに、先生は徐に口を開いた。

「……村の様子がおかしいのには、気づかれたか？」

「少し、いつもと違うとは感じましたが……。何かあったのですか？」

「実は、由治とお千のことです。」

由治さんとお千さんといえば、村の外れに住んでいる三十頃のお年のご夫婦のことだ。お子さんこそいらっしやらないけれどとても仲がよろしく、村きつてのおしどり夫婦として知られている。わたしも何度かお話をしたことがある。

田上先生の話はこう

少し前にお千さんが体調を崩した。初めは風邪かと思われたらしいけど、病状はみるみる悪化し、ついには床からも起き上がれなくなってしまった。詳しいみとては分からない。

「そんな……」とわたしは声を漏らさずにはいられなかった。

「だが、丁度そこに薬売りが来てね。笠を目深に被った薄気味悪い奴だったか。」



三日前のこと。村に来たというその奇妙な薬売りの男は、村人たちに薬を売って回ったわけではなく、売ったのはどうやら由治さんにだけらしい。そんな怪しい者を、と周りの者は思ったらしいけど、由治さんは藁にもすがる思いで、少しでもお<sup>あし</sup>銭と交換できるような代物をかき集め、頼み込んでその者から薬を買ったのだという。

「そうしたら、死にかけてたお千が嘘みたいにすっかり良くなったのだよ。私達も流石にそれには驚いた」

ところが、と先生の声がそこで更に暗くなった。

「一昨日から、由治もお千も急にいなくなってしまっ……」

「いなくなった、といいますと？」

「神隠しみたいに急に消えてしまったのだよ。それも二人とも。村の者も探してはみたのだが……。気味が悪いって、皆怖がっててね」

わたしが感じたのは、これだったのだ。目に見えずとも漂う不穏な空気。

何だか嫌な予感がする。その話を聞く限り、まるで

「丹優さん、もしかこれは」

わたしの考えを代わりに紡ぐように、少し憚りながらも田上先生は切り出した。迷信的な災いの言葉を唱えるかのごとく、不安げな面持ちで。

「お父上が話していた『あれ』と、何か関わりがあるんじゃないだろうか？」

田上先生に断りを入れて屋敷を出た。行李はひとまず置かせてもらい、代わりに弓と矢筒を肩にかける。懐剣の桜透しの鍔を、確かめるように指でなぞる。

外では東雲しのめが伏せて待っていた。私の姿を見止めて体を起こす。でも、今日也の姿はまだない。

かなり遠くまで行ったのかしら。先生には今日也が戻ってきたら言伝を頼んでおいたから、大丈夫だとは思っただけど……。

「……行ってみよう、東雲」

わたしは一抹の不安を胸に、少し駆け足で向かう。由治さんとお千さんの家に。

日が橙色を帯び始めた。

そこは、村の外れにある、藁の屋根と土壁でできた小さな家。人の気配はない。

無作法とは思ったけれど、おそろおそろその入り口の戸を引いた。木戸が軋んで小さく鳴る。知らず知らず、手が胸元の懐刀に伸びていた。

中は、土間と板張りの部屋でできたごく普通の造りになっている。土間には編みかけの藁が無造作に置かれてあった。囲炉裏の奥には、薄い敷布が敷いてあるのが見える。そこにお千さんが寝ていたのだろうか。

これといって荒らされた様子も慌てて出て行った様子もない。

けれど、一歩中に足を踏み入れると分かる。室内は、背中を這い上がってくるような、淀んだ空気で満ちていた。

差し込む斜陽が、わたしの影を一層濃く映し出す。

ふと。

反射して何かがりらりと光った。

「…………？」

床に敷かれた布団の、枕元に置かれたお盆。その上のお椀が転がって水がこぼれていた。濡れた皺の入った薬包紙から覗き見える、何か……。

わたしは吸い寄せられるように近づいて行き、一段高い部屋に膝をついて上がって、それに徐に手を伸ばす。

赤い石の欠片だった。赤と呼ぶには深く濃い、まるで血のような色の。

「これって」

わたしの声は震えていた。地面が歪んだかのような錯覚を覚え、数歩後ずさる。

「緋、力…………？」

「緋力」

慶史が鬼を目撃したと聞いていた時から感じていた不安が一気に膨れ上がって溢れる。

じゃあ、お千さんは……。

わたしはそれを懐にしまつと、慌てて外に飛び出した。力がうまく入らなくてよろける。

「東雲！」

木戸に手をかけて叫ぶように呼ぶと、外で待っていた東雲が耳をピンと張る。

「お願い！ 急いで張ひぢを呼んできて！」  
さつと身を翻したその灰色の姿は、山の方へと走り去ってすぐに見えなくなる。東雲は賢い犬だ。走真がそう言っていたのだから。だから、大丈夫。すぐに張を連れて来てくれる。

一昨日姿を消したのなら、そう遠くへは行っていない筈。人氣がなく、日の光からも身を隠せる場所にいる可能性が高い。由治さんは、まだ無事にいるだろうか……。

もし。

トクン。

不意によぎった憶測に心臓が大きく打つ。

もし、今日也が、走真そまのあの力を受け継いでいたら？

走真は、数里離れた場所からでも「彼ら」の存在を鋭く察知することができた。それだけではない。微かに残る意識や記憶でさえも今日也にその力の一端でも残っていて、気づかない内に引き寄せられていたら？

「……っ！！」

咄嗟に駆け出していた。不安と焦りが胸を締め付けて、鼓動が早くなる。

空の果てには黄昏が滲しみんでいる。これほどまでに、その景色を不気味に思ったことはない。

もうすぐ、日が暮れる。

「彼ら」が動き出す刻ときが迫っている。

今日也！

十話 予兆（後書き）

- ・「みとて」は病因のこと。
- ・一里がだいたい四キロ。

#### 四 むかしむかし……

#### 【呉葉】

元シの中でも特に大きな勢力を誇ったのが、「秋臣あきおみ」と「群青鬼ぐんじょうき」でした。

彼らはやがて一族を成し、糧として血を求め、人間の命を脅かすようになっていきました。

そこで、彼らを討つために剣客の集団が作られました。

これが後に「鬼打隊おにうちぢ」と呼ばれるものです。

その創始に携わったのが、未だ人の心を残した元シ「鬼頭きぐし」。

そして、揺り籠ゆりかごより関わってきた「沿寺えんじ」という人間だったといわれています。

鬼と人との戦いはここから始まり、そして長きに渡って続いてきたのです。

時が平安から、争いの絶えない戦国の世に移り変わっても、なお……。

## 十一話 幽鬼

今日けふせつせつー！ー！

【今日也】

ふと、誰かが俺を呼んだ気がした。そこで俺は我に帰る。

「ここ、は……？」

視線を辺りにさ迷わせる。

そこは、石の鳥居と、奥に寂れた本殿があるだけの小さな神社だ。手入れは行き届いていない様子で、後ろの階段と石畳の参道は萎びた古い落ち葉で覆われている。

茂った林の向こうに望む山が少し遠くなった気がする。村から少し離れた所なのだろうか。

……あ、あれ？ 俺、何でこんなところにいるわけ？

覚えていない。

覚えていないのだ。全くと言っていい程に。

俺は混乱した頭で必死に思い起こす。確か、俺は……。



丹優が田上という人と話をしている間、俺はどこを目指すでもなく村をぶらぶらと散歩していた。一応東雲は田上さんの所で待たせておいた。だが、一通り回ってしばらくぼんやりした後、引き返すことにしたのだ。田上さんの屋敷の前で待っていた方が良さそうだと。自分の髪と目のせいかな、むやみやたらに注目を集めていると気づいたからだ。

その時。

言葉では表せない妙な感覚に襲われた。

周りの景色が、音が、温度が、俺から遠ざかっていく。

響くのは、自分の心臓の音と息遣いだけ。

褪せていく世界の中で、代わりに、五感の全てがただひとつのものに集中した。

( て )

「……？」

( ろ、て )

頭の中で誰かが囁きかけている。

でも聴き取れない。

待ってくれ。よく、聞こえない。

その声を追おうとして、吸い込まれるように俺の意識は落ちていき

そして気がつけばこんな所に来ていたのだ。

とにかく帰らないと。帰り道が分かっていることが大前提だけど、何が何だか分からないながらも、俺は慌てて踵を返そうとする。

だが、不意に鳴った軋んだ音がそれを引き止めた。

ゆっくりと音のした方向に首を向ける。

閉ざされていた筈の本殿の戸が、開いていた。

薄暗い黄昏から浮かび上がるように、そこから何かがぎこちなくよるめきながら出てくる。

人だ。女の人。

髪も着物も乱れていて酷い有様だ。深く俯いて長い髪が垂れているので顔までは伺えない。石畳の上に両膝から崩れ落ちる。

遠目でも分かるそのボロボロな姿と衰弱ぶりに、何であそこに人が？ という疑問も忘れて俺は駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか!？」

支えるようにその女性の肩に触れた。

手のひらごしに体の震えが伝わってくる。泣いているのだろうか、嗚咽のような声が漏れていた。

だが、それとは別に頭の中で反響する声がある。

（ る、て ）

『 な、ぜ 』

（ ころ、して ）

『ど、して』

( じゃないと )

『 どう、し、てだ、お、千………』

( 才前ヲ殺シテシマウヨ? )

様子がおかしい。

泣いているのではない。重たい髪がはらりと一房揺れ、そこから僅かに覗く血の気のない唇が、にっと歪んだのが見えた。

「……っ!？」

突如、肩にそえていた手首が握られる。信じられないくらいの握力だ。俺は必死に振り払って、弾かれたように飛び退く。

その人は痩せ細った体を起こし、徐に顔を上げる。

生気がない。死人よりも青白い肌には、血管が絡む鳶のように浮き出していた。

白目の部分のない瞳は、濁った青に怪しく光る。

依然として歪に笑うその口から覗くのは、鋭い牙だ。

そして、口元に、顔に、着物にこびりついた黒い染み。直感的に分かった。血だ。恐らく、自身の血ではない。

あの時の「奴」と同じ……。

これは 鬼!？

「キィ、ハハ、ハハハハ……」

髪を振り乱して笑う「鬼」は、人が人ならざるモノへと変わった姿だった。俺はその瞬間を目の当たりにした、まさにその目撃者だ。狂気に満ちた目がふと、俺に定まる。

途端に悪寒が駆け抜ける、氷の塊を押し当てられたかのような鼓動が跳ねる。

俺はよろよろと後退する。逃げなければいけないのに、体はすくんで上手く動いてくれない。

何してる。

早く。

動け。動けよ。

自分の足だろ。

やっとの思いで一步退く。

それに呼応するようにあっちも一歩俺ににじり寄る。

自然と、腰にさした刀に俺の手が伸びた。

鬼は爪をかざす。削がれた白炭のような十指からは、鋭利な鉤爪が伸びていた。大凡人間おおよそのもつ物ではない。それはまさしく獲物を狩るために備わった獣の凶器だ。奴は低く身を沈め

「……！」

その直後、一瞬にして俺の前に出現している。気がついてもう遅い！

刹那

「今日也っ！」

体が解放されたかのように俺は反射的に半歩退く。爪が俺の皮膚を掠める。

「……っつ！？」

熱い痛みが走った。



走る。

考える間もなかった。がむしゃらに、体が勝手に動いていた。

「……ガッ!」

それは空気を切って奴の背中に突き刺さる。

鬼はその衝撃で前に倒れこんだ。動かない。

俺はそれを素通りして丹優の元に駆け寄る。

「早く!」

今は逃げるのが先決だ。すぐに丹優の手を引いて階段まで駆け下りようとした。

だが

「きやつ……!」

丹優が小さな悲鳴を上げて倒れる。手を握っていた俺もつられて後ろに引っ張られる。

弓が転がり落ち、筒の中の矢が打ち合って場違いな軽快な音を立てた。

振り返ると 鬼が丹優の足首を掴んで今まさに起き上がるようにしているところだった。その背に生やしたままの刃が、不気味にきらりと光る。

「なっ……!」

何で。

何でまだ

まだ生きてるんだ、その状態で!?

( 血 )

( 血ガ、欲シイ )

( 血ヲ、血ヲ寄コセ！ )

飢えと苦痛に満ちた形相で鬼は牙を剥く。銀色の糸が引く。俺は咄嗟に丹優を背にする形でその前に滑り込む。次の瞬間！

一閃が、鬼を薙いだ。

鬼は後方に吹き飛ばされ、その上半身が滑り落ち、続けて下半身もその力を無くしてドサリと地に落ちた。あの淀んだ青の目は見開かれ、牙は剥いたままだ。

遅れて、生ぬるい風が吹く。

何が起こったのか。

鬼は……体を真横に一刀両断されていたのだ。

断末魔すら上げさせないくらいあつという間の出来事だった。それをやってのけたのは、無骨に光る 異様なまでに巨大な刃。

これって……？

「何やってんだ、ったく」

真後ろに立つ気配に、俺は肩越しに後ろを見やる。そこには

「……ちょ、うっ？」

滲んだ闇を背負って佇む、張の姿があった。片手に握られているのは例の大矛だ。

……張まで、何でここにいるんだ？

「どつちも生きてんな？」

俺たちを見下ろし安堵したように言う張には、珍しく焦っていた様子が感じられた。

張は大きく矛を振って血を払うと、刃を地面に突き立てた。ザン、と地が震える。

そして、覆面の奥の視線を移す。つられて俺もそちらを見れば、両断されたその無残な鬼の体が、今や割れた硝子細工のように砕け散って、赤い粒子となって霧散しつつあった。遅れて、鈍く金属が鳴る。

俺は言葉どころか動くことも忘れて、しばらくその場に固まっていた。

背中に丹優の手がそっと触れる。それで俺は少しずつ体から力が抜けて、ようやく息をつくことができた。

「張、間に合って、良かった……」

「俺の寿命を縮める気かよ」

張の手を借りて丹優はよろめきながら立つ。俺も何とか立ち上がった。

どうして二人がここにいるのだろうか。絶体絶命の危機に駆けつけて来てくれたことは分かるのだが、詳しい経緯はさっぱり飲み込めない。

「……？」

右目に何かが垂れてくる。拭くと、それは血だった。

さつき、爪が掠ったけど、どうやらそれが俺の眉の上あたりを切ってしまったようだ。気がつかなかった。結構深いのか俺はもう一度手の甲で拭いた。



「……今の、間違いない。鬼だな」

張は、今や血の跡さえ残っていないその場所に行つて屈むと、何かを拾い上げる。俺が咄嗟に投げた脇差だ。そして背中越しに苦々しげにこう呟くのだった。

一体、これは……？

静寂の中に俺は呆然と立ち尽くす。

これ以上なくらいに凄惨な光景だった筈なのに、鬼のあの消え去るような最期がそれを曖昧にしていた。

でも、未だ収まらない鼓動と、止まらない血、微かな胸の奥の物悲しさが俺に告げていた。今のは夢じゃない、現実なのだ、と。

「お千、さん……」

俯いた丹優がぼつりとこぼすように何か言った気がした。

## 十一話 幽鬼（後書き）

今回は今日也からの視点です。ようやく鬼が再登場しました。  
若干ホラーになってしまいましたが；

そして張、ぎりぎりで間に合いました！ 多分山駆け下りてきています。大矛担いで（笑）

## 十二話 緋力

まあ、あの状態でも人間と呼ぶのなら……。  
でも、やっぱり

あれは『鬼』だよ、間違いなく。

### 【今日也】

部屋の隅で、ただぼんやりと虚空を眺めていた。

鬼に襲われたあの後、くまなく調べた神社の隅を張が掘り返せば、男の人の死体が埋まっていた。首元を食い千切られていたらしい。

俺たちはその日の内に丹優たんゆうの屋敷に戻った。完全に日が落ちる前にと急ぐ帰り道、俺は由治よしじと千せんという人のことを初めて丹優から聞かされたのだった。

この事は田上たがみさんだけに内密に話され、その由治という人は明日一番に村で弔われるという。

千というあの女性が殺したのだろうか。人気のない神社にまで連れ出して、殺した後はふと我に返り目を背けるように地面に埋めたりまでして。どちらにしても、千さんの方は表向きは依然行方不明ということになるのだろう。仕方がない。骨すらも残らなかったんだから……。

こうして、何ともやりきれない結末を夜と共に迎えたのである。

俺は膝を抱えた両腕の中に顔を埋めた。俯けば、喉から胸にかけてを覆う吐き気にも似た不快感がますます酷くなるのは分かっていたけれど。

ざわつく心の中に疑問が浮かび上がっていた。

丹優が、張が、慶史けいしが言っていた、人の生き血を吸う化け物「鬼」。

でも、あの時見た千さんも、俺が最初に遭遇した男も、本当に化け物と一言で括り切ってしまうだろうか？

そうでないとして、じゃあ一体「鬼」って……？

( はや、く )

( 喉が、渴ク…… )

( ころし、て、私を )

( 血ガ欲シイ…… )

( あなたを、ころし、たくな、い )

( オ前ヲ殺シテシマウヨ? )

『 どう、し、てだ、お、干……… 』

腕を解いて立ち上がり、俺は部屋からそつと抜け出た。

廊下に出れば、青白い薄明かりと静かな空気が満ちていた。もうすぐ夜が明けそうだ。

庭先で伏せていた東雲しんうんが首を上げたのが見えた。張を呼んで来てくれたらしい功労者だ。こちらに近づいてきた東雲の頭をひとしきり撫でてやった。

そして、なるべく音を立てないように忍び足で歩き始める。

角を曲がった廊下に差し掛かったその時。

俺の真横の障子が勢いよく開け放たれた！

「……うつ!?!」

驚きのあまり飛び上がりそうになった。お馴染みの奇声を上げなかったのが不幸中の幸い。でも、動悸の速さはまだ収まらない。

木戸に手をかけて佇む、いつもの覆面の男がそこにいた そつ

か、ここ張の部屋か。てか、どれだけ気配に敏感なんだよ！

「張、サン………」

「何してる」

「いや、その………」

張の鋭い視線が突き刺さる。別に悪いことをしている訳じゃないが、ついでもってしまつ。そして俺の目よ、ここぞとばかりに泳ぐな。

少しして、ため息が漏れ聞こえた。

「……入れ」

「へ？」

聞き返すよりも前に、張はくるりと背を向けて、さっさと部屋の中に入っていつてしまう。

一瞬どうしたらいいのかあたふたして、結局俺は張に続いて部屋に入った。音を立てないように障子を閉める。

閉め切られた窓の前に夜明けの光はいささか頼りなく、部屋は薄暗かった。家具がほとんどないためか少し殺風景にも感じられる。部屋の端には布団が乱雑に畳まれてあった。

奥には、刀掛けの上に置かれた大矛。布が掛けられてなお、その重厚な威圧感が伝わってくる。

張は胡坐を掻いてその近くに腰を下ろしていた。俺もとりあえず手近なところに座る。向き合った姿勢のまま、どちらもしばらくは何も言い出さなかった。

この何とも表しがたい沈黙を破ったのは、張の方からだった。

「てめえの考えてることなんざ分かってる。大方、丹優に聞こうと思っただろ」

鬼のことをな、と凶星をつかれて知らず知らず視線が泳ぐ。だから泳ぐなっつては俺の目！

「生憎てめえには関係ねえ……と言いたいところなんだが」

と張は腕組をして、もう一度深くため息をついた。

「現に鬼に関わっちまって、俺たちにも関わっちまって、その上走真うまに関係してる以上はな」

「……」

まあ、走真の件はひとまず置いてくとして。

確かに、安易な「関係のない」立ち位置に今の俺はいないのだから、残念ながら。

「だったら、てめえにも知る必要が出てくる」

張はそう言つと懐から何かを取り出し俺の前に置いた。丹優から借りてきた、と続ける。

それは、和紙に包まれた小さな物だ。

開けてみると張は目で促す。俺はそつとそれに手を伸ばし、ゆっくりと開けた。かさりと小さく音が鳴る。中には

「……？」

小さなガラス片のような石が入っていた。抓んで顔の近くに持っていく。黒い色の結晶か鉱石のようだ。いや、部屋が暗いから本当は赤い色なのかもしれない。

「これって……？」

鬼のことを説明してくれると思っていた俺は、何だかよく分からない物を渡されて余計に混乱していた。張はそれをどこか冷静に眺めている。

「それは、『緋力』って代物だ」

「ひか……？」

「丹優が聞いた話じゃ、これを胡散臭いどこぞの薬売りがあの夫婦に売ったそうだ」

確か丹優が、千さんは重い病気で死にかけていたと言っていた。

それが急に良くなつたつて……。

「……何かの薬、なのか？」

俺はその欠片を小さく掲げた。俺からすれば何気ない質問だったのだが、覆われた布から覗く張の目は忌々しそくに歪む。

「んなわけねえだろ。これは」

張の声が一層低く曇った。

「人間を鬼に変える、いわば毒だ」

人間を、鬼に変える……？

張が語る内容に、俺は黙って耳を傾けていた

緋力。

それは、人間をあの鬼という生き物に変えてしまふ力がある。

だが、普通の人間に使ったところでのその効果は期待できない。重い病気や大きな怪我を負った者　つまり、死にかけている者にだけ利くらしい。

服用すれば、自然と傷も病も治る。初めは麻薬のような高揚感に襲われ、身体能力も感覚器官の働きも回復力も飛躍的に上昇する。

だがらよく「不老不死の薬」と間違われたことがあったそうだ。

しかし、これは一時的なものに過ぎない。

緋力は次第に人の心を蝕み始める。徐々に理性がなくなり、代わりに芽生えるのは耐え難い血への乾き。それに抗えなくなり人の生き血を口にした時、彼らは「鬼」になるのだという。そして、日没



が来れば血を求めて人を襲うようになる。

すなわち鬼は、「緋力を口にした元人間」ということだ。

俺が襲われたあの男がそうであり、千というあの女性がそうであったように。

「こんなもんが……？」

俺はまだ信じられない気持ちで、そのちっぽけな破片に視線を戻した。

「……緋力は元々、『群青鬼』ぐんじょうきっていう特別な鬼の血から作られる」

初めて聞く言葉に、俺は微かに眉をひそめた。

「『元シ』っていう、大元の鬼だ。代々群青鬼は、この緋力を使って一族を増やそうとしてきた」

「一族、を……？」

「ああ。不老不死だって言われるくらい生命力とやらが強い奴らしい。そのせいかは知らねえが、群青鬼はためえ自身のガキをそうそう作れねえ。他の始祖鬼と違ってな」

生物の生嚙りの知識ではあるが、本来生き物というのは、限られた寿命の中でできるだけ多くの子孫を残そうとする。命の期限が短い程顕著だ。しかし仮にそれがなければ、むやみに多くの後世を残す必要はなくなってくる、ということか。

張が吐き出すように言った。緋力はそういってとんでもねえもんだ、と。

……まるで、禁忌を犯した恐ろしい悪魔の実験のような話だ。

直に欠片を持つ皮膚を介して、底知れぬ不気味な冷たさが内に浸み込んでくる気さえする。

「でもよ、最後の群青鬼は鬼打隊おにうちたいが二十年くらい前に滅ぼしたって話だ。緋力も全て回収し終えた筈なんだが……にしても随分と粗悪な緋力だな、それは。昔はこんなんじゃないかったぜ」

張は苦々しげに盛大な舌打ちをした。

俺は手の中の暗い色の結晶を俯くように見つめて、ただ言葉を失っていた。

俺はもう一つ気にかかったことを口に出した。それは何度か耳にしていた言葉だ。

「『鬼打隊』っていうのは？」

張が目を伏せた。その瞳に暗い影が落ちたように感じた。

「……鬼打隊ってのは、名の通り、鬼を狩る剣客の集団のことだ。大昔から、鬼や緋力の殲滅せんめつのために戦ってきた」

鬼の、緋力の、殲滅せんめつって……あんな恐ろしいモノたちを相手に戦う人たちが存在してるのか？

「俺も、丹優も、走真も、ああそれから慶史もだな……。俺たちは皆、その鬼打隊のもんだった」

予想外の事実には俺は目を見開く。張も、慶史も、丹優も……？  
そして同時に引っかかる点があった。以前丹優が走真について話

した時に感じたのと同じものだ。

「鬼打隊の者だ、たつて……今はそうじゃないのか？」

張は腕を組み直した。

「……それこそ、丹優に聞け」

「丹優に？」

「緋力の怖さを俺はよく分かってるつもりだ。だから俺から説明した。だが鬼打隊について知りたいなら、丹優の方がいい筈だぜ。」

『沿寺』は隊ができた頃から関わってるからな」

俺は張の部屋を後にした。

時間が時間だから当たり前なんだけど、丹優の部屋の明かりはとうに消えていた。寝ているなら邪魔はしたくない。

部屋に戻ろうかとも一瞬考えたが、結局それは却下した。今の俺は、頭の中がごちゃごちゃになっていて、とてもじゃないが大人しくしていられそうになかった。

縁側の外に置いていた草履を履く。そして、靄がうつすらとかかる山の中をどこに行くでもなく歩き始めた。とにかくじつとしていたくなかったから。

でも、冷たい空気も、辺りの静けさも、周囲の暗い木々も、今は俺の不安を煽るだけだった。

どのくらいさ迷うように歩いていたか。

頭上で羽ばたくような音がして、俺は咄嗟に空を仰いだ。青がかった白んだ空の上を、大きな鳥が翼を広げ悠然と飛んでいた。まるで

で、地を這う世界で起こることなど瑣末にすぎないともいうように。何周か辺りを旋回し、やがて木々の合間に消えていく。

視線を地上に戻す　気がつけば、小さく開けた場所にまで出ていた。初めて丹優たちに出会った所とは違うようだ。少し先に、あの場所にはなかった筈の高い石のような物が二つ見えるから。

不意に、その辺りのたなびく霧が揺れた。

そこに屈んでいた誰かが、すっと立ち上がるのが見えた。

あれは

## 十二話 緋力（後書き）

緋力の説明は難しいです。分かり辛くはなかったでしょうか……？

### 十三話 その終わりと始まりについて（前書き）

今回のお話は結構シリアスかもしれませんが、また、歴史的な説明があるので少々長いです。

ですがどうしても外せないところなので……；

そんな第13話ではありますが、お付き合い頂ければ感謝です。それではどうぞ。

十三話 その終わりと始まりについて

忘れない。

鬼打隊わたしたちが生きた日々を。

【今日也】

そこにいたのは

「……………丹優？」  
たんゆう

丹優だった。

てつきり部屋で休んでいるとばかり思ってたんだが。あちらも俺に気づいたようで、黒目がちの瞳が「どつしてここに？」と問いかけていた。でもほんの一瞬の間だけ。すぐに丹優の顔つきは心配そうなものへと変わる。

「今日也。大丈夫ですか？」

「あ、ああ。平気」

再確認するように、俺は前髪がかかる左目の上あたりを指先でなぞった。昨夜鬼にやられた傷は、洗い流せば大したことはなかった。まあ、頭の怪我ってやたら出血するっていうし。

「……良かったです」

丹優が少し困ったように微笑する。

あれ？ 「大丈夫？」って、怪我のことじゃなかったのか？

俺は丹優の側に歩み寄る。

それだけなのに、不思議なくらいに心の中のざわつきが治まっていく。

丹優は再び膝をついた。着物の袖を揺らし、細い指が地面にそつと何かを置く。

近づくと、曖昧だった物の輪郭がはつきりしてきた。

丹優が手向けたのは、霞の中に浮かび上がるような青紫色の花だ。そして向かい合っていたのは、さつき背の高い石のように見えていた墓だった。大小二つ、並ぶような位置にある。墓といっても、形の整った石に文字が刻まれただけの質素な物なのだ。

そこで俺は息を飲むことになる。

大きい方の墓石には

「鬼打隊」。

それより二回り小さい方の墓石には

「宿地」とあったからだ。



墓標には続けて「宿地和真かすま」と「宿地走真そじま」と小さく彫られてあった。

張ちやうの目に映った陰、そして丹優のあの寂しそうな表情の理由が、今分かった気がした。

と同時に、何だか気まづくなってきた。

俺、あんまりここにいない方がいいんじゃないか……？

「あ、俺」

もう行くと慌ててその場を後にしようとしたが、珍しくその最後を待たずして丹優が遮った。

「大丈夫ですよ、ここにいて」

「……」

少しの逡巡の後、俺は静かに丹優の隣に腰を下ろした。

「この墓って……」

「ええ。実際に、遺骨を納めているわけではないのですが……」

墓前に手を合わせていた丹優がこちらに眼差しを向ける。

「張から緋力のことを？」

「……うん」

「そう。鬼打隊のことはまだ、ですよね？」

俺は思わず口ごもる。確かにそうなのだが、今そのことを尋ねるのは気が引けたのだ。

「張はわたしからの方が良い筈だと……。けれどわたしは」

まだ迷っているんです、と丹優は小さく零した。話すことで、ますます俺を巻き込んでしまうかもしれないから、と。その表情からは、随分と思いい悩んでいる様子が伝わってくる。

丹優にそんな思いをさせてまで、俺は 知りたいのだろうか。それとも、何も知りたくはないのだろうか。

本当は、俺はどうしたい？

どうすることを望んでいる？

その覚悟はあるのか？

「でもさ……」

自問が収束するよりも先に、気がつけば俺はそう口にしていた。

鬼と、それを狩る「鬼打隊」との、途方もなく長い歴史。

それがどこかで歯車の歯のようにかみ合って、知らず俺の「何か」も回している気がしてならないのだ。例えば俺が、途中参加した一人物に過ぎなくても。

現代に戻る道を探すにしても、ここで生きていかなければいけないにしても、仮に走真の生まれ変わりだったとしても

「俺にとって、知らなければいけないことだと思う」

そうしなければ、きっと俺自身が前に動き出せない。

丹優が俺を真っ直ぐに見つめ、俺も丹優を真っ直ぐに見つめ返した。

やがて、丹優はゆっくりと頷いた。手を伸ばし、墓石に刻まれた文字をそっとなぞる。まるで、その遠い過去を辿るように……。

そして静かに言葉を紡ぎ始めた。

「昔」

昔、まだ平安京が国の中心だった頃。

異国から、奇妙な物が渡ってきた。「揺り籠ゆりかご」と呼ばれた、石造りの箱だったそうだ。

開けた中に何が入っていたのかは誰も知らない。元より今では行方知れずになってしまっている。

だがその中身が原因で、五人の人間が鬼へと変えられた。そうして、鬼の始祖である「元シ」が生まれたのだ。

やがて、一族を作り次第に力をつけ、人間を脅かし始める元シが現れた。それが、「秋臣あきおみ」と「群青鬼ぐんしょうき」だった。

逆に、人間側につく者もいた。

彼らに対抗するために、同じく元シの一人であった「鬼頭」が、初代隊長として「鬼打隊」を創始したのだ。以前から親交の深く薬学に通じていた「沿寺えんじ」の貴族の後援の下に。

「これが鬼打隊の始まりです」

それ以来、鬼打隊は人に害を成す鬼たちと戦い続けてきた。何百年にも渡って。

隊の者と、その家族や関係者と共に東の地で暮らしながら、初代の鬼頭が亡くなった後もずっと……。

一方、協力者であった沿寺は、その薬学の知識を使って、緋力の効力を打ち消す薬の研究をし続けてきたのだという。

何かが、どこかで聞いたことがあるような……？  
俺は妙な引っかけり覚えだが、それが何かは分からなかった。

「そして」

時代は戦国の世に移り変わった。

そんな中、ある男が新しく鬼打隊隊長となった。

「しづえげんぼつ 渋江元伐は、人間でありながら圧倒的な強さを誇っていました。  
剣の腕においても、戦においても」

この頃が鬼打隊の全盛期だった。この勢いに乗じて、渋江隊長が率いる鬼打隊は、群青鬼とその一族を滅ぼすことに成功したのだ。た。

「けれども、渋江隊長は力を追うあまり緋力に魅入られるようになり、後に何者かによって暗殺されてしまいました……。その後隊長を継いだのが」

自然と、俺の視線は墓石の文字にいく。

「走真のちちのあや 養父であった、宿地和真でした。歴代の中でも、聡明で優れた剣客であると称された隊長です」

「走真の……」

俺は小さく呟く。少しずつではあるが、丹優や張が言っていたことが俺の中で繋がりつつあった。

「もう一つの勢力であった秋臣は、当時越前の朝倉に手を貸していました」

だが、大名の朝倉は浅井と組んで織田信長に反旗を翻した。その結果、彼らは敗走を余技なくされてしまった。

その機に宿地隊長は出陣を決め、鬼打隊は秋臣の一族をも討ち取ったのだという。

こうして、長きに渡る鬼打隊の戦いに決着がついたのである。

しばらくは鬼の残党や緋力の回収に追われていたが、それも徐々に沈静化していった。誰もが平穩の兆しが見えたと、そう信じていた。

「ですが」

突然丹優が顔を曇らせた。

「四年前、鬼打隊は近隣の大名たちによって襲撃され、滅ぼされました」

「……！」

「本当に多くの人が亡くなりました。宿地隊長も走真も、そこで戦死を……」

「……………何で？」

知らず涙が落ちるように、ただ一言の疑問の言葉がぼつりと零れた。

鬼打隊ってというのは、人間のために必死で鬼と戦ってきたんだろ？ それなのに、どうして逆に殺されなければ……？

その刹那、夢の中のあの赤い世界が俺の脳裏をよぎった。

鬼がいなくなった以上、諸大名にとって鬼打隊の力は恐ろしいものでしかなかった。皆「鬼」と戦ってきた腕利きの剣客だ。彼らにとって、人を相手にするのはさぞ簡単なのだから。

人が人を出し抜き殺し合う争いの世では、いつ何時誰が回りまわって敵や味方になるか分からない。そんな只中では、いかに規模が小さいとはいえそんな者たちを放ってはおけなかった。敵方に回られるかもしれないのなら尚の事……。

それが理由だった。

「かろうじて生き残った者達は、今では散り散りになっています。わたしは、父の友人だった田上先生たがみを頼ってこの山城やましろに来ました」

これが私の知る全てです、と丹優は語り終えた。

二人の間に流れる、重い静寂。

怒りとも悲しみともとれる感情が喉につかえて、次の言葉が出てこなかった。

丹優は変わらず墓の文字を見つめていた。その横顔は、どこか思いつめているようにも、嘆いているようにも、悼み祈っているようにも見えた。

堪らず伏せた俺の視界に、霞んだ地面と、その端の青紫色が目に入る。

その時、不意に俺の中に疑問が浮かんだ。不安にも似た疑問が。今までの話を聞く限り、確かその悪い鬼とやらを全部倒したんだよな？

「だけど

「丹優、だけど昨日の夜」

俺が皆まで言い終わることはなかった。背後で鳴った、木の枝が折れる乾いた音を耳が拾ったからだ。

俺と丹優は後ろを振り返って、同時にその人物の名を呼んでいた。

「張！」

「……張」

朝霧の向こうからこちらにやって来る、張の姿がそこにあった。

腕に何かがとまっている　大きな鳥だ。鷹、だろうか？

あれ？　その鳥、さっき見たやつじゃ……？

丹優は袴の土を払って立ち上がる。俺も慌てて腰を上げた。

張は空いている方の手を丹優に差し出す。細く折り畳まれた紙のようだ。

「周助ユウスケからだ」

しゅうすけ？　と思っただが、邪魔をしたくはないので俺は口を閉じていた。

丹優は微かに眉を動かしたが、何も言わずそれを受け取る。その場で開いて目を通し始める。

俺と張はそれをただ見守っていた。

しばらくして、丹優が紙面から顔を上げる。

「……他の所でも鬼が出たみたい。数は、まだ少ないようだけど」「鬼と、それから緋力を売り回る妙な薬売りか……。どうもきな臭いな」

厄介なことになりそうだ、と張が忌々しそうに舌を打つ。

張の意味するところを、丹優も感じ取ったようだった。

「群青鬼の一族は、滅びた筈だけど……」

「まあ、裏を取ってみなけりや何とも言えねえな。まずはその薬売り、とっ捕まえて洗いざらい吐かせるのが先決か」

何とも張らしい物騒な台詞を放つ。

「にしても人手がいるぜ。あいつらもとっくに勘付いてると思っ  
がな」

「……まだ健在なのは？」  
「俺たちを入れて五人。慶史けいしを数えていいのかは分からねえが」

生き残りはそれだけなのかと、俺は愕然とする思いだった。それは、張と丹優からも僅かに見受けられた。

「知ってる限りじゃ」  
張が名前を挙げ始める。

ここにいる二人。沿寺丹優えんじたんゆうと、加治張かじちよう。

そして残りの三人  
大阪の高村成実たかむらなりさね。  
土佐の右手周助ついでてしゆうすけ。  
加賀の刀納宗一郎とうのそつしゆういちろう。

お前をいれたら一人増えるけどな、と張がどこまで本気なのか分



からない口調で俺を足す。

「どうする、丹優？」

真剣な眼差しで、張は丹優の意思を仰いだ。

俺も丹優をじっと見つめる。

無視できない何かが起きているのは、間違いないのだろう。

丹優は少し俯いて考え込んでいたようだったが、やがて顔を上げる。その瞳には、強い決意が秘められていた。

「……鬼打隊のみんなを、集めましょう」

木々の合間から、一条の白い光が差した。

例えどんな事が起きたとしても、いつもと変わらず夜は明け、今日は始まるのだ。

そしてこの日は、俺にとっての新たな始まりでもあったのだ。

### 十三話 その終わりと始まりについて（後書き）

これで二章が終わりになります。

鬼打隊の壊滅は、逆算して天正11年（1583年）の冬の出来事になります。

三章では、鬼打隊の生き残りの仲間たちを徐々に登場させていければなあと思っていたり。

ちなみに、話中で出てきた「青紫色の花」は竜胆です。

花言葉・・・「あなたの悲しみに寄りそう」「誠実」「正義」「悲しむあなたを愛す」「淋しい愛情」

物語中では大分後になって登場する予定の「宿地走真」のイメージに合わせて選びました。

伍 むかしむかし……

【呉葉】

時代が戦国に変わった頃。

その頃になると、「鬼頭」の子孫には人間の血が濃く混じっており、鬼打隊は弱体化していくと思われていました。

しかし、それを盛り返す人間が現れます。

渋江元伐<sup>しぶえげんぼつ</sup>。

そして彼が死んでしまった後、その後を継いだ

宿地和真<sup>しゆくちかずま</sup>。

この二人の隊長でした。

渋江隊長は隊の勢いに乗じて鬼の隠れ里に攻め入り、群青鬼<sup>ぐんじょうき</sup>とその一族を、その次の宿地隊長も戦の流れを利用して、秋臣<sup>あきおみ</sup>の一族を討ち取ることに成功しました。

こうして、二大勢力と恐れられた「群青鬼」と「秋臣」の元シを滅ぼしたのです。

彼らが本当に全て死に絶えたのかは、また別のお話になりますが……。

十四話 俺を殺す気デスカ……？

暴力とスパルタは紙一重。

【今日也】

五日が経った 俺が緋力や鬼打隊おにうちたいのことを知り、そして丹優たんゆうが鬼打隊の再結成を決めた日から。

直に隊の生き残りの三人にもこのことが伝えられ、ここに集まってくるだろう。現に、「右手周助うでしゅうすけ」とかいう人は、鬼の動向を探りながらここ山城に向かっているらしい。

それまで俺たちは、丹優の屋敷でひとまず待機することとなった。

で、何をしているかというと

「いいか、まずは短い刀の扱いに慣れる」

「あ、ああ？」

「分かつたらさっさと構えろ。戦るぞ」

「……えーーーーっ!？」

山の開けた場所。丹優と張に初めて出会った所だ。

俺の手には、慶史けいしからもらった脇差。

そして向かいには、覆面姿の張。

右手にはあの大矛を持っている。今は革の刀袋みたいな物に包んでいるけど。

そこで俺は、張と対峙していた。

何でこういうことになってるわけ……？

ビデオテープの高速巻き戻しと勢い同じく、俺はこれに至るまでの経緯を必死に思い返すのだった。

そもそもの始まりは、俺が護身術を習おうかと零したことだった。これまでを振り返って考えたことだ。俺が鬼に二度も遭遇して生き延びられたのは、慶史や丹優や張の助けがあったからで、運とタイミングも偶々良かったからに過ぎない。自分の力では何一つ、できてはいない。

結果的にそれは、「鬼相手に護身も何もない」と張に一蹴されたんだけど……。結構真剣だったんだが。

しかしどうい風風の吹き回しか、代わりに俺は張から刀の手ほどきを受けることになっていたので。

といっても、俺は山を何周も走らされたり、終わりのない素振りをやらされていた。晴れ続きのせいで、張が外に出られなかっためだ。

いや、仕方ないんだろうけど。それにしても、若干適当じゃ……なかるうか？

そんな当の本人はというと、瓢箪の中に入った酒か何かを呷りながら、俺の様子を気だるそうに室内で眺めているだけ。

……その中に砂入れるぞコラ。

(てめえ、どつかで剣を習ってたのか？)

(ん？ 剣道を、少し前の話だけど)

(……へえ。妙な癖がついてるな)

(……？)

鞘に入れたままの脇差を規則的に素振りしていた俺に、張が思案ありげに声をかけてきた。その時交わした何気ない会話が、今になつて思い出される。

今日は朝から曇りだった。

ようやく部屋から出てこられた張は、俺をここに連れて来るや否や、実戦訓練を始めると言い出したのだ。

これを思い付いたのは、絶対あの時の会話が原因だろう。

「戦<sup>や</sup>るじゃなくて、殺<sup>や</sup>る気だろっ!？」

俺は必死で叫ぶ。

何段階飛ばしてんだよ!? いきなり張と戦うのは、いくらなんでも自殺行為だ。そこらの釣り糸でバンジージャンプする行為に等しい。

「何事も実戦が一番なんだよ。抜き身ではやらねえって言ってんだろ」

「そんなの抜き身じゃなくても死ぬわっ!」

俺がなお反抗し渋っているのを見て、張が舌打ちをした。挑発するよつに言葉を畳み掛けてくる。

「いつまでごねてんだ餓鬼」

そんな小学生みたいな悪口、俺には通用しません。

「寝癖野郎、若白髪、女顔」

……今は、若干ムカつとしたかもしれない。

「チビ」

……。

「チビ、チビチビドチビ」

「んだとコルアアアアアアッ!!」

堪えきれなくなって俺は声を張り上げた。中学の頃の名残で、ついガラが悪くなる。

いや、この際ガラなんかどうでもいい！ その単語だけは聞き捨てならん！

怒りのせいで俄然闘志に火がついた。こうなったらやってやる。まんまと乗せられた気もがしなくてもないが、それはこの際置いておく。

息もまだ荒いまま、俺は鞘に入ったままの脇差を中段で構えた。剣道の竹刀とは違うけど、持った感じは不思議としっくりくる。

それを見た張の目が好戦的に吊り上がる。

「手加減はしてやる。俺はこつちの手しか使わねえ」  
張は柄を握る右手をひらひらと掲げてみせた。

「どこでもいい、打ち込んでこい。一打でもできたらお前の勝ちだ」  
そう言って、大矛を肩に担ぐようにして張も構えた。

互いに睨み合うようにして向かい合う。

風の音も、木々のざわめきも、落ち葉を踏む音も、鳥の鳴き声も、  
一気に俺たちの周りから退いていく。

先に動いたのは、どちらだったか。

「……っ！」

これで、五度目だ。

間合いを詰めようとすると、振り払われた矛で脇差もろとも俺自身も弾き飛ばされる。打ち付けられる背中への衝撃に息が詰まる。

張の武器は、それ自身の威圧感はもちろんのこと、当人の腕力と遠心力が味方してか、破壊力が凄まじい。

脇差越しに受けた攻撃でさえ、加減されていなければどこかの骨が折れていただろう。抜き身だったら、体が真っ二つだ。

だがその分、身を以って分かったこともある。

大矛は、刀身が巨大なせいで剣の流れが遅めで、動作が大きい。  
ましてや張はハンデで片手だけなわけだから、動きも限られてくる。

反対に、俺の脇差は間合いこそ短い、速いし小回りがきく。



第一撃の受け太刀は無理としてかわすしかないが、その後張が振り切ったところを攻め込めば……いけるかもしれない。多少なりとも隙ができている筈だ。

後は俺の思い切り次第か。

「生きてるなら、もういつぺん行くぞ」

「言われなくてもっ！」

萎縮いしゆくしてしまった体を叱咤しったするように、俺は再び起き上がった。土を払うのも忘れて、もう一度張に向かって脇差を構える。すっと目を細め、相対する渋赤の姿を見据えた。

張の大矛は、まだ俺には届かない位置にある。だが、俺の脇差においてはまだまだの距離だ。

集中しろ。集中しろ。

うわ言のように口の中で呟いて、神経を相手の全てに集中させる。

張は今一度柄を持ち上げて構えると、じりつとこちらに詰めてくる。

俺も、刀を握る手に自然と力がこもった。

その時、どちらかが踏んだ枯れ葉が、乾いた火花のような音を鳴らした。

それに反射的に反応して、弾かれたように俺は地を蹴っている。一気に張の矛の範囲にまで駆け込む。

集中しろ。集中しろ。

張は焦った様子もなく一步退いて腕を上げる。

このままだと、俺の頭に向かって矛が振り下ろされる形になる。仮に避け損なえば、そうなたとして仮にこれが寸止めされなければ、まず間違いない俺の頭蓋骨が無残に潰されるだろう。退かなければ危険だ。

否、退くな。

集中しろ。集中しろ。

そして見切れ。

最初に張の刃をかわした時の、鬼の爪をかわした時の、あの感覚を思い出せ！

不意に、頭上へと迫り来る刃が遅くなったように感じた。

自分の鼓動と呼気だけが響く。

考える間もなく、俺は半身をそらせる。

真横で風が重く唸る。

地面を抉る振動が伝わってくる。

かわせた！

そのまま脇差を右の裏手に構え直して、更に俺は踏み込む。

そして横薙ぎに刀を繰り出した！

張が一瞬目を見開いた気がした。

と思つた矢先、急に引つ張られるような感覚に襲われ、思わず俺は前のめりになった。

そして追い討ちをかけるように俺の背中にのしかかる重み。鈍い地響きと、立ち上がる土埃。

「ぐうわっ!？」

気がつけば俺は……張の大矛の下敷きになって、うつ伏せに倒れ込んでいた。

な、何が起こったのデス力……？

俺が状況を把握するには少し時間がかかった。

つまりは、こういう一連になる。

一撃をかわされた張は、咄嗟の判断で右手を柄から離した。その手で俺の脇差を掴んで受け止めると（ま、鞘に入ってたから出来た業だけ）、引つ張るようにして俺のバランスを崩させたのだ。

続けざまに、落下して地面に突き立った矛を俺の方向に蹴り放ち傾き倒れたそれは、見事に俺を下敷きにしたのだった。

型も何も無い。何とも荒削りな戦い方だ。そんなのアリかよ……。

何とか起き上がるうとするものの、俺の上に乗った物はびくともしない。

め、めちゃくちゃ重い……っ！ 何十キロあんだよこれ！？

「ま、よくやった方だな」  
そこらのごろつきか、並の侍に通用する程度だけどな、と付け足される。

俺は慌てて首だけを向ける。一瞬、地面に転がった俺の刀が目の端に映った。

俺を見下ろす張の目には、あの僅かな驚愕の色は既になく、息す

らも乱していない。

徐に矛がどけられた。俄かに呼吸が楽になって、俺は起き上がると軽く咳き込んだ。そしてあえなく手足を投げ出すように地べたに座り込む。

打ち身やら擦り傷やらのせいだろう。じわりと体中に痛みが広がってくる。今までこれに気がつかなかったのが不思議なくらいだった。

それが収まった頃合で、張が言葉を続ける。

「若干、剣道とやら特有の癖もマシになったしな」

「……」

今なら、張の言わんとしていたことが分かる気がする。

防具に慣れた体に、摺り足に打ち込んだ後の動作……。剣道で培った動作が、逆にここでは妙な違和感を生んでしまっていたのだ。それに、あまり実戦向きではないのかもしれない。相手も剣道の構えをしているとは限らないわけだし。

にしても

「もうちょっとだった気がするのになあ」

俺はため息をついて、盛大に悔しがった。一瞬、いける！ と感じたのだ。

でもまさかあんな切り替えしをされるとは……。

「百年早えよ」

「ただの高校生にあんた相手に、何百年かかんだよ」

あんな馬鹿でかい武器を片手で軽々と扱う張の力に、俺は思わずツッコこんだ。

張は「こつこつせい？」と首を傾げはしたが、特に気にする様子もなく矛を肩に担ぎ直す。

ふっと小さく笑った気がした。それは俺への嘲りではなく、むしろさやかな自嘲のような。

「奇遇だな。俺も元はただの漁師だ」

「……へ？」

「要するに、慣れってことだ」

そこで会話を切ってくるりと背中を向ける。そして色づく葉の茂る木の下へと、さっさと歩いて行ってしまった。

そのせいで、張がふと呟いた言葉を問い直すことはできなかった。

十四話 俺を殺す気デスカ……？（後書き）

m + yは剣道を全くやったことがないので、色々間違いがあるかもしれない；

ちなみに、今日也是小・中で剣道をやっていたという設定。一応、全国大会の上位レベル。高校では陸上部（走り高跳び）に所属しています。

## 十五話 静かなる飛報

不気味な、仄暗い夜だった。

風は妙に凪いでいて、波と舟が微かに揺れるだけ。

振りがぶられた鋭い爪。

淀んだ青白い眼光。

激痛。

辺りに飛び散る鮮血。

その時、霞んだ視界の端に、ぎらりと光る鈍い輝きを捉えた気がした……。

### 【張】

そこで目が覚めた。

瞼の上で、雲と木陰の合間を縫って降る木漏れ日が、小さな陽炎のように揺れている。

俺は陰の下で腕を組んで座っていた。木に預けていた背をゆっくりと起こす。

寝ちまつてたか。随分昔の夢だったが、それにしても夢見の悪い……。隊に入る前のことは、すっかり割り切ったと思っていたんだがな。

日陰の外を見遣ると、今日也けふもちも少し先の岩に腰掛けて休んでいた。先程負けたのが余程悔しいのか、何やら難しげな顔で脇差を見つめている。

掲げられた漆黒の鞘が肅とした光沢を放つ。唯一下緒と柄巻だけが深緑の色だ。

以前に一度坂本さんが話していた通りであれば、あれは慶史けいしの心こころ任たのだ。だったら

「良い刀だ。扱いこなせるようになれ」

じゃねえと勿体ねえ、と俺は思わず零していた。

今日也がこちらを振り返る。寝てたんじゃなかった？ 寝てねえよ、と一、二言の軽口をかわした後に、今日也はかざした脇差に再び視線を戻した。

「……やっぱり良い刀やっなんだ、これ」

「抜いて銘を見てみる」

こいつはそんなことも知らなかったのか……。知らずため息が漏れる。

俺は隣に立てかけてあった愛刀を持って重い腰を上げた。空の色は相変わらず冴えない。

今日也は俺の意図するところを掴みかね眉を寄せながらも、危なっかしい手つきで鞘から刀を抜いた。小刻みな鋼の音を立てて白刃が現れる。直刃の刃紋が灰色の空の中に際立つ。



今日也の真横に立った俺は、刃を裏返させ、鰐元の部分を示す。ここに銘があるのだ。普通は茎なかこにあるものなんだが。そこには

「坂本荒高 心任」と文字が彫られてあった。予想通りだ。

「さかもと、こう、しん……？」

「坂本荒高心任。その刀の名前だ」

「じゃあこの『坂本荒高』ってのが作った人？」

「ああ」

刀工名は荒高あらたか。本名は、坂本徹さかもとておる。

当時の宿地隊長しゆくちに負けずとも劣らぬ鬼打隊の剣豪で、実動部隊に属する俺の直属の上司だった。また優れた刀工としても知られ、鬼打隊の業物といわれる刀のほとんどはこの人が手がけたのだ。

慶史と刀納とつの軍師と連れ立って「三剣」と呼ばれていたとか、走そ真うまの教育係だったとか何とかとも聞いたことがある。

(にしても、全く……惜しい人を亡くしたもんだ)

そう説明を終えた俺も、刀袋の紐を解いて、大矛の刀身をよくよく今日也に見せた。

そこにも同じくこうある 「坂本荒高 火竜かりゅう」と。燃え立ち昇る竜 小粋さを好む坂本さんらしい刀名だ。

「へえ……」

今日也は自身の刀と俺の矛の銘を交互に見ながら、感心したように言った。

「心任そじつ、慶史のだろ」

「そうだけど……よく知ってるな？」

「何でも、坂本さんが戯れで慶史にやった奴らしいぜ。煮るなり焼

くなりてめえの好きしろつつてな」

「……………え！？ た、戯れっ!？」

俺は火竜をしまいながら、少しばかり衝撃を受けている今日也をちらりと横目で見る。

先程の戦いで的一幕をふと思い返して、自然と眉間に皺がよった。

俺が矛を振り下ろしたあの瞬間、今日也は驚く程の動きを見せたのだ（ほんの一瞬にすぎなかったが）。その速さと瞬発力に、不覚にも少しばかり動揺してしまった。瞬時に敵の懐に入る、走真あいつの十八番の手法じゃねえか…………。

だからといって、俺がこいつに負けるなんざ方に一つもねえがな。

何にせよ、太刀筋は悪くないが、鬼相手に生き残りたいなら今の並の腕じゃあ役不足だ。それ以上の力をつけねえことには。

こいつも何かしらの流派を会得した方が良いだろう。

となると、やはり走真の流派になってくるか？

だが生憎、そのために必要な物が揃っていない。周助しゅうすけに頼んではおいたのだが。それまでは

「当分はさっきの遣り合いで訓練するからな。言い忘れてたが」

「あれ、ずつとやんの!？」

「晴れの日以外はな」

何か真っ白に燃え尽きそう、と意味の分からない眩くらきが聞こえるが、完全に無視を決め込む。

俺は火竜を担ぎ木陰に戻った。持ってきたもののそこに置きっ放しにしていた瓢箪を掴む。拍子に軽快な水音が鳴る。

……………そろそろ戻るか。

ゆっくり歩き出しながら、俺は顔布の間から瓢箪の中身を呷る。

丹優<sup>たんゆう</sup>に調合してもらった薬を、勝手に酒で薄めた物だ。単体ではとても飲めたもんじゃねえ。

辛い口当たりの酒の味と、喉の奥に残る薬特有の苦味。それから

「……………おい」

「ん？ な、何？」

口の中に広がる、ざらつく細かい粒の食感。

「てめえ砂入れやがっただろ！？」

「ちよ、ちよつと、一旦火竜<sup>それ</sup>置けつて！」

「いい度胸じゃねえか……………オラ逃げんな待ちやがれ！！」

「ぎゃああああ来るな————っ！」

屋敷の庭先まで追いかけて、ようやく俺は今日也をとっ捕まえた。ここ最近で気づいたことだが、こいつは無駄に足だけ速い。

「さあてめえ、どう料理してほしい……………？」

「なっつ！？ 暴力反対！」

「どの口がほざいてやがる。オラ、歯食いしばれ」

首根っこを掴んだまま、一発殴らせると今日也の頭に拳を振り下ろすこと

「張<sup>ちや</sup> 今日也」

その寸前でかけられた声が、俺の握り拳を停止させた。

首を向ければ、こちらにやって来る丹優の姿があった。側には東雲のぶもついている。

籠を背負っているところからして、薬草か山菜かを採りに出ていたようだ。

だが、いつもと違う点が二つ。丹優の腕をしなやかな止まり木にするのは、灰色の大鷹。周助が飼い慣らして訓練した、あいつと俺たちとの伝令役だ。

そして丹優の手の中にあるのは、細く畳まれた伝書。

「周助から」

丹優のその一言と雰囲気から、俺は大体を察した。

こりゃあ、何かあったな……。

俺はひとまず今日也を離し（こいつへの制裁は後回しだ。後で吊るす）、詳しく話を聞こうと場所を変えることにした。

板張りの間の囲炉裏を囲むようにして座り、俺たちは丹優の説明に耳を傾けていた。

周助からの書状の内容はこうだ。

山城と近江おみの境近くで、最近神隠しのような事件が相次いで起きている。その多くが旅の者だ。

それだけなら、ただの噂と聞き流すんだが……。  
道中例の「緋力を売る薬売り」の足取りを掴み辿っていくと、その辺りの村に立ち寄っていた可能性が出てきたらしい。  
もし鬼や緋力が一枚噛んでるとしたら放ってはおけない。そうとなれば

「俺が行く。それでいいな丹優？」

一通り話を聞き終えた俺は、確かめるように丹優に言った。

恐らく無意識だろう、丹優がちらりと外に視線を遣った。だが、その逡巡を飲み込むように、丹優はゆっくりと肯いて俺に応えた。  
外の曇り空の切れ間からは、日の光が差し込んでいる。

「その周助っていう人は？」

同じく丹優の話を座って聞いていた今日也が、不意に訊ねた。

「周助には、このままその薬売りを追ってもらうつもりです」

丹優の答えの後に俺も続く。

「情報収集と追跡であいつの右に出る者はいねえ。捕まるのも時間の問題だ」

曲りなりにも周助は隠密部隊の出だからな。となれば、神隠しこじちは俺が調べた方がいいだろと言いつつ終えた。

「じゃあ、周助にもそう伝えて」

伝えておくと席を立ちかけた丹優を俺は制した。その前に、と俺の隣の今日也に目を向ける。

「今日也、てめえも行けるか？」

「……俺？」

ここで自分の名が出るとは思っていなかったらしく、今日也は自

身を指で指して聞き返す。今そこにためえしかいねえだろうが。他に誰がいる。

「今回ためえが必要だ」

こいつも走真と同様に、鬼の居所を察知できるのは丹優から聞いていた。

村の特定ができていない以上、劣れどもその力が必要になってくる。昔のように、実動や隠密の部隊から人手を割り、風漬しに当たってはいられないからだ。まあ、戦闘面では対して期待はしていないだが。

丹優は口を開きかけたが、結局その瞳を揺らすだけに留まった。俺もそれ以上は口にしない。後はこいつ次第だ。

今日也は、横に置いた心任かたなに視線を走らせる。

心任、か。その名の通り、後はためえの心に任せるぜ。

少しばかりの間の後。

やがて、今日也は俺を、そして丹優を真っ直ぐに見据えて頷いた。

「行くよ、俺も」

【丹優】

翌朝。

わたしが見送りに戸口へと出ると、丁度張と今日也が出立しようとしているところだった。

早朝の光が白む景色に散る。季節のせいか山の空気のせいか、風は少し肌寒かった。

その冷たさが、不安や心配の陰となつてわたしの中に入り込んでくる。

張は、鬼の戦い方を熟知している。

今日也は鬼の居場所が分かる。彼自身はまだうつすらとしか気づいていないみたいだけど。

今回の件に二人が必要なのは分かっている。

でも、張の日の下の辛さを、元々戦いのない世界に暮らしていた今日也を巻き込んでしまったことを思えば、とても心苦しかった。それと同じくらい、ここで待機するしかない自分を齒痒くも感じていた。

( 今日也、てめえも行けるか？ )

張が思いがけず今日也に打診した時、ドクンと胸が大きく打ったのは夜を跨いでもまだ鮮明だった。

けれど今は。

今は、わたしなりにできることを精一杯するしかない。

みんなを信じて。張も今日也も周助も、他の仲間も、みんな……。腕の中の確かな重みが、その思いを首肯し支えてくれているかのようにだった。

手甲と脚絆がまだ少し慣れないようで、今日也は不思議そうに手足を動している。その背中に、わたしは声をかけた。

「これを」

振り返って、不思議そうにこちらにやって来た今日也に、わたしはゆっくりとある物を差し出す。それは

「どうぞ、持っていて」

刀箱に収められた、走真の「鉄東矢<sup>てつとうし</sup>」。

今日也が途端にはっと顔を上げたのが分かる。

「でもこれは走真って人の……」

わたしは首を横に振った。

どうか、これを持っていてほしい。

(鬼殺しでも人斬りのためでもない)

(これからは )

走真がわたしを守ってくれたように、きっと

( 丹優、あんたを守るためにこの刀を取っていきたいんだ…… )  
「きっと、この刀があなたを守ってくれます」

だから持っていていってと言うと、今日也は少し考えるように視線を移ろわせる。

やがて、分かったと頷いてその紺鞆の小太刀に手を伸ばしてくれた。柄を持たないように慎重に箱から取り出して、脇差とともに腰にさす。その姿は、どこか懐かしかった。

「ありがとう」

今日也の言葉に、わたしは微笑ん小さく頭を下げた。

お礼を言わなければいけないのは、むしろわたしの方。



「行くぞ」

少し離れたところいた張が、それを見届けてくるりと背を向ける。その肩には、革の刀袋に包まれた矛が担がれている。

話が終わるのを、待っていてくれたのね。

「じゃあ、行ってくる」

「気をつけて」

ああ、と返して、今日也はその後を追う。張も片手を掲げてわたしに伝えてくれた。

そんな今日也と張の背中を、わたしは静かに見送った。

こうして二人は旅立った。

目指すは、近江へと。

十五話 静かなる飛報（後書き）

前の話の初めあたりで、今日也がイタズラを匂わせてます（笑）

十六話(前) 少年 - 青 - (前書き)

近江へ向かう旅の途中のお話です。ほのぼのかもしれませんが、  
それではごうぞ。

一期一会。

【今日也】

旅人の失踪が相次ぐ神隠しの村。  
張と俺はそこを<sup>ちよう</sup>目指して、山城<sup>やまし</sup>を北に進んでいる。

四日。「手に手を取り合う何とも愉快的な」張との旅は、そうこうして早  
俺たちは丁度、宿屋や店が集まる町通りにさしかかっていた。

しばらく続いていた薄曇りの天気が一転、今日は清々しいくらい  
の快晴になった。

そのせいで、宿を取ってからずっと、張は閉め切った薄暗い一室  
に籠って寝込んでいた。あの様子だと、夕方までこの町から出られ

そうにない。

それまで俺は、情報収集もかねて外をぶらつくことにした。

宿屋を後にし、奥まった一角にある廃れた裏通りを足早に抜ける。どう控えめに見ても柄の良くなさそうな者達や浮浪者たちが地べたに腰を下ろしているのが、目の端に入る。

何せ、変わった髪と目の色の風貌の者と、片や覆面に大矛を担いだ男の組み合わせだ。そんな風変わりな旅人が泊まれるのは、自然とこういった所になってくる。

だが、表に出さえすればそんな荒んだ空気も陰を潜め、代わりに人の往来の音や声といった活気が戻ってくる。

俺は通りに沿って、どこに行くでもなく辺りを歩く。

笠の陰から目に入るのは、宿屋、小料理屋、茶屋、小間物屋……。物珍しくてついきよきよきよしてしまう。このような場所は、慶史たちと別れて以来随分ご無沙汰だったから。訪れたことのない異国に来たかのような感覚が、どこか新鮮だった。

それがかえって。

逆にふと、俺に現代を思い出させてしまう。

そして今、全く知らない世界に確かに自分はいるのだと。

旅立つ前、周助からの報せを受け取った時。「てめえも行けるかと張に聞かれたあの時、恐怖も迷いも確かにあった。偶然の要素が何か一つでも欠けていれば、俺は確実に殺されていたのだから。でも。」

俺がこの時代にタイムスリップしてしまった、その全ての始まりは鬼からだ。ならば、俺が帰れる鍵もまた鬼なのではないか？ 奴らの存在の先にあるかもしれない、元の世界との繋がりをここで見失いたくはなかった。

それだけじゃない。

何かしらの役にも立ちたかったのだ。俺を心配し、あらゆる助けを差し伸べてくれた丹優たんゆうたちの……。必要とされるのなら、俺は応えたい。

これは、俺が鬼打隊おにうちたいの過去を丹優に聞いた時の覚悟に似ている気もする。

俺が進む先に何が待ち受けているのかは分からない。  
だからといって

「……くよくよしていても仕方がない、か」

(今日也)

(どんなに苦しくても、悲しくても、怖くても)

(前に進むことを、その気持ちや止めてしまっただけは駄目よ)

(止めたらきつと、そこで何かが終わっちゃうわ)

とにかく、出来るだけ前に進んでいだけだ。

梗子はねもちさんが言っていた言葉を、そつと呟いた。

何となく見上げた空は、青い。

「何だと小僧!?!」

「もういっぺん言ってみやがれ!?!」

突如、俺の意識は地に引きずり戻された　荒々しく響く怒鳴り  
声によって。

視線を戻した道の先には 男が二人。

擦り切れた着物に、粗野な出で立ち。刀を提げてはいるが、侍には到底見えず、よく言うところつきといった感じた。

「聞こえなかった？ やめなつて言ったんだよ」

そいつらに囲まれるようにして立っているのは、一人の少年だ。相貌も秀囲気も全く対照的な。

そして、彼の着物に埋まるように身を縮こまらせている小さな体子供だ。年端もいかない女の子。

見たところ、あいつらがぶつかつたか何かであの子に難癖つけたのだろう。それを庇つたのが、あの若い男といったところだろうか？ 男たちの足下には、グシャリと踏み潰された千代紙の手毬が転がっている。

一部始終を見ていた筈の周りの人たちは、遠巻きにそのやり取りを見ているだけ。

「大の大人が子どもに絡むなんて、情けないなあ」  
どう見ても背丈も体格も上回る相手を前に、少年は呆れたように零した。それから、隣で震える小さな肩を、行きなと優しく後ろに押す。その子はおろおろしながらも、通りの向こうへと走り去っていった。

だが既に男たちの標的は目の前の少年に変わっている。あの子供のことはもうどうでもいいらしい。

上から下へ舐める様な眼差しを向け、やがてその少年の腰の物へと止まった。

「小僧が、粹がりやがって」

「その癖、なかなか良い刀挿してやがるじゃねえか、あア？」

目を細め、下卑た含み笑いが浮かべる。

「それ寄越しな」

「そうしたら見逃してやらねえでもないぜ」

何が可笑しいのかそう言ってひとしきり声高に笑った後、薄汚れた刀の柄に意味深に手を持っていく。

しかしその脅しに、少年はこれと行って怯える素振りは見せず、あっけらかんとしたまま。これ？ と脇の日本刀を目で指す。

「……いくらなんでも可哀想すぎるでしょ、君たちなんかに使われたら」

「んだとこの餓鬼っ!？」

思ったことをそのまま口に出したただけなのだろうが、かえって火に油を注ぐ結果になってしまったようだ。

垢で汚れた男たちの顔が怒りに染まる。一層声を張り上げ詰め寄ろうとする。

男の一人が刀に手を伸ばすのが見えた。頭に血が上って、ここが町通りだということも忘れてしまっているのか。

周囲の空気が一層強張る。

はいそこまで！

不良は不良でも人様に迷惑かけんな！

見かねて俺は動く　がたいの良いそのごろつきたちと少年の間に、割り込むようにして踊り出る。



予期せぬ介入に、刀を抜きかけた男の動きは完全に停止していた。鞘から僅かに抜き出されたその柄頭つかがしらを押し込むように片手で掴む。刀を抜かれるのを防ぐ。

そして空いたもう一方の裏拳を、相手の腹に叩き込む。指の関節が疼く感覚。鳩尾に入った。

「何だてめえ！」

横で聞こえる怒声。

一拍遅れて俺に飛びかかろうとする、もう一人。

俺は前のめりになった目の前の男から素早く鞘ごと刀を抜き取る。振り返りざまに、一閃。

それは、無防備なまでに走り込んできていた一方の奴の喉仏に直撃する。

呻き声すら上げず、未だ身を屈めていた仲間の男を下敷きにして、転がるように派手に倒れた。

ものの十秒で片がついた。

元々喧嘩慣れはしている。中学時代は、これよりももっと大人数相手に立ち回っていたっけ。それに、張のめちやくちゃんな訓練をこずっと受けていたのだ。武器を持っていたところで、こいつら程度は恐るるに足りない。

……にしても、本当に威勢がいいだけだったな。まさに小悪党の代名詞。

俺の足下には、地面に突っ伏して小さく身じろぎする男二人と、舞い立つ土埃と、後は無音だけ。

やがて辺りから、拍手と歓声が、ぽつぽつと上がり始める。

う、うーん？ 何か無責任と取れないことも、ないような……？

微妙な心境に小首を傾げていると、不意に後ろからぼんと肩を叩かれた。

振り返り　そこに佇むのは、例の少年だった。

色鮮やかな紙の鞠が宙を跳ねる。

先程助けた女の子が、お礼にと渡しに来てくれた物だ。

昔丹波のお国にて

帝さまのみことのり

賜り家臣は大江山

向かいしついいは敵のかしら

その時丁度、二人分の茶と菓子、が丸い盆に載せられて運ばれてきた。

手鞠を打ち上げながら何やら童謡のような唄を口ずさんでいた少年は、一時中断してそれを受け取った。

「何かご馳走になって……」

「気にしない気にしない。これは僕の感謝の気持ちだから」

この時代の甘い物って、結構高価じゃなかったっけ？　砂糖がど  
ういう理由で……。

思わず遠慮する俺に、団子の串がのった皿がずいと勧められる。じゃあ、とおずおずと受け入れると、少年は満足そうに頷いた。

「いただきます」

あの後、のされたごろつきたちが去っていくのを待たずして少年はお礼にと俺を近くの茶屋に連れて行った（というより、引っ張って行った？）。

そういう経緯で、今俺は奥側の縁台に腰かけ、お茶と団子を頂いているのだ。

野店傘のだてがさあるし、これから食べるのにそれ？ と指摘されたので、俺は被り笠を取っている。

やっぱり髪と目の色がなあ……という気まずさが最初にあった。しかし、少年は多少目を見開いたもの特に何も言わず、そのすぐ後に透明な微笑みを浮かべただけ。

その反応は意外だったけど、悪い気はしなかった。

「……うまい」

「そうだね」

何となく懐かしくなってしまった甘味に舌鼓を打ち、それから熱いお茶に口をつける。何だかほっとする。

そして、同じく団子を齧っている隣の人物にちらりと目を遣った。

年は俺と同じか少し下くらい。顔立ちにほんの少しの幼さが残っている。

少し長めの髪は緩く結われてある。髪の色と同じ瞳は、日に照らされて赤茶色にも見えた。

青がかった朽葉色の着物の上に羽織った臙脂色えんじが揺れる。

優しい顔立ちと人好きする口調だが、その中性的な容貌がどこか世離れた霧囂気も醸し出していた。

「改めて」

食べ終えた頃を見計らって、少年は再び俺に向き直る。

「助けてくれてありがとう」

「え？ いや」

「よく絡まれるんだ、ああいうのに。これ持ってるから  
そう言っつて、少しだけ困ったように頭を掻いている。」

「その刀のことか？」

俺は、彼の脇に立てかけられた日本刀に目線を落とす。さっきから少し気になってはいた。大分古いようだが、その中に秘めた厳かさや伝わってくる気がした。

うんと答えると、少年は徐にその刀を水平に持ち、鯉口を切つて鞘から少し抜いて見せた。すらりと音を立てる。

赤鞘から覗くのは、きらりと光を映す研ぎ澄まされた刀身。揺らめく炎影のような刃模様。

あまり知識のない俺から見ても、それがとても立派な刀であることは一目瞭然だった。

けれど……。

慶史の刀や張の矛とは違う、微かな違和感のようなものも伝わってくる。上手くは言えないが、美しい刀だけで言い終われない、あ

る種の薄ら寒さのようなものが。

それが顔に出ていたのだろうか、一言言い添えられた。

「妖刀だからね」

「妖刀……？」

漫画かゲームで登場するくらいのどこか現実感を帯びない単語だ、妖刀なんて。つい興味を引かれて俺はそれを覗き込む。

「童子切安綱どうじぎりやすつなっていうんだよ」

ゆつくりと刃を鞘に戻しながら、少年は俺に説明してくれた。

「何か、凄い刀だったんだな」

道理で先程のごろつきたちが奪い取ろうとするわけだ。でも、確かにあいつらには勿体なさ過ぎると俺も思う……。

「そういう君のも良い刀やっみたいだけど？」

好奇心に満ちた瞳が、今度は俺の側の二つの刀に注がれる。座って食べるのに挿したままでは邪魔になったので、手の届く縁台の上に置いていたのだ。

「あ、ああ……」

張も同じことを言っていた。「良い刀だから扱いこなせ。じゃないと勿体ねえ」と。といつても、どっちも正式には俺のじゃないかなあ、と知らず知らず言葉が濁る。

「何て刀名？」

「えっと、この青い小太刀が『鉄東矢てつとうし』で、この脇差が『坂本荒高さかもとあらたか』の心任しんじょう……だった気がする」

「……………へえ」

ここ数日來のまともなやり取りに、俺は少なからず感動を覚えていた。

皆さん、俺は今会話のキャッチボールをしています！ 大事なことなんで二回言います、キャッチボールをしていますよ！！

道中の張なんて、俺が投げたボールを腕組んで見送るような奴だ  
って張！？

し、しまったあああああつ！！

「俺、そろそろ行かないと！」

俺は慌てて立ち上がる。ついまたりして、張のことが頭から抜けていた。

思った以上に長居したみたいだし、そろそろ宿に戻った方が良さ  
だろう。張の不機嫌の矛先が俺一人に向く前に。

俺は腰に刀を挿し直して、笠を被り顎元で紐を結ぶ。途端に俺の  
髪も瞳も外から覆い隠される。

改めて礼を言つと、こちらこそ、と少年も律儀に頭を下げる。

「ねえ」

不意にもう一度声をかけられ、俺は振り返る 縁台に腰掛け頬  
杖をついている姿は少し遠くなった。

「君、名前は？」

そういえば、お互いにまだ名前言ってなかったっけ……？

「俺は、今日也。一瀬今日也」

あんたは？ と俺も聞き返す。

「僕？ 僕は」



十六話(前) 少年 - 青 - (後書き)

思ったより長くなったので、二話分に切ることになりました；

「童子切安綱」はウィキペディアとかで調べたら出てくると思いますが。

刀の特徴とかは本来の物に基づいておりませんのでご了承を；



十六話（後） 少年 - 赤 - （前書き）

「少年（青）」の後編にあたるお話です。

また、少々残酷な描写がありますので、苦手な方はご注意ください。

それではどうぞ。

十六話（後） 少年 - 赤 -

ともすれば滑稽な。  
ともすれば残酷な。

それは、思いがけないくらい悪戯に

不意に噛み合った、運命の齒車。

【一】

一刻程ぼんやりした後、銭を縁台に置いて僕は立ち上がった。  
童子切どうしぎりを腰に挿し直してゆっくりと歩き出す。小さな鞆をぼんぼんと打ち上げて、何となく手遊びをしながら。

昔丹波たんばのお国にて

帝みかどさまのみことのり

賜り家臣は大江山

向かいしついに敵のかしら

何の気なしに唄を口ずさんでいると、さっきの光景が図らずも思い返された。今日也という少年と別れをかわした時のだ。

(ねえ。君、名前は?)

(俺は、今日也。一瀬いせ今日也)

(あんたは?)

(僕? 僕は)  
秋臣あきおみ、一はじめ

去っていく紺色の背中に、最後まで届いていたのかどうかは怪しいけどな。

ふっと笑みを零す　　なかなか面白い人物に僕は出会ったみたいだ。

酒吞童子しゅうんどうじと呼ぶ鬼の

首とり　めでたし喜ばし

討たれる前に叫びし童子

父母恋しと 嘆けども

聞こゆるものは やまびこのみぞ

ふわりと舞い上がった鞠は、受け止められることなく地へと落ちていく。

足の赴くままに表から裏通りに入った。歩を進めるにつれて、世俗の気配もざわめきも遠のいていく。

次に足を止めた時には 町どころか街道筋からも逸れた、どことも知れぬ林の奥の境内に入り込んでいた。

そこにあるのは、打ち捨てられた神社の名残と鳥居だけ。人の気は皆無。

いや、後背で土をきしる音がする。

ちらりと肩越しに後ろを見遣れば、彼らは湧き出るように現れた。見覚えがある。さつき絡んできた男たちだ。人数は四人増えて六人になってはいるけど。僕をずっと跟けていたということだ。

「……小僧が、調子に乗りやがって」

「ただで済むと思ってたのか？」

ぞろぞろとお仲間を引き連れてご苦労様なことだ。

(随分なご時勢だねえ……)

僕は肩を竦めてため息をついた。そして彼らの方に向き直る。

「どうする？ あの腰の、相当な金目のもんなんだろう？」

「痛めつけて搔っ払うか？」

なるほど、ね……。先程の意趣返しと、それから僕の刀を狙った追いはぎ目的なわけか。

確かに、こいつらを追い払ってくれたのは今日也君だから、僕は「良い刀を持つてる小僧」程度にしか思われていなかったんだろう。それにしても、思った以上の性悪ぶりだ。ここまでいくと感心さえしてくる。

「いや、人目も助けもねえことだ」

あたまた頭格と思わしき男の発言に、他の者たちも次々に刀を抜き始める。まるで示し合わせたかのように。

その欲に満ちた目は、手に握られた刃と同じく鈍く曇っていた。どちらも下等な光を宿している。

「構いやしねえ、たかが餓鬼の一匹……殺しちまえ」

それを合図に、男たちは有無を言わず一斉に僕に斬りかかってきた。

「たかが餓鬼一匹」に六人がかりなんてそれこそあんまりでしょ、とそれを僕は他人事のように眺める。

僕を「殺せ」と言った男が、刀を大きく振りかぶる。

「人目もないことだし、構わず殺してしまえ？」

奇遇だね。

僕も同じ考え。

だからわざわざここを選んだんだよ。

次の瞬間には　その男の首が飛んでいた。さっきの鞠みたいに、  
血肉の断面からは、切断されたむき出しの白い骨が覗く。

振り下ろされる剣先が届くよりも先に、僕は柄に手をかけていた。  
腰溜めの体勢。そこから鯉口を切る音すら立てず抜刀したのだ。

落ちて弾む生首が、仲間たちを凝視する。

間髪入れず、固まってしまっている右側の二人の胴体目掛けて薙  
ぐ。

刀越しに伝わる、ぱっさりと斬れる肉の感覚。短い悲鳴。

そして振り返り様に剣の切っ先を打ち、もう一人の喉を貫く。

刃を抜けば、傷口から溢れるのは血の滝だ。

そのまま転がるように身を屈め、迫り来る最後の男の脛を斬る。

そいつは、ぶつりと糸が切れたように地面に倒れ込む。

遅れて、其処此処で血飛沫が上がった。

まだ息のある最後の奴は、僕の足下に仰向けに転がって、人語を



せつかく返り血は浴びないように気をつけたのに、これで草履は台無しになってしまった。

やれやれと思っていると、ふと何者かの気配を感じた。それは僕の知っている人のものだ。僕は顔を上げる。

「いたんなら、助けて下さいよ」

振り向く代わりに、僕は声を掛けた。

「坂本さん」

「寧ろそいつ等じゃないのか、助けが要ったのは」  
「はは、確かに」

視線を横に向ければ、いつからそこにいたのか、古びた社の壁に背を預けている姿があった。笠のせいで顔はあまり見えないけど。肩にかけて灰色かいろが流れる墨色の着物。それに笠と手甲と脚絆という旅の格好が、この人には珍しい。

でも、腰に挿した物はいつもと変わらない。その漆黒の刀は、彼さかもと坂本徹の右元を常に居場所としていた。

坂本さんの言葉に軽く返して、僕は早々と懐紙を取り出した。童子切の刃を出来るだけ丁寧ていねいに拭う。

くすんだ血と脂の汚れが落ちれば、綺麗な小乱れ刃が再び姿を現した。



瞳。

その刀身が一瞬映したのは、血よりも赤々と燃える僕自身の

「……要らないのか？」

坂本さんが一言そう問った。それは、「ここにある血を飲まないのか」と解釈すればいいのかな？

「遠慮しときます。何か食中あたり起こしそうですし」

半分冗談、半分本気のもりで僕は答える。

童子切を鞘の中で休ませてから、僕は坂本さんに差し向かった。

「で、何かお知らせですか？」

この人は、自分の興味が向いたこと、それが重要なことでない限り、決して動こうとはしない。今回はどうやら後者のようだ。

「群青鬼ぐんせいおにが目を覚ました」

「……へえ」

それは良い知らせだ。渋江元たいちよう伐とやらにやられたあの瀕死の傷が、ようやく回復の兆しを見せたということになる。

となると、緋力の研究の方も少しは進むのかな？

群青さんの血が弱まっていたせいで、今の緋力が生み出すのは、十割が失敗作の「鬼」だから。

「そつとなれば、群青さんのお見舞いに行かないと。坂本さんは？」  
「己おれは、九独くどくを一旦連れ帰りに行く」

その名前を聞いて、例の男の顔が浮かんだ。

今のところ、あの薬師さんに緋力を撒まく役割を任せている。

群青鬼の側近さんがその事後を見て、緋力の調整や改良を続けて

いるのだ。

「ああ、あの人ね……。またどうしてですか？」

九独さんなんて、坂本さんは眼中にも入っていないだろうに。ど  
ういう風の吹き回しだろう。

「そろそろ緋力に勘付く頃合だろう。九独だけだったら簡単に追跡  
される」

「それって……鬼打隊おにうちたいのことですか？」

坂本さんは沈黙でそれを肯定した。

鬼打隊かあ、懐かしいな。最後に会ったのは、「秋臣」が潰され  
た時以来だ。

生き残りがまだ鬼や緋力を追っているというわけか。僕たちのこ  
とまでは、さすがにまだ掴んじやいないだろうけど。

あれ？ ということは

「じゃあいずれ、お仲間さんと戦うこともあるんじゃない？ いいんで  
すか？」

僕の問いかけに、坂本さんは笠の陰からその鋭い目を覗かせる。  
射抜くような覇気を秘めた目だ。鬼とは似て全く非なる、青灰色の  
双眸が垣間見えた。

「あの隊のことなど、今更どうとも思っではない。只」  
「ただ？」

「まだ暫くは、己れの存在は奴等に伏せておく」

「まあ、死んだことになってますもんね、『あの日』に」

坂本さんは、これ以上の会話は無用、伝えることは伝えたとばかりにさっさと動き出した。

その背を見て、僕は不意にあることを思い出す。  
血や死体を踏まないように気をつけながら（これ以上汚れたくない）、とりあえず後を追う。心臓を抉られた手前の赤黒い死体を、大きく跨ぐ。

「そういえば、僕も一つ言おうと思ってたことが」

「何だ」

「さっき面白いことがあったんですよ」

「一体、どんな顔をするだろうか？」

坂本さんの作った鬼打隊の刀。

そして、坂本さんや鬼打隊、きっと僕たちにも関わりが深いであろう「走真」の鉄東矢。

その二つを持つ少年に出会ったと言ったら……。

何だか面白くなりそうだ、久々に。

赤紫に暮れる空を見上げて笑みを浮かべながら、僕は一度切った言葉を続けるのだ。

十六話（後） 少年 - 赤 - （後書き）

「秋臣」や「群青鬼」のいきさつや、坂本徹については随分前に出てきたので……どうだったでしょう？；

分かり辛いようでしたら、それはm + yの文才の拙さ故なので申し訳ないです；

次から本筋に戻ります。

## 十七話 いねやいの

慣れないことはするものじゃない。

でも、やらないといつまでたっても慣れられない。

### 【今日也】

近江<sup>おつみ</sup>。その中心に近淡海<sup>ちかあわつみ</sup>と呼ばれる湖を頂く地。  
つまるところの、現在の滋賀県だ。

目指している「神隠しの村」は、山城<sup>やましゅう</sup>（つまり京都）との境に程近い、近江の南外れにあるらしいんだけど……。  
その辺りにある村は一つではないだろうし、当然道も一つではない。となれば当然、迷って立ちあぐねる場面に何度も出くわすわけだ。

そんな時決まって張は、驚く程端的に俺に聞くのだ。

(で、どっちだ?)

(え? えっと、何か……………あっち?)

(よし)

(こんなんで本当にいいのか!?)

俺には、鬼を感知できる力があると張は言っていた。だから今回俺が必要だったとも。

それについては……………心当たりがないとも言えないから、否定はし切れない。学校の帰り道に遭ったあの男と、お千さん 俺がどちらの鬼の一件にも出くわしていたのは確かに事実だから。

よくある「異世界に飛んだら特殊能力を授かっていた」みたいなノリなのだろうか?

けどさ、俺が何となく選んだ道のままを行って、本当に着けるのか……………?

そんな一抹の不安を抱えて、俺は旅を続けていたのだった。

けど、案外

「……………着けるもんなんだ」

丹優たんゆうの屋敷を発ってから六日目のこと。張と俺は、近江おうみの南境みなみかぎ寄りのとある村に辿り着いていた。

入り組んだ道の先の山の麓にある小さな村。

外れの丘陵を切り開いた高台には、比較的大きな屋敷が一つ、見

下ろすように建っている。村主が住んでいるのだろうか。

それを除けば、ぼつぼつと点在する簡素な家々と納屋と荒涼とした畑だけ。合わせてこの曇天と、肌寒い空気。閑散とした、悪く言えばどこか閉鎖的な感じのする所だ。

そのせいだろうか。何やら居心地が悪い。

「行くぞ」

張はそんな寒村を見渡して、それからさっさと歩き出していた。マジで置いていかれかねない。俺も慌ててその後を追った。

だが、村には直接下らず、代わりに踏み入ったのは近接する山の方。

張の話では、「鬼」が活動できるのは日没以降。日中は仮死状態に近く、光を避けるようにして身を潜めている。

わざわざ夜を待ってやることはないというのが張の考えだ。日が暮れる前に片を付ける、と。

そう言われれば、俺が鬼に遭遇した時はいつも夜だった。暗闇の中での鬼の脅威（かれら）を振り返れば、確かにそれが一番の策だと思う。そんなやり方は卑怯だと言っていられる程、生易しくはないのだ。

といっても、鬼が人里のど真ん中に隠れられる筈もない。怪しむべきは、人の気が少ない山の奥か村外れあたりになってくる。

そこで神社の社かお堂、洞穴でも見つけられれば当たり前……なんだけど。

「おい」

「こつち……、やっぱり違うかも」

「早くしろ」

「あれ、向こうの方……？」

「だからどつちだ！」

事はそう上手くは運ばなかった。

その原因の九十九パーセントは……………俺デス。

なぜなら、張の言う俺の鬼専用のGPS機能が、ここに来て全くダメになってしまったからだ。ここまでの道中、何となくこつち…  
…というのはあったが、今ではその「何となく」さえも働かない。  
さながら、どの方角も指さずただひたすら回り続けるコンパスのよ  
うな気分だ。

そのせいで今俺たちは、絶賛迷子中 山中をさ迷うように歩き  
回っている真つ最中なのである。

元々気の短い隣の覆面男は、当に痺れを切らしている。

「チビ肝心な時に迷ってんじゃねえよ！」

チ…………っ!?

「だあああああっ！ ちょっと黙ってるよ！」

「んだと戦んのかコラ!？」

「ここじゃどうせ火竜それ振れねえくせに！」

何てつたつて、木やら林やら障害物が多い。大矛を振り回す空間  
はあるまいて！

「言いやがったなこの糞餓鬼!!！」

そしてとうとう喧嘩まで起こる始末だ。



か細い糸を頼りに、真つ暗な洞窟の中を進むような……。水の中で、くぐもった声に必死で耳を澄ますような……。

そんな手探りの感覚の中

山腹の中程の地点。身を屈めた木々の葉や、背の高い草が生い茂る奥。

そこに、上へと続く石造りの階段を発見したのだ、ようやく。

ところが、肝心の階上に何かがあるのかは、斜陽の陰になっていて見えない。両脇に建つ二本の石塔からして、それこそ社でもあるのだろうか。

何にしても、調べるに十二分に値する。

けれど依然として、俺の注意はあちこちに飛んでいて、心の中で燻<sup>くすぶ</sup>る得体の知れない何かが気になって気になって仕方がない。重大な何かを見落としている気がしてならないのだ。それは焦燥感と言っても良かった。

「おい、聞いてんのか？」

「……あ、ああ」

張の一声で、俺はその意識を半ば強制的に断ち切った。

「何かあった時は、心臓か首を狙え」

急所以外の箇所では、鬼には大して効かないからな、と張は続けた。

確かに、丹優が鬼の目に射た矢傷も、俺が背に投げ放った刺傷も、すぐに血が固まって癒えてしまったのを覚えている。とんでもない回復力だ。

張は簡潔な忠告をした後、徐に矛を担ぎ直した。

俺も自然と、手元が脇差の柄に伸びる。

お互いがちらりと目配せをして、石段に一步踏み出そうとしたその時

「ここで何をしておいでか？」

男の声が降ってきた。

陰を抜けて階段を下りてくる何者かの姿が、そこにはあった。

## 十七話 「これやこの」(後書き)

「これやこの」は、「これが噂に聞くあの……」という意味です。  
百人一首の和歌より引用。

今日也と張は、相変わらず次元の低い喧嘩をしています(笑)  
でも  $m + y$  が目指すのは、何だかんだで仲の良いコンビです。

## 十八話 遣らずの村

「妙だぜ、こころは……」

【今日也】

屋敷の手伝いの人何人か、膳を運んできて早々に退出していった。

どうぞ、とそれを勧められて、俺は慌てて礼を述べる。

「ありがとうございます。何かすみません」

「いいえ。妻を十年前に亡くし、娘にも先立たれ」

小ざつぱりした、だが幾分殺風景にも感じられる客間に巡らせる、寂しげな視線。

「誰かとこつやって話すのが楽しみとなりましたね。こちらこそお礼を」

あの時俺たちが出会ったのは、鬼でも何でもなく、普通の人間<sup>と</sup>だった。今日の前にいる、丙目<sup>へいめ</sup>という年配の男性だ。見も知らぬ者に対しての腰が低いと言ってもいい程に丁寧な口調は、最初俺を驚かせた。そこそこきちんとした身なりをしていて、目元の皺は温厚そうな印象を与える。

(ここで何をしておいでか?)

丙目さんの問いに、「旅の者なんですが、道に迷ってしまって」と俺の口から咄嗟について出ていた。まあ、張<sup>ちやう</sup>も瞬時の判断で矛を近くの藪の中に隠していたから、この説明でもぎりぎりいけただろう。まあ、それをなしにしても十分怪しいんだけど。

(……この上は古い神社で、道はありませんよ)

(はあ、そうですか……)

(それにしても難儀したでしょう。ひとまずこちらへ。私の屋敷が近いので)

物腰も丁寧に、丙目さんは俺たちを招くように案内した。俺と張は面喰らって少し顔を見合わせ、とりあえずそれについて行ったのだ。

俺たちが上ってきたのとはまた違う方向へ。人の足で自然に踏み慣らされた山道を下っていけば、出てきたのはあの高台の屋敷の裏手だった。

そこでやっと、丙目さんがここの村主だと気づいたのだ。

そして、屋敷で休ませてもらうどころか、夕食までご馳走になっているのが今のこの状況。思いがけない厚意と親切さに、俺は何よりもただ戸惑うばかりだ。

張は散歩とか何とか称してどこかに行ってしまうって、なかなか戻ってこないし。一体どこまで出かけてるんだよ。

「そういえば、一瀬いちのせさんはどちらに向かわれているのですか？」

丙目さんは汁物を一口含んだ後、俺に話を振った。

「山城の方に」

……本当はそこから来たんだけど。

「ほう」

「ちょっと、訪ねたいところがあるんで……」

「それは大変そうですね」

嘘ではない。目指しているのは神隠しの村です！ と言えないだけで。

「この辺り、旅の人はよく通るんですか？」

「いえ、辺鄙へんびな地ですから。道が複雑なので、偶に境近くで迷う旅の方はいますが」

「最近、そんな人たちの神隠しが相次いでいるとも聞きますな」

俺は一瞬ぎくりとした。「神隠し」で思い出して、さり気なく聞こうと思っただけに。

しかしそれ以降は、当たり障りのない会話が交わされた。俺は近からず遠からずの内容で旅のことを話し、丙目さんも近江やこの村のことを教えてくれた。山城を発つてからは一いちと一いちという少年以来の、まともかつ和やかな会話だったかもしれない。

丙目さんが不意に俺に切り出してきたのは、そうこうして食事を終えた頃だった。

「一瀬さん、宜しかったら泊まっていって下さい」

「……え？」

「直に日も暮れますし、行方知れずの旅人の件もありますし」

「で、でも、これ以上はご迷惑になるんで」

食事の上に寢床まで提供してもらうのは、流石に気が引けた。ありがたいのは間違いないが、それでも俺は慌てて断ろうとする。

「久方ぶりに、少しばかりですがもてなしをさせて頂きたいのです」  
「……」

丙目さんの物悲しげな表情に、後の語が喉元で詰まる。この親切さの奥には、家族を亡くした一人身の孤独があるのかもしれない。どこの者とも知れない風変わりな俺たちに良くしてくれたのも、そういう理由だったのだろう。そう察してしまえば、無碍むげには断れない。

「……じゃあ、今晚はご厄介になります」

「厄介など。世話好きな老人の単なる我侷わがくですから」

遠慮しつつおずおずと下げた頭を上げると、丙目さんは嬉しそうに目を細めていた。

「では、お連れの方にもそう伝えておきますので」

早い夕食に早い就寝。照明が自由に使えない時代の人たちの生活リズムは早いものだ。

宛がわれた一室に、布団が整えられた。用意してくれた手伝いの人にも礼を言おうとしたが、その前にそそくさと出て行ってしまい、今のところ部屋には俺だけ。

刀と荷物と笠を布団の側に置いて座り、そんな俺は首を傾げずと唸っている。

神隠しの村って、本当にここなのか？

単なる、どこにでもある静かな田舎村の一つじゃないのか。

俺の方が間違っていたりして……。

そう考える度自信がなくなってくる。

でも、この心の妙なざわめきだけは、一向に消えてくれない。

丁度その時、襖が開いた。入ってきたのは、張だ。手にあの大矛がないだけで、何やら変な感じがする。

「張、どこに行ってたんだ？」

「村の奴らに話を聞きに行ってた」

張はそう言っつて、もう一つ敷かれた布団の上に腰を下ろして胡坐を掻く。間を置かず聞こえるのは盛大な舌打ち。

「ここ最近、重い病や怪我を負った者、そいつに薬を売りに来た奴がいたかも聞いたんだが」

聞いても、村の者全員が口を噤くんでしまったそうさ。逃げるように避ける者もいたらしい。それはこの屋敷の者も含めて。

「……それはあんたが怖いからじゃ？」

「何か言ったか」

「いや別に」

ろくに話を聞けず、ならば丙目さんにと思っただらしいが、既にあの人は寝室で休んでいる。今のところ、鬼、緋力、薬売り、どの情報もともに掴めていないからか、「役に立たねえジジイだぜ……」と張は悪態を付いた。



……一宿一飯の恩を受けておいてそこまで言つなよ。もう完全な八つ当たりだろこれは。

俺の冷たい視線は何のその、張は苛立たしげに頭をガシガシと掻いている。

「つたく、揃いも揃って何かに怯えてやがるみてえだ」

「それは……確かに」

そういえば、手伝いの人にもそんな様子が見受けられた。出来る限り関わり合いたくない、とでも言うかのような。

いや、俺はそのずっと前から気づいていた筈だ。初めにこの村を見た時から。

「妙だぜ、ここは……」

日は落ちた。代わりに上った月の静かな光が、雲の合間から零れ、灯りの既に落ちた薄闇を微かに照らす。

用意された床には、俺も張もどちらも横にはなっていない。

「俺は一旦あそこに戻る」

頃合を見計らって、張が低くそう言つて腰を上げた。衣擦れの音がそれに伴う。

「あそこ」とは、山中で見つけたあの階段の所のことだろう。丙目さんが足しげく参拝しているらしいから、鬼が隠れているかどうかは怪しいものだが……生憎というか、張の火竜かりゅうはあの近くに隠したままなのである。

「てめえはここにいる。二人もいらねえだろ」  
念のため気は張つとけと言いつ残して、暗い赤の背は部屋を後にするのだった。

張が行つてどのくらい経つたか。

俺は居住まいを正したまま、無意識に右の指で心任しんとうの柄をなぞっていた。瞼こそ閉じているが、感覚は冬の空気のように冴えている。それなのに、胸の中には変わらず何か悶つかえたまま。

片眉が跳ねる。

戸の外の、更に向こう側の廊下で、今人の気配と微かに軋む床の音がした。

俺は目を開けて素早く刀を腰に挿すと、そつと襖を開けて外を覗いた。すると、ぼうつと揺れる火の明かりが、廊下の先の角を丁度曲がっていくのが見えた。

こんな時間に一体……？ 数秒の逡巡の後、俺は極力気配を殺して、足を摺るようにして後をつけていた。

出てきたのは 敷地の隅。屋敷に入る時、この場所には気がつかなかった。

そこには、ひっそりと建つ納屋とも蔵ともいえない小屋があり、手前で灯りが滞留している。

俺は距離を少し置いて、手近の物陰に隠れて様子を伺っていた。  
だが

「出てきて下さい」

「……！」

俺の心臓は大きく跳ねる。

声を掛けた人物はそれ以上何も言わなかったが、これは俺が出てくるのを待っているようだ。お見通し、ということか。ばれたなら仕方がないと、俺は小さくため息をついてゆっくりと歩み出る。

そこにいたのは

「……丙目さん？」

丙目さんだった。暗闇にすっかり慣れてしまった目が、あの温和そうな目と宙で結びつく。ぼんやりと暖色に照らされる口元の微笑みは軟らかい。

「一瀬さん、おびき出すような真似をして申し訳ない」

おびき、出す……？ 丙目さんが、俺を……？

「丙目さん、これは一体……」

「いや、貴方にどうしても見せたいものが」

「……？」

見せたいもの？

俺は訳が分からず眉をしかめた。

丙目さんはくるりと俺に背を向け、手燭を地面に置くと、目の前の小屋の蝶番ちやぶつがしを外し始めた。農村にらしからぬ、大ぶりの鉄の錠のようだ。

程なくして、金属が地に滑り落ちる音が響いた。そして、軋む不気味な音を立てながら、ゆっくりと扉が両開きに解放されていく。

何だこの感じは……？

空気が重い。息苦しい。

温度が下がった。

ぞくりと悪寒が背を這い上がる。

心臓の脈がとぶ。

ダメだ。

ダメだ。

「それ」を開けては、いけない。

丙目さんがすつと横に下がり、開け放たれたその暗がりの中にぎらりと光るものを俺は捉えた。

青白く灯る両眼。

この瞳を、俺は知っている。

これは

「鬼……っ!？」

「『鬼』とはまた失礼ですね」

俺の驚愕の声に、丙目さんは不服そうに顔を歪めるも、すぐに慈愛に満ちた表情に戻る。

「一瀬さん、紹介しましょう」

「私の、娘です」

「そして貴方には、我が娘の糧になって頂く」

十八話 遣らずの村（後書き）

遣らずとは、「行かせない」という意味です。参考までに。

十九話 鬼は囃（わら）う

さあ、今宵も

闇の中で、逢いませう。

【今日也】

「瀬さん、紹介しましょう」

「私の、娘です」

「そして貴方には、我が娘の糧になって頂く」

その言葉と同じくして、解き放たれた蔵の中から浮かび上がるよ

うに現れる姿。顔にかかった長い髪の間から、妖しく光る青白い瞳が垣間見えている。

娘って……へいめ丙目さんの娘さんは、亡くなったんじゃ……？  
しかし現に今、そう呼ばれた者は俺の前にいる。だがそれは、紛れもなく 鬼だ。

「娘は、人の血肉を求めています。貴方のような他所者たひびとたちは丁度良い」

ましてや今宵は二人も手に入った、と丙目さんは嬉々として口にする。

「丙目さん、じゃああんたが……」

ここが、探していた「神隠しの村」で間違いないということか。その全容が少しずつ形を成していく。

この境辺りに立ち寄った者たちが失踪したのは、鬼に喰われているからだ。そして鬼の食事に加担していたのは、他の誰でもない、丙目さん本人なのだろう。

人間が人間を喰わせる手助けなど……まさに、狂気だ。底冷えのするような恐ろしさがよぎる。

「さあ、腹が減っただろう」

小さな子どもをあやすように、丙目さんが娘に声をかけた。その変わらぬ優しげな表情が、今はかえって不気味でしかない。

それまで定まらなかった鬼の焦点が、俺へと結びつき……その目が三日月のように細まった。

下手に刺激しないよう、気取られないよう、慎重に。

俺は左の腰元に手を伸ばした。

僅かな逡巡の後、鯉口を切って、ゆっくりと鞘から脇差しんとうを抜く。

手のひらが柄にじっとりとはり付いている。

不意に、ふつと……。

地面で揺れていた蝋燭の火が

消えた。

同時に、鬼の姿も俺の視界から忽如として失せる。

「……………!?!」

俺は慌てて視線を走らせる。どこに消え　　っ!?!

ようやく気配に気づき、はっと頭上を仰いだその刹那

鬼は一気に跳躍し、俺の目の前に迫っている!

「……………っ!」

上からの重圧に、俺はそのまま押し倒される。

間髪入れず、鬼が覆いかぶさるように飛び掛ってきた。

一体、この痩せた体のどこにこんな力があるのか。逃れようと身じろぐが、一向に事態は変わらない。完全に押さえつけられた体勢になっている。

「キィハハ、ハハ、フフフ」

口角の上があったその口から覗くのは、尖った犬歯。肉切りナイフよりも鋭いそれ。全体重をかけて俺の首に食らいつこうとしている。左手一本で、それを死に物狂いで押し返す。だがなおも迫り来る。

握られていた筈の脇差は　　ない。さっきので放してしまったのか。例の小太刀を代わりに抜く余裕などない。もう一方の手で地面を掻き筆るように落とした刀を探す。



どこにいった!?

「ギイ、キキキ、キイハハハ」

「……っう!」

押さえ込まれた肩口に食い込む皮膚を抉る爪に怯みそうになるのを、歯を食いしばって耐えた。左腕の感覚がじわじわと無くなりつつある。

そうしている間にも力負けしてきて、喉元を引き裂く牙が徐々に近づいてくる。

首筋に、その先端が触れた。血の気が凍る。

その時、右の指先に微かに触れる物があった。ガチャと小さく音を立てる 脇差、心任しんとうだ。

腕を伸ばし必死でそれを握った。

俺は奥歯を噛み締め、力を振り絞って何とか鬼を押し戻す。僅かに俺と相手との間に隙間が生じた。

咄嗟に、そこに刃を滑り込ませるようにして振り払う!

「ギイヤアツ!?!」

短い悲鳴を上げて、鬼は俺の上から即座に飛び退いた。

振り抜いた勢いのまま、俺はすぐに起き上がる。

少し離れた先には 鬼が身を縮こまらせるように蹲すまっていた。

着物を染め、白い腕を伝うのは、赤黒い血。だがすぐに傷口を押さえていた手が解かれ、再びゆらりと立ち上がる。

出血は、もうしていない。その間ほんの数秒。急所でこそないものの、決して浅い傷ではない筈なのに。

俺は眉をしかめた。張が「首か心臓を狙え」と言っただ理由がこれだ。

痛みが逆に煽ってしまったのか、弄ぶような様子はもうない。代わりに、より強くなった殺意と怒りに満ちた眼光で、鬼は俺を射た。限界まで見開かれた、白目のない濁った青の両眼。身を低くし、飛び掛る姿勢を見せる。

もう一度、来る。

そう察知し、反射的に俺が身構えた時だった

鬼の標的が俺から逸れた。

落ち着きなく周囲を見回し、そして次の瞬間には、獣のような素早さで突如駆けて離れていく。俺には最早目もくれず、向かうは裏手の山の方へと。何か不可視の存在に、俺には聴き取れない声に、呼び寄せられるかのように。

「……………何だ？」

一体どうなって……………？

呆気にとられていたのは一瞬だ。

慌てて俺は刀を鞘に仕舞う。このまま行かせるわけにはいかない。俺は鬼の消えた後を追って走り出す。

「と、鴉カケっ！！」

背中越しに、丙目さんが誰かの名前を叫んだ気がした。

【張】

屋敷を後にし、下ってきた山道を取って返した。

暗闇の中でも目が利くから、程なくして例の場所に戻ってこられた。

隠したままだった火竜あいはうを藪の中から探り当て持ち上げると、手に馴染んだ感覚と重みが戻ってくる。昔はこの大矛を扱いこなせず鬱陶しく思ったこともあったが、今や体の一部同然、欠けると妙に落ち着かない。

「つたく、とんだ面倒だ……」

そして徐に石段に足をかけ、上っていく。

さっきは、あの丙目とかいうジジイに邪魔されて、結局確かめられず仕舞いだった。ここといい、この村といいあのジジイといい、どうにも怪しい。ジジイの過ぎるくれえの歓待も、何かに怯え怖れ「我知らぬ」を通す村人連中も。何かしら隠してやがる。

両脇の石塔を過ぎれば、やがてその階上が明らかになってきた。

そこは鬱蒼とした森に囲まれながらも、思ったよりも開けた場所だ。奥にあるのは、神殿か堂か？ 古びてはいるが造りはしっかりしているようだ。

「……？」

そのすぐ近くに、不釣り合いな頑丈な鉄の錠と鎖が転がっているのが目に止まった。

扉は、開いている。

俺は警戒しながら近づいていく。錠は壊され鎖は千切られていた、

恐らく内側から。手招きするようなその戸の隙間から中を伺えば

「……………やっぱりな」

初めに届いたのは、外気に触れることのなかった生ぬるい異臭。続いて、闇に映えるそのくすんだ白の色。人骨だ。それも結構な数で、頭蓋骨やら肋骨やら腰骨やらが、あちこちに散らばっている。

木の壁や床には一面、夥しい量の変色した黒い染み。

俺は顔をしかめ、扉から離れた。

なにか『古い神社しかねえ』だ。ここは 餌場だ。

「あの狸ジジ、……………！」

悪口は言い終われず 俺は首を向け、鋭い視線を横に遣る。

感じたのは、滲み出る禍々しい気配。

少し離れた木々の陰から、そいつは浮き出るように現れた。

元は、若い女か。痩せた体つき。血の気のない肌。長い髪越しに覗く、青白い眼光。

一瞬につと笑ったように見えたのは、捕食しようと牙を剥き出す肉食獣のそれに近い。

「ついに」

俺はそいつ、「鬼」に向き直る。

「お出ましか」

と同時に、鬼は俺に飛び馳せる！

踏み込みすら見せず、一足飛びで俺の間合いに接近する。

小刀の如く研がれた爪が突き出される。

俺は肩に担いでいた大矛を握り直す。鬼を迎え撃ち、その頭部目がけて力のままに振り下ろす。

直撃すれば間違いなく頭蓋骨を粉碎する一撃だ。  
しかし

「……！」

こともあろうに寸での所でかわされる。

地を這うようにして滑り込み、次の瞬間には俺の背後に回り込んでいる。速い！

「させるかよ！」

振り返りざまに、俺は横薙ぎに振るう。

だがその追撃を嘲笑うように、鬼は後ろに大きく跳躍する。蝶のように、というには些か無骨に、鬼は神殿の屋根の上に着地した。

「……ちっ」

月を背負う鬼の姿を見上げるような形で俺は舌打ちを零す。

前の「お千」の時とは少し違う。本当なら、さっきの一打で仕留めていた筈だ。

こいつはずっと動きが素早く、血に狂って突っ込むばかりでもねえ。

かなり頻繁に血を摂取して食い繋いでいるみてえだが、そのおかげってやつか……？

そうだってんなら

俺は火竜の刀袋を取り去った。革の覆いから解かれたのは、ざらりと光る巨大な刀身。現れる四方龍の鐔。

首の骨か背骨を砕けばいいと思っていたが……とにかく真つ二つに斬る方が手っ取り早そうだ。

腰を落とし、鉄刃の矛を伸長するように構える。その直線上に、  
奴の双眸の輝きを捉える。

そして俺は 一気に地を蹴った！  
耳元で風が叫ぶ。

今度は俺が屋根の上の鬼に迫り、刃を一閃させる。  
鬼は真横に飛び退く 狙い通りだ。  
間髪入れずに踏み込み奴を追う。

その姿を間合いに収めた。  
空中ではまず回避は不可能。  
矛を翻<sup>ひるがえ</sup>して下方に構える。  
すくい上げるように切り上げ、これで片がつく まさにその刹

那！

ガサリと大きく鳴るざわめき。  
空気を裂く音。  
突如として爆ぜる気配、殺気。  
それは 背後から。咄嗟に視線を後ろに向ける。  
俺のすぐ後ろに押し迫る俊敏な影。

そして、俺の眼前に打ち払われる、一撃。

「……っ!？」

頭全体に、打ちつけられたかのような重い激痛が襲う。視界が揺  
さぶられる。  
その衝撃で、俺は神殿の屋根へと、思いつきり叩きつけられて落  
下した。

半壊した神殿の床の上に倒れ、口の中だけで呻く。  
辺りには、土埃が舞い立ち、木片と骨が散らばっている。

空中でろくに防御も受身も取れなかった俺は、突然現れた影にもろに殴り飛ばされたのだ。あんな馬鹿力、普通なら首の骨が完全に折れている。

「……………く、あの野郎……………」

頭が割れるように響く。目がくらんで歪む。全身の骨が軋んでいる。

……………右手にまだ火竜を握っているのが、不幸中の幸いだ。  
かろうじて体を起こす。ここでいつまでもぶっ倒れているのを待ってやる程奴は甘くない。矛を支えに、よろめきながらも何とか足を踏み出した。

皮一枚で繋がっているも同然の扉を出た、淀んだ土煙の先。そこには

「そついうことかよ……………」

身を低くし、ゆらりと狩りの構えに入っている鬼の姿。

さつきと違うのは、それがもう一体増えていることだ。俺に不意打ちを食らわした奴が。

そいつらは、何もかもが瓜二つだ……………姉妹、それも双子か。  
互いが互いの危険を感じ取って、一所に集まってきたところか。

それを見た途端、俺はすぐに納得していた。

鬼は、二体いやがったわけか。恐らく、一体はこの神殿、もう一体は別の所に潜んでいたのだろう。今日也が昼方の鬼探しで妙に迷っちゃまっていたのは、これが原因だったのだ。

新手の鬼は、どこかで負傷したのか、肩口の布地を赤黒く変色させている。

腕から指先へ伝うその流血の代わりに 血が硬化し、赤い刃を象っているのが目に入った。

俺は思わず眉間に皺を寄せ、舌打ちをした。

不意に

俺の顔を覆っていた布が、するりと地に落ちる。先程の攻撃のせいかもな。

口の中に広がる鉄の味と、何かの硬い欠片。奥歯がかけちまったか。それと共に血の混じった唾を地面に吐き捨て、それから口元を手の甲で乱暴に拭う。

「上等だ」

そして矛を構え、切っ先を奴らに向ける。月光を反射する刀身に映りこむ自身は 一方の隻眼を青白く燃やしている。

フツと俺は口端だけで笑う。

「お望み通り、始めようか」

鬼たちが鋭利な歯牙を向けて、咆哮を上げる。

それに応えるように、俺も牙を剥いた。



十九話 鬼は囁（わら）う（後書き）

かなり初期の段階で、張の秘密に気づかれた方も多いのではないでしょうが；

近々、彼の経緯についても書きたいと思っています。覆面さんの外見についてもできれば……。

二十話 鬼は啼く、そして泣く(前書き)

今回のお話は、少しダーク要素が強めかもしれませんが。

また、前話の張サイドと少しばかり平行した形になっていますので。

それでは、どうぞ。

二十話 鬼は啼く、そして泣く

立ち止まらねえ。

振り返りもしねえ。

全部ひっくるめて、一生背負って歩いてく。

己が己に課した業だから。

【今日也】

息が上がる。視界の悪さに何度も足を取られる。

でも立ち止まらない。立ち止まらない。

頭の中に浮かぶ光景　それはきつと誰かの記憶と呼ぶべきもの  
の余韻を追って、俺はひたすらに山中を突っ切る。

脳裏に入り込んでくる。展開されていく。

丙目へいもくさんの悲痛な表情。

そしてこう呼びかけるのだ。奥さんの忘れ形見とも言つべき、死に際の娘たちに。

( 鴉からく )

( 千代ちよ )

( お前たちだけは、決して死なせはしない…… )

きらりと光る、血の色のような欠片。

『 お父様…… 』

ここは……。

気がつけば、昼に訪れた石段の所に戻ってきていた。鬼の気配の名残は……階段の上へと続いている。その先を見上げた時

「……うわ!？」

前触れなど一切ない。響く轟音。同時に、何かが粉碎し、崩れ落ちる音。

一体何が!？

俺は弾かれるように階段を駆け上った。

上りきれば、見事なまでに半壊した建物がまず目に飛び込む。

依然巻き立つ土煙の中には、鬼が二人。一人は俺が追っていた者だ。心任で斬った肩口の血の痕はまだ記憶に生々しい。

「上等だ。お望み通り、始めようか」

不意に低い男の声を耳が拾い、そちらに視線を向ける。そこに佇んでいたのは

「……ちよ、うっ？」

鬼と対峙する、長身の男。

やや逆立った短髪に、鋭い目つき。顔の半分までいたる、変色した古い痣。

そしてその右目だけは普通と異なり、青白い光を宿している。まるで鬼の目のような……。

はためく見覚えのある着物と、手に掲げる巨大な大矛がなければ、その男が張<sup>ちやう</sup>だとはすぐに気がつけなかったかもしれない。

しかし、この驚きはつかの間のことだった。

「うわあああ、あ、あ、あ、っ！！」

「……っ！」

後ろだ。慌てて脇差を抜き振り返る。

捉えたのは鈍い刃物。

俺は体を傾がせ、身を返してかわす。大きく空振りしたその人物の手首を峰で打ち据えれば、手にもっていた凶器が転がり落ちる。

古びた鉦<sup>なた</sup>だ。

続けざまに足払いし、前のめりに倒れ込んだ首根に刃をそえる。

「動くな……丙目さん」

……俺に襲い掛かってきたのは、丙目さんだった。この人も後を追いかけてきていたのか。

俺たちに気がついたらしく、張が鬼から目を逸らさぬままに俺に言い放った。

「おい餓鬼、そのジジイしっかり見張つとけ。手、出させるなよ」

言い終わるか終わらないかの内に、こちらに馳せようとした鬼の進路を阻むように、張は矛を薙いだ！

「鴉、千代、殺せ、殺すんだ、そうだ、殺してしまえ……」

両膝をついた体勢で動きを封じられた丙目さんが、呪いに等しい言葉を吐く。その首筋に刃を押し当て、警戒を解かぬままに、俺は張の戦闘の成り行きを見守る。

鬼は二人だ。

俊敏で、入れ代り立ち代りで動きを定まらせない。先程から斬撃をするりとかわしてばかりだ。

そこから転じて繰り出される鋭い牙と爪。一方の鬼の腕には、赤い刃が伸びている。

これらを矛で受け、払いながら、張は戦っている。

数も速さも分が悪い。

圧されているのか？

いや、多分そうじゃない。張は、一気に畳み掛ける機会を窺っているのだ。

しかし……。

「……ちっ」

一閃をかわして高く跳躍し、赤い剣の生えた鬼は張の後方に降り立つ。

これで挟まれるような位置になってしまった。獲物を追い詰める包囲網を狭めるかのように、前後から鬼がじわじわとにじり寄る。

マズイ……。それに、これじゃ埒が明かない。  
そう思ったのは、張も同じだったようだ。目の奥の鋭さが増す。

前方の鬼が、一気に詰め寄ってくる。

張も迎え撃つように地を蹴る。

それを見計らうように、後方からもう一人も動く！

張が肩越しに後ろの敵を見遣るが……避けようとしなない！？

赤の刃が張の肩あたりを狙って伸び　突き刺さる。

「……………」

張は顔を歪めたが、構わず前から来る鬼を切り払う。

刺されることを端から承知で、確実に一人倒すことを先決したのだ。まさに、肉を切らせて骨を断つだ。

鬼は即座に退いたが避けきれず、切っ先が胸を走る。

骨肉を裂く重い音。響く短い悲鳴。髪を振り乱し、体を屈して痛みにもがく。

敵にまたとない隙ができる。だが、張は止めは刺せない　乱暴に肩口から刃を引き抜いた背後の鬼が回り込み、張の手元に突如として現れたからだ。

「……………」

刃物のような牙で張の手首に容赦なく食らいつくと、ぐいと顎を引いてよじる。

捻られた拍子に、大矛は張の手から落ち、勢いのままに地を滑って離れていく。

張は咄嗟に手を返して、裏の甲を鬼の顔面に叩き込む。

怯んだその牙から解放されると、すぐに後退して距離を取った。

「……つつ、馬鹿力で噛み付きやがって」  
忌々しそくに、張は食らいつかれた方の手を数度振る。大丈夫なのか？ 確かではないが見た限り、腕首の肉を貫通していたんじゃないのか？

どうする……？ 今や張は丸腰状態だ。  
無慈悲にも、鬼は既に張に向かって来てるというのに！

不意に。

張が咆哮を上げる。それは夜気を震わす まさしく獣の咆哮だ。大凡人間のものとはいえぬ二本の鋭利な犬歯が、その口元から垣間見えた。

本能的な恐怖に鬼が身をすくませ、動きが僅かにぶれる。

張はそれを見逃さない。

自ら踏み込み、一気に加速して間合いに飛び込む。

さっきのお返しとばかりに体をそらして鬼の横に回り、肘で首を突きのかせる。

「ガッ!？」

その衝撃で前のめりになった鬼を捨て置き、張は駆け出している。向かう先には、地に伏したままの火竜かりゅう！

ほぼ同時だった。

張に胸を斬られ、少し先でのたうっていたもう一方の鬼が、震え



ながらも立ち上がったのは。拍子に、破れた布地から、癒着しつつある盛り上がった赤い肉が覗く。

その血走った眼が捉えたのは……俺と、丙目さんだ。手負いの鬼が欲しているのは、新鮮な血だけ。既に、理性は飛んでいた。

「ち、千代っ!？」

丙目さんが驚愕と恐怖の入り混じった声を上げた。まさか父親を襲うとは予想だにしていなかったのだろう。だが、獣の生存本能の前では、最早「父」は何の意味も成さない。

皮肉にも丙目さんの声を引き金に、荒い動きで奴はこちらに飛び掛ってくる。

張は!？

視線を走らせる。

まだ火竜には距離がある。

そうする内にも鬼の刃が張の背中に迫いすがって来ている。

矛にはまだ、届かない。

「張!」

気がつく間もなく、俺は手に握る心任しんじやうを張に向かって投じていた。

脇差は白い弧を描き

向き直りざまに、張がその柄を掴む。

直後、両者の影が覆いかぶさるように重なった。

刹那の時が、停止したかのように感じられた。

「グア、ギヤアア……」

苦悶の断末魔を搾り出し、倒れたのは 鬼の方だった。

その胸を、深々と脇差の刃が貫いていた。

一方、俺たちにも残った鬼が迫ってきている。俺の手元にあった脇差は、張に渡してしまった。

「……………っ、こうなったら!!」  
迷っている暇はない。

丙目さんの前に躍り出るようにして、俺は腰に挿したもう一振を抜き放ち身構える。青い小太刀。鉄東矢てつとうしを。

抜刀の軌道に合わせて、鏢に埋め込まれた青い石が煌く。戦いは場違いなくらいに、美しく。

剣を引き寄せ溜め、一瞬のタイミングを見計らう。

俺の小太刀の間合いに、鬼が　　入る！

次の瞬間

俺の眼前を突如として銀の影が覆った。

地面を穿つ。

続けて、飛び散る熱い血潮。

一拍遅れて届く風。

「……………っ、これは？」

目の前に出現した堅牢けんろうな壁……………それは、突き立つ張の火竜だ。

視線を移せば、矛を投げ放ったまま静止していた張の腕が、ゆっくりと下ろされるところだった。ようやく主の元に戻った刃が、投げ打たれ、下敷きにするようにして最後の鬼を叩き切ったのである。

辺りに停滞する静寂。誰も、何も言わない。

それを破ったのは、意外にも俺だった。正確には、俺の持っていた鉄東矢が、だ。

もう限界だった。小太刀を抜いてすぐに、鋭い痛みと熱が手のひら全体に走っていたからだ。痛覚はやがて麻痺すると聞いたことがあるが、この場合においてそれはあり得なさそうだ。

刀がするりと手から落ち、地面を打って高い金属質の音を鳴らす。その後を追うようにぼたりぼたりと滴るのは、俺の血だ。

見るともなしに手を見れば、手のひらに無数の切り傷が刻まれていた。まるで砕けた硝子でも握ったかのような有様だ。初めて持った時よりも、握っていた時間が長かったせいだろう。

ふと、土を踏みしめる足音が近づいて来るのに気がつき、俺は顔を上げる。張だ。

「こんなところか」

張が静かに口を開く。

その鋭い双眸の奥に見据えるのは、俺の後ろの 丙目さんだ。今や糸の切れた操り人形のように力無く、丙目さんはその場を微動だにせず、ただ呆然としている。

「 娘が流行り病あたりで死にかけてたところを、緋力を持った例の薬売りに付け込まれたんだろ」

鬼に変えられるとも知らずに、と張は苦々しく零す。

「それで、今度はためえの娘たちを生かし続けるために、旅の奴らを殺しちゃあ与えて食い繋がせた。村の奴らも、丙目むらめしの殺しに薄々気がついてはいたんだろうが」

「……………」

「鴉、千代、鴉、千代……………」

丙目さんは、まるでう言ようにそればかりを繰り返している。虚ろに見つめる先は 娘たちの死に場所だ。既に赤い破片へと姿を変えて霧散してしまい、もう何も残っていないのだが……。

その様を見下ろしていた張が、深くため息をつくように呟いた。

「これが、緋力に手を出した者の末路だ」

「……そう、か」

あるいは、緋力によって歪められた愛情の成れの果て、とも言えるのではないだろうか。

丙目さんの悲痛な表情。

そしてこう呼びかけるのだ。奥さんの忘れ形見とも言うべき、死に際の娘たちに。

( 鴉 )

( 千代 )

( お前たちだけは、決して死なせはしない…… )

きらりと光る、血の色のような欠片。

『 お父様……… 』

『 もう、いいの……… 』

徐に、張が腕を伸ばし俺に何かを差し出す 心任だ。いつの間にか、鬼を貫いた時に付着したであろう血は綺麗に拭い去られている。

受け取ると、張は地に突き立ったままだった矛に手をかけ抜き、

それを刀袋に仕舞う。

心任を腰に戻し終えた俺も、慎重に鉄東矢を拾い上げ、鞘に素早く収めた。手はまだ痛む。

「行くぞ」

それを確認した張は、石段の方へと歩き出す。

……え？ お、おい、ちょっと、丙目さんをこのまま放っておくのか……！？

胸の内の戸惑いと動揺は声にならなかった。俺は一瞬躊躇ったが、結局その背を追う。

すると突然

悲鳴にも似た絶叫が後背から上がり、思わず俺は足を止めた。

「な、なぜだあああつ！？ なぜつ、鴉を、千代を、殺したあああつ！？」

「……決まってるだろ。鬼だからだ」

張は振り返らず、言い放つ。その声はさして大きくはなかったが、低く、重かった。

表情は、ここからでは窺えない。

「おに、鬼など、なぜ娘たちだけ、つつあああ、あああ、あああ、娘たちだけがあつ！！」

丙目さんは追ってこない。それどころか、最早俺たちの姿は見えておらず、言葉すらも聞こえていない。ただ目を見開き、喉が張り裂けるばかりに叫ぶのみ。以前の丙目さんの面影は、もつどこにもない。

張は矛を担ぎ直したが、そのまま歩は止めない。

「安心しろ。てめえも立派な」

「『鬼』だ」

二十話 鬼は啼く、そして泣く（後書き）

少し短めかも……と活動報告では言いましたが、案外普通の長さと変わりました（笑）

「安心しろ。てめえも立派な『鬼』だ」の台詞を書きたくて書きたくて。日の目を見ることができて良かったです。

そろそろ三章も終盤です。次話は恐らく張がメインになってくるかな、と。

## 二十一話 天つ風よ（前書き）

近江編の最後のお話になります「静かなる飛報」の初めで張が見た夢と関係していたり。それではどうぞ。



二十一話 天つ風よ

鬼打隊おれたちが殺すのは、鬼であつて、人間じゃねえ……。  
だが、ある意味じゃあ、人間ほど「鬼」に近い生き物はいないだ  
ろう。その逆も、恐らくまた然り。

だったら、俺はどうなる？

人間か？ 鬼か？

それとも、その両方か？

あるいは そのどちらでもないのか……？

【張】

早々に例の村を後にした。夜が明けて事の次第を知った村の者達

に大騒ぎされるのは御免だ。

丙目あいつがどうなったのか……俺がそれを知ることはこの先ずつとな  
いだらう。知ったところで何になる。

今は峠を下る途中で、戦闘に身を置いた身体を休ませるために、  
適当な場所をとって野宿をしている。焚き火の近くに腰を下ろし、  
どちらとも何も言わず、各々のことをやっていた。

ちらりと視線を移せば、今日きょう也は手の傷を布で幾重かに巻いてい  
るところだった。

鉄東矢てつとうしやを持ちすぎたせいか。鉄東矢あれはまだ、走真そま以外を主と認め  
ていないということになる。

まあ、その程度で済んだなら良い方だ。昔あれを迂闊に掴んだ敵  
なんぞは、片腕をこっそり持つて行かれた。

「刀持つのに、支障はねえだらうな？」

「あ？ ああ……何とか」

俺の問いかけに、今日也は手を開いたり閉じたりを何度かやって  
確認してみせた。

「つて、それよりも、あんたは！？」

「うるせえ」

急にでかい声出すな、と端的に返し、腕を火の明かりにかざす  
丁度鬼に食い付かれたところだ。の傷は、血こそまだ多少流れ  
ているが、もう大分塞がりかけていた。これなら放っておいても直  
に治るだらう。肩の傷も同様の筈だ。

こんなに早く治癒することは、普通に考えればまずあり得ない。

それを目の当たりにした今日也が、やはりと言つべきか今更と言  
うべきか、思い切ったと表すには些か気まずそうに口を開く。

「……………なあ、張うち」

「俺も『鬼』だ。ある意味じゃあ、な」

「……！」

言い切るのを待たずして遮った。

元々隠していたわけじゃあないが、根掘り葉掘り聞かれるのも面倒だ。それなら、俺から話した方が早い。

「てめえも、薄々気がついてただろ」

「……」

思い当たる節は、それこそいくらでもあるだろう。

鬼と同じく、日の光を苦痛とする。日中は活動も鈍る。

傷の治りも、今見せた通り。確かに他の鬼みたく忽ち傷口がくつつくわけじゃねえが、次の日には大抵元に戻っている。

まず第一、俺の火竜は、大の男数人がかりでやっと持ち上げられる代物だ。それを並の奴が担げる筈がねえんだ。

「でも張は、さっきの鬼たちとは、違うだろ……？」

「……多分な」

俺はそう答えて、ふと天を見上げる。夜明けを感じさせる藍色の空が、あの時の暗い海の色と重なった。

元々は、武蔵のある村の漁師だった。笑えてくる。ただの漁師だったってんだから。

朝一番で漁に出た。それ以外にも、畑や塩や干物作りの手伝いに、雨の日には網を繕う作業……平凡と言ってしまうばそれまでだが、平穏な暮らしだった。少なくとも俺にとってその日常は存外悪いも

んではなかったし、恐らくそれがこれからもずっと続いていくのだらうと思っていた。

だが敢無く一変したのだ。あの日に。

始まりは、村の近くで見かけた奇妙な二人組の男。一人は大柄の初老の男で、もう一人は、何とも派手な髪の色が目を引き、この国の者とは違った外見の若い男だった。

黒い着物に、革の鎧と手甲と脚絆。腰には立派な刀を挿していた。その格好は、旅姿というよりは戦装束を思わせた。

何にせよ、この辺りでは見慣れない者達であるのは間違いないかった。

(てめえら、ここで何してる?)

それが、鬼打隊との出会いだった。

この二人組が、先代の副隊長「右手周助」と、今となっては隊の生き残りの一人となった高村成実だと知ったのは、後になってからだ。

そして、奴らが「探している者」と言っていたのが、まさか追っていた鬼で、ここに流れ着いていたとはな……。あの時の俺が知る由もない。

その晩は、不気味な、仄暗い夜だった。

日はとうに落ちて、村全体が寝静まっていた。そんな中俺は、突然胸騒ぎとも虫の知らせともいえぬ感覚に目を覚まし、気がつけば床を抜け出していた。元々勘は良かった方だ。そしてそれがあの日の災いとなり、俺の運命を変えた。

嵐の前触れか、風は妙に凪いでいて、波と舟が微かに揺れるだけの浜。

(……………！)

その時遭ったのだ　鬼に。

初めは余所者の男かと思った。知らねえ奴が、砂に足を取られでもしたのかよるめきながら、向こうからやって来ていると。

だが、朧気な月の下に照らされた姿は　淀んだ青白い眼光、口元から覗く牙、生気のない肌に広がる変色した痣　本能が、こいつは普通の人間ではないと告げていた。化け物だ、と。

(な、んだ、てめえは……………？)

俺を見定めてからの鬼の動きは速かった。視界に明確になり始める距離であつたにも関わらず一瞬で詰め寄られ、逃げる間もかわす間もなかった。

振りかぶられた鋭い爪。覆つのは、赤く固められた刃だ。

(ぐわあああつ、つ、う……………！！)

そして　辺りに鮮血が飛び散った。

何が起こつたか分からなかった。

ただ激痛のままに顔の右あたりを手で押さえ、そのまま両膝を折って身を屈した。

膝下の白い砂が、吸い切れなかった赤黒い血溜まりの中に飲み込まれていく。

その刹那、霞んだ視界の端に、きらりと光る鈍い輝きを捉えた気がした。それは、抜き放たれた刀。そこからの記憶は飛び飛びだ。

馳せる影が二つ。

黒衣着物の姿。

大柄な体躯。

馬鹿みてえに派手な髪色。

見覚えがあつた。昼に見かけた連中だ。

刃を閃かせ、次の瞬間には化け物の心臓は貫かれていた。

そいつは硬直したまま血を滴らせ、やがて脆い細工物のように割れて、砂塵のように霧散していった。

( い )

( お ! )

( しっかり ろ )

そこからは……覚えていない。言えるのは、気がつけば鬼打隊の里に運ばれていたということだけだ。

人生でこれ以上ない程最悪の出来事だった。全く、運がねえ。

俺を襲つた鬼。そいつは例外的に、何度も何度も緋力を取り込んでやがった。緋力の毒に、体中が浸り切っていたのだ。あの恐ろしい痣が、その証拠だ。

それによつて傷つけられた俺は、そいつを介して「緋力の血」が体内に入り込んだというわけだ。

普通は、あの鬼と同様に理性もない化け物になるか、じゃねえとしても死ぬ。相当の出血だったらしい。

だが、それは辛うじて避けられた。

里に運ばれるまで生き耐え、それから、今は亡き丹優たんゆうの父、沿寺えんじ卿と、医者なまみだつた成実なるみの治療を受けたためだ。

おい、成実。今俺様がためえに感謝を示してんだぞ。

だが……完全に助たすかつたわけではない。沿寺が研究し続けてきた緋力の力を打ち消す薬つてやつは、まだまだ不完全なものだったからだ。利く条件も限られている。

だから 俺の中には、今でも朽ち得なかった緋力の一部が流れている。

傷こそ治ったが、顔の右半分に残った、緋力の毒を表す痣も消えなかった。そちら側の眼もまた同様に、青灰色の、鬼の瞳のまま。

ようやく包帯が取れ、無理矢理鏡をひたたくって見た時の衝撃を、俺は今でも覚えている 故郷どころか、もう「人」にも戻れないという事実を突きつけられた時の……。

これが七年前、俺が数えて十九の年のことだ。

「それで、鬼打隊に……？」

「隊に入らざる終えなかった」ってか？ まあ、それが悪いことだとか情けねえだとかは思っちゃいない。

「自分じゃ選べねえ運命もある。否定はしねえよ。だがな」

確かに、立ち直るのには時間がかかったもんだ。それこそ呆れる程に長い時間が。

それくらい失ったものは大きい。一生かかっても取り返すことは出来ない。

しかし一方で、得たものもある。

紛<sup>まが</sup>いではあるが鬼の力を得た。肉体は人程柔じゃねえし、傷の治りも比較的早い。感覚もずっと鋭くなった。

仮にも鬼の身分に、片足突っ込んでるんだからな。戦闘では、こ

ういったのは役に立つ。  
だからこそ、見出したものがあるのだ。

(上等じゃねえか)

(貴様も、志くらいあるだろう)

(どうしても果たしたい志くれえよ)

(なら、利用しない手は無い……)

(その『鬼』の力、最後の最後まで利用し尽くせ!)

「俺には俺なりの信念があった。だから鬼打隊に入った」

俺だけじゃねえ。鬼打隊の者全員に、それぞれが掲げる目的、信念があった。鬼、緋力、人、そして己に対しての……って俺は何だっってこんなことまでこの餓鬼に語ってんだよ!?

話し終えたところで何を口走っているんだと我に返り、俺は抱え込む勢いで頭を掻いた。畜生、穴があったら入りてえ。

それを横目に、今日也の目線は未だに低く押し黙っている。

「ちっ、辛気くせえ」

俺は瓢箪を掴んだ。さっきの戦いのせいで、表面に大きな輝ひびが入ってしまったっている。再度小さく舌打ちをして一気に呷った。口の中に、混ぜた酒の味と同じく苦味が広がってくる。

そっぴゃあ、これも

「これは、丹優が作った薬だ。緋力の毒と、それから血への欲求を多少なりとも和らげる効果がある」

勝手に酒を混ぜてはいるがな。

ひとしきり飲み終え軽く振ると、中身が軽い水音をたてた。

今日也がようやく顔を上げる。そして、徐に口を開いた。





今日也は笑われたことが納得いかないのか、不服そうにしている。真剣も真剣で言っただから、余計に性質たちが悪い。

「まあとにかく、二度とやんなよ」

「……善処します」

「善処じゃ足りねえよ」

東の方から空が少しずつ白み始めてきたのが、木々の隙間から目に入る。

そろそろ行くか……。

焚き火の火を消して、顔に布を巻きながら俺は腰を上げる。脇に置いていた火竜に手を伸ばす。

袖から覗く手の傷口から血が一筋伝って流れ、そしてそれからの出血は止まった。

自身の血は、赤く見えた。

「さつさと峠こを下りるぞ」

「あ？ ああ」

後背に、慌てて追いかけてくる気配。待つのも面倒で、俺はそのまま歩を進める。

フツと、口端で笑みが零れた。

どうしても、果たしたい志……。

ああ。あるに決まってる。

俺が元の人間に戻る道など、どんなに足掻いたところで、あり

はし無い。

そうだってんなら

鬼も、緋力も、必ずこの世から無くしてやる。

俺と同じ轍を踏む道なんぞ、全部断ち切ってやるつじやねえか。

それまでは。

例え俺が、人でも鬼でもねえ中途半端な化け物でも。

立ち止まらねえ。

振り返りもしねえ。

全部ひっくりくるめて、一生背負って歩いてく。

己が己に課した業だから。

(上等じゃねえか)

(貴様も、志くらいあるだろう)

(どうしても果たしたい志くれえよ)

(なら、利用しない手は無い……)

(その『鬼』の力、最後の最後まで利用し尽くせ！)

(おらよ。快気祝い代わりだ。貴様に遣る)

(刀名は 『火竜』だ)

(それから)

(貴様は己れの部隊に入れ)

(己れは、鬼打隊実動部隊班長 )

(坂本<sup>さかもと</sup>だ)

「なあ」

「何だ」

「もしも一回イタズラ的なことを仕掛けてみた」

「絞めるぞ」

「デスヨネー」

## 二十一話 天つ風よ（後書き）

これで三章が終了です！

新キャラを出していきたい……と言いながら、出てきたのは名前だけ、もしくは敵がちらり程度；

次の章では、必ずや！

お付き合いいただきありがとうございます。これからもよろしく  
お願いします。

おまけで、張のイラストを載せています。

ネタバレ&低画質ではありますが……（汗）

> i 2 2 5 7 9 — 2 7 2 7 <

〈資料集 - 巻 -〉

《揺り籠》ゆりかご

平安時代、異国から渡来してきた奇妙な石造りの箱。

開けた中に何が入っていたかは不明。

しかし、その中身が原因で、五人の人間が鬼へと変えられたという。

その行方は今では分からなくなってしまっている。

\*\*\*

《元シ》

「揺り籠」によって生まれた、五人の始祖鬼のことを指す。皆、元は人間。

この「元シ」が、現在の鬼たちの大元であるといえる。転じて、彼らの直系の子孫もまた「元シ」と呼ぶ。

「鬼頭」きとう

元シの一角。

感情が昂ぶると、瞳が金色に変わる。

鬼となった後も人の心を残しており、そのため人間側についた。人々を脅かし始めた元シたちに対抗するために、揺り籠にも関わりのあつた「沿寺」と共に、後に「鬼打隊」を創始。初代隊長となつた。

しかしそのせいで、鬼側からは「裏切り者」とも呼ばれていた。

彼が死んだ後、人間の血が大分混じってはいるが、「鬼頭」の子孫もまだ存在しているという。

「秋臣」  
あきおみ

元シの一角。

有名な「酒呑童子」のモデルとなった鬼。

感情が昂ぶると、瞳が赤色に変わる。

「群青鬼」と並ぶ、元シの二大勢力の一つ。

一族を成して京で力を持ち始め、血を求めて人間に害を成すようになっていった。

しかし、元シの秋臣は、後に丹波の大江山にて討たれてしまっている。討った時に使われた刀は「童子切安綱」こっしきりやすつなと呼ばれる名刀。

秋臣の一族は戦国時代までその勢力を保ち続けていた。だが、手を貸していた越前の大名「朝倉」が織田信長に負けたのをきっかけに敗走。

そのすぐ後に、鬼打隊による二度の攻撃で滅亡してしまった。

「群青鬼」

元シの一角。  
感情が昂ぶると、瞳が青色に変わる。

「秋臣」と並ぶ、元シの二大勢力の一つ。  
その長命さゆえに、逆に生殖能力が極端に低い。そのため、他の元シとは違って、自らの血から作った「緋力」と呼ばれる代物によって、人を鬼へと変え一族の代わりとしてきた。

歴代の群青鬼と、生み出された鬼によって勢力を保ってきたが、戦国の世に移り変わった後、鬼打隊によって滅ぼされた。

「刀納」

元シの一角。  
同じく元シの「群青鬼」の分家ともいわれる。  
その瞳は銀色に燃える。

感情が喪失しており、「無の鬼」とも称される。

刀納は鬼にも人にも関わらず、僅かな一族とともに加賀へと退いた。  
一族内だけで純血を保ってきたが、それも限界に達し、最後は絶えたとされている。

「呉葉」



元シの一角。

戸隠・紅葉伝説で鬼女として語られている。  
感情が昂ぶると、瞳が紫紺に変わる。

平安の世の京にて、時の皇族・武将であった源経基に愛されるも、その正体を見抜かれ、追放されてしまった。

追われた先の信州戸隠の鬼無里村で、子供と共にひっそりとその余生を送ったとされる。

\*\*\*

### 《鬼打隊》 おにうち

その名の通り、鬼を狩る剣客の集団のことを指す。

元シの二大勢力「秋臣」と「群青鬼」に対抗するため、そして人々を守るために組織された。

その歴史は古く、平安時代にまで遡る。

初代隊長は、元シの「鬼頭」。

その後援に、揺り籠にも関わりがあったという「沿寺」家がついた。

東北の地に里をかまえ、隊の者とその関係者や家族が暮らしていた。

しかし、先々代隊長「渋江元伐」  
しぶえげんぱつによる群青鬼一族の討伐、先代隊長「宿地和真」  
しゅくちかすまによる秋臣一族の討伐後、逆に鬼打隊の力を恐れた近隣の大名たちによって襲撃され、里は全焼。鬼打隊は壊滅して

しまった。

鬼打隊の構成について

・隊長

鬼打隊の長を担う人物。

初代隊長の流れを継ぎ、隊長には「鬼頭」が多かった。しかし、徐々に人間との交わりが進み力を失ったため、鬼頭以外の者に移行していった。その中でも特に有名なのが、「渋江元伐」と「宿地和真」。

・副隊長

鬼打隊隊長の補佐を担う人物。

・軍師

鬼打隊の参謀。

・実動部隊

実際に鬼と戦う剣客たちを集めた部隊。

・隠密部隊

主に鬼や緋力の情報を集めることを目的とする部隊。

・後援部隊

戦闘の場には直接立たず、治療や武具の調達などのサポートを行う部隊。

・守備部隊

主に里の警備を行う部隊。

・近衛兵

隊長らや「沿寺」の護衛を担う者たちを指す。

鬼打隊の隊服について

隊服は基本、黒の着物に鎧や籠手がついた戦装束になる。  
軍師より上の者には、黒の陣羽織がつく。

隠密部隊は、同じく黒の忍装束。

後援部隊、主に治療を行う者は白の羽織を身につけている。

近衛兵は、鎧直垂に侍烏帽子の格好が基本。

\*\*\*

《沿寺家》  
えんじ

元々は薬学に通じた中流貴族。

「揺り籠」にも関わりがあったとされ、親交の深かった元シの「鬼頭」と共に「鬼打隊」の創始に携わった。

応仁・文明の乱（1467 - 1477）以降、公家の没落が起こり、沿寺家は鬼打隊の里に移り住んだ。

代々、緋力の効力を打ち消す薬の研究を続けている。また、揺り

籠から始まる鬼の歴史を記録してきた。

その膨大な知識は、鬼打隊隊長と並んで隊の中でも大きな意味を持っている。

ちなみに、沿寺家の現当主は沿寺丹たんゆう優である。

\*\*\*

### 《緋ひ力》

元シの「群青鬼」の血から作られた赤い結晶の欠片。  
群青鬼の一族を作り出すことを目的とされている。

今は群青鬼が力を失っているため、緋力の精度が落ちており非常に不安定。結果、理性のない化け物「鬼」を生み出すに留まっている。

死にかけている人間が緋力を口にし、その後人の生き血を摂取した場合に効果が生じる。

はじめは高揚感に襲われ、あらゆる傷も病も癒えてしまい、運動神経や五感や治癒力が飛躍的に発達する。しかし、やがて自我を奪われ、他人の血を求めて人を襲い始める。

不老不死の薬として誤認されることもあり、大名の中でも争いの道具として欲する者がいた。

\*\*\*

## 《鬼》

「緋力」に感染した、元人間。

青白い肌、白目のない青灰色の瞳、鋭い牙と爪、血を硬化させる能力を持つ。また、人並み外れた身体能力と回復力を備えている。だが、失敗作の鬼には理性がない。

感染経路はほとんどが緋力によるもの。緋力と人の血を口にすることで鬼に変わる。

日の光に弱く、夜になると現れ血を求めて人を襲う。中には頻繁に血を飲むことで最低限の自我を保つ者もいる。

首を切り落とすか、心臓を突き刺すか、脊椎への決定的な損傷を加えなければ殺せない。

死んだ後は、赤いガラス片のようになって碎け散り、消え去る。

ちなみに、完成度の高い緋力であれば、より強い力と理性を持った高等の鬼を生み出すこともできるという。

二十二話（前） ぼーいみーつがーる（前書き）

第四章に突入です。

しばらくシリアスな内容が続いていたので、今回は一転ほのぼのした感じのお話に。

楽しんで頂ければ幸いです。では、どうぞ。

二十二話(前) ぼーいみーつがーる

「何で言わなかったんだよっ!？」

「あア？ 聞かなかったからだろ」

【今日也】

「え？ 何？ これを俺にどうしろと？」  
「読め」

「……はい？」

「お前が読め」

「だから何で俺が？ 自分で読めよ」

「……」

「もしもーし」

「……」

徹底的に口を閉ざすつもりか黙秘権行使ですかコラ。はいはいそのまま、私は貝にでも具にでもなっしてしまえよ。

……ん？ ちょっと待てよ。

そういえば思い返してみると、今までの周助しゅうすけからの書状も、初めて会った時に渡した慶史けいしのも、実際読んでいたのは丹優たんゆうだった気がする。これは、ひょっとして

「張ちやう、あんた………字読めないのk痛つてえっ!？」

それを言い終わらないうちに、頭頂部に容赦なく振ってくる張の拳骨。痛みで明滅する視界。

……凶星か。

「いいからとつと読め!」

「何も殴ることないだろ!？」

「うるせえ。何だその小馬鹿にしたような顔は」

馬鹿にはしてないって。

まあこの時代、皆が皆読み書きできるわけじゃないのは知ってる。ただ、張のその意外性に笑いそうになっただけで……って、これを世間一般では馬鹿にしてるって言うのか。

俺は次なる張の拳を警戒しながら、手の中の書状に洩々目を落とすのだった。

事の始まりは

峠の険しい下り道が、次第に開けた緩やかな勾配に変わり始めた頃。

高い鳴き声とともに、薄灰色の朝空から悠然と降り立つ影があった。一羽の大きな鷹。「周助」の伝令役だ。毎度のことながらよく俺たちの場所を特定できるものだと感心する。



足に結われて携えてきた書状を張が解き、開いた文面を見つめ……  
俄かに不愉快そうに目を細めた。

「周助からだよな？ 何だつて？」

「……」

俺の問いかけに張は答えず、代わりに俺にその書状を渡してきた。それを反射的に受け取ったものの……何で、俺？

そして、初めの会話に戻るのだ。

この時代の繋がった小難しい字を俺が読めるわけないだろ……。  
仮に文字が読めたとしても、どうせ次には古典みたいな文体が待ち構えているのだ。これが、厄介事の一つ目。

二つ目も、そう間を置かずにやってきた。悠々と歩く渋赤の広い背中与書面とを交互に睨みながら歩いているところに、突然かかってきた声がそうだった。

「張の旦那、じゃねえですかい……？」

「頼みますよ、張の旦那！」

「断る！ 誰が好き好んでそんな面倒事を。それに俺は今休業中だ」

「この通りーっ！！」

「すがりつくな鬱陶しい！」

旅の山道で偶然出会い、おずおずと声をかけてきた男。名を八兵衛<sup>え</sup>といった。小柄で、団栗目と下がり気味の眉のためか、どこか気の弱そうな印象が否めない。

八兵衛さんは、若狭のある町一帯を占める博徒集団 酒徳組に  
属する人で、張とは顔見知りのようだ。

博徒。つまりは博打を生業とする人たちのことだろう。  
何だか、話の雰囲気からしてヤクザ関係っぽい。一瞬、頭の中で  
某極道映画のテーマソングが流れる。

八兵衛さんと張の押し問答を、俺は遠巻きに眺めていた。  
内容を聞く限りだと、こういうことだ

八兵衛さんは大事な用で近江おつみに遣いに出され、今若狭わかさに戻る途中  
らしい。だが、酒徳組と長年に渡って対立している組があり、道中  
に命を狙われるかもしれないという。

二つの組の勢力争い。敵側がその見せしめとして狙ったのが、運  
悪くも一人旅で、その上（こんな風に言うのも何だが）簡単に仕留  
められそうな八兵衛さんだったのだ。

当の本人は、行きこそ何とか巻いたが、帰りはどうなるか分から  
ないと半泣き状態。

任侠怖えー。命取るとかそこまでするか。

と、ここで天からの助けとばかりに偶然出会ったのが、張だった  
というわけだ。

何でも張は、少し前まで用心棒をしていたらしく、以前はその酒  
徳組でも仕事をしていたのだという。だから昔のよしみで、途中ま  
で用心棒をしてほしいということなのだ。

道脇の岩に腰を下ろし、周助からの書状の暗号解読中の俺を尻目  
に、二人は断る頼む、つつぱねる食い下がるを繰り返している。

「第一、そんな割に合わねえ使い走りやらされてんじゃねえよ」

俺もそう思います。

「親分の命令でさあ……そうだ！ 礼は親分がはずませてくれやすからっ」

いや、あんたじゃなくて親分かよ。

「断るって言うてんだろ」

「そこを何とか」

「守りに入るのも性に合わねえ」

いやいやいや、用心棒の意味を履き違えてるって。

第一、用心棒って言うなれば護衛だろ？ ……思いつき「護」  
入ってんじゃないかよ！

張に、頭が弱いとか力馬鹿といった疑惑が浮上し始める。口が裂けても本人には言えないけど。

「それにだな、俺たちが向かってるのは山城だ。方向が端から違えんだ」

「そうでもないかもしれぬ」

丁度読み終えたところで、俺は口を挟む。二人の視線が俺に注がれる中、腰を上げ、張に書状を返す。

「多分だけどこれ、『若狭に来てくれ』って書いてあると思う」

若狭の酒徳の町で待つ アバウトではあるが、恐らくそういった内容じゃないだろうか。

「若狭？ 何でまた周助がそこにいんだよ」

「いや、そこまでは……」

「その町、おいらの町です！」

張の不機嫌そうな声音に、対照的な八兵衛さんの嬉々とした声が被さる。

張がちつと舌打し、目に見えて苛々し始める。これで断る正当な理由はなくなつたのだから。

「どうせこれから向かうんだろ？」

流石、若い旦那！ と俺を調子立てた後で、八兵衛さんはビクつくきながらも張の方を窺う。拾われるか元居た場所に捨て置かれるか、その後の身の結末を不安がちに見守る捨て犬のようだ。

「いいじゃないか、人助けだと思つて」

八兵衛さんもうんうんと大きく頷く。

やがて、張が半ば観念したように口を開いた。「下手に死なれでもしたら目覚めが悪いつてか？」と、深いため息をつきながら。

「……行けばいいんだろ、行けばよ」

かくして、急遽俺たちの若狭行きが決まつたのだった。

といつても、八兵衛さんが心配するようなことは何も起こらず、旅は驚く程に順調だった。

基本足しかないこの時代の移動手段に、俺も大分慣れ始めていたし。

そして、北へと旅を進めて何日目のことか。

俺たちは若狭に到着し、酒徳の町へと繋がる街道を歩いていた。

左右を竹林に囲まれた一本道。町はまだまだ見えない。笠から覗く空は相変わらずの曇り空で、伝令の鷹がつかず離れずで上空を飛んでいる姿だけが見える。

空気は前より冷たくなって、思わず俺は首をすくめた。

横では、和やかに話しに興じる八兵衛さんと、無愛想ながらも何だかんだでその聞き手に回っている張がいる。

「もうすぐ町に着きやす」

しばらくして、八兵衛さんが道の先を指差した時だった。

不意にがさりと葉音が鳴る。

「……っ！」

近づいてくる気配。

これは、一人じゃない。複数だ。

俺は身構え、張も気配の方に視線を向ける。八兵衛さんはひっと喉を鳴らした。

続けざまに、竹藪を押し分けるようにして飛び出してきたのは男が、五人。誰も彼も人相がきつくガラが悪そうだ。どう控え目にとつても堅気の間人には見えないだろう。前を塞ぐように立ちただかってくる。

まあ、「このまま何事もなく」なんて、そんな上手くはいかないだろうなと予想はしていたけど。近江での追っ手とは別に、待ち伏せしていた奴らもいたという事が。

ここまでされるって……八兵衛さん、親分からの大事な遣いって、一体何だったんだ!?

「か、かなまる金丸組！ こいつらです、おいらが言ってたのは!」

八兵衛さんが悲鳴に似た上擦った声を上げる。

「酒徳組のモンだな……?」

「俺たちのシマででけえ顔しやがって」

「ちよこまか逃げ回るしか能がねえくせによ」

「な、何をっ!?! シマも何も、あの町は酒徳のモンでい!」

「んだとっ!?!」

「おい」

五人の中で一番屈強そうな男が、短く声を発した。強面の顔には、勲章とばかりにまがまがしい傷跡が残っている。そいつの一言で、この口競り合いは切り置かれた。感じからして、こいつがこの中の頭か。

「とつとと終わらせるぞ」

幸か不幸か、今俺たち以外に人の通りはない。しかし、いつ誰がやってくるとも限らず、奴らは人目を気にするように周囲を確認する。

そして、使い古されていそうな腰の刀に手がかけられた。他の男たちも、一斉に刀を抜き始める。

「八兵衛」

男たちに顔を向けたまま、張が隣の八兵衛さんにどこか気だるそうに声をかける。返事を待たずして、そちらに張は腕を伸ばす。

「ちよつと持ってる」

そう言って渡されたのは、張の大矛「火竜」だ。今は革の刀袋に収まっているが。

「へ? へい……!?! つうわ!?!」

恐怖と混乱で訳も分からず受け取った八兵衛さんは、予想以上だったであろうその重さによるめいた。何とか支えようとしたが一拍も置かずに、大矛は派手な地響きを立てて倒れ落ちる。すぐ後を追って、八兵衛さんもその脇に尻餅をつく。

それを引き金に 男たちがこちらに突っ込んできた！

まず手前の一人が詰め寄ってくる。

俺は慌てふためいている八兵衛さんは背にして、その男に立ち向かう。

解いた俺の笠が、はざりと地に落ちた。

刀が振りかざされる だが、はつきり言って遅い。

それに狙ってくれと言わんばかりに、胸がガラ空きだ！

俺はしゃがみこむように前に踏み込み、拳を握り締めてそいつの鳩尾辺りを殴りつける。重い音と、肌に伝わる衝撃。

かはつと乾いた声を洩らし前のめる男の顔にもう一発、そして立て続けに腹に蹴りを放つ。

男は後ろに飛ばされるように倒れ伏した。

ふと視界の端に捉える 張は男三人を素手でいなしているところだ。

まるで子ども相手に喧嘩をしているように、次々と男たちは拳を叩き込まれ、他愛無く地面に吸い込まれていく。

さっき俺が一人やって、張が三人……後一人だ！

慌てて意識を自身に戻せば、真正面から迫り来る姿がひとつ。頭あたま格と思わしき、さっきの大柄な男だ。

怒号を上げ、俺に向かって刀を大きく振り上げる。

あんな力任せの攻撃、直撃したら頭が真っ二つに割れる。でもさ

振り上げすぎたら胴体がガラ空きになるんだってば！  
揃いも揃って少しは学べよ！

そう内心ツツコミを入れながら、俺は再び腰を落とし、鞘に収ま  
ったままの心任しんとうを素早く抜き取り

「ぐわあっ！？」

「……！？」

次の瞬間には、そいつは横に盛大に吹っ飛び、俺の視界から忽然  
と消失した。

慌てて消えた方向を振り向けば、当たり所が悪かったのか、男は  
道上で気を失って動かなくなっていた。ダラダラと鼻血を流してい  
る。

白目をむいたそいつを引きずって、返り討ちにされた金丸組の連  
中は尻尾を巻いて逃げ出し始めている。後ろで、八兵衛さんの「見  
たか、一昨日来やがれ！」という歓声が聞こえた。このワンシー  
ンは、どうやら全国全時代共通のものであるらしい。

俺はといえば、目を点にして、依然固まったままの状態。

「な、何だ……？」

小気味良い足音を立て着地した何者かが、片膝立ちの体勢からゆ  
っくりと立ち上がった。

それでようやく理解した。突然竹林を縫って真横から現れたその  
人物が、飛び込む勢いそのままに、あの男の顔面に見事なまでの膝  
蹴りを食らわしたのだ。あの様子じゃあ、あいつの鼻の骨は折れる  
だか陥没だかしていそつだ。



しかしその納得は、張の発した驚きの声によってすぐに中断される。

「てめえ何でここにいやがんだ」

突如として登場した助つ人は振り返り、遅いから迎えにきたと笑った。その拍子に、艶やかな黒茶の髪がなびいて揺れる。「嵐」と透る声の名を呼べば、空中の鷹が信頼する主の腕にスイと降り立った。

「周助」

「……え？」

「しゅ、周助……？」

周助つて、「右手周助」？

「こ、この人が、例の？」

周助つて

「……お、女……っ!？」

二十二話（前） ぼーいみーつがーる（後書き）

久々に新キャラを出せました。

タイトルで既にネタバレをしているので、常にハラハラものでした

（笑）

補足ではありますが、

若狭は、現在の福井県のことです。

また、張が矛を使わなかったのは、使うに足りない程度の奴らだと判断したからです（笑）

二十二話（後） ぼーいみーつがーる（前書き）

「ぼーいみーつがーる」の後編です。やっとこそ新キャラの登場で  
ありますが（笑）  
それではどうぞ。

二十二話（後） ぼーいみーつがーる

【今日也】

右手周助<sup>うてしゅうすけ</sup>。

元、鬼打隊隊員<sup>おにうちたいたいいん</sup>。

忍の出であつた先代副隊長を伯父にもち、その流れから隠密、特に謀報と追跡に長ける。

また、副隊長が編み出した「右手鳴雷流<sup>なるかみ</sup>」の剣においては、免許皆伝の腕前でもある。

丹優も<sup>たんゆう</sup>、あの張<sup>ちやう</sup>でさえも、一目も二目も置いている人物のようだった。

鬼打隊の壊滅後は、周助は生まれ故郷の土佐に戻つたらしい。丹優から聞いたところでは、大分前にそこを離れ、各地を旅していたようだが。

緋力や鬼が再現し始めた今は 周助はその動向を探りながら、例の「緋力を売り歩く薬売り」を追跡している……。

で。

この情報から、一体誰が「右手周助」が女だと推測できた！？  
できた奴、拳手。はいそこ、ちよつと前に出てきて話聞かせる。

そりゃあ確かに、イメージが先行して勝手に思い込んでたのは俺ですけどね……。今更ながら、先入観って怖え！。

「丹優からの書状で聞いてはいたけど、ほんとに走真そしまに似てるねー」  
自己紹介を交わして早々に周助に頭をわしゃわしゃされながら、俺はしみじみとそう思ったのだった。

現在俺たちは、若狭わかさの酒徳さかどくの町に入っている。

張は八兵衛やへえさんに促されて、酒徳組に顔を出しに行った。八兵衛さんの遣いの件は一応機密事項であるらしく、組に直接関わりのない俺と周助はひとまず待機だ。

ところが、再び戻ってきたのは八兵衛さんだけ。何でも、張は親分の話とやらに捕まってしまったらしい。

（用心棒のお礼と言っちゃあ何ですが、飯屋でも……）  
そうして八兵衛さんに連れてきてもらったのは、店屋が軒を連ねて立ち並ぶ町の表通り。その中の一軒の料理屋で、俺たちは張（プラス 用心棒の報酬金）が戻ってくるのを待っている最中、なのだが……。

「……そ、そんなに食べるの？」

「何言ってるの。奢ってもらう身を弁えて、いつもより控えています」

「それでっ!？」

「今日也が少ないだけでしょ。というわけで、いただきますーす八兵衛さん」

「へ、へい、どうぞ……」

店の奥側の席 俺の隣に座る周助は、そう言いながら運ばれてきた料理を平らげていく。

部活後の俺の食事量とペースを軽く上回ってるぞ、これは。

そしてその華奢な体のどこにそんなスペースがある！？ 胃は四次元ポケットか！？

すごく幸せそうに頬張ってるから良いんだけどさ。

向かいの八兵衛さんは箸を止め、呆気に取られているを通り越して、ある種感心した風に周助を眺めている。多分俺も同じ表情に違いない。

少しして、周助はふと顔を上げて朗らかに話し出す。

「それにしても」

好奇心に満ちた瞳が俺に向けられる。

「まさか一発で見抜かれるとはねー。女だって」

周助は、年は俺と大体同じくらいだろうか。

どこか意志の強さを窺わせる、目鼻立ちのはっきりした美人である。

緑の着物に、暗い灰色の袴といった男の旅姿ではあるけれど。黒茶の髪も、首の襟巻きに達しないところで切りそろえられている。

何でも、自らの素性を無闇に明かさないために、そして旅での面倒事を避けるために、周助は日頃から男装をしているとのこと。元々、隊の男ばかりの中で育つたのも一因らしいが。

名前まで男なのは……先代副隊長「右手周助」を襲名したから、だそうだ。

「良い洞察力してるね、今日也は。このまま隠密なっちゃおう?」  
「い、いや……?」

そう言って頭をわしゃわしゃされる。本日二回目。  
数日間とはいえ旅を共にした八兵衛さんももう俺の外見には見慣れただろうから、まあ公開されても、いいっちゃいいんだが。

「綺麗な兄ちゃんだとは思いやしたが」

八兵衛さんは、八の字の眉を更に下げて口にする。

「恥ずかしながら、おいらは全然気づけやせんでしたよ」

女「長い髪の常識が根付くこの時代。短い髪にあの格好では、周助はまず間違いなく男に思われるのだろう。」

「うーん、俺は『兄ちゃん』には見えなかったけどなあ」

俺から言わせたら普通なんだけど。ショートカットとかボブとかの髪型の「女子」は見慣れているし。まさかこんなところでカルチャーギャップを感じようとは。

俺たちの会話を聞いていた周助の目が、そこで悪戯っぽく細まった。隣にいた俺が真っ先に標的になり、新しい玩具を見つけた猫のようにじゃれ付かれる。

「ばれたにせよ、ばれなかったにせよ、嬉しいことというねー。こいつこいつ」

「わわ! やめろって!」

「また照れちゃってー」

思った以上に気さくというか、言ってしまうえば少々男勝りでお転婆のようだ 周助は。

「変わっ………愉快な方が多いですねえ、張の旦那の友人さんには」

八兵衛さん、今絶対「変わった」って言おうとしただろ。

そして何故その中に俺も含まれている!?

昼をご馳走になったその後。

「ちよいと、組覗いてきやしようか」と、八兵衛さんが通りへ一歩踏み出した矢先のことだ。

「うわあっ!?!」

突然、追い越すようにして走り寄ってきた男が、八兵衛さんの肩に乱暴にぶつかったのだ。八兵衛さんはその場に尻餅をつくように倒れる。

それにも関わらず、当の男は謝るところか一瞥もせず、そのまま足早に去って行ってしまった。

感じ悪っ! チンピラか?

「八兵衛さん、大丈夫ですか!?!」

続けて店を出て、笠を被り直していた俺は、慌てて八兵衛さんを起こす。

「すいやせん。痛てて……にしても何なんだ、さっきの野郎は」  
八兵衛さんはぶつぶつと文句を言いながら、怒った風に腕を組み

「……………あ、あれ? ねえっ!?!」

顔を真っ青にして、懷や袂を漁り始める。

「た、確かに、勘定済ませた後に、こ、ここに……………」  
「ないって……………」

まさか、財布!?!



それと同時にだつた。

「今日也、さっきの奴がスった！」

刀袋に仕舞われた刀を背に負つて、店から周助が駆け出してきたのは。そのまま俺たちを通り過ぎ、軽やかに通りを疾走していく。

「え？ マジでっ！？」

スつたつて、八兵衛さんにぶつかつてきた男があの際に！？ 次から次にいざこざとは……凄じいトラブル誘引率だなオイ！

急いで俺もさっきの奴の後を追つて走り出す。すぐに周助と並走する形になる。

しかし、その姿は既に遠く、人通りの多い道を縫つてさつさと進んでいく。まさに勝手知つたる何とやら、水を得た魚のようだ。

対照的に俺は、逆走する往来の中何度も人の肩にぶつかり、その度小さく謝罪しながら、擦り切れた着物一枚のその背中に追いつが。食べたばかりのせいかわ脇腹が痛む。

ばててしまったのか、八兵衛さんの気配は途中からついてきていない。

不意に、男が急遽方向を変え、裏路地に入ったのが目に入る。

このままじゃ見失うか！？

「今日也はそのまま追つて！」

「……！？」

透る声の方に顔を向けた時には既に、周助は道脇の方へと走り込んでいた。

そして 地面、それから壁をタンツと蹴つて、軒先の屋根に軽快に上つたのだ。

瓦の上に着地し、次の瞬間には、反対側の裏路へふわりと舞い降りる。

すげー忍者みてえ、というか周助はある意味忍者か……って感心してる場合じゃないって俺！

俺も次の角を曲がる。一本奥まったただけの通りの筈なのに、退くように人気がなくなり、どこか薄暗く湿っぽいようにも感じられた。

気配のままに追っていき……ようやく俺は、平家屋の背が連なる狭い一本道に例の後ろ姿を捉えた。

「おい、待て！」

俺が声を張り上げれば、まさかここまでついてこられるとは予想していなかったのか、振り返った男の顔に動揺の色が浮かび、俄かに走る速度を上げ始める。

あー、俺の馬鹿っ！

待てって言われて待つ奴なんか確かにいねーよ！

けど、障害物のないこんな直線の場合ならば、分はこっちにある。

「……！？」

刹那、男の前方に俊敏に降り立つ影がひとつ。揺れる緑の袖元、柵引く襟巻き　周助だ。

屋根伝いにここまで先回りしてきたようだ。これで前には周助、すぐ後ろには俺で、挟み込まれる形になったが、男はなおもしぶとい。

「くっ……どけ小僧！」

そいつは目の前の周助にそのまま突っ込んでいく！

だがそれは、無駄な試みに終わる

周助はくるりと身を翻して、相手の首のつけ根に手刀を打ち込んだ。間髪入れずに足払いをかけ、浮いた体に被さるように肘を突き入れる。

「ぐわ、は……っ!？」

男は呻き声を零しながら倒れ伏し、路上で小さく身じろぎをするに留まった。

流れるように転じた敏速な攻撃だった。攻撃自体はそんなに重くはないのかもしれないが、見事なまでに的確に急所に入っている。追いついた俺が思わず感心していると、後背からくぐもった低い声がかかる。

「今度はスリかよ。忙しねえな」

「……張!」

振り向けば、そこに佇むのは御馴染みの覆面の長身だ。後から、おろおろと成り行きを窺う八兵衛さんの姿もある。

「さっきそこで会ったんでさあ………おいらの銭、どうなりやした?」

「大丈夫。無事だよ」

いつの間に抜き取ったのか、周助が金が入っているらしい巾着を八兵衛さんに投げて返した。

「すみません、ありがとございやす!」

「おら、取り戻したんならとっとと行くぞ」

「一件落着!」

「……なあ、こいつどうすんの?」

俺は依然のびたままの男を指で指す。いや、何かこのままじゃ放置の予感だったから、つい。

「ああ？ 放つとけ」

「自業自得。転がしときなよ」

即答の二人。息は恐ろしいくらいにぴったり。

このスリが何だか不憫に思えてきたのは言うまでもない。運悪く狙った相手がいけなかった。とりあえず、合掌だけしといた。

張が「世話はかかるが信頼には置ける」と零していたりもしたが、確かに八兵衛さんはその手の世界では珍しいくらいの良い人だった。そんな八兵衛さんに、お礼やら謝罪やらでそれからずっと頭を下げられっぱなしで見送られ、俺たちは町の外れにまで出てきていた。酒徳組からの謝礼金を分けてもらい、俺の懐も初めてこの時代の金で潤っている。やっぱり、諭吉はここではただの紙切れ同然かあ……。

そんなことを思っている間に、張と周助は気づけば本題に入っている。

「で、さっきの話の続きだ。何でおめえが、若狭で止まってんだよ」「だーかーらー」

張の問いかけに、周助は唇を尖らせて、それから口ごもった。

「途中までその薬師とやら、追跡できてたんだよ。それが急に……」

「『急に』何だ」

「辿れなくなっちゃってさ。まるで誰かが、うちの邪魔したみたい」

「その薬売りに、協力者がいるってことか？」

「いるのは間違いねえが……周助の追跡を絶つなんざ、普通の奴じ

「やまず無理だ」

俺の疑問に、目を曇め不機嫌そうに張が答えたのは、雲の切れ目から注ぐ日のせいだけではないだろう。

「ちっ、厄介だぜ……」

「でも、そいつが立ち寄った所は分かってる」

その言葉に、覆面から覗く張の目がすっと鋭くなる。

「少し前から、そこで死人が続出してるとみたい」

「……それって」

緋力を売る薬売りが立ち寄ったとされる場所。そこで相次ぐ事件。これまでを考えれば、鬼と無関係とは言い切れない話だ。「神隠しの村」の一件が実際にそうだった。

俺の言わんとしていることを周助が受ける。

「調べる価値はあるでしょ？ だから二人を呼んだの。嵐あらしの行き戻りが早かったから、近くにいないんじゃないかと思ってね」

「こつというのは、早めに片付けた方がいいから」と周助は呟く。

その後、既に嵐をやって丹優にもこのことを知らせたと言いつた。嵐は……伝令役のあの立派な鷹のことだ。

相変わらずそういってこだけ手際がいいな、と張がぼやく。大矛の柄を肩に預け直して、深いため息をついた。

「つたく、次から次に問題なあ……で、どこだその場所ってのは」

「若狭の北外れにある小さな村なんだけど。ちょっとした噂になってる」

「そこの入り江に」

「人を喰う人魚が巢食ってる」ってね」

二十二話（後） ぼーいみーつがーる（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました！

「右手周助」はそれこそ何年も前から出来上がっていたキャラなのですが、今まで今日也や張が多かっただけに、なかなか書き慣れませんでした……；

さて、そんな周助が加わったわけですが、これからの今日也たちの旅も引き続き見守って頂けると嬉しく思います。  
それでは次話でお会いいたしましょう。

## 六 むかしむかし……

### 【呉葉】

「鬼頭」の作った鬼打隊。

後の世に、その鬼打隊によって滅ぼされた、元シの二大勢力「群青鬼」と「秋臣」。

では、他の元シはどうなったのでしょうか。

銀の瞳を持つ、「刀納」。

揺り籠ゆりかごによって人を超える力を得、それと引き換えに感情をなくしてしまった、無の鬼。

刀納は鬼にも人にも関わりませんでした。

僅かな一族とともに加賀かがへ退き……群青鬼が討たれる少し前に絶えたと聞きます。

その血を引くのは、ただ一人の半鬼……。

わたしはその人に会ったことがあります。どこか悲しそうなあの目を、わたしは幼いながらに覚えていました。



もう一人の元シ。紫紺の瞳を持つ、「呉葉くれは」。

戸隠・紅葉伝説の元となった鬼です。

呉葉は、京にてある高貴な方の寵愛を受けました。でも、その正体を見抜かれ、とうとう追放されてしまったのです。

追われた先は、信州戸隠の鬼無里村おになしというところ。子供と共に、そこでひっそりと暮らしたとされる呉葉

これが、わたしの祖先にあたります。

## 六 むかしむかし……（後書き）

戸隠・紅葉伝説は、ウィキペディアなどで調べたら出てくると  
思います。

二十二話 旅路にて（前書き）

今回は、若狭の旅の途中での「こまストーリー」です。

二十三話 旅路にて

すべて世は事もなし。

【今日也】

「何ともねえって言ってんだろ！」

若狭<sup>わかさ</sup>を北に、「人喰い人魚が潜む村」へと向かう旅路は、思っていたよりも順調に進んでいた。久々の快晴……という歯止めが途中でかかるまでは。

張<sup>ちやう</sup>は日の光がダメだ。その理由は、前に本人から聞いたことがある。

だから、日暮れまでとは言わないにしても、せめて太陽が陰るまでは休もうと言っているのだが さっきから張に突っぱねられっ

ばなし。

歩む道は山道とはいえ、差し込む陽光は強い。

大矛を担ぐ張の足取りは、幾分覚束ない。それが「幾分」なのは、張の意地とやせ我慢によるもの以外の何物でもないだろう。よく分からんプライドというか、弱味を見せたがらないというか、ねえ…。

「ふらふらで言っても説得力ないって」

「黙ってるチビ」

「……」

あーこの強情っぱりがっ！ 小学生かよお前は！

俺はついに匙を投げた。

丹優たんゆうの言うことなら聞くんだけどなあ……。心の中でそう零しながら、どうしたものかと困り果てた俺の視線が、ふと周助しゅうすけと結びつく。

後は頼みます、同僚さん。敬礼。

俺の心中を読み取ったのか、周助が心得顔で張の前を遮るようにずいと進み出た。その瞳が強気そうにつり上がる。

「いいから素直に休みなよ」

「ンな暇はねえ。先を急ぐんだろ」

「無理して倒れたら元も子もないでしょ。別に、永遠に休めって言ってるわけじゃないんだから」

「うるせえよ。俺はそんなに柔じゃねえ」

張はそう言い捨てて周助の横を通り抜けていく。

あー、やっぱり、こうなってしまうのか……？

「こら、偶には人の言うこと聞きなさいって！」

無視を通す張は、歩を止めぬまま。

「……へえ、そーゆー態度とるんだ」  
張は依然シカト。

「あーあ、じゃあばらしちゃおうかなあー。今、ここで」

ピタリ。

「……んだと？」

含みのある周助の言葉に、ようやく張が立ち止まる。肩越しに睨みをきかせているようだが、そんなの彼女はどこ吹く風だ。

「『ばらす』だと……？ 何の話だ」

「んー？ 例えば、どこかの誰かさんが」

周助は指を折って数えつつ、そこから一気に畳みかける。

「隊に運ばれてきたばかりの時、熱出してずーっと寝込んでたとか」

「……」

「縁側で寝たまま朝になって、日光浴びて大火傷したこととか」

「……っ」

「拳句の果てには、自分の体質分かってなくて、水浴びにいつて素っ裸で卒倒した」

「だああああっ！ てめえが何で知ってんだよんなこと!？」

堪え切れず張が怒鳴ったのを口火に、二人の攻防が始まる。

俺、このまま聞いていいのか、この会話。何か、張の沽券に関わりそうな気が、するんだけど……。

「うちの情報網は広いの」

「何が情報網だ。言いふらしやがるのは、成実しかいねえだろうが」

なるみって……前に張が言ってた「高村成実」たかむらなりさねのことだろうか。  
確か、張を助けた隊の医者だとか、何とか……？

「それから、昔は走真に」

「休めばいいんだろ休めばっ！」

「はい決まりー」

張は思わず出た自身の言葉の後に、しまったという風に舌を打った。「てめえ……」と口にこそするものの、最終的には閉口してしまっ。

まさかの展開に俺は目を見開く。ほんの少しの悪戯心を覗かせた笑顔を浮かべ、周助は密かに俺に向かって片方の目をまばたかせた。上手くいったでしょ？ とでも言うように。

思わず感嘆の言葉が俺の口からついて出てくる。

「すげえ……張が言い負け」

「負けてねえよっ!!」

山道からやや離れた、山間の少し開けた場所。抜ける風はつつすらと冷たい。

腕を組んで腰を下ろしている張の頭上を木の陰が覆う。当人は身じろぎするのも億劫そうで、思った以上にこの日差しが堪えていたようだ。

俺たちも休憩中なんだけど……携帯を周助に強奪され、カメラ機

能で遊ばれ放題されている真つ最中なのだ、俺は。

「何これすごい！ よくできた絵を次々写せる！」

「もうやめろって、貴重なバッテリーが切れるからーっ！！」

ソーラー充電器（自然の恵みを利用しない手はない、エコだエコ）もあるにはあるが、この時代いつ何が起きて全部駄目になるかわからないのだ。だが、そうやって焦る俺に、思いもよらない切り返しがされる。

「『ばってりい』って？」

「……電池のこと、いや、電池ってのは、つまり……」

「隙ありっ！」

「あ、っ！？」

「おい、周助」

そんな俺と周助のやり取りを一時中断させたのは（ある意味ナイスタイミング）、張のくぐもった声だった。覆面から覗く瞼が気だるげに上げられる。

「そっぴやあ……頼んどいたやつはどうなった？」

「……ああ、あれね」

周助は思い当たったように自分の荷の中を探し始め、そうして取り出された布に包まれた何かを張の元に行って手渡した。俺もつられて近づき、それを開く張の手元を覗き込む。かかる木漏れ日が揺れていた。

現れたのは 小ぶりな盾。鋼で作られたかのような鈍色の。

「また、えらくいいやつじゃねえか、この小盾は」

確かめるように手背で表面を何度か叩きながら、張は珍しく明らかな感心を表している。

「当たり前前。じつちゃんの故郷でわざわざ仕入れてきたんだから」

「伊賀の里でか……」



「じつちゃん」とは多分、周助の伯父さんの、先代副隊長のことだろう。

それにしても「伊賀の里」とは。聞き覚えのある単語が出てきたなあ忍法帳だすげえな、などと他愛無く考えていたその矢先に

「おらよ」

「へ?」

思いがけず、その盾とやらが俺に投げて寄越されたのだ。慌ててそれを受け取ると、思っていたよりも少し重く、金属の冷たさがじわりと伝わってきた。

「……………何で俺?」

「何でって、今日也になって頼まれた物だもん」

「だから何で俺に…………?」

周助への問いかけに、代わりに張が口を開く。

「てめえも、何かしらの流派を覚える必要がある」

「流派って…………刀の?」

「ああ。てめえには 『零式流』 だろ。そのために要る盾だ」

ぜろしき、りゅう…………?

「走真の流れでいけばそうなるだろ」

「本当に零式流にするの? 近衛兵流っていう手は?」

「このえへい、りゅう?」

「慶史<sup>けいし</sup>が使つてた流派だよ」  
立て続けの新出単語に目を白黒させる俺に、周助が端的に言い添えた。

慶史の流派って……あの鎖がついた刀のやつか？ 初めてこの時代<sup>こ</sup>にやって来た時、鬼を倒した慶史の剣が脳裏<sup>こ</sup>に浮かんた。

「何言つてんだ。あれは防御や捕縛専用じゃねえか」

「やっぱ駄目？ 無難だと思つたんだけど」

「ちょ、ちよつと……」。

お二人さん、誰かを忘れてたりなんかしていませんか？

「刀も峰刃だろ。鬼相手にんな面倒なことやってられつかよ」

「慶史はやってたつていうじゃん」

「何をだ」

もしもーし。

「鬼の首を、こう折つてさ」

「あれは例外中の例外」

「一旦ストオオオオーッブっ！！」

耐え切れず、俺は二人の会話を強制中断させる。張と周助両者がぴたりと俺に注視した。

勝手に話を進めないでくれ……。さつきから俺だけ置いていかれている感があるのは、絶対気のせいじゃない筈だ。

「まず最初に！ 『ぜろしきりゆう』って何だよ？」

「すつとっふ……？」 と首を傾げながらも、周助がここで説明を

入れてくれた。それでようやく俺にも内容が見え始めたわけだ。

零式流

それは、宿地走真しゅくちそうまの剣派だ。

先代隊長宿地和真かずまの、刀と小盾を用いる「弦式流げんしき」を元にして、走真自身が作り出した型らしい。

小盾は同じだが、違うのは通常の刀ではなく小太刀を使うところにある。

攻撃には些か劣るものの、防御と素早さに優れており、走真はその達人だったとのこと。

「へえ……」

「俺から言わせりゃ、走真の捻くれた性格のままの流派だがな」

おい、今さり気なく故人に対してめちやくちや失礼な発言しただろ、張。

周助に恥ずかしい過去を暴露されたせいで、機嫌はまだ低迷中ってことっすかね……？

心の中でツッコミながら、俺はその小盾を試しにつけてみた。肘の下から手首のあたりまでにかかる盾のようで、ともすれば籠手のようだ。だがそのサイズに見合わず、強度はなかなかの物のようである。侍やら武士やらのイメージとは何やら異なり、西洋の騎士を少しばかり連想させる。

こんな装備は初めてつけるが、妙にしっかりと馴染むのだから不思議なものだ。

俺のその一連の動作を、張も周助もどこか静かな目で見つめていた。そこに俺ではない誰かを垣間見ている、そんな気がした。

「で、覚えるって、二人はその零式流とやら、使えんのか？」

「使えるわけねえだろ」

「知る限り、あれは走真しか使ってた気がするしねー」  
「すかさず返ってきた二人の回答。やっぱりこういう時の二人の息はぴったり。」

「あー、零式流って、走真だけの流派だったのか。だとしたら何か結構レアだな……………って」

「じゃあ『覚える』の無理だろ！」

「やっと事の問題性を俺の頭が認識した。  
教えてくれる人がいなくて、どうやって学べと!?!  
一体何考えてるんだあんたらはっ!?!」

「実戦で感覚を取り戻してもらうしかねえだろ、走真のよ」  
「ま、見たことはあるから何となくなら教えられると思うけど?」

「……………」

「何なんデスカ、その適当かつ究極的な感覚指導は……………」  
「その時俺が己の幸先を不安に感じたのは、言うまでもない話だ。」

「若干予定より遅れたものの、それから数日後に目的の村に到着できたのが、幸いといったところだろうか。」

二十三話 旅路にて（後書き）

今日也君には、自力で流派を習得してもらったのかなさそうでしょうかね（笑）

二十四話 うたかた、海の淵（前書き）

「若狭・人魚編」。いよいよ突入です。

その前編部分にあたるお話になります。スローペースなので、大して進展はしていないかもしれませんが；

ちなみにサブタイトルの読み方は、「うたかた、うみのふち」です。

二十四話 うたかた、海の淵

後悔先に立たず。

【今日也】

「張、周助」

会話を遮るような形で俺が声をかけると、砂を踏み分ける音を引き連れて、二つの気配が背後に近づいてきた。

「ンだ、今日也」

「鬼の場所、分かったの？」

「ああ、うん、まあ、多分そうなんだけど……」

「ああ？ 何だその煮え切らねえ態度は」

「どごどごー？」

勘にも第六感にも近い漠然と感じる何らかの気配。そちらを躊躇いがちに指差せば、張と周助が辿るようにその先に視線を向けそこで一瞬、俺たち全員が言葉を詰まらせた。

やがて、ぽつりと漏れた呟き。

「……………おい、こりゃあ」

「ちよつと……………冗談きつくはない？」

「で、デスヨネ……………」

俺が指し示した先にあるのは　　海、だったのだ。

……………うん、海。どう見ても海。何をどうしても海。この先ずつとただただ海。

何とも物騒な別名をもつ村ではあるが、それも単なる例えか何かだと思っていた。でも、あながちそうでもなかったらしい。今回の敵って

「文字通りの『人魚』、だったりして……………？」

話は少し前に遡る。

ほんの一时间、もとい「半時」前くらいのことだ。若狭わかさの北外れに位置する「人喰い人魚の村」に俺たちが到着したのは。

そこは、漁師小屋のような家屋が集まる小ぢんまりとした村だった。日はまだ高かったが（張はこれで大丈夫なのか？）、どこか不気味な程に人を見かけなかった。村の人からは後で話を聞くしかなさそうだった。

……………言わずもがな、ここで張からあの御馴染みの言葉をいっそ清



清しいくらいに言い放たれましたとも。「で、鬼はどこだ」って。

俺は探知機でもダウジングでもない。トリユフを探し当てる豚でもない。妖怪アンテナも立たないしな！

走真譲そつまりらしい「鬼のサーチ機能」を当てにされても、俺は困るんだって……。

こうしていつもの如く、何となくの感覚だけで俺は歩を進めながら、辺りを偵察してみるようになったわけなのだ。

程なくして、村から少し抜けた奥まった場所に辿り着いた。風は一段と強く冷たい。

そして。

ふと鼻腔をかすめたのは、懐かしくさえ感じる匂い。これは、潮の匂いだ。

続いて耳に入ってきたのは、引いては返す水音。

「これって………やっぱりそうだ！」

そのまま足早に進めば、嗅覚と聴覚両者の存在感が刻々と増していき……視界の果てに捉えたのは思った通り 海だった。

どうやら、小さな入り江のような所に出てきたらしかった。

「……っ？」

どこか遠い郷愁に誘われて、俺の足は知らずそちらへ近づこうとしていた。だがすぐに、行く手を阻む物があることに気が付いたのだ。

密集して組み合わさった、竹垣や柵の数々。ここまですれば最早防壁だ。それらが、大袈裟なくらいに入り江へと通じる道を塞いでいた。誰も外から中へ入れさせないというよりは、まるで内側から誰かを出させないことを意図されたかのような。

「何だよこれ………」

明らかに、異様だ。

(ちよつと、お邪魔しますよつと)

俺は小さく気合を入れて、多少苦戦しながらもそれらを乗り超え(周助は軽々だったけど)、内に侵入した。一拍遅れ、張も浜に足をついた。

辺りに注意を払ったものの、そんな必要はなかったかもしれない。見えるのは

「海岸だけじゃねえか」

「あつちに船着場もあるよー」

「取って付けた程度のがな」

「……今日也」

ふ、二人してこつち見んなって……。

俺が聞きたいくらいだって。今更だけど何で俺はここに行き着いたんだ!?

間違いでないなら、鬼の気配のする方に俺は向かってたんだよ、な……?」

内心の困惑と疑問は結局言葉にならず、俺は曖昧に苦笑いを浮かべることしかできなかった。

「……ま、今んとこそその餓鬼は外してはねえからな」

若干の沈黙の後張がそう呟き、「祠や小屋といった鬼が身を隠せる所が密かにあるのかもしれない」とひとまず俺たちは探しにかかり

「いや、まさか、なあ……」

一通り探しはしたが、巡り巡ったところで俺の足が自然と向

かうのはやはり同じ。

この海の、目の前。

海って……普通に考えて無理だろ、ここは。鬼やっかいに普通が当てはまらないのは既に体験済みではあるのだが。といつても、限度つてものが……。

とにかく、このままじゃ埒が明かない。依然近くを調べていた張と周助に、俺は意を決して声をかけたのだった。

「張、周助」

「海か……」と張。

そうです海です。

「水の中ってこと？」と周助。

そういうことに、なりますね。多分。

俺の鬼専用GPSが本当に信用するに値するのなら 今回の鬼てまは、この海の水面下ということになるのだ。

この手のケースは初めてらしく、鬼との戦いに精通し経験も長い二人でさえ、どうしたものか決めあぐねている様子だった。

まだ昼だ。鬼の活動時間ではない。何か手がかりの一つでも見つければ、それに越したことはない。

そう結論付け、今の内に少し調べてみるかということでは結局落ち着いた。

船着場にあつた小舟の一つを早速拝借し、周助を乗り込ませたその後、かい櫂を手にした俺が続く。

「……………周助？」

俺は訝しげに周助の背に声をかけた。途端に俯き加減で口数が明らかに減つたからだ。道中も明るく快活だっただけに、何だからしくない。

「……………つのわあ!？」

だがその返事を待たずして、背後に傾く無遠慮な重心。がくりと揺れ、俺は咄嗟に振り返り

「ちよつ、ちよ、ちよつと張ストップストップストップ！」

「……………あア？ 何だつてんだ」

「定員つてもんがあるから！」

「俺合わせてたかが三人だろ」

「何言つてんだ『それ』合わせたらオーバーだから沈むからっ！」

俺は櫂を駆使して張を必死で制止する。

当たり前だ。片足を既に舟にかけた張は、いつものように「火竜かりゅう」を担いでいるのだから。大の男数人がかりでも持ち上げられないという、大矛盾を。

「火竜それは置いてけいやいつそあんたごと残つとけつて日差し強いし！ 周助も何か言つてやつてく」

その矢先、それまで黙り込んでいた周助がすくつと立ち上がる。そして一言

「降りる」

「……は？」

そこからの動きは恐ろしく俊敏だった。慌てて空いているもう一方の手で周助を押し止めはしたけれど。

「降りる！　というか降りして！」

「え……ええええっ！？」

「無理やっぱ無理絶対無理、てかもうつち吐きそう！！」

「ま、まさか船酔い！？　まだ舟出してもないのに！？」

「つべこべ言わずに乗せろ」

「お願い降りしてー！！」

「ちょ、おいコラ落ち着け一旦落ち着こうって、二人とも揺らすなひっくり、返るから……だ、誰かマジで助けて下さあああああああ  
いっ……！！」

波しぶきに埋もれたのは、怒声か、切迫した声か、それとも板挟みにされた者の叫び声か。一体誰のものだったのか。

張はもの凄く不服そうだったが、あの矛を持ち込まれたら最期、タイトニツク状態になるのが目に見えている。俺の全エネルギーをもって阻止した。それに「何ともない」と言い張ってはいても、この日の下では相当しんどい筈だ。

周助にいたっては、出発する前からの船酔い状態。船着場で背を丸めて蹲り、張が呆れた様子を滲ませているのが少し離れたここか

らでも分かる。

結局。

俺が一人で行くことになりましたとさ。というか、消去法でいったら俺が残った？

まあ別にいいんだけど……。本格的に危ないのは日が暮れてからだろうし。

成り行きでこういうことになり　小舟でやや沖合に出て、辺りを何周か回って目を凝らしてはみたが、特にこれといって注意を引くものはなかった。小さくため息をつく。

少し期待をしていたりもしたのだが、これは何か別の対処法を探し直すしかなさそうだ。

ぐるりと進路を変え、俺は岸へと戻り始めた。

視線の先に見える元いた入り江の船着場に徐々に近づいていく。

依然回復していない周助の背を、張が荒々しくもさすってやっている（プラス　荷物番の）最中だ。

俺は少し声を張り上げて、そんな二人に呼びかけた。

「張ー！　と、まだ生きてるか周助ー？」

「何だ」

「うー」

「何かあったか？」

「いいや、何もなし。やっぱり夜にならないと」

「あア？　素潜りするくらいの根性見せるや」

「誰がやるか！　俺は絶対しな　」

不意に、俺の權を漕ぐ手が止まる。

膝元に置いていた俺の脇差が、その拍子に微かな音をたてた。

「おい、どうした？」

張の声が、霧がかって酷く遠くに聞こえる。返事をする余裕はなかった。

胸騒ぎにも似た違和感が、その時俺の全てを支配していたからだ。まるで、淡い色の風景画に一滴の墨汁を垂らしたかのような、浮かび上がるような違和感が。

悪寒がじわりと背を舐める。

鳥肌が立つ。

この感覚を、俺は知っている。

自然と、脇差しんさつに手が伸びていた。

左の指先が僅かに鞘の表面に触れたその時だ。視界のななめ下端水面に何かの影が一瞬映り込んで、たちま忽ち過ぎ去っていったのは。

櫂を置いて膝立ちになり、ゆっくりとそちらに近づく。丁度覗き込むように。

しっかりと手にした脇差。

それを左の腰側に持っていく。

そして徐に右手を柄にかけ、鯉口を

その刹那、手首を掴まれた。

深い水の底から突如伸びてきた、何者かの手によって。

細い静脈が浮き出た、まるで固めた蠟のように白い腕だ。

「……っな!？」

驚愕も束の間、俺はありえない程の力で引つ張られる。取り落とした刀が舟の床面を打つ音が、どこか他人事のように耳に入ってきた。

そのまま、俺は海の中に引きずりこまれる！

海の表面に体を強かに打ちつける。

その衝撃の直後の、肌にとわりつく、重く冷たい水圧と波のうねり。上昇する泡沫。

水の膜越しに、何かが聞こえる。

それは……歌声？ 笑い声？ すすり泣き？

俺には分からない。

「……!!」

不意に、俺は捉えた

視界一杯に広がる、水草のように漂う人の髪の毛のようなもの。

その合間から覗く、亡霊のと呼ぶにはあまりに飢えた双眸を。瞳に宿す、青白い発光を。

本能が告げていた。

鬼だ、と。

頭の中で響く警鐘と焦燥感に従って、俺は掴まれたままのその手を振りほどこうと必死でもがく。

だが束縛は解けない。

むしろ五指に一層の力が込められ、捕らわれる。



抗えぬまま、俺は仄暗い世界の底の、更に奥深くへと引き込まれていった……。

二十四話 うたかた、海の淵（後書き）

張「てめえはいい加減克服しろよ」

周助「うー」

張「オラ下向くんじゃねえ。深呼吸しろ」

周助「うー」

張「ったく、仕方ねえな。何でてめえのお守りまで……っておい？」

周助「……ううっ」

張「て、てめえ、吐くとか言うんじゃねえだろうなっ！？」

張が周助の背中をさすってあげていた、その裏側の会話。

周助は乗り物全般がダメだという設定です（笑）

それこそ、舟から籠、馬にいたるまで。おんぶはあまり揺らされなければセーフです。

そして張は、何だかんだで面倒見がいいんです（笑）

二十五話（前） 誰が人魚を殺したのか？

一寸先は闇。

【張】

「……………？ おい、どうした？」  
ぴたりと静止した舟の上の今日也けふしやを不審に思い、声をかけたその  
直後。

前触れなく響き渡る水音。

泡立つ海面。

突如として乗り手をなくした小舟だけが、取り残されて所在なく  
揺れている。

さっきまでいた筈の今日也の姿は ない！？

一体何が起こったのか。

見間違いでなければ……あの一瞬の間に、何者かが今日也を海の中に引きずり込んでいた。

「周助しゅうすけ、そこにいる！」

「ちよっ、と!?!」

慌てて顔を上げた周助に説明する時間も惜しみ、今日也の消えた後を追って、俺は咄嗟に海の中に飛び込んでいた。

途端に視界を覆う深い青。肌にまとう冷たさ。

胸の内で一つ舌打ちをする。顔布が解けてしまったのが分かったからだ。だが今はんなことは気にしていられない。構わず潜り進んでいけば

薄暗い闇の底で、大粒の泡沫が上がっている。

いやがった!

今日也だ。

溺れているというよりは、何かに必死で抗いもがいているように見受けられる。

俺は後ろから今日也の首根と片手を取り、そのまま引き上げようと

いや、もう一方の手を掴んでいる者がいる。

俺たちの下方。

姿ははつきりとは確認できない。だが、この異質な気配は……。

(さっさと)

その気配の方を睨みつけ、俺は威嚇するように牙を剥いた。

(放しやがれっ!!)

すると、敵と思わしきその影は本能的に怯んだのか、微かに力が緩んだ。

「……!!」

その機を逃さず、力の限り今日也を引き寄せ、海上へと上昇し  
蒼然たる世界が目一杯に開けた。

盛大に飛沫が跳ね返る。

乏しかった空気が一気に肺に満ちてくる。

それと同時に、無遠慮な日射が晒された肌に直に当たり、俺は思  
わず顔を背けた。目の粗い鑢やすじで皮膚を削り取られているかのような  
感覚は、腹立たしい程に相も変わらない。しかし、今は痛いと言  
っている場合じゃあない。

敵はまだ、俺たちの真下にいるのだ。

昼だろつが関係ない。水の中という、光の限られた棲家すみかで自由を  
得た、「奴」が。

火竜は、今俺の手元にはない。

元よりこの「領域」の中では、使えない。

ようやく解放された今日也は、激しい咳を繰り返しながらも、残  
されていた舟にしがみ付き中に置かれたままだった心任しんとうを掴み取る。

「……つ、今日也、行くぞ！」

その今日也を引つ張るようにして、俺は勢いそのままに流れの抵  
抗に逆らって波を掻く。

気配が、俺たちの後をついて来ている。

「張ちやう、今日也つー!!」

船着場から回りこんでいた周助の姿が岸に映る。

すぐ後ろまで、迫ってきている！

「早く上がれ！」

足が着く浅瀬にまでたどり着くや否や、俺は今日也を前に押しやりながら周助に向かって叫んだ。

「鬼がいやがった！ 来るぞ！！」

「……了解っ！」

俺の一言で状況を把握し、すぐに周助が援護に入る。波を跳ねかけ走り込みながら、背の刀に手をかけるのだ。

鞘から引き抜かれ姿を現すのは、反射して映える細身の刃。周助の刀 「雷風<sup>らいかせ</sup>」。

まだ体勢を整えていない俺に駆け寄って、周助は海へと切っ先を向けて構える。

その軌跡を追うように俺も後ろを振り返った。

そして垣間見た。

少し離れた海面。そこから僅かに覗く、水草のような髪の毛の、青白い鬼の双眸を。

しかし、奴はそれ以上の深追いはしてこなかった。そこまで頭の回らない奴じゃあないらしい。こちらが三人、ましてや日の満ちる陸にいと判断したのか、海の底へと身を翻し消えていったのだ。た。

引いては寄せる潮の音。それを頭の片隅で聞きながら、俺も周助も、しばらく警戒したまま周囲に視線を走らせていた。静寂が張り詰めた緊張を物語る。

やがて鬼の気配が完全に消え 徐に周助が刀を鞘に戻した。金属の音が小さく鳴る。

それを聞き届けて俺もようやく息を吐いた。

岸边に打ち上げられた魚と同じ有様で仰向けに倒れている今日也は、息も絶え絶えだったが、ここで何とか言葉を発せよう。喋る合間合間に、飲み込んでしまったのか海水を吐き出している。

「ゲホツゲホツ、ガハツ、張、マジで、助かった……」

「そいつア、良かった、な」

「ハア、ゲホツ、冗談抜きで鬼、海の中にいたって、か」

「まあな、また、厄介なのに」

「当たっちゃった」と零し、不本意にも周助の手を借りて俺も立ち上がる。

「……ちっ」

ところがその拍子に、俺を取り巻く世界の全てがぐしゃりと歪んだ。

いや、実際は俺自身か

視界がひしゃげる。

足元が崩れる。

音が遠い。

疼痛が激痛のそれへと変わり、全身を熱した無数の針で刺されるような痛みだけが妙にはつきりとしていた。

ああ、こりゃあ、まずい……。

「ちょ」

「う!?!」

「おいっ!?!」

そこで俺の意識は 暗転した。無様にも。

【今日也】

意識のない張を、俺と周助で何とか村まで運んだ。

ずぶ濡れかつ必死の形相の旅人三人　ようやく見かけた村人の男が、日に焼けた顔に驚愕の色を浮かべたのも無理はない話だ。

それでも俺たちが例の入り江から来たと見てとるや、親切にも近くの漁師小屋を使わせてくれ、そこにひとまず張を寝かせることになった。

村の人の助けも借りて、馬鹿みたいに重いあの大矛も同様に移動させた（いや、目が覚めて愛刀が手元ないとキレられたら、困るから）。

張が倒れたのは、直射日光が原因だ。熱中症のような状態に陥っていた。これより酷ければ大火傷をすることもあるらしいが、それには至らなかつたのが不幸中の幸いだつた。

「看病なんて張がさせるわけないでしょ」なそうだから（周助曰く。ごもつとも）、見張りのために、俺は海岸にとつて返した。

水辺には近づかないように注意して座り、揺らぐ海の黄昏を見るときもなしに眺める。俺の着物も、岸边まで流されて戻ってきた張の顔布も、潮風に晒されて大分乾いてきた。

「今日也」

不意に透る声が降ってきたかと思えば、いつの間にかやら周助が俺の隣に腰を下ろしていた。村での情報収集はひとまず終わつたらしい。



「村の人から色々聞いてきたよ」  
そうして周助は事の次第を説明してくれた。

少し前に、この漁村に例の薬売りが来たのは間違いない。見かけない怪しげな風貌だったせいで村人たちも覚えていた。そして、病で危篤状態だったある村の者に、薬と称して奇妙な赤い欠片を与えて去っていったそうだ。だが、今まさに死にかけている人間にこんなものをと皆思っていたらしく、実際に、その人物はそのまま息を引き取ったとのことだった。

それから少しして、今回の「人魚」の騒動が起こり始めたのだという。

「でも、『息を引き取った』って……」

「多分、緋力が効く前の、一時的な仮死状態に過ぎなかったんだと思っ」

「それで？」

「それで」

「この風習に従って、『水葬』にしたんだって」

俺の口から知らずため息が漏れる。

この事件の真相はそういうことだったのか　水葬された後、緋力の力によって再び目を覚まし、入り江に近寄る人間を襲い始めた「鬼」。それが「人喰い人魚」というわけなのか。

周助によれば、緋力は人を鬼に変える過程で、時折思わぬ変異を

引き起こさせるらしい　今回の鬼のように。

「もう六人も死人が出てるって……。みんな怯え切ってこの入り江には近づけないし、うちがここに戻るのにも『生きて帰れない』なんて反対されたんだから」

周助はそう言って唇を尖らせる。その大きな瞳を険しくして、更に言葉を続けた。

「もつと厄介なことが、ね。始めに死人が出たのがここでしょ」

周助は砂浜に指で簡単な見取り図を描きだした。この入り江に、そこから繋がる村といった具合だ。そして図上に×をつける。「それから、ここ、次にこのこと……」と印を加えていけば

「……これって」

周助の危惧していることを俺も察した。

始めに印がついたのが、沖合の海。

次の印が、そこから少しだけ岸よりの場所。

それから、浅瀬、その近くの岸边、浜、そして最後に、入り江口だ。

徐々に……陸に、出てきている？

周助がそれを首肯する。その動きに合わせて、黒茶色の髪が首元で揺れた。

「陸っていうよりは、どんどん村側に出てきてるんだよね」

「それは……かなりマズイだろ」

人の血を得た「奴」の活動範囲が、じわりじわりと広がってきている。恐らく、自分の元にみすみすやって来てくれる獲物がめつきり減ってしまったためだろう。これでは、空腹に耐えかね村にまで襲いに行くのも時間の問題だ。入り江の入り口に広がる柵や竹垣も、鬼の脚力の前では些細な段差程度にすぎないだろうし。

「だから『もつと厄介』なんだよ。これはすぐにも片つけとかな  
いとねー」

確かに、長期戦をしようものなら、今度は村そのものが危険に晒  
される。それこそリスクが高い。

今夜だ。出方を見て、今夜で片をつけなければいけない。

「張の仇を取るためにもー！」

「……いや、張死んでないって」

( おい、糞餓鬼…… )

( 『自分のせい<sup>てめえ</sup>で』、なんて、思ってもみるんじゃ、ねえぞ )

( 自惚、れん、なよ )

( 絞める、ぞ、オラ )

小屋に横たわり、意識が混濁しながらも言い放った張の言葉が思  
い出される。俺の内心を読んでの張なりの喝だったのだろうか。俺  
になど構うな、今は目の前の敵にだけ集中しろ、という。

「うちと今日也の二人で」

周助が勢いよく立ち上がり、袴の砂をはたきながら意気込む。

心の中で一つ自身に気合を入れ立ち上がり、俺もああと頷いた。

「 いっちょ人魚の捕り物といくか！」

二十五話(前) 誰が人魚を殺したのか?(後書き)

私だったら、そんな水場には絶対近寄りたくありません(笑)

あともう少しだけ「若狭・人魚編」が続きます。よろしければお付き合いですませ。

二十五話（中） 誰が人魚を殺したのか？

覚悟はいいか。

来るぞ、奴が。

【今日也】

誰が言った言葉だっただろうか。「水はあらゆる世界に繋がっている」と。

日は完全に落ちた。ぼんやりと照らす半月を除けば、辺りは夜の闇に包まれている。

そんな中俺は、岸の浅瀬に佇んでいた。丁度、膝丈まで浸かるか浸からないかの深さの位置だ。

昼間の一騒動の時とは違ってかわって、入り江は息を潜めたかのようにしんと静まり返っていた。波は凪いでいる。

だが、感じる。

この海底で息づく、奴の気配を。

俺の神経は研ぎ澄まされていた。ともすれば切れてしまいそうな、ぴんと張り詰めた緊張の糸にも似た感覚だ。

左腕につけた小盾の感触と重みを確かめた後、俺は徐に腰の脇差しんとうを抜く。鞘から滑り出でる鉄刃が響く、硬く、真直に。

その切っ先を少し力をかけて手のひらに押し当てると、じわりと対角線に朱が滲んだ。俺は微かに眉をしかめる。その手をゆっくりと伸ばせば

パタ、パタと。

赤い滴は波紋を描きながら、暗い昏い水くろの奈落に溶けていく。

パタ、パタ。

(こつやっとおびき出すしかない……)

静寂の中では、俺の血の落ちる音はやけに耳についた。

パタ、パタ。

(奴は、血を嗅ぎ付けてくる筈……)

パタ、ポタ、パタタ……。

(餌は 俺だ)

来たっ!!

蛇がうねるように跡を浮かびあがらせ、俺の目の前の海面が荒々しく歪んだ。

吹き上がる水柱と、禍々しい殺気。

その刹那　鬼が姿を現す！

「シヤア、アアアアツツ！」

襲い掛かってくるその一瞬のタイミングを逃さず、俺は数歩退いてそれをかわす。

「……っ！」

予想していたよりずっと俊敏だ。

内心の動揺を抑えくるりと身を半転させ、鬼の背中に刀の柄を叩き込む。

短い悲鳴を上げ、奴は一足飛びで俺と距離を取る　これでさっきと立ち位置が代わり、俺が海側、鬼が浜側になった。

ここまででは思惑通りだ。俺は波に足を取られないように腰を落とし、頭の中で周助（しゅうすけ）が言っていた作戦を反芻する。

（　止めを刺すのを今日也に任せるのは、まだ早いかなあ……）

（　首を斬り落とすとか、心臓を一刺しとあって、言うより案外難しいんだから）

（　じゃあ、こうしよう。今日也は、鬼をできるだけ海側から遠ざけて）

（　うちは、そいつが村に出るのを防ぐから）

（　陸で待機してるうちが、仕留めるって手筈で）

つまり今回の俺の役目は、鬼（おに）を出来るだけ水辺から引き離すことだ。万一海の中に逃げ込まれでもすれば俺たちは深追いでできないし、それまでの苦勞が文字通り水の泡になる。

恐怖だの竦みそうになる体だのはこの際知らないふりをして、一

気に押ししていくしかないんだろうけど……あの速さは、結構骨が折れそうだ。

それにしても

水から上がった敵の全貌を改めて見遣る。ゾクリと悪寒が走る。

最早原型が分からない。人間の様を止めていないのだ。

その体はまるで水死体のように生気がなく、背骨も前のめりになって歪んでいる。手も人のそれではなく、右の爪だけが異様に大きく鋭利に変形している。長い尾には、無数の針で形成された鱗ひれがついていた。藻のような長い髪の毛の合間から窺えるのは、辛うじて人の面影を残した顔と、二つの濁った青白い目玉だ。まるで視覚を捨て去った深海の生き物のような。

「鬼」というよりは、最早「怪物」の姿に近いかもしれない。

何が人魚だったの……。

血の臭いに当てられて興奮し切った鮫じゃないか、これじゃあ。

俺は内心一人ごち、心任を構え直す。

そして、この鬼と正面から対峙するのだった。

全身が脈打っているかのように、速い鼓動が響いている。柄を握り締める手も、小刻みに震えていた。

「武者震い」なんて格好いいものからではないだろう。鬼を前にしての、本能的に感じる恐怖からだ。何度遭遇しても慣れることはない。



でも、ここで退く気は、毛頭 ない。

ふと、俺の手の中の脇差と左腕の小盾に視線を落とす。一瞥にも  
すぎなかったけれど。

(……散々)

(走真あんたの生まれ変わりだつて言われてきたけど)

(実際は……さあ、どうだろうな)

(俺が、知るわけもないっての)

(でもさ、今は )

俺の前世という幻影に向かつて、祈りと呼ぶには随分と乱暴な口  
調で、一方的に言い放つ。零式流せろしきの達人とやら

「力を貸してくれよな!!」

体の強張りが、己に喝を入れることでやっと解ける。

勢いのままに波を押しつけながら、鬼の間合いへと一気に踏み込  
む。

「……!？」

相手の方が速かった。剣が届く一歩手前で、鬼は浅瀬の水の中に  
身を沈めていたのだ。

途端に、奴は俺の視界から消える。

片足を踏み出した後だったせいで、俺はそこから不自然に動きが  
止まってしまう。

その瞬間

意識よりも先に体が動く。

気がつけば、俺は後ろを振り返りざまに、庇うように左腕をかざ  
していた。

「っ!？」

直後、鋼越しに衝撃が襲う。骨の奥にじんと響く。

そこでようやく理解した、何が起きたのかを。  
咄嗟にかざした左腕の小盾が、鬼の攻撃を受け止めていたのだ  
背後の海面から飛び出してきた鬼の、巨大な爪を。  
瞬き一つにも満たない間のことだ。僅かにでも反応が遅れていた  
ら、俺の体は無残にも切り裂かれていたことだろう。

「……う、ぐっ」

そのまま力の押し合いになだれ込む。

目前に迫る鬼の顔はじつとりと濡れており、浮かび上がるように  
白い。歪に尖った牙をさながら警戒音のようにキリキリ、カチカチ  
と鳴らしている。

相変わらずの鬼の馬鹿力に、俺は顔をしかめた。だが。

(ここで押し負けて)

ぬかるむ水底の土を踏みしめ、俺は奥歯をぎりつと噛み締める。

( たまるかっ!! )

渾身の力で、俺は盾ごと鬼を押し出す。

ぐらりと相手がバランスを崩す。

その隙を見逃さず、俺はくるりと脇差を逆手に持ち直し、奴の喉  
元目掛けて振り払う。空気を裂くような音がした。

しかしそれは、敵のしなだれた髪を一房落としたにすぎなかった。  
張さながらに、俺は内心で大きく舌打ちをした。

仕返しとばかりに、今度は鬼が体ごと突進してくる。

そのせり出した犬歯を鋼の表皮で受け、その下から滑らせるようにして心任しんとうの刃を繰り出す。

(……え、あ、あれ?)

あ、この盾、こつやって使って戦うんだ……じゃなくて！  
まるで体に染み付いた昔の感覚を思い出すかのように、体が勝手についてくる。それに一番驚いているのは俺自身だ。けれど、不思議がるのは後。

敵の動揺が直に伝わる。再び間合いを離そうとする気配も。  
また水中から、なんてさせてたまるか　動きを止めるな。止まるな。

盾で打ち払い、間髪入れずに追撃する。  
一合、二合と、刀を振るい続け、攻撃の手を止めない。  
じりじりと、鬼は圧されていつている。

だが、その時。  
鬼が一閃をかわし、前傾するように構え

突如として俺の前方に出現するのは、剣山のような影。奴の、  
尾!?

俺は慌てて飛び退く。ずりりと足が滑る。  
そのせいで後ろに倒れるような形になり、体が一瞬宙に浮いた。  
それが、酷くゆっくりりに感じられた。

好機とばかりに追いつがる、鬼の姿。飛び掛ってくる。  
ニィ、と両端に裂ける口。覗く牙。  
笑っているようにさえ見える。

そして、俺に覆い被さってくる……。  
そうはさせない。

俺は、両手を柄にかけ、腕を伸ばし、すくいあげるように刀を

「ギャア、ウツ!？」

「……っつ!」

そこで、世界のスピードが正常化する。

鬼は弾かれるように身を退き、転がるように地面を滑る。

一方俺は、倒れた体勢から横転し、片膝をついて身を起こす。

舞い立つ砂塵の先の、鬼。

その体に走るのは、血が既に固まりつつある、傷の跡。

心任の刃は……奴の体を縦一線に斬っていたのだ。残念ながら浅  
かったらしく、致命傷には程遠い。

「っ、……?」

ついた膝に力を入れようとして、そこでようやく知覚する。熱に  
も似た痛みが、ズクズクと俺の右の脇腹を叩いていた。どうやら、  
ナイフの切れ味にも似た奴の尾をかわしきれなかったようだ。

俺は立ち上がる。

着物が吸い取り切れなかったのか、拍子に傷口の血が下へと伝う。  
痛み分けか。いやまあ、良しとしよう。幸い俺のも深くはないし。  
それに。

背景に目を遣る暇は無くとも、足場の感覚で分かるから。砂の、  
感触だ。

鬼はもう、浜辺に上がる位置にまで押し出されていたのだった。

「これでもう、逃げられないな」

今は怪我也痛みも一向に構わない。俺は心任の切っ先を真っ直ぐ

に鬼へと突きつける。

俺が海への退路を塞いでいるから、奴は今更戻ることはできなくなった筈。一度斬られただけに、次は迂闊に飛び込んでこれないだろう。となれば、さあどうするか……。

案の定、鬼は虚勢にも似た唸り声を上げ、身を翻す。入り江の外へ。そこから繋がる村の方向へ。新鮮な血肉が用意された場所へ。

だが、それは叶わない。透る凜とした声。

「ここから先にも 行かせないよ」

入り江の口には待ち構えていた、周助がいるのだから。

二十五話（後） 誰が人魚を殺したのか？（前書き）

「若狭・人魚編」の最終話です。いよいよ決着がつきます。それではどうぞ。

二十五話（後） 誰が人魚を殺したのか？

そのまま身を投げた人魚姫は、海の泡となって消えていったのでした……。

【今日也】

「ここから先にも 行かせないよ」

周助は背中の鞘（かたがね）からすらりと「雷風（らいかせ）」を抜く。  
フェンシングの剣にも似通ったそれ。細身の、否むしる極限まで研がれた先鋭さを思わせる刀身。その切っ先を鬼に伸ばし、左手を添える形で構える。

鬼はびくりと身を震わして動きを止めた。後方の俺も既に追いついており、完全に挟み撃ちにしていた。

俺は心任（しんとう）を、周助は雷風を、それぞれに刀を携え慎重にタイミン

グを測る。歪な鬼の体越しに周助と目を合わせ、お互いに確かめ合うように小さく頷く。そしていざ踏み込もうと、足に力を入れかけた、その矢先。

牽制するかのよう<sup>けん</sup>に揺れていた敵の尾が、動いた。

先程の戦闘での攻撃が脳裏をよぎり、思わず盾を持つ腕を固くしたが、それが再び俺に向けられることはなかった。尾の導かれた先にあったのは 鬼自身の口元。一体何を、と思うよりも早く、奴の長い青紫色の舌がぬらりと尾の先を舐め取っていた。

何だ……？

あいつが今口にしたのは、錆みたいな色の……。

あれは……血？

血つて………、っ！？ さつき、俺の脇腹を掠めた時についたものか！？

「っ！ やばっ！」

周助が焦りの声を上げるも、時既に遅し。奴の変化はすぐに訪れた。

「グギヤア、ガア、ア、ア、アアアアアッ！！」

耳の鼓膜を容赦なく震わせる突然の雄叫びに、心臓を鷲づかみにされるようだった。一瞬呼吸が止まる。

「なっ………！？」

メギ、メリツメリ、グチャ、メ、ギイ……。

肉を押しやる、筋を裂く、皮膚を破る……。吐き気が込み上げるような不愉快な音が俄かに満ちる。

その残響が消えた頃には、鬼は



「……………な、んだよ、これ」  
最早そこに、生気のない骨張った姿は残っていない。骨格が拡張し、筋肉が盛り上がり、爪が更に長く鋭くなり、全身が強化され…巨大化、していた。前と比べればその差は歴然、一回りも二回りも違う。血を摂取したことで、次の「変異」が起こったとでもいうのか。

不意に、風が叫ぶ。

「……………っ！」

隆々とした鬼の腕が殴り払う　周助は、刀身を立てて咄嗟にそれを防ぐ。

後ろに跳び退り威力を殺したようだが、結果的に弾き飛ばされる形になってしまった。

「周助っ！」

奴の動きを、俺は完全に捉えられなかった。影のようなものがよぎっただけだ。

こいつ、さっきより格段に速い！？

驚愕の暇も与えられない。

俺は反射的に盾をかざす。

間髪入れず、襲ってくる鬼の尾の剣先。

盾ごしであってなお、衝撃に軋む腕の骨。力はさっきの比ではない。

俺が今防げたのは、勘と運以外の何物でもなかった。

「……………っ、冗談だろ！？」

「今日也！」

周助が身を起こすのが視界の先に映る。丁度、鬼を挟んで差し向かう位置だ。

砂にまみれてはいるが、幸運にも無傷だったようである。

「一瞬でいい！ こいつを！」

「……！ ああ！」

周助の言わんとすることを察し、それに伴ってパニックに陥りかけていた俺の頭も少しだけ冷えてきた。

そつだ。何とかして、一旦奴の動きを止めないことには。そこから一気に叩く。

俺は、脇差を中段で構え直す。

それを見計らったかのように、獣の唸り声を発しながら、黒い孤影がこちらに飛び掛かってくる。

速い！

一旦退がるべきか？ いや、ここで逃げるつもりか 踏み止まれ。

全神経を、集中させる。

その支障となるものは全て俺の意識から切り捨てる。瞬きも、呼吸も、思考も。

集中しろ。

速さだけに囚われるな。

集中しろ。

先を読んで、見切れ。

見切れ！

こちらに真正面から迫ってくる、影。巨大な、影。

武骨な体躯。ぎらつく表皮。青白い眼、牙、振りがざす、爪……  
……見えたっ！

体をそらし 今俺がいたところは鬼の穿った爪先によって、地

面が深く抉られていた。

髪がなびく。

奴の真横に回り込む。

「はああああああああっつ！！」

刀を振り上げる。

気迫を込め、全ての体重をかけ 真っ向から振り下ろした！

バキリ、と。

まるで骨でも折れたかのような、鈍い音韻。

両腕が疼き痺れる程の、確かな手ごたえ。

俺の刀は……………奴の爪を半分から折り砕いていた。

「ギイヤアアア、グウアアアアツ！？」

その切断面の血管から、赤黒い凝血が覗く。無機質な爪の残骸が足下に転がり落ちる。

垣間見た、ぎらりと光る輝き。

続けて、どさりと砂上へと落ちる、鬼の尾先。

トカゲの尻尾のように未だのたうち動くそれを断ち斬ったのは

周助の刀だ。視線を慌てて走らせれば、刀を放った体勢のまま睨み据える周助の姿がある。

(助けて、くれた？ ……っ！)

尾が俺の頭に振り下ろされかけていたのだと、そこで遅くも気が

ついた。

「……うわっ!?!」

前触れなく地響きが起こる。

己の武器を二つも削ぎ落とされた敵が、ぐっと地を踏みしめ、空中へと跳び上がったためだ。「飛んだ」と思わせる程の脚力に目を見張る。

一足飛びに退却するその先には……海。

何としてでも逃げ込むつもりか!?

「今日也っ!」

振り返れば、丁度周助が投げ放った刀を拾い上げ、こちらへと駆けて来るところだった。

視線が合う。

俺は言葉すら忘れ領く。

指示などなかった。それでも、俺の意識の中の別の何か、周助が何をしようとしているのかを既に察していた。

俺は姿勢を低く落とし、盾を上へと構える。

それに呼応するかのように、こちらへと疾走する周助。

俺の肩に手をつき、背中、そして構えた盾へと軽快に足をかける。

それが俺の盾へと最後に到達した瞬間　俺は押し出すように、その左腕を渾身の力で振り払う。

体のバネを増長させて跳躍し、周助が上空へと高く舞い上がる。

風の中を馳せる。

さながら、獲物に狙いを定め捕らえる鷹のようだ。

空中に、敵の逃げる術はない。

周助は、雷風かたなの握られた右腕を引き寄せてため、そこから一気に鬼の胸部へと突き入れる！

その美しいまでの片手突きの一撃は

鬼の心臓を見事なまでに、貫いていた。

これこそ、張に「その一撃まさに疾風迅雷」とまで言わしめた、「右手鳴雷流なるかみ」の極み 突き。  
まさしくその通りだ。そう感じた、大気を一瞬で突き抜ける雷光のようだと。

鬼は苦悶の声すら漏らさなかった。血だけが棚引く。

その体にあつという間に亀裂が生じ、ボロボロと崩れ落ちるように赤い硝子片へと変わって霧散していき、絶命した。

### 【周助】

きらきらひ。

夜空に散る。

はらはひ。

海へと落ちる。

鬼たちの最期は、存外綺麗なものだよなー。これって皮肉？ それとも本質？

降り注ぐ赤い欠片で切らないように、空いている方の腕で顔を覆いながら、そんなことを問ってみたり……。

一瞬の浮遊感に包まれた後、うちは砂浜にタンツと着地した。

膝立ちの姿勢からゆっくりと立ち上がり、背中の鞘に、ゆっくりと雷風を納刀する。鏗鳴りの音がさざ波をもろともせず高く響く。凜と終わりを告げるみたいに。

「……終わった、かあ」

あの最後の一瞬を地上で見届けていた今日也は、息をつきながら地べたに座り込んだ。腰が抜けてしまったというよりは、ピンと張った弦が切れてしまったかのよう。

「でも頑張ったじゃん」

「うー、こんなんは一生に一回で十分だって」

鞘に心任を納めながら今日也は苦笑する。

うん、分かる。うちも初めて鬼と戦った時は心の底からそう思った。鬼打隊では、誰もが必ずは通る道だったもん。

月の光に照らされて、今日也の灰色の髪が銀色に揺らめいている。今日也を笑ってねぎらいながら、うちは先程のことをふとぼんやりと思い返していた。

あの鬼と戦っていた時の、今日也を。

岸辺で鬼と対峙していた時。咄嗟に攻撃を防いだ時。反撃して鬼の体を斬った時。そして、鬼の爪を折り砕いた時。

あの時の彼は

(！……そう、ま？)

重なった。敵をひたむきなまでに真っ直ぐに射抜く、走真そつまの

姿と。その上、戦闘の中で零式流の技もいくつか体現していたようだったし。特に教えてもないのに小盾の使い方もすっかり心得ていて本当に驚き。

丹優たんゆうからあらかじめ説明はされていた。確かによく似ているなあと思いはしても、でも生まれ変わりだとか未来から来ただとか、ちよつと半信半疑だった節があつただけけど……。

「ねえ、今日也」

「ん？」

「うん、今日也は、『本物』だわー」

「……………は？何が？」

「別にいー」

「えっ？ええ？俺何か偽者だったのか？気になるだろそんな切られ方したらっ！」

「と、いうことなんです」

ようやく回復して火竜片手かりゆうに入り江に戻ってきた張ちやうに、今日也が気まずそうにこれまでのいきさつを語り終えた。それはそうと、何で今日也正座してんの…………？

「ンだよ、『全部終わってました』ってか」

そんな張はといえば……………思いつきりうなだれてる。

「俺はずつと寝てただけか！？出番一切ないじゃねえかよー！！」

「で、でもほら、張は俺を助けてくれたしさ。な？」

「そうそう」

今日也は顔を上げ、必死に取り繕うように言葉を重ね、うちもそれに乗っかる。

……いや、確かに言えないもん。「今回の鬼はすごい速かったから、張とは相性最悪。むしろいなくて良かったね」なんて。

これは張の矜持が大分傷ついてるかなあ、と傍で思っていたり。

その苦笑いを交えた気まずさを強制的に打ち切るように、うちは口笛を吹く。愛鷹の嵐あらしを呼ぶために。

きつと心配と信頼がない交ぜになって居たたまれなくなっているだろうから、丹優にちゃんと伝えて安心させてあげとかないと

「任務完了。これから皆で帰ります」って。



二十五話（後） 誰が人魚を殺したのか？（後書き）

これで「若狭・人魚編」は終わりです。

今回は今日もなかなか頑張らせました。最終的にはかなり強くなる予定なんですが、この時点ではまだまだ危なっかしいといえますか（笑）

今日也是非常にと動体視力が良いという設定です。その理由が明らかになるのは……大分、先になるんだろうなあこのペースじゃ（汗）

このように長いお話を……読んで下さってありがとうございます！

七 むかしむかし……

【呉葉】

お話は、再び「鬼打隊<sup>おにうち</sup>」へと戻ります。  
元シの血を引く二大勢力、「群青鬼<sup>ぐんじょうき</sup>」と「秋臣<sup>あきおみ</sup>」を倒した鬼打隊の、その末路のお話へと。

二度に渡った秋臣との戦いが終わり、鬼も緋力もようやく落ち着いてきた頃。

雪が降るにはまだ少し早い、そんな時期の、冬のこと。

鬼打隊の里は

近隣の大名たちに襲撃され、攻め滅ぼされてしまいました。  
何の、前触れもなく。

鬼のいない世では、鬼打隊の力は恐ろしいものでしかなかったのです。規模は小さくとも、敵に回られば厄介だから、と。

それが、諸大名の理由<sup>かれら</sup>……。

隊は壊滅。村は全焼。

本当に多くの命が失われたといえます。

かろうじて生き延びたのはほんの僅か。散り散りになり、身を潜めて暮らしていたと聞きました。わたしのよく知っている人たちの人生は、こうして一変したのです。

この惨劇の後。

傷を忘れるにはまだ短いように思われる、四年の歳月が流れ

〈キャラクター紹介 -巻-〉（前書き）

ここからはキャラクター紹介になります。

今回は、一瀬今日也、沿寺丹優、加治張の三人です！

質問形式でお送りしたいと思います。

他のキャラクターに関してはまた後々書いていきたいなあとは思っています。

また、m+yの低クオリティーのイラストも一緒に載せてあります。「イメージと違う!」ということもあると思います。さらっとネタバレもしていますので、スルーして頂いても構いません。

より分かりやすく、より楽しんで「シノキズ -織豊鬼伝-」を読んで頂けるお役に立てればと思います。

それでは、どうぞ。

## 〈キャラクター紹介 - 巻二〉

【一瀬 今日也】

この物語の主人公。

那覇で母親と二人暮らしをしている高校三年の少年。生まれつきのグレーの髪と藍色の瞳をもつ。

言いようのない焦燥感と苛立ち、何かの予感のようなものを感じて生きてきた。

ある夜、「鬼」に襲われ、気がつけば四百年前の安土・桃山時代にタイムスリップしていた。現代に戻る方法を探す中で戦いに巻き込まれていく。

真つ直ぐで真面目な人の良い性格で、動体視力と反射神経が異様なくらいに優れている。

何でも、鬼打隊長の養子、「宿地走真」の生まれ変わりらしいが……？

登場話： 一話「始まりと呼ぶにはあまりに不遇」

一人称：「俺」 二人称：基本的には「名前」

> i 2 9 9 7 4 — 2 7 2 7 <

> i 2 3 1 7 4 — 2 7 2 7 <

張 「おい、餓鬼。とつとと始めんぞ」  
今日也 「ん？ 始めるって、何を？」  
張 「てめえに質問だよ。面倒くせえ」  
今日也 「え？ マジでか！？ てか何で張が質問係なんだよ？」  
張 「知るか。俺はただ読み上げるだけだ」  
今日也 「今から質問担当を丹優に変更とかできないわけ……？」  
張 「……………絞めるぞコラ」

名前は？  
いちのせ きんじや  
一瀬今日也。

簡単な「ぷろふいーる」紹介してくれだとき。んだ、このぷろ何  
とかって？

受験間近の18歳。

…………… 168cm 57kg。

7月20日生まれのAB型。

那覇市立黒曜高校の三年生。陸上部走り高跳び専門。

こついつのが、プロフィール。

摩訶不思議な言葉の羅列でちつとも分かんねえよ  
あーっ！ 張は質問係に徹しろよ！！

ちつ……………出身は？

今さり気なく舌打ちしたろ。  
出身は沖縄の那覇。

服装は？

あー、今は紺の着物と袴の格好が多いかな。慶史からもらったやつ。

学生服もあるんだけど。そうそう、時々ジャージも活用してる！

武器持ってるか？ 持ってなけりゃあ早々にお陀仏してるな

いちいち一言加えんな張！

あるよ。刀が二振。

心任しんとうつていう脇差。これも慶史がくれたんだけど……な、何か結構良いもんなんだろう？

それから鉄東矢てつとうしつていう青い小太刀。走真しゆまつて人の遺品らしいけど、色々あって貸してもらってる。といっても、持ったら怪我するから使うことは滅多にないけどな。

心任……黒鞘、濃緑色の柄、木瓜紋の鍔。

鉄東矢……紺鞘、青い石のはめ込まれた銀鍔。

流派は？

零式流ぜろしき……でいいんだよな？ 有無を言わず決められたけど。

零式流……宿地走真によって作られた、小太刀と盾で戦う流派。攻撃力や間合いの長さには些か劣るが、防御や素早さに長けている。

趣味は？

おっ！ 質問コーナーらしくなってきたんじゃないか？  
趣味はランニング。あとスキューバダイビング。

特技は？

特技ねえ……鬼の居場所が分かること？  
昔は剣道だったけど。

好きな物は？

沖縄料理全般！ あと海かな。

嫌いな物は？

寒いところ。いや俺那覇育ちだから温室育ちだから！

あと、「チビ」って悪口。これが悪口の中でもずば抜けてムカツク。

チビ、てめえの長所は？

……おい張、前の俺の台詞ちゃんと聞いてたか？  
長所って……自分じゃ分からないな。

えのか？  
変に馬鹿真面目で律儀で、家族仲間問わず他人思いなところじゃね

……俺褒められてんのか？



てめえの短所は……精神的に弱いつてえか、甘すぎんだよ。戦じや真っ先に死ぬぞ

……ハイ。

まあ、その『甘さ』は必ずしも悪いわけじゃねえんだがな（ボソリ）。癖はあるか？

しいて言うなら、一人ツッコミ癖？

暇な時は大概何してんだ？

ここに来てからは、主夫的なことしてるかもしんない。仮にも居候させてもらってる身だからさ。

こんぶれつくすとかはあるか……こんぶ、れ？

あー、自分に対しての劣等感っていうか。

自分の髪と目の色が気になって仕方なかった時期はあった。あの頃はあんちゃやってたなー（遠い目）。

今は……背かな。

逆に、これだったら他の奴には負けねえってのはあるか？

うーん、何があるかな………体の丈夫さと、後は運動神経とか動体視力？

尊敬してる奴はいるか？

梗子さん。あ、俺の母親ね。

あの人は天然でのんびりしてるけど、芯はしっかりしてる。俺を

女手一つで育ててくれてるし、すっげえ感謝してるし尊敬してる。

嫌いな奴、または敵わねえって奴いるか？

えっ、ちよつと良い話したのに、次にこの流れ！？

嫌いつて訳じゃないけど……張の第一印象は最悪だったよな。出会い頭に殺されかけたらね俺。

あれは紛らわしいてめえが悪い。最後に読者に一言

誰が一番悪かったのか省みるよ少しは！ 後一步でこの話の主人公が二枚卸しになってたんだぞ！！

えーっと、皆様、「シノキズ・織豊鬼伝」を読んでくれてありがとうございます。

これからも、どうぞよろしく（お辞儀）。

張 「あー、やっと終わりやがったか」

今日也 「途中から明らかにテキトーだったろ」

張 「何言つてやがる。俺はいつでも本気だぜ」

今日也 「おい！ せめてその酒を置いてこっち見てそっいつこと  
言えよ！！」

\*\*\*

【沿寺 丹優】

この物語のヒロイン。

鬼打隊の創始の頃から携わり、「揺り籠」からの長きに渡る知識をもつとされる「沿寺」家の当主。

薬学に長け、鬼を救う手立てを探し続けている。

元貴族の出で、聡明で心優しく一途な、可憐な少女。

帰る場所のない今日也に手をさしのべる。

今日也の前世である「走真」と何らかの深い関わりがあったらしいが……？

登場話： 六話「タンユウ」

一人称：「わたし」 二人称：「あなた」「名前」

> i 2 1 1 8 4 — 2 7 2 7 <

> i 2 3 1 7 5 — 2 7 2 7 <

今日也 「丹優、ちょっといいか？」

丹優 「何、今日也？」

今日也 「あのさ、質問形式の紹介がしたいんだけど、丹優の」

丹優 「まあ、わたしの？」

今日也 「そう。今いいかな？」

丹優 「はい。喜んで」

今日也 「じゃあ、ちょっとここに座って（照）。えーっと、まず、

何だ？ ご趣味は 「

張 (ンだこりゃあ、何の見合いじっこだよ……)

名前は？

えんじたんゆう  
沿寺丹優です。

簡単なプロフィール紹介を。これは作者から預かったのを紹介するな

・17歳

・155cm 40kg

・卯月(4月13日)生まれ

・O型

・沿寺家現当主

・薬師

丹優の出身は？

生まれたのは東北の鬼打隊の里です。

今は山城(京都)で暮らしていますけど。

服装は？

薄紫の小袖と袴をよく着ています。

昔は打掛も持っていたんですが、今の格好の方が動きやすく好きです。

武器は持ってる？

一応ではありますけど……。弓矢と、それから懐剣を。  
「ますはな枳花」という、沿寺家の先祖伝来の短刀なんです。

枳花・・・桜透しの鰐の懐刀。

何か流派はあるのか？

流派自体はないのですけれど。

懐剣術と弓道の心得が少し。走真に習いました。

……………えっ!?!? そうなのか!?!?

そうですよ(にっこり)。

丹優の趣味は？

生け花と、あと琴を弾くのが好きです。

へえー、今度良かったらやってくれよ……………それも走真から習  
ったとか言わないよな？

何度か見てもらったことはありますよ。

彼は武芸も芸道も教養作法も、そつなくできましたからね。

何だそのオールマイティ人間は!?!? じゃあ、丹優の特技は？  
薬学に関しては多少の知識はありますが。

(好きな物は? 何でもいいよ)

そうですね……自然が好きです。とても心が落ち着くので。食べ物だったら、杏と、柚子粥が好物ですよ。

お、何か美味そう。じゃあ逆に嫌いな物は？

嫌いな物、ですか？

皆さんそうでしょうけれど、争いごとは嫌いですね。

丹優の長所は、頭良いし、親切で優しいところだよな

てめえは知らねえだけだ。丹優の洞察力の鋭さは俺たちの比じゃねえぞ

……？

短所は？

甘え下手って、皆によく言われます。

あー、……丹優は癖ってあつたっけ？

癖ですか？ 自分ではよく分からないんですけど……。

あ、分かった、その敬語癖だよ。暇な時は大概何してる？

屋敷のことをしたり、薬草を摘みに行ったり、後はお庭の手入れとかをしています。

コンプレックス……もとい、劣等感みたいなのはあるか？

あまり武芸に秀でてはいないので、時々それが歯痒く感じることに

はあります。

あとは……童顔なので、ちょっと気にしてます(恥)。

いや、丹優は十分……その……(ごによごによ)。逆に、これだつたら他の人には負けないってのは？

やっぱり、お薬のことになるでしょうかね。

尊敬してる人はいるか？

両親もそうですし、鬼打隊の皆さんも父の友人方も全員尊敬しています。

嫌いな人、または敵わないって人はいる？

敵わないのは、父です。

それから慶史。いつもはぐらかされてしまっんですよ。

慶史かぁ……元気にしてるかなあ。最後に読者に一言  
皆様、「シノキズ・織豊鬼伝」を読んで頂き、本当にありがとうございます。  
うございます。

これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

今日也 「はい、これで全部。お疲れ様」

丹優 「今日也もお疲れさま。あら、そろそろ」

今日也 「ん？」

丹優 「東雲のお散歩に行かないと」

今日也 「お！ 待って、俺も行く！」  
丹優 「くすくす」 そんなに慌てなくても、ちゃんと待ってますよ」

今日也 「張、留守番よろしくな」

張 「……おつ。今日也は樹海に迷ってしばらくゆっくりして来いや」

\*\*\*

### 【加治 張】

元鬼打隊（実動部隊）の一員。

昔ある事件に巻き込まれ、鬼の血が移ってしまった感染者。

常に覆面をしているためその素顔は分からない。

口が悪く短気で直情的な一方で、熱い一面も見せる。

だが、腕つぶしの強さは確かで、大矛「火竜」を片手で軽々と扱  
いこなす。攻撃の核を担う。

用心棒などの仕事をしながら、現在は丹優の元に身を寄せて暮ら  
している。

登場話： 六話「タンユウ」

一人称：「俺」 二人称：「てめえ」「名前」



> i 2 1 1 8 1 — 2 7 2 7 <

> i 2 3 1 7 6 — 2 7 2 7 <

張 「……………おい」

周助 「何？」

張 「何でてめえとなんだよ」

周助 「何これ今日也の時の再現!？」

張 「この前は今日也への質問係で、今度はてめえからの質問かよ。嫌がらせ以外の何物でもねえだろ」

周助 「またまた照れちゃって!。とか言って本当はうちとで嬉しくせに」

張 「違いよ。てか照れてねえよ」

名前はー？

かじちちよう  
加治張。

前から思ってたんだけど、「張」って少し変わった名前だよね？  
あア？ 祖父ちゃん祖母ちゃんが明から渡って来たからな。その  
名残だろ。

えーっ!？ それは初耳なんだけど  
言わなかったからな。

簡単な「ぷろふいる」紹介を。これは何か作者から預かってるよ

・26歳

・182cm 74kg

・神無月(10月19日)生まれ

・A型

・鬼打隊、実動部隊の所属

自分のこと<sup>てめえ</sup>言われてんのに、イマイチ分からねえところがある気がすんだが……。

出身はー？

武蔵の出だ。

服装はー？

渋い赤の着物に、茶の野袴。腰に瓢箪吊つてることが大概だな。

武器は持つてる？ …… って持つてるよね存在感半端ないくらい

出してるもん

当たり前だろ。

武器は大矛の「火竜<sup>かりゆう</sup>」だ。

火竜・・・刃が異様に巨大な大矛。四方龍の鏢。

その火竜って、実際どれくらい重いわけ？

ああ？ 大体、四十貫（約150？）くれえだ。

……重っ！ 張って流派あつたっけ？

んなのねえーよ。我流だ。戦ってるうちに出来ちまった。

荒削りな遣り方だとは言われるが、攻撃力は高えし、実戦向きだと俺は思うがな。

趣味はー？

釣り。最近してねえな……。

じゃあ特技はー？

魚ならこれ以上ねえくらいに上手く卸せるぞ。

張の好きな物はー？

魚料理と酒。酒は辛口の方が好きだ。

薬にお酒混ぜてたら、利くものも利かないよ？ じゃあ嫌いな物はー？

嫌いってえか、日光が苦手だな。

あと成実なるみ！

相変わらず成実のこと嫌いなんだねー（笑）。張の長所は……何だかんだで面倒見が良いところ？

俺が知るかよ聞くな。

張の短所は、短気！ 口が悪い！ すぐ手とか刀が出る！  
……んだとコラ。

ほらすぐ怒ったーっ！！ 癖はある？ ……絶対舌打ちでしょ  
まあ、否定はしねえよ。

暇な時は何してるのー？  
大概は部屋で寝てんぞ。  
気が向いたら今日也の刀の訓練に付き合っがな。

「こんぶれつくす」とかはある？ 何でも自分に対しての劣等感  
みたいな意味らしいんだけど……  
………三章の「天つ風よ」って話を見る。

逆に、これだったら他の人には負けないぞってのはあるー？  
力では負けねえと思うぜ。  
そう容易く「火竜」を扱いこなされてたまるかよ。

尊敬してる人はいる？  
尊敬か……坂本さんは尊敬してるぜ。

知らない人のために。「坂本さん」ってのは、坂本徹とおあたらたか荒高あらかたかったかてい

う、鬼打隊の剣豪兼刀工のこと。実動部隊の長で、張の火竜も坂本  
さんが作っただんだよねー？

まあな。

嫌いな人、または敵わないなあって人はいる？

嫌いな奴は成実！

敵わねえってか、頭が上がらねえのは丹優だな。

最後に読者の皆様に一言。きつちり締めてねー張

あア！？

(カチコチ)「ご、ご一同方、この度は、縁もたけなわ、「シノキ

ズ - 織豊鬼伝」を読まれて頂き、切に、ありがとうございます」

周助 「そこまで無理して敬語喋らなくていいんだよ!？」

張 「……………」

周助 「ご、ごめんね？ 何かとりあえず、ごめんね!？」

張 「……………」

周助 「でもほら！ ちゃんと成立したじゃんこの企画。ね、ね？」

張 「……………ちっ」

周助 「……………何ぞ？ 拗ねてるの?？」

張 「……………拗ねてねえよ」

周助 「わ、分かりやすー(ボソリ)」

## 〈キャラクター紹介 - 巻 -〉（後書き）

キャラクターについて何か質問がありましたら、活動報告の方にごうぞ。

後書きにてお答えしますので。

挿絵表示の機能を使ったのは初めてなので、もし表示されていない場合はお手数ですが教えて頂けると嬉しいです；

〈幕間〉 始動（前書き）

今日也たちのストーリーから敵（鬼）側のストーリーに一旦それるのが、この《幕間》です。

「その頃 は……」といった感じになっています。

今回は秋臣一の視点からです。

それでは、どじょう。

〈幕間〉 始動

「『豊臣』の世も、そう長くはあるまい」

「時が来れば」

「見限るまでのこと」

【一】

敢えて世俗とは隔たりを置いた閑静な地所。そんな最上の地にあてられた屋敷の、広い客間。

真新しく敷き詰められた畳から、微かな藺草イグサの匂いが揺れる。

上座には、居住まいを正した壮年の男。

屈強な体躯。丸めた頭に、落ち着き払った伶俐な目。その相貌も



雰囲気も、まるで厳格な修行僧のようだと常々思う。

ひじかたしちよう  
土方七曜。今や群青さんの唯一の側近だ。

立派な着物のお偉いさん（確か、鳴沢さんといったかな？）の堅苦しい挨拶を、泰然自若とした岩のような毅然さで聞いている。いや、耳では聞いていても、頭ではもつと他の重要な事を十も二十も考えているのかもしれないけど。

「群青殿は快癒に向かわれているとのこと」

（退屈だなあ……）

その脇に控えている僕はといえば、とうの昔にこのくだりに飽きていた。気まぐれで来てみたまでは良かったけど、どうやら失敗だったらしい。

これなら、ごろつき連中を斬っていた時の方がまだ楽しかったり。僕に遅れて大阪に戻ってきた坂本さんも九独くどくさんも、勝手に各々のことにいそしんでいるしなあ……。

「太閤殿下に成り代わりまして、ここにござ挨拶とお祝いを」

やっと終わった挨拶の後には、快気祝いの品と称した豪華な品々が続く。どれも希少で高価な物ばかり。

だが、祝いと言う割には、鳴沢さんの表情からは疑念と不審が滲み出ている。

別にそれで不愉快な気持ちだとかにはならない。ただ、面白いくらいにあからさまだなあ、くらいなもので。

どこの身分とも知れない者達に何故ご機嫌伺いのような真似を、なんて思っているんだろう。

まあ、それも仕方がない、か。群青さんのことを知っているのは、「彼」の腹心の中でも限られたごく一部の者だけと聞くから。それこそ片手の指で余るくらいなの。

( 知らないもんね。ましてや僕たちの本当の正体なんて )

欄間の影が、傾きだした午後の座敷に落ちる。この季節には珍しい茜色の鮮やかな夕日が、畳の上に優美な影絵のような模様を映し出していた。

鳴沢さんとその一行がようやく帰った後、僕は凝りそうになった首をほぐしながら(鬼でも首や肩は凝るんだよ?)、大きく息を吐いた。鳴沢さんの置き土産の数々をちらりと一瞥する。

「にしても……随分ご執心のようですね、太閤たかひさんは」

南蛮の衣服。

明から取り寄せられた正絹の織物。

繊細なガラス細工。

七宝の装飾品。

金彫りの漆の調度品。

とりどりの舶来の香木、青白磁器、狩野の屏風絵。

気に入りのお妾にだって滅多にこんなことはしないだろう。

けど残念。尽くす相手を間違えている。

さて今回は、一体この内のいくつばかりが群青さんの興味を引くことができるだろうか。ほぼ大半が放っておかれて無駄になるのが毎度ではあるけれど。群青さんが望んでいるのは、恐らくこういった物なんかじゃないから。

「天下を獲つたと云えど、豊臣秀吉も所詮人間。老いも死も怖いと見える」

並べられた品々をまるで庭先の石ころ同然のように一瞥し、七曜さんが口にする。地に響くような低い声だ。  
「でしょうね、と僕は小さく零す。」

「群青鬼」の一族の滅亡。鬼打隊によって壊滅に追い込まれたのが、もう二十年以上前のことと聞く。

その後、群青さんたちに庇護と余りある待遇をしてくれた人物。何でもそれが、織田信長、次いでこの豊臣秀吉とやらだったらしい。だが、善意だけで助けたわけではない。鬼と知っていたのなら尚更だ。

その裏には、生命力の高い群青鬼の血を求める本心が隠されているのだらう。

人間つてのは僕たちよりもずっと早く「老い」に追われる生き物で、もう秀吉さんも五十と一の年だ。たくさん側の室を抱えているらしいが、まだお世継ぎもいないわけだし。

「まあ、そのおかげで、群青さんの療養も緋力の研究も出来るんですから。役得でしょ」

恐らく、勘付きだした「鬼打隊」の生き残り連中も予想だにしないだろう。僕たちが、こんな隠れ蓑に潜んでいようとは。

「されども」

「? 何です?」

「天下人と呼ばれた所で、豊臣の世もそう長くはあるまい。時が来れば……見限るまでのこと」

「はは、と僕は思わず笑った。」

利用できるものは利用する。

不要と悟れば、ためらわず切り捨てる。

全ては、主の群青鬼のために……。

七曜さんのこういうところは、僕は嫌いじゃない。人間に見せる無駄のないくらい冷酷さは、僕にとっては明快で分かりやすい。複雑なのも偶には粹だと思っけど、「すぎる」のは好きじゃないんだ。

「本当に」

「鬼」みたいな「人」ですねえ、七曜さんは」

暮れ時は山の端にくすぶっている。

それをはかたなく眺めながら、僕は長い廊下を歩いていた。足の裏に直に伝わる床の感触は滑らかで心地良い。

「九独さーん」

たどり着いた部屋の障子に、僕は全く気後れせずに手をかける。

優雅な座敷の真ん中。

そこに見止めた、山伏装束姿やまぶしの小柄な男。酷い猫背のせいで余計にそれが目立つ。ゆっくりと上げた蜥蜴とかけ似の面立ちが窺える。

九独さんは、相も変わらず金勘定に精を出していたようだ。

これじゃあ高利貸しみたいだ、薬師というよりは。ま、こういう人の方が、七曜さんにとっては使いやすいのかもしれない。

「太閤様の使いの方が、来られていたようですな」

相変わらず九独さんの喋り方は、口の中にこもるようで癖がある。「いらぬ物置いて帰りましたよ」と僕は軽く返した。

ずっと喋っていても格段楽しい相手ではないから、手短に話を終わらせることにした。

「七曜さんからの指示です。』ほとぼりが冷めたら、また緋力を売り歩け』ですって」

ともすれば卑しそうに、九独さんはその小さな目を更に細めた。

「あ、それから、僕も同行しますから」

「……………では、そのように」

一瞬疑問の色を浮かべたものの、九独さんは小さく頭を下げるだけに留まった。自分の損得に直接関わりがないのなら、あまり細かいことに深追いはしないらしい。

（まったく、損な役回りだなあ……………）

一方の僕は、心の中で不満の声を上げ続けている。何をどうやってたつて気の進まないものは進まない。

否応なく、七曜さんと交わした先程の会話が思い返された。

（それで、緋力の方はどうですか？）

群青さんが力を取り戻し始めた今、その血から作られる緋力もまた精度が高まりつつある筈だ。これこそが群青鬼の「一族」への足がかりになる。そうなれば

（高等鬼、作れそうですか？）

（何体かはできておる。完成体とは言えぬが……………いずれ鬼打隊あたりに使えるであろう）

（さすが、仕事が早いですねえ）

( じゃあ、九独さんにもいつも通り、緋力を広めてもらったらいいですか？ )

( ああ、だが )

( 何ですか？ )

僕が同行しろって、どういうことさ。

確かに、近い内に緋力は九独さんの手に負えない代物になるだろう。お役御免もそう遠くはない話ではあるだろうけど、ここで肝心なのはその捨て時ってやつだ。元々、鬼打隊に大本ほくたちの足がつかないためにいるんだから（本人には言っていないけどね）、ちゃんと切り捨てられてもらわないと。

でも、だからってさあ、僕をこの人のお目付け役にしなくても…。暇とか退屈とか言っただけじゃいいかな？

( 僕が九独さんに同行って… )

( だったら、坂本さんはどうさせるんですか？ )

( 彼奴あいつにはまた別件を用意してある )

( 別件？ )

「そういうことをお願いしますね」

言うことは言ったと、ため息混じりにくるりと背を向け、僕はその場を去ろうとする。

だが。

ピタリ。

障子を開け放したまま、僕は静止した。目の前には、手入れの行き届いた美しい庭園が広がっている。

殺気だ。

これは 坂本さんの。

ここから、少し離れたところで。

もう一つ気配を感じるのだが、蜃気楼のように曖昧で、よくは分からない。気配をここまで隠せるなんて大したものだ。

腰に挿した童子切安綱ていじきぎり やすつなの柄を指の腹で撫でながらふーんと零す僕の背に、九独さんの訝しがる声が投げかけられる。

「どうしました？」

「坂本さん、一人で何か楽しいことやってるみたいですよ」

「……？」

僕は肩越しにそう呟き、気配の先の虚空を睨む。

そして、足に力を込め

瞬間その場から消えたように見えたのか、「それはどういう……」  
と言いかけていた九独さんの驚愕の表情を最後に垣間見た。

風の中を跳躍し、加速して疾駆する。

広い庭、高い塀の先。

屋敷の外、伸びる下り坂、守るように茂る林の奥。

視界に映るもの全てが、幾重の線となって通り過ぎていく。

「……いた」

すぐに、いつもの墨色の背中を視界に捉えた。何者かと対峙する坂本さんの姿だ。左手には漆黒の愛刀が握られている。

やっぱり、一人で楽しいことやってるんじゃないですか。

僕は口の端で小さく笑った。  
ああ、僕の中の血が、騒ぐ。

「僕が九独さんに同行って……」

「だったら、坂本さんはどうさせるんですか？」

「彼奴にはまた別件を用意してある」

「別件？」

「お主が話しておったことだ。九独並びに伝えてこい」

「それはいいですけど……何て？」

「『鉄東矢』を持つ例の少年とやらを」

「  
此処に連れて来い、と」





〈幕間〉 始動（後書き）

「太閤」は豊臣秀吉の呼び名のことです。  
ようやく歴史を絡ませることができました（笑）

今回は、坂本徹の視点からの予定です。

〈幕間〉 邂逅（前書き）

今日也たちのストーリーから敵（鬼）側のストーリーに一旦それるのが、この《幕間》です。

「その頃 は……」といった感じです。

坂本徹の視点に移り、秋臣一視点だった前話「始動」と少々平行した形になっております。会話とキャラクターの心情描写が多い、シリアスなお話かもしれませんが、  
それではどうぞ。

〈幕間〉 邂逅

刃を交わすのは

友か、敵か。

【坂本】

豊臣の使い走りの世辞話などに興味はない。どうせ貢物の機嫌伺いだ。

その間、己<sup>お</sup>れは愛刀に心行くまでの手入れを施していた。利き手がこうなってから少し疎かになってしまっていたが、九<sup>く</sup>独<sup>どく</sup>を連れ戻す面倒も片付き暇があり余った分、己のこの片割れにいつもより長い時間をかけることが出来たのだ。

だが。

どれ程経った後だろうか。不意に、その手を止めるものが在ったのは。

逡巡はない。刀を腰に挿し、その柳生模様の黒鍔を確かめるように一つなぞると、己れは立ち上がり自身の座敷を後にした。

森閑とした林を右手に、緩やかな坂の勾配が屋敷の正門から下る。辺りに視線を探らせながら、己れはその門扉に背を預けていた。冬前の小春を思わせる穏やかな微風が着物の袖を揺らす。

すると、目の横に一向の姿がちらついて入り込んでくる。案の定、七曜しちようとの話を終えた鳴沢つかいらが、屋敷を後にしようとしているところだった。

門先の己れに漸く気付いたのか、先頭の鳴沢はあからさまに顔を顰しかめる。さも不愉快そうに睨み据え、足早にこちらにやって来る。

道を空けるのも、仰々しく頭を下げるのも面倒な己れは、戸に更に深く体重をかけただけだ。

鳴沢の顔がいよいよ歪み、屋敷の敷居を跨ぐその通り過ぎ様

「……はっ」  
「……はっ」  
奴は苦し紛れの悪態を吐き捨てて、その場から去っていく。

(不調法者)

(この)

(卑俗な、下種が)

「……はっ」  
それがご立派な武士の誇りとやらか。大層人間らしい、蔑んだ不遜な矜持とやらで結構なことだ。

下らない。実に下らない。

だがそれでいて、癪に障る。

重なり思い出させるのだ。先々代の隊長、渋江しぶえ元伐げんばつを。そして、

あの日あの時の、矮小で卑劣な人間共を。

(まあ、前者に限ってはとつくの昔に )

己れはそれを鼻で笑った。

( 暗殺された口だがな！ )

刹那。

己れは右の柄に手をかける。

漆黒の鞘から抜き放たれる、黒鉄の刀身。

研ぎ澄まされた直刃。

「ばんさいかねしげ晩斉兼重」。

視界に映り込む鳴沢の遠ざかりつつある背中を、塗り潰す様に閃く。

そして。

一瞬の踏み込みと共に、地を蹴る。

刃先が向く先には

高い跳躍からの一閃。

斬り交える。

己れの暗黒の刃と、奴の純白の刃を。

互いが互いを打ち放ち、地に降り立つ。

一足飛びで斬り込んだのは、坂の側に茂る林の中だ。

己れの姿が掻き消えていることに、何の気無く振り返った鳴沢が今頃驚いているかもしれないと他愛なく考える。鳴沢を斬れば七曜が口煩いであろうし、元より「兼重」を小物で汚すつもりなど毛頭なかった。

間合いを取る相手の姿に、思わず己れは目を細める。勘付いた時

から大方の見当はついていたのでが。

まるで気配を感じさせなかった。唯一感じ得たのは、兼重の手入れをしている時にふと覚えた、在るか無きかの違和感のみだった。それと、屋敷の門の前に居た時に一瞬鼻についた、微かな香り。以前のこいつからは決してしなかった紫煙の匂いの為だ。

「相変わらずだな」

そして、己れ達は対峙する。

「宗一郎」

刀納宗一郎。

どう控え目に見ても秀麗な、見目の整った顔立ちの優男だ。

髪、瞳、今となつては懐かしい隊服に羽織。その身に全ての闇を引き連れて来たかのような、黒、黒、黒……。

その色の中で一際映えるのは、全く対照的な純白の差料。

「静姫」 雨に散る桜のような刀紋、八方透かしの銀鍔が美しい、暗殺剣に留めるにはつくづく惜しい「刀納」の刀だ。

「四年ぶりだな」

己れはそう言うと、口の端を小さく吊り上げた。

緋力の出所を探っていた右手周助の嬢ちゃんを上手く撒いたと思っていたが……。己れともあるう者がそれに気を取られ過ぎていたらしい。

別にこいつが追跡していたとは。流石、と言うべきか。

宗一はそれには答えず、翳りを差した眼差しだけを己れの右の袖口へと滞留させる。最早気付いている筈だ。己れの右腕が、肘下からごっそり無くなっていることに。

だが、奴はそのまま目線を上へと引き上げ、只一言発したただけだった。

「……まさかお前が、今回の緋力に関わっていたとはな」

「それを言うなら、己れが生きていたことに驚いたらどうだ」

「……答える坂本。お前は」

「群青鬼側についたのか」

「現状見りゃあ分かるだろう、鬼打隊元軍師さんよ」

敢えて挑発して奴を呼んだところで、宗一はその柳眉を微動だにさせない。まるで彫刻された能面の様だ。

今や主の感情の昂りを代わりに現すのは、俄かに光を宿した熱を持たぬ氷月の如き、銀色の双眸だけ。

「ならばお前は、実動部隊班長だ。敵に寝返るなど」

「『鬼打隊への裏切り』だつてか？」

相も変わらぬ奴の暗の言葉を遮り、続ける。

「貴様は代わり映えしねえな。後にも先にも鬼打隊のことだけか。じゃあ聞くが」

未だに構えたままの闇色の刀身に視線を落とす。

知らず漏れる冷笑の傍らで、妙に冴えた頭とは裏腹に、その下の腹の奥ではどす黒い感情が渦巻いている。その凶暴な感情が出口を求めて喉元を這い上がって来れば、思いがけぬ程の底冷えした声となって吐き出された。



「鬼打隊が何を残した」

「……」

「鬼打隊が馬鹿みたいに守ってきた人間達は、何を残していった」

「……」

何も。

何も、残してはいない。

貴様も当事者なら、それはよく分かっている筈だ。

残ったものと言えば、ただ見渡す限りの赤い世界だけ。

斬ることしか知らぬ剣士の命。そう呼ぶべき右腕<sup>もの</sup>が、焦土の上に重く無機質に転がり落ちる。血塗れた切断面より下の空虚。

「鬼打隊、此の剣人を殺める為に在らず。鬼から人を守りし為に在り」。

拳句、己れ達が人間に攻め滅ぼされ、呆気無く灰と成り果てた。

下らない人間の企みや欲の所為でな。見るに耐えぬその醜さは、己れの内なる激情と嫌悪を滾らせる。

嗚呼、鬼より人間の方が、よっぽど……。

本当に斬り尽くすべき、「害悪」は

「……お前も人間<sup>ひと</sup>だ、坂本」

憂う様に、誠め諭す様に、宗一がやがて静かに告げた。昔と一向に変わらぬ、不器用なまでに真直ぐな清冽さだ。

だがそれは、今の己れには一笑程度にしか値しない。

「そう、思うか……？」

差し向かうその銀の瞳の中に映った己れが、己れ自身を見返している。

呼応するかのように輝きを帯びる、己れの蒼白の両眼。

隊の者達には忘れられぬ、鬼のみが有する瞳。

そこで初めて、宗一の顔に目に見える感情の色が現れた。驚愕と言っても良い。瞠目し、息を飲んだのが分かる。

「……………『高等鬼』に、なったのか……………」

左手に握られた黒き刃を、迷いなく宗一へと突き付ける。

返答はそれだけで十二分に過ぎる。貴様の目の前にあるそれだけが真実だ。

「今日は珍しくどちらも饒舌だな」

己れは宗一を睨み据える。最早無駄話はいらない。

「だが、昔話に花咲かせる為に来た訳じゃあないだろう、宗一郎」

その一言を引き金に、宗一の目から一切の気色が消えた。表情は氷の如き硬質なものへと戻る。これが任務を為す時のこいつの姿だ。兼重に相對する様にまた、静姫に力を込め、己れへとその差料を向ける。

同じく「三剣」のこいつと仕合うのは、終ぞ久しい。

互いに、慎重に間合いと呼吸を計る。

両者の間、白黒の剣の間に満ちるのは、殺気だ。

些細なことで撃鉄を下ろし得る、一触発の殺気。

とうに失った筈の右腕がまだそこに在るかの様に、脈動にも似た疼きと痛みが込み上げる。

先に動いたのは

「……！」

宗一だった。

俄かに警戒に目を細め、己れとの間合いから大きく飛び退る。そして一切の無駄のない所作で静姫を納刀すると、音どころか自身の気配一つ零さずにその場から忽然と姿を消した。

何故か。

答えは至極簡単だ。己れの後ろに居る。

「あれ、逃げちゃいましたねあの人」

一瞬にしてこの場に出現した気配。己れの後背で暢気に響く若い声。

溜息混じりにちらと見遣れば 赤味を帯びた髪、朽葉色の着物、

臙脂の羽織 そこには、秋臣あきおみ一が立っていた。

「貴様の所為だ」

「いや、何だか楽しそうな殺気がするんで、仲間に入れてほしいなあと思つて来てみたんですけど……」

つまらないなあ、と一は幼さを幾許か残したその姿に似つかわしく唇を子供見たく尖らせ、所在無げに腰の赤鞘の刀を弄んでいる。

こいつが殺気を逃す筈も無い。元より「秋臣」の血故か、己れよりも好戦的な坊主だ。

「それにしても今の人、お知り合いですか？」

「……」

「あの銀の眼……ああ、鬼打隊の『刀納』ですかね」

「……」

「それにしても、何だかあっさり退いちゃいましたけど」

己れはその全てを黙殺した。分かっている癖に敢えて聞く、存外性質の悪い餓鬼だ。

退いたのも当たり前だ。恐らく宗一の本来の目的は、緋力の元出の搜索と、群青鬼の存命の確認。俺と仕合う為でも、ましてや一と戦う為でも無い。見つかったのも不本意に他ならなかったことだろう。

何よりも任務とその効率性を重視する奴のこと、それさえ果たせれば長居はしない。

「色々ばれちゃったんじゃないですか？ 追わなくても？」

「必要は無い」

幾分楽しそうな声音の一に、己れは振り返らずに端的に言い放つ。ここを突き止めたとしても、今の弱体化した鬼打隊に豊臣の領土まで攻め入ってくるだけの力は無い。知られたところで、その支障は微々足る物だ（七曜はあまり良い顔をしないだろうが）。

「無駄口はいい。要件は何だ」

こういう時は大抵、一は七曜からの面倒な言伝を持って来る。

やはりと言うべきか、一は「あ、やっぱり分かってました？」と悪びれなく笑った。

「早く言え。己れは今虫の居所が悪い」

肩越しに睨みを効かせれば、少し面食らった様子の後に一はまた笑顔に戻り、首を小さく傾げる。無邪気に相手をからかう餓鬼のそれだ。

「やっぱり坂本さんでも、少し寂しかったりします？ 昔の仲間と会って」

「愚問だ」

己れは右元の黒塗りの鞘に晩齋兼重を納めた。小気味良い金属の音が、暮れなずみ始めた黄昏を裂いて高く木霊する。

納刀の際に垣間見たのは、感情が冷め光を終息しつつある己の青灰色の瞳と、柄すら握れぬ元の利き腕の空。

その両者が、己れの中での四年という歳月を物語っている。それを刹那に感じただけに過ぎない。

「下らん……」

例え昔の仲間だろうが。馴染みだろうが。戦友だろうが。己れの目障りとなれば

ただ斬って捨てるのみ。

〈幕間〉 邂逅（後書き）

坂本徹の裏切り（？）には、失意と人間&鬼打隊不信が背景にあります。大義見失っちゃったみたいな。

その辺の過去については追々しつかりと書いていきたいと思っています。でも坂本さんは若干難しい言葉を使うから、ちと大変だったり（汗）

それでは次回から新章に突入します！ そろそろ新キャラもちゃんを入れていきたい今日この頃（笑）

八 むかしむかし……

【呉葉】

元シ、その一族、鬼、緋力……全てを終わらせたかわりに迎えた  
結末。引き換えに払った、多くの犠牲。

鬼打隊おにうちの壊滅から四年後。

その月日の中で、世は着実に移り変わりをみせていました。  
戦乱の時代が向かうは、「豊臣」の平定の流れへと……。

そんな中。

方々で密やかに広まりはじめた、ある事件の噂。忍び寄る異変。  
夜な夜な現れ人を襲う化け物。  
生き血をすする人間まがい。

死にかけていた者すらも治す、深紅の欠片……。

それはまるで

(夜な夜な現れ人を襲う化け物)

鬼のような。

(生き血をすする人間まがい)

高等鬼シのような。

(死にかけていた者すら治す、深紅の欠片)

緋力シのような。

全ては終わった筈……。

そう、全てを鬼打隊は終わらせた筈だったのに

大元の鬼は

群青鬼は、生きていたのです。



二十六話 ただいま

【 】

「ん？ 丹優たんゆうどないしたん？」

「東雲しのめを見ませんでしたか？ どこにもいなくて……」

「あー、あの犬公ならごつつう勢いで外出てっただ」

「外に……？」

「ああ、今しがた山下りて行った」

「下りて、……！ すみません、少し出てきます」

今だけは、想わせていてほしい。

この世界にも、俺の帰りゆく居場所はあるのだと。

【今日也】

山城。

田上<sup>たがみ</sup>さんの村を抜けて裏山を上ること一時と少し。

「……………つ、えうわおう!？」

突然視界を覆う灰色の影。

全体重を前脚にかけて飛びつきに、不意打ちを食らった俺は支えきれず尻餅をついた。

尾てい骨強打。

当たり前といえは当たり前だ。いくら犬とはいえ、優に仔牛くらいの大きさがあるんだから。

「……………し、東雲っ! 重いつて!」

完全に興奮し切っている様子の東雲を宥めすかして、俺は何とか体を起こす。重さだけで例えるなら、水をたっぷりと吸った土嚢袋を腹からのける感覚に近い。

倒れた拍子にずり落ちてしまった被り笠はそのまま解いた。ここまで来れば、髪の色とか目の色とかもう隠さなくていいだろうし。

もつすぐ着くだろうから。

「てめえの飼犬の躡くれえ、ちゃんとしろ」

「あれー？ 東雲前よりおつきくなつたー？」

まだじゃれ足りない様子の東雲と云々している間に、張ちやうと周助しゅうすけは俺の横を通り過ぎていく。

洪赤の広い背中はずっくりと、快活な緑の後姿は待ちきれないとはかりに、山間の向こうへと遠ざかる。

地面に転がった荷物を引っ掴み、俺も慌てて後を追った。

その後ろにぴったりとつく東雲。長い尾が引っ切りなしに左右に揺れている。

それからそう間を置かずして、視界の先に見えてきたものがあつた

切り開かれた山中に佇む、簡素で落ち着きのある佇まいの屋敷。少しだけ懐かしくなってしまった場所。

近江の「神隠しの村」へと旅立ってから、ここは何も変わっていないように思われた。強いて挙げるとするなら、冬の訪れが近いせいか若干薄ら寂しくなった木々の葉と、出発の時にいなかった周助が今はいることぐらいだろうか。

邸を四方にぐるりと囲む竹垣。その表の門口を抜ける。

すると、屋敷の前に佇む華奢な姿が目に入ってくる。あ、と俺は思わず声を上げた。

青紫色の着物に渋袴。深い藍色の羽織。ふわりと揺れる黒髪。白

い花の簪が、空の色を反射してきらきらと輝く 丹優だ。

「丹優ーっ！」  
その姿をいち早く見止めていた周助が歓喜の声を上げ、襟巻きをなびかせながら飛ぶように丹優へと抱きついた。相も変わらぬ身の

軽さだ。

丹優は急で驚いたのか目を丸くして、それでもすぐにその眦を柔らかに緩める。ぱつと陽が差すように表情を綻ばせた。

「周助！」

「丹優久しぶりー！ どれ位ぶりかな？ 元気にしてた？」

「ええ、周助も元気そう良かった」

「当ったり前！ ごめんね本当はもっと早くに訪ねるつもりだったんだけど」

「気にしないで。わたしたちのために色々してくれてたんですもの」  
直の再会を喜ぶ、明るさに満ちた会話が交わされる。はしゃぐ周助がほとんど喋ってはいるけれど。

これが噂に聞くガールズトークってやつか……？

だ、男子の入り込む余地がない、だと……！？

やがて周助の話は一応のところ一区切りを置かれた。まあ、周助が丹優に会うのも随分久しぶりのようだから無理もないのだろう。今までは飼い鷹の嵐を介して手紙をやり取りしていたわけだし。

そして次に、周助のすぐ後に続いていた張へと丹優の視線が上げられる。

「張も、お帰りなさい」

「ああ」

「道中、体に大事は？」

「別にねえよ」

張の返事はいつものごとく至極端的だ。神隠しの村の一件や人喰

い人魚の一件で本当はアレとかコレとかソレとかあったんだが、張は敢えて言うつもりはないらしい。

俺にしても、鉄東矢てつとうしを抜いたせいで負った手の傷や、人魚もどきの鬼にやられた脇腹の怪我はとつくに治っている。今更丹優の心配を煽る真似をしたくないのは右に同じだ。

丹優は顔布の奥に覗く張の双眸を見つめた。ふっとその眉尻を少し下げてみせてどこか困ったようにしていたが、それを取り直すように口元に笑みを取り戻した。

「長旅で疲れたでしょう？ さあ、中に上がって」

周助はもう一度丹優の肩口に頬を寄せぎゅっと抱きしめ、それから屋敷の中へと上がっていく。

張も大矛を担ぐのとは反対の空いた手で丹優の肩をぽんと叩き、一言二言かわしてから中へと入っていった。

二人にやや遅れていた俺が最後に辿り着く。

相変わらず東雲は俺に「つけ」状態だ。

「今日也」

俺を前に、丹優はその白い頬に小さなえくぼをのせて微笑みを浮かべた。

その柔らかく澄んだ笑い方は、初めて会った時から変わらない。

何て言ったつけ？ ……そう、『朝桜』、とかだったか？

ふとそんな言葉が思い出された。

いつか古典の授業か教科書で見かけた、それか植物好きの梗子さんが言っていた気がする。

その時には今一つピンと来なくて、何だか情緒的というかセンチメンタルな言い方だと思っただけだったけど。

朝桜。ああ、丹優のイメージはそんな感じなのかもしれない。

朝露の中咲く清らかな桜　でも、だからこそ吹けば忽ち落ちてしまいそうで、何とも言い知れない儚さが、俺を無性に不安にもさせた。

その不可解な心のざわめきを自然と穏やかにしてくれるような声音で、丹優が言葉を紡ぐ。

「お帰りなさい」

一瞬、俺は返事に詰まってしまった。

何でだかは分からない。

ただの何の気ないやり取りだ。現代<sup>あじう</sup>では、梗子さんと、生前は父さんと、時には友人やクラスメイトや部活仲間とも交わしていた、本当に何気ないやり取りの筈なのに……？

それなのに、答えるのにほんの少しの間を要してしまった。

「……………ただいま」

一言。

ただ一言を口にしたただけなのに、途端に、胸の奥にじわりと優しい熱がこみ上げ、心の隅々にまで滲みながら広がっていく。

丹優にまた会えて嬉しいからなのか、無事に戻ってこれで安心したからなのか、これまで張り詰めていた糸が切れたからなのかはよく分からない。

でもその瞬間だけは、不思議と疲労も傷も戦いの記憶も全部忘れ去ることができた。それだけは確かだ。

この温かな感触におずおずと手を伸ばしそつと確かめるように、俺はもう一度その言葉を口にする。

「ただいま」

黒目がちのひたむきな眼差しを向け、丹優はゆっくりと首肯するかのようにもう一度その言葉を紡いでくれた。

「お帰りなさい、今日也」

「うん……ただいま、丹優」

帰ってきた。

交わした旅立ちの言葉の先に繋がるところへと。

俺は、ここに帰ってきたのだ。

俺の知る故郷<sup>せかい</sup>は、もうそこにありはしない。

真っ赤に塗り潰された世界。  
炎の海。

辺り一面を焦がす熱気。  
吹き付ける血の風。  
火と黒煙で焼けた空。

そう遠くない所から聞こえる叫び声と悲鳴。怒号。  
無数の剣の音。

己の喘鳴。自身の血の臭い。

暗い山間の中に分け入っても、そのどれもが途切れることはない。  
否、寧ろ新たな気配と音が近付いてきている。

(……後を追われているな)

側の東雲も、首を上げ耳を立てている。

(撒くのは、これは難しいところか……)

泥に沈んだような体を叱咤し、東の間背を預けていた木の幹から  
身を起こす。

それを辿り不安げに投げかけられる瞳。

( ? )

( 追手は俺が戦(や)る )

( 先に逃げる )

( ! 駄目よそんなの…… )



( )

分かっていた。

「君」が決して行かせようとしないうことくらい。

行かせてしまったら、それが最期になるかもしれないことを怖れて。

だから。

だから、敢えて酷い言葉を選んで君に叩き付けた。

(あんたの心配なんか要らない)

(あんたがいたら戦えないと言ってるんだ)

(足手まといになる)

( )

血の気を失った悲痛な相貌。初めて見る表情。

わざと傷つけたのは俺なのに、そんな君をこれ以上見ていられなくて。

俺は二人逃げて来た道の方にくるりと背を向けた。

鉄東矢の柄を固く、固く握り直す。

戻る先に待ち受ける赤い赤い世界に飲み込まれまいとするかのように、俺は声を限りに叫ぶ。

俺の後ろにある、去り難き確かな存在に向かって。

(片付いたら、すぐに後から追いかける)

(だから先に行け )

（ 行くんだ丹優！！ ）

約束する。

必ず。

必ず、君の元に帰ってくるから。

## 二十六話 ただいま（後書き）

「ただいま」の印象を残すために敢えてここで切りました。普通の高校生には、なかなかハードな旅でしんどかった筈なので、帰ってこれた感動もまた一入といえますか……。

最後の文は、もう言わずもがな例の奴の記憶です。

追々今日也の前世の話において大事になってくる（予定の……）パート、のつもりです。

今回はもう少しギャグといますか、ほのぼのにしたい……。

## 二十七話 来訪者

というよりも、本当は少し前にもう来てたらしいんだけどね。

【今日也】

柄の濃緑色と、鞘の艶やかな黒

『心任』と名付けられたこの脇差を、確かな存在感を残していた腰元から手の中へと移す。

それから、柄の部分を持たないように細心の注意を払って、小太刀『鉄東矢』も帯の間から抜く。

命の恩人からの貰い物と、良くも悪くも特殊なこの預かり物の後に続いて、俺も玄関の式台（板敷きの部分のことをそう呼ぶらしい）へと腰を下ろした。

決して軽くはない刀二振を差して立ったり座ったり……。こうしてみると、手間取っていたその動作もそこそ慣れてきた気がする。

東雲しのめが屋敷を飛び出して行ったので、そろそろ俺たちが帰ってくる頃なのではと丹優たんゆうは思っていたらしい。

あらかじめ用意された木盥が、玄関先で俺を慎ましく出迎えた。丹優は中の水を入れ替えるために一度勝手場へと向かい、戻ってきた時に清潔な手ぬぐい数枚と一緒に持ってきてくれた。

丹優の細やかな気遣いに礼を言って受け取る。

手甲を解いた両手、続いて藁草履の結び目からようやく解放された足を盥の水に浸した手布で清めれば、みるみる泥や土埃の汚れが洗い落とされていく。

この屋敷から山頂方面に少し登ると川の上流域に行き着くのだが、そこから汲み溜めてまだあまり時間が経っていないのだろうか。肌に触れる澄んだ水は冷たく、どこか冬の気配を感じさせた。

(……げ)

今更気づいてしまった。足の親指と人差し指の間に靴擦れを起していることに。

普段のスニーカーとかスパイクだったら、まずこんなところにはできない。これは、丁度草履の鼻緒が当たる位置だ。

まだ慣れていないせいか、それともこれまで歩き通しだったせい。どちらにせよ、鼻緒が常時そこに当たりっぱなしだったわけだから、他の傷と比べて治りが遅かったのかもしれない。

その赤く滲んだ擦り傷を濡れた布が軽く掠めただけで、ピリツと疼痛が走った。当たり前前だけど痛い。

乾いた方の手ぬぐいで、一通り終えて小ざつぱりした手足を拭く。そして、心任と鉄東矢を腰に挿し戻し、片手に旅の荷物、もう一方の手に被り笠を持って俺は立ち上がる。

一旦落ち着いてしまうと、なかなかどうしてまた起き上がるのが億劫になるから困りものだ。

使い終わった木盥を抱えた丹優が俺の後に続く。持ってきてくれた時と同じく、中には水が一杯に張られてある。

「持とうか？」と丹優に申し出たんだが、やんわりと断られてしまった。小さく微笑んで、その黒目がちの瞳をちらと俺の両手のあたりに向けながら。

あー……、そういえば俺も手が一杯、でしたよね……。

そうだった、と頭を掻こうとしたものの、それが手を塞いでいる元凶の笠のせいで出来ないことを思い出し、余計に俺は苦笑するしかなかった。

中が上がれば、廊下を進んだ先から何やら声が　周助の澆刺しやうせきとした声を主に、張ちやうの低い声もいくらか　聞こえてくる。

これは……居間の方からだ。

勝手場と隣接していることや囲炉裏が設えられていることもあって、普段から居間は食事の時に使われている所だ。神隠しの村の一件で丹優や張としたように、ここを話し合いの場とすることもある。

ふらふらと声に釣られて例の居間を覗く。囲炉裏の近くに敷かれた円座の上を陣取っている、張と周助の姿がすぐ目についた。

部屋の隅に見えるのは、無造作に置かれた二人の旅荷物だ。

剣士にとつては片割れとも言うべき刀　張の大矛かじゆう『火竜』と、

周助の剣『雷風』は、刀袋の中で身を休め、それぞれの主の近くに控えることを許されてはいたが。

居間を抜けた廊下からでない、奥の各部屋には行けない。

とするとこの二人……色々放りっぱなしでここでセーブポイント  
紛いのことしてんのかよっ!?

「おいおい……っつて、え?」

二人が居座るその理由はすぐに分かった。俺は文字通り目を丸く  
して、思わず素っ頓狂な声を上げる。

篝火を囲んで催される食宴のように、囲炉裏の周りに並ぶ豪華な  
料理の数々が俺たちを迎えていたからだ。

ここでの食事は、基本雑穀か玄米の飯に一汁一菜。

俺が身をもって体験したある種のカルチャーショックだ。この時  
代、おかずなんて一般庶民がほいほいと食べれるものでもなく、例  
に違わず俺たちもそうなのだ。

それなのに、今日の夕食はどうしたことが。

丸く小高く盛られた白米、大ぶりな魚の干物の開き、冬野菜をふ  
んだんに使った関西風の煮物、香り立つ具沢山のみそ汁、品良く小  
鉢に盛られたお新香……。

冬が近くなつて夕飯時が早まったのは分かるけど……。

何で突然、絶賛おかず増量追加中? おかず強化月間? 持って  
けドロボー状態?

俺がポカンと呆気に取られている間に、張も周助も食べる体勢に  
入りつつあった。

張は顔布を解き(今まで食事は一緒にしなかったが、近江での事  
件以来少し俺と打ち解けてくれた?)、周助は襟巻きを畳んで脇へ  
いそいそと置いている。

隠すものがなくなり久しぶりに見た吊り上がり気味の張の目が、

俺にすつと向けられる。依然として顔の右半分を黒紫の痣が覆っており、そちら側の瞳はうつすらと青白い。

「オラ、餓鬼。てめえもとつと来い」

「早くしないと今日也の分なくなっちゃうよー」

「いくら長旅で腹が減ってるからって行儀悪いぞ。別に逃げるモンじゃあるまいし」

「何言ってるんだ。逃げんだよ。てえか、すぐに無くなんだよ」

「ちよつと、何でうちの方見て言うの」

……まあ確かに、周助の例の食事量とペースでいけばすぐになくなりかねないけど。

「せめて荷物を片付けてからにしろよ」

俺はどこのお母さんだよ！　なんて自分にツツコミを入れながら一応言うだけ言ったけど、その後は華麗なるスルーを決め込まれた。うん、大体予想はしてましたケドネ……。

小さくため息をついている俺を他所に、二人はいつの間にもやら箸に手をかけている。そしてまさに、その口に料理が運ばれるところであった。食卓で腹が空いたと責め付き、咎められても「いただきます」を待てない子供のようだ。

その様子をにこにここと見守りながら、居間に面した庭先に先程の盥の水を捨て終わった丹優が、隣の勝手場へと行くこうとしているのを俺は見止める。その細い背中に俺は声をかけた。

「丹優」

「はい？」

振り返った拍子に、丹優の緩やかな黒髪が揺れ、白い花の簪がき



らりと光る。

「あの料理……あんなにたくさん、どうしたんだ？」

「あれですか？」

丹優はそう言つと、頬にえくぼを浮かべてにっこりと微笑んでみせた。

「お土産ですよ」

「お土産？」

俺はその真意がイマイチ掴めなくて、首を傾げながら訝しげに眉をひそめた。

「お土産つて？ 誰の？」

「オレからのやで」

ああ、お宅の。何かすみません色々と気を遣って頂いて………  
………つて、今の声誰！？

声の根源を探して視線をあちこちに慌しく巡らせる。

すると、ひよっこりという擬態語がぴったりなくならいに、衝立で仕切られていた勝手場の方から不意に顔を覗かせる人物が一人。

「………！」

初冬にも関わらず、真夏の太陽の日差しが降ってきたのかと思つた。

まず何よりも一番に目を引いた、輝く陽日を零したかのように明

るい髪の色。ライトブラウンとかの比ではない、むしろブロンドに近い、<sup>こがね</sup>黄金色の髪だった。

二十代後半くらいの青年だ。灰黄色の（もつと風流に言えば『木蘭色』らしいけど）着流しに、青緑の帯。その渋めの配色が、総髪に結ってまとめた金の波打つ髪と、垂れ目がちの琥珀の瞳を一層際立たせている。鼻梁も高く、肌も少しアジア人らしからぬ感じの色合いだ。

温厚そうで誠実そうな、どこか人好きそうな印象を受けた。でもその瞳は、純粹な悪戯を思いついた時の子どものようにキラキラと揺れている。

「今日也くんやろ？ 丹優から聞いてるで」

あ、日本語喋った。というか何で関西弁？

俺はこの突然の謎の人物の登場に目を白黒させ、何をどうコメントして言いやら混乱するばかりで、すぐには言葉を返せずにいる。

だが、俺の代わりにその場を埋めてくれた「物」はいた。

カン、カランカラン……

木床を打って転がる軽快な音。

これは……箸の音？

振り返れば、この男を凝視したまま張と周助二人が完全に硬直していた。まるで、一目見ただけで石に変えられる怪物に遭遇した時のように。

「久しぶり二人とも。どうや<sup>それ</sup>その料理、オレが作ったんやけど」

本当だ。確かに襷をかけて、両袖をたくし上げている。

料理中だったのか、と妙に納得した。

その瞬間　　バタリ。

張はその場に倒れ伏した。壁にもたれかかった綿入りの人形を小突けば、こんな感じで力無く倒れてくれるかもしれない。いや、音だけで言ったらドサツみたいな重い音だったんだけど。

周助はといえば口に手を当てて、今にも泣き出しそうな顔をしている。え、何？ 吐くのか？ これは吐くのか？

何だこの反応は。

未だに正体不明の青年の手料理とやら、超絶に……………不味いんじゃないのか。

先に旅立たれた張の横におずおずと近寄る。へんじがない。ただのしかばねのようだ。

恐らく俺分に宛がわれていた箸で、手近にあったお椀の中の野菜の煮物をつまむ。

見た目はこれと言って問題ないんだが……………？

ちよつと、失礼しますよ……………？

首を捻りつつも恐々と口の中に運び、それが舌に到着した途端

「……………っ!？」

二人と同じ轍を踏んでしまった。

始めは濃い醤油の味が口内に広がる。その後で、舌を針で刺すくらいの塩辛さと、喉に張り付くような甘ったるさが襲ってくるのだ。何とか咀嚼した野菜も多分火が通り切っていない。妙な生臭さとアクがあり、ガリゴリと固い割に時折グニユツとした不可思議な弾力が現れ出でたりもする。

予想の遙かに上を行く、不味いすら超えた不味さだった。もう表現しきれない。

俺までもが口を押さえて前のめりになる羽目になる。  
傍からすれば、大いなる絶望を前に両膝ついて打ちひしがれている人にしか見えないだろう。

「これ……丹優が、作って、くれたと、思ってた、のに……」

「て、めえ……や、りやが、った、な……なる、み……」

地面を掘り返して這い進む半死人のように、周助と張が息も絶え絶えにやっとのことで呟いた。

なるみって……  
『たかむらなりさね高村成実』！？

だが、俺の驚愕は結局のところ言葉にならず仕舞い。声すら出ない。

救済バケツマジで救済バケツいるってこれ三人分いやこの時代バケツってないのか桶桶桶ええええっ！！

ようやく俺たちが喋れるくらいに回復したのは、丹優が運んできてくれた白湯を飲んでからだった。

「てめえはんで毎回食えるもんを食えねえもんに変えんだよ！」

傾きだした午後の日の中、何とか復活した張の怒声が響き渡る。

「昔からてめえだけは『勝手場入るべからず』って言われてんだろ

！……」

「何でや、上手そつやん」

「だから余計に性質たちが悪いんだよ。てか何だその喋り方は」

「おおー小夜ちよ、久しぶり！」

「その名前で呼ばないで！ 『周助』だったら！」

「ええやん別に。相変わらず周助も丹優も、隊の女子おなじは皆別嬪さんやなー」

「聞けよコラアー！！」

「あーはいはい。オレあの日ひ以来ずっと大阪にいたんやで。郷に入つては郷に従えっちゆうか」

「黙れや、ンの似非大阪人が」

何だこの状況は。まるでめくるめくミニ漫才を見せられている気が……？

「責任持っててめえが全部食えや」

「いやあー、オレは何か湯漬けでええわ。ある、丹優？」

「ありますよ」

「ンで元凶のてめえが違うの食ってんだよ、成実なるみ！」

張と「なるみ」という愛称を持つこの人物の、噛み合っているようでない会話を目の端に入れながら、俺は今までに聞いた情報を必死で思い起こし繋ぎ合わせる。

高村成実。

あの時の惨劇を生き残った、数少ない鬼打隊の内の一人だ。

張や周助の話でも度々出てきていた。

鬼打隊の後援部隊医療班にいた医者だとか、鬼の血に感染した張を助けた一人なのに何故だか張は毛嫌いしているっぽいとか、副隊長の甥　つまり周助の従兄いとこだとか、まあ色々。

でもまさか、俺もこの時代この日本でこんな金髪のハーフさん（多分そうだよな？）に会えるとは思っていなかった。

あの眩しい金の煌きが脳裏に蘇り、俺はしみじみとそう思うのだった。

聞けば俺たちが帰ってくるほんの少し前に、この青年は丹優の屋敷に到着したらしかった。

そして久々の再会を祝して色々お土産を持ってきてくれて、腕によりをかけて料理を作ったらしいんだが……。タイミング良く帰って来てしまったのが俺たちの運の尽きってやつだ。

ただ今、居間の囲炉裏を車座に、奥から張、周助、問題の成実、丹優、俺の順で座っている。

例の成実は和やかに話に興じていて、丹優も久しぶりに仲間に合わせて喜んでいるのか、嬉しそうなお表情でその話し相手になっている。いやでもほのぼのとしているのはその一角だけだから。

散々悪魔の物質を作るだけ作っておいて、自分は好物だという湯漬（この時代にまだ茶漬けはない）と漬物を食べている成実は、唯一丹優が作って安全圏内だったらしいその二品を余すところなく堪能している。そして同じく粥を食べてもらった丹優を除けば、他三人の何と静かなことか。

丹優は遠い目をした俺たちの様子にきよとんとしている。

うん、けど丹優には絶対に食べさせるわけにはいかないから。知らなくていいこともあるんだよ世の中には！

その日の夕食では、まるで世界最後の晩餐よりも重苦しい光景が広がっていたのは言うまでもない。

食べ物を残すのも、人の善意をないがしろにするのも確かにいけないけど……一体、何の拷問ですかコレは。

「あー、そつや。あと何品か作ろうと思ってたん」

「……絶対作んな!!」

初めて俺と張と周助が寸分違わずシンクロした瞬間だった。

張や周助の時もそうだったけど……。

本当、初っ端からインパクトありすぎるだろ、高村成実たかむらなるみも……。

## 二十七話 来訪者（後書き）

久々の新キャラ登場です。前話の冒頭で【 】として登場していた奴です。

ちよいちよい話の中で「成実」「フラグを立てていたのですが、それがついに果たされる日が！（笑）

この時代の異人に金髪がいたのかどうかは定かではありません；  
関西弁も多分間違いだらけです；

全てはm + yの妄想です。そのための「ファンタジー」のタグ！  
違う違う

みてみんでアップしたミニキャラのイラストです。

> i 2 6 9 9 1 — 2 7 2 7 <



二十八話 夜はお静かに（前書き）

更新が遅れてすみませんでした。><

ただいま「山城日常編」中でありませぬ。今回は切りどころが分からなくて少し長くなってしまいました。お付き合いいただければ幸いです。

それでは遅ればせながら、どうぞ。

二十八話 夜はお静かに

マイペースも自由人もいいんですけど、あんたいつか殺されますよ！？

【今日也】

丹優<sup>たんゆう</sup>の屋敷は、何でも書院造というやつに近いものらしい。

そういえば、中学時代の歴史の教科書でそんな単語をちらっと見た気がしたような……？（高校では世界史とってるもんで）

> i 2 8 8 0 3 | 2 7 2 7 <

まず、屋敷の玄関に入ってすぐの右手に「遠待」という一室がある。待機部屋のことだそうだ。でも普段は使っていないから、ひとまずここはパス。

廊下を進んでいけば板張りの居間に入る。大きめの衝立で直接は見えないが、土間の勝手場も隣接している。

その居間を通り抜けた縁側からでないと、各部屋には行けない。この屋敷の特徴なのか、奥へ奥へと続く造りになっているのだ。

庭をコの字型に囲うようにして、縁側沿いにある部屋は計四つ。出ですぐが丹優の薬室、使い勝手を考えてかその近くに丹優の部屋、そして張が使っている比較的大きな部屋という並びだ。

俺が今のところ使わせてもらっている寝室はと言えば、角を曲がったところにある元蔵書部屋がそうだ。

そこから更に伸びる廊下の先には小さく仕切られた医療室があるんだが、俺は覗いたことくらいしかない。だからここも今はパス。

で。

何で急に丹優の屋敷の間取りを解説しているのかと云うと。別に安土桃山時代の物件紹介がしたいんじゃないんだ俺は。

「俺は絶っつっつ対に願い下げだ！」

「何でやー。二人で長くい夜を語り合おうやー」

「気色悪いこと言っつてんじゃねえ！ てめえは納屋で十分だ一人で遊んでろ！」

何度目かの張の怒声。それを面白がってからかう成実さん。

「じゃあ、俺のところでもいいんじゃないか、成実さん」

「でも……今日也のお部屋は、少し手狭ではありませんか？」

「う、うーん、まあ……？ といっても丹優と周助は確定だし」

俺の提案に、丹優が申し訳なさそうに眉じりを下げる。

「張が折れれば万事丸く収まるじゃん」

「さつすが小夜、よう分かつとるわ！ 何ならオレと小夜の二人  
べ」

「嫌だつたら！ それに『小夜』じゃない、周助だつてば！」

「なっ！？ オレともじっちゃんともよう寝とつたやないかあああ  
ああっ！？」

「っ、何年前の話持ち出してんの！？」

「成実さん、それはちょっと……何か誤解を招く言い方だと思うん  
だけど」

周助が助け舟を出したまでにはいいけど、別の話になってないかこ  
れ……？

「だあああああっ！ 黙ってるてめえら！」

ブツリ 覆面男の頭の血管が切れる音を聞いた気がした。

「周助が折れれば万事丸く収まるだろうがっ！」

「いや、だからそれは一番問題だろ！？」

話を元に戻そう。そろそろ俺もツツコミし切れなくなってきたし。

何で急に丹優の屋敷の間取りを解説しているのか。

察しの通り、部屋割りで揉めに揉めているから、デス。

恐怖の晚餐から解放され、鬼の事件の報告も済んだ。旅を終えた  
身を各々行水で清めて居間に集まり直した後、その次に話に上がったのが「部屋割り」だったのだ。

周助と成実さんが増えた分、寝室として使っていたいつもの三部  
屋を誰にどう振り分けるかが前とまた変わってきたからだ。

丹優と周助の相部屋は何の異論もなく決まったんだが、問題は

「成実なるみと枕並べるなんぞ、天地ひっくり返つても俺はしねえからな！！」

張が、成実さんとの相部屋をこれ以上ないくらいに拒絶しまくっているのだ。

普通に考えたら、一番大きな部屋を使っている張との相部屋が無難だと思っただけだな。

となれば俺との相部屋になるんだろうけど、さっき丹優が口にした通り、確かに男二人じゃあ少し手狭感がありそうだったり。

じゃあ張を俺の部屋に移して、大部屋を俺と成実さんでという案も出たんだが、日当たりとか、張の無駄に馬鹿でかい大矛のスペースとかを考えたら、それもちょっと難しいかもしれない。

完全に詰まった。

仕舞いに、張は居間の奥で「嫌だ」「無理だ」「断る」しか口にしなくなっている。人はどうやら追い詰められすぎると、単語でしか会話できなくなるらしい。

居間の縁側に腰掛け、膝に鼻先をのせて尻尾を振る東雲あすのの頭を撫でつつ、俺は内を振り返る。

どうしてやったらいいのか戸惑いつつも、氣遣って丹優がやんわりと声をかけているところだ。

それを前に、最期まで戦い抜くと決意した兵つわもののように腕を組み居直る張。

大きな瞳を吊り上げて言い聞かせようとする周助が、「今日也も説得してよー！」と俺を呼ぶ。

その様子を、琥珀色の瞳を楽しそうに揺らし、頬杖をついて眺めている成実さん。

東雲の灰色の毛を梳き手触りを感じながら、俺はその様子に思わ

ず苦笑する。

(うん、でも……)

ただの苦笑とは、ちょっと違うかも。

俺たちを取り巻く雰囲気や居間に満ちる空気は　ここに居る俺たち五人と取りとめのない言葉だけでしか形成されていない筈なのに　何て賑やかで、心地良いんだろう。

張は「五月蠅えくらいだ」とかなんとかぼやいていたけど。

でも俺は、それが決して嫌いじゃなかった。

梗子さんと、親友の関口と、クラスメイトと、部活仲間と……俺が皆と分け合ってきたものと何ら変わらない、人が居る温かさがそこにはあった。

別に、心に留めることでもないのかもしれない。

それでも今の俺にはその光景は、目を細めるくらいに眩しい、それでいて遠く行き着けない彼方にある光のように感じられた。

429

結局、俺と成実さんで例の蔵書部屋を使うことになった。

それにしても、張の成実さんに対するこの過剰な反応ぶり……何か、嫌な思い出でもあったりするのかな？

冬の訪れがすぐそこまで迫っているせいか、陽は早々と木立の合間に傾き出していた。それに伴ってじわりじわりと下降する気温が、居間に差しかかる夕暮れの影と交じり合う。

いかんせんこの時代には電気がない。電球とかライトとかも当たり前だけどない。

だから完全に日が落ちる前にと、俺たちは今日のところは話を切り上げ、それぞれの部屋に向かい始めていた。

「今日也」

じゃあそれに倣って俺もそろそろ、と縁側へ向かう背中に、ふと柔らかな声がかかる。

「……丹優？」

振り返るとそこには、丹優が佇んでいた。

普段夜行性の張も流石に疲れているのか、とつくに自室へと引き上げていたし、周助ははしゃいだように部屋に走って行った。てつきり周助と一緒にだとはかり……。

夕闇に冴え冴えと浮かぶ金の月が、丹優のほっそりとした輪郭を照らし出しているのが見える。首元に落ちる陰影と、丹優の肌の白さが対照的だ。何故だか少しどきりとしてしまって、つつい視線が泳いでしまう。

「今回は本当にお疲れさまでした。無事で何よりです」

丹優が黒目がちの瞳で俺を見上げる。紡がれる穏やかな声音は、安堵と労りの温度を帯びている。

「ゆっくり休んで下さいね」

「ああ。ありがとう」

何だか変に気恥ずかしくて、それでも見つめ返した丹優の両の瞳。

その奥に微かな憂いの色を垣間見たと思ったのは、俺の気のせいなのだろうか。

けれどその一瞬の変化は、すぐにいつもの微笑みによって消されてしまった。ふわりと笑う、あの優しい微笑みで。

「お休みなさい」

「…………お休み」

小さく頭を下げ部屋へと退く丹優の華奢な背中を呼び止めようとして

自分が丹優に何を言おうとしているのか。

何が言えるのか。

何を言うべきなのか。

結局そのどの答えも導き出せず、俺はそのまま見送るだけになってしまった。

何の感情から来るものか分からないため息を一つ漏らす。

「ふうん」

「っえうおわあっ!?!」

突如、思いがけず俺の肩に振ってくる声。

頭上へと何の前触れなく落ちてくる鉄骨なんかよりもずっと突然だった。

お馴染みの奇声を上げ慌てて振り向けば、真っ先に視界に飛び込んでくる今晚の月と同じ光輝の色。

文字通り俺の目と鼻の先に、成実さんが立っていたのだ。

どこから沸いた。

「…………! 成実さん!」

「あー別に成実なるみでええよ。皆そう呼ぶし」

「はあ」

「んじゃ言ってみよかー」

「なる、み…………?」

「うん、それでええわ。オレも今日也つて呼んでええ?」

こういう人の内にほんと入り知らず馴染んでしまうような明るい親しみやすさは、周助と確かに似ている。流石いとこ従兄妹だ。



「はあ、それは全然………って、いつから居たんですか!？」  
「オレは奥の医療部屋に道具一式置いてきただけやけど、いつから  
ってせやなあ、『今日也』……丹優?』のあたりから」

「それって始めからじゃないっすか!？」

「まあまあ、別に聞かれて困る内容でもないやろ」

「そりゃあ、そうですね」

こんなに近くまで来られて気がつかないって……俺はよっぽど気が緩んでたのか、それとも思っている以上に物思いつてやつに耽っていたのか。ちよつと凹む。

「それにしても、ふん、へえ……」

成実さん、もとい成実は納得したようにうんうんと一人頷いている。もれなく口の端を緩めて。

「若いってええなあ。青い春とはよう言ったもんや、な?」

「な? って何がです?」

ぼんぼんと景気付けのように肩を叩かれる。

「ま、頑張りや」

「……………へ? な、何を?」

「分からのなら今はそれでええわ」

成実は悪戯つ子のように愉快気に笑いながらくると身を返し、新しく宛がわれた角の部屋へ入っていく。

しばらく俺は立ちすくむ。

木枯らしに似た風が吹きぬける。木床の冷たさがじんわりと足の裏を介して体温を奪う。寒い。

それなのに、血は上へ上へと昇ってきたように顔に熱が集中していた。絶対今俺の顔は茹でダコよろしく真っ赤に違いない。

それを自覚することによってようやく俺は我に返り、成実の後を追うのだった。

「成実、さっきの話　　って早っ!？」

縁側の角にある薄い襖を開ければ、今やなじんだ一室に俺を迎え入れてくれる。俺たちがいない間に丹優がこまめに掃除してくれたのか、埃っぽさは微塵も感じられなかった。

そんな寝室には、結った髪を解き寝巻きの長襦袢で、寝る準備万端の同室者の姿が既にある。限られた面積の中に布団をバランス良く配置しているところだ。

早着替えの魔術師かあんたは。

「っと、よし完成。じゃあオレこっちー!」

成実は敷き終わるや否や、左側（俺から見てのね）の布団に飛び込んだ。既にその敷布の脇に成実の持ち物らしい木刀（何で木刀？）と着物が置いてあったから、最早確信犯だろう。

まるで修学旅行ではしゃぐ中学生みたいなノリだ。この人張と同一年らしいんだけど一応。

その無邪気な様子に知らず笑いを誘われながら、俺はとりあえず部屋の奥に旅荷物を一通り落ち着ける。その後で脇差「心任」を抜いて近くに置き、続いて小太刀「鉄東矢」を腰帯から手の中に移動させる。

以前これを抜刀した時には、手の平がガラス片を握ったみたいな有様になってしまった。でも、最近気づいたんだが、この鞘の部分を持って大丈夫らしい。ようするに柄を掴んで使おうとしなればいいのか？

「……ん？」

そこでようやく、部屋の奥のある物に気がつく。  
旅に出る前にはなかった物だ。

箱だ。少し年季の入った木の箱。見覚えのあるそれ。

これは 前に二度、張と丹優が持っていた……刀箱だ。鉄東矢  
の。てつとうし

不思議に思いながらその前に座り、空いた片手で蓋を開ける。

と、その矢先に、鉄東矢を丹優に返すのをすっかり忘れていたことを思い出す。しまったと焦って腰を浮かしかけるが、設えられた刀置きの上に重なる和紙の存在で、その焦燥は一時沈められた。和紙というか、何かの書きつけのようだ。

かざりと乾いた音を立て開いた紙面には、すっきりとした綺麗な字で（昔にありがちな繋がり文字じゃないのは俺に対する配慮だろうか？）こうあった。

『これはあなたがお持ち下さい。きつとあなたを守ってくれます』

これを書いたのが誰であるのか、俺にはすぐに分かった。

「……………丹優」

刀箱の前でじつと静止している俺に、視界の端の布団の上に胡坐をかいている成実が一言。

「貰ったとき」

俺は咄嗟に成実を見返す。

「鉄東矢やる？ そのまま貰ったとき」

この人はその書きつけの内容を見てはいない筈なのに、全てを知っている風な口ぶりだ。あたかも困惑し判断しかねている俺の内心を読み取ったかのような。

「走真以外持ったら大怪我するし、鬼斬るにも相当な威力で危ない

し、持つんは大変かもしれへんけど」

「いや、そういうんじゃない……これって、走真そつまって人の形見なんだろ？ それに丹優も大事そうにして」

隊と直接関係のなかった俺でも、丹優や張の話聞いて、この小太刀がどうい物なのかくらい分かってるつもりだ。

先代鬼打隊隊長の息子。丹優の護衛。そして鬼打隊の里が大名達に滅ぼされた時に戦死したという、宿地走真の遺品……。

それをずっと大切に持っている丹優。この刀を見る時の、あの悲しそうな、寂しそうな表情。

それなのに俺なんか譲り受けてしまったら、酷く不釣合だし、何より罰当たりだろ？

「うん、そうやなあ」

成実は俺が口ごもるのをちらっと横目で見て、それから暗い天井を仰ぐ。

「オレはあの日、走真や丹優の側にはおらんかったから詳しくは知らんけど」

「その鉄東矢は、走真そつまの最期の時まで付き従って、丹優を守ってたって聞いたとる」

「……」

「鬼殺しでも人斬りのためでもない、丹優を守るためにこの刀を使うって言った主の言葉通りにな」

「だったら……」

「だからこそや」

「『この刀を今日也の側に』、『今度は今日也を守ってほしい』って丹優は願っるとるんやろ」

「……」

「せやから、丹優のこと想うんなら遠慮せんで。今日也、君が持ち」  
目線を天井の木目から俺へと移した成実の微笑も口調も、さつき  
までののんびりしたものと何ら変わりはない。

それでもその一言一言が、静かに、諭すように、俺の胸の中に収  
まっっていく。

もう一度、俺は手の中の鉄東也に視線を落とす。

障子越しに透ける月の光に、きらりと銀の十字鏢が反射している。  
その鏢にはめ込まれた深い青色の石が、達観しながらも俺を真っ直  
ぐに見つめている、そんな気がした。

「ま、色々言うたけど、そんな深<sup>ふこ</sup>う考えんと。実際のところ『お守り』  
のお裾分けくらいに思っとき」

手を上下にひらひらとさせ、敢えて軽い調子を選んだかのような  
成実の態度に肩の力が抜け、俺はフツと僅かに笑みを漏らした。

（ ありがとう、丹優…… ）

俺は小さく頷き、開け放したままだった木箱の中に鉄東矢をそつ  
と納め、丁寧に蓋を戻した。

「で、話は変わるんやけど」

俺が刀箱の蓋を閉め切った頃合を見計らい、成実が俺の元へとに  
じり寄ってくる。さつきまでの真面目さはどこへやら、その目には  
今や悪だくみを思いついた子供の色が浮かんでいる。

「これとこれ、どっちがええ？」

「……は？」

俺の目の前に突き出された二つの代物に、俺は無意識に聞き返していた。

だって、いつどこから出してきたのか、成実の右手には習字用の筆、左手には紙やすりが握られているんだから。

筆と、やすり……？ 何で……？

「せやから、筆とやすり、どっちがええ？」

「どっちって、何ですか……？」

「いや、旅疲れで今日はあれも珍しく熟睡してると思うんや。その機を見逃さずにはおれんやろ」

一体何の話をしてるんデスカ、この人。

脈絡がなさすぎて、おまけに雰囲気の変化が急激すぎて、俺は完全についていけない。

けど、とりあえず何か言っとかないと解放してもらえなさそうだから、どっちかというと親しみのある筆をおすすめと指差す。

「じゃあ、これで？」

「了解、こっちなー。なかなか王道で攻めるな今日也は」

成実はそういうと、急にがばっと立ち上がり、そそくさと部屋を出て行くとする。少し話し込んでいたせいか、行灯も灯していない辺りはすっかり夜の闇に覆われていた。

「えっ、どこ行くんですか!？」

「どっかって、今日也これが良いって言うたやん」

俺の問いかけにきよんとした幼児のような顔つきで、成実がこちらを振り返る。その掲げられた手には、さっきの筆。

「それ、どうするんです？」

「決まってるやろ」

そう言って、ニカッと白い歯を覗かせ、今日見せた中でも一番の

爽やかな笑顔が向けられる。

「今からこの筆で、寝てる張の顔に落書きしに行くんや」

……………ハイ？

「起きたらどんな反応するか、いや、しばらく気づかんかもなあ張のことやし。ククク……………」

「……………はあああああつ!?!?」

「ちなみに今日也がこつちの紙やすり選んでたら、これで張の牙を削るつもりやったんやけ」

「いや、ちょっ、マジであんた死にたいんっすか!?!?」

張があんなに成実のことを嫌い、相部屋を頑なに拒んでいた理由が、今分かった気がした。

二十八話 夜はお静かに（後書き）

今日也は意識はしているようですが、自覚にはいたっていませんね  
まだ（ ） 照

そして出会ってすぐにそれを見抜いた成実さん（笑）一番奴が恋愛  
事情には鋭いでしょう多分。

ちなみにこつそり設定ですが、成実が左側の布団を選んだのにはち  
やんと理由が。

寝た時に成実の左手方向には今日也の布団がある＋右方向は布団も  
ないから空いている＋成実は右利き

で、いつでも脇の木刀が取れるように、とのこと……（ ）  
（ ）

さて、静かなのほほんとしたお話が続きましたが、日常編の中でも  
そろそろ少しアクティブにしていこうと思います。

それではまた次回お会いいたしましょう^^



二十九話（前） 夢の続き - 赤黒 - （前書き）

タイトルの副題は「赤黒」で「せつこく」と読みます。内容そのままの副題ではありませんが；

内容の印象を残すこととレイアウト色のイメージを考慮して、短くはありますが敢えてここで切りました。

後編も同時アップしておりますので、宜しければ続けてどうぞ。

二十九話(前) 夢の続き - 赤黒 -

俺の世界の全て。

(ここは、どこだ……?)

世界が赤一色に塗り潰された。  
真っ赤な、世界。

燃え上がる炎の海。

辺り一面を焦がす熱気が肌をなぶる。

怒号と悲鳴。無数の剣の音。  
そう遠くない所から聞こえている。

火と黒煙に侵された赤焼けの空。

むせ返るような鉄錆の臭い。  
吹き付ける血の風。

(またいつもの、あの夢か……?)

広がる赤黒い血溜り。肌を伝って滴り、地面を染めていく。  
纏わりつく生温かさ、治まらない寒気。  
己の喘鳴。感覚が消失していく五体。

ごめん……。

最後の最後で、約束、守れなくて……。

(約束?)

(何のことを言ってるんだ?)

霞んで、暗く狭まっていく視界。

その時、頬をそつと何かが撫でた。

目をこらす。残された力全てを振り絞ってようやく動かせたのは、  
結局片手だけ。

微かに伸ばした手のひらに、ひとひらの純白の雪の欠片が、ふわ  
りと舞い降りた。

ああ、そうか……。初雪、か。

声が出ているのかどうかもう定かではない。  
それでも、そつと呟いた。

「  
丹優たんゆう」

最期に、君が見ていた世界の一片に、触れることができた気がしたんだ……。

(丹優？ 何で丹優の名前を……？)

今度は一体何だっというんだ。

気がつけば、あの真っ赤な世界を他人事のように傍観して望む、ぼっかりと孤立した一面の黒の世界に俺は一人佇んでいた。

切り離されたあの赤い空間の中で、焦土の上に倒れている誰かが、仰いだ空へと力なく手を伸ばしているのが見える。その手はやがて事切れたように真下に落ち、それきり動かなくなってしまったけれど。

あ、と俺が声を上げ駆け寄ろうとするのを阻むかのように、足元でカチャンと何かが金属質の音を立てた。

不思議に思い拾い上げる。銀の十字鏢、はめ込まれた深い青の石、日本刀と呼ぶには随分と小形な太刀……それは

「これって、鉄東矢……？」

鉄東矢だ。この小太刀を見間違っ箆もない。

でも、どうしてこれがこんなところに……？

その時、かざした抜き身の刀身に青白い不気味な輝きが映り込む。「……っ！」

反射的に顔を上げ身構れば、沈殿した闇にゆっくりと浮かび上がるように、それが俺の前に現れていた。

くたびれたパーカーとズボンを着た、一見ホームレスともとれる

小柄な男。目深に被っていたフードがはらりと落ちる。あらわになつた顔は血の気がなく、頬はこけ目は落ち窪んでいて、生氣というものが全く感じられない。

何よりも目を引いたのは、不気味な程に光るあの青白い瞳だ。その両眼だけが、唯一の荒々しい生命力を主張している。

そいつはニツと笑う。否、笑つたのではない。その口から覗くのは剥いた牙だ。人間の犬歯というよりは、肉食獣のそれを連想させる。

人であつて人ではないモノ。まさしく、「化け物」と言うにふさわしい相貌だつた。

こいつは、前に会つた……！

俺のいた現代せかいで会つた

鬼！？

そいつはふらふらと覚束ない足取りながらも、俺の方ににじり寄ってくる。力無く開かれた口からは、ノイズじみた耳障りで無機質な声が発せられる。

『ドウシタ？ 斬り殺セヨ？』

頭の中で警鐘が鳴り響く。本能が危険を知らせているのに、焦りと相反して体は硬直してしまつていた。足は地面に縫い付けられたかのように微動だにできない。

手に握り締めた鉄東矢を振るうことさえ、叶わなかった。

『俺ヲ斬ルカモ武器モ、ヲ前二八在ルノダロウ？』

そうこうしているうちにも、それは近づいてくる。まるで、恰好の獲物に狙いをつけた猛禽類のような目つきで。

その眼から視線を逸らせない。仄青く発光するその眼から。

『ソレナノ二何ヲ躊躇ッテイル？』  
『何故俺ヲ殺サナイ？』

奴は枯れ木のような両手を伸ばす。パーカーの袖口から覗くその指先に生える爪もまた鋭利で、手全体は赤い結晶のようなもので覆われている。硬化した鬼の血だ。

『アア』

『ソレトモ……………殺セナイノカ？』

奴は一度体を引く動作を見せ……………次の瞬間

『殺セナイナラ、殺サレルダケダ！』

何の前触れもなく俺に飛び掛ってくる！

「……………！？」

それまでの緩慢な動きは消えた。突進してきたのではない。それこそ一足飛びで俺の元に飛び込んできたのだ。

いや、違う。

奴は俺の真横ぎりぎりを、嘲笑うかのごとく通り過ぎていく。

思考が追いつく間もなく、俺は咄嗟に鬼が馳せていった後を振り返る。

その先に在ったものが視界に入り、驚愕と動揺に目を瞠ることになる。

いつもの穏やかな様子の梗子さん。

ずっと前に死んだ筈の父さん。

ふざけてじゃれ合う友人ら。  
その輪の真ん中で笑う関口。  
そして、こちらを見返り優しく微笑む丹優……。

皆の姿が、そこにはあった。

何故。

どうして。

皆鬼の姿が見えていないのか、危機も恐怖も何一つ存在していないかのようにそこに居続けている。

「やめろっ、……っ!?!」

鬼の本当の獲物<sup>ねらひ</sup>を悟り、俺はすぐに奴の後を追いつがるうとする。だが、それは不可能だった。

俺の体は、指の先から足の先に至るまで、どこもかしこも金縛りにあったかのようにその場から動けなくなっていたからだ。唯一許されるのは、この声を張り上げることだけ。けど、俺の声が聞こえているのかどうかさえ定かじゃなかった。

その牙が、爪が、飢えた視線が、全てが俺の大切な人たちに向けられている。

肌を無数に突き刺すような、溢れるばかりの野生の殺意。  
凶器と狂気がすぐそこまで迫っている。

その一連の動きは、きつと目にも留まらぬ速さなのだろう。だが俺には全てがスローモーションのように感じられていた。

よく研がれたナイフのような爪が、一番手近にいた丹優の頭上へ

と振り下ろされる。

声を限りに叫んでも叫んでも叫んでも叫んでも叫んでも

それが止められることはない。



二十九話(前) 夢の続き - 赤黒 - (後書き)

前編は意味不明の夢がメインです。ちょっと懐かしい第一話のシーンもあつたり。

この夢の意味するところが明らかになるのは、もう少し先になるかもです…… ( - - )

(強いて言うなら、殺したことの無い今日世の心理と、過去と現在の繋がりを示唆していると言いますか……ごによごによ)

二十九話（後） 夢の続き ・ 碧白 ・ （前書き）

タイトルの副題「碧白」は「へきはく」と読みます。

『夢の続き 赤黒』の後半部分にあたるお話ですので、宜しければそちらの前話と合わせてどうぞ。

確かにこの世界で、俺は生きている。

【今日也】

そこで俺は目を見開き、飛び起きる。

（今、のは……）

乱れた息はそう簡単には収まってくれない。心臓は暴れ出す程にドクドクと脈打っていて、その鼓動に呼応するかのように俺の体も知らず小刻みに震えていた。

昨日の夜は俺には寒いくらいだったのに、今や寝巻きも布団も汗で濡れてびっしょりだ。額にひつつく前髪、背中を伝う冷や汗、体の奥に未だ燻る不気味な熱……そのどれもが不快で不快でたまらない。

(今のは、夢……?)

吐くばかりだった呼吸を何とか整えながら、ゆっくりと辺りに視線を巡らせる。

あの夢の中の赤と黒がぼやけ、退色し、そして焦点の定まらない遠景にゆっくりとピントを合わせていくかのようになり、次第に俺の感覚や意識も回帰し落ち着いていく。

それでようやく、宛がわれた例の和室で俺は眠っていたのだと思い出せる余裕も戻ってきた。

薄い障子を透かして柔らかい外光が差し込んでいて、遠く鳥の囀りも聞こえてくる。ここには時計がないから正確には分からないけど、どうやらもう朝のようだ。

精神に直接圧し掛かっているような疲れからなのか、そこから現実へと解き放たれた安堵からなのか、俺は一度深いため息をつく。

さっきの夢……。

前にも似たようなのを見たことがあるけど、今回はそれとは大分違った。

赤い世界。黒い空間。誰かの手。鉄東矢。そして例の鬼。久しぶりに垣間見た現在と、それから丹優……。

夢がどんどん鮮明でリアルになってきている、なんて俺の考えすぎなのだろうか。何にしても、夢見が最悪なのは間違いない。

どんどん沈みかける重い気持ちを掬い上げるかのように、その時ふと、梗子さんの言葉が頭の中に浮かんだ。父さんが死んで、色々あって俺が荒れかけていた時に言った、あの言葉が。

(今日也)

(どんなに苦しくても、悲しくても、怖くても)

(前に進むことを、その気持ちを止めてしまっただけは駄目よ)

(止めたらきつと、そこで何かが終わっちゃうわ)

考え込み過ぎたってどうしようもない、か。

この悪夢に意味があるのか、それとも全く意味のないものなのか……天才でも超能力者でもない、訳も分からず四百年前の世界に飛ばされた俺には知る由もない。

ただ、それに囚われ立ち止まっていても何の解決にもならないのだけは確かだ。夢のことだけじゃない。元の世界に戻る手立ても、俺がここにやって来た理由<sup>わけ</sup>も、俺自身のことも。ならば

「とにかく出来るだけ前に進んでいっただけ、だよな」

そうすれば、今すぐには無理でも、いつかきつと……。

俺は上目の端に入る濡れた髪をかき上げるようにして、少しの間だけ顔を覆う。でもいつまでもそうしてはられないから、その両手で頬を軽く叩いて、よしと小さく気合いを入れて布団から腰を上げる。汗ばんだ肌が熱の籠もった布団の外に晒されて、ひやりと冷たい。

基本、ここでの食事作りは当番制だ。今朝は俺と丹優が朝食当番だった筈。人数が増えて五人になった今、いくら丹優でも一人での準備は大変だろう。

手早く着物に着替え終わり、ちよつと顔を洗いにだけ行ってそれから勝手場に、と思っていた時

「ん？」

朝一番の清澄な空気を台無しにしたと言っても過言ではない、ドタバタと騒がしい足音が響き渡る。

何だどうしたと思う間もなく、縁側を走り抜けてきたのか勢いそのままに俺の部屋の障子が開け放たれる。間髪入れずに中に飛び込んで来る姿が一つ。

「……………！ どうしたんっすか成実<sup>なるみ</sup>!？」

「なるみ」こと成実なりさねだった。

きらきら金色に揺れる癖っ毛の総髪だから、その色だけですぐに誰か見当はついた。人のこと言える立場じゃないけどさ。

昨日の話し合いで俺と成実なりさねは相部屋になってるんだけど、そういえば俺が起きた時にはもう部屋にはいなかったな。

「あ、お早うさん」

「おはようございます」

「それはそうと今日也、ちょい匿かくってや。どっか隠かくられるええとこない？」

「隠れるって、何ですか？」

「いやちよっと……………どしたんや今日也、顔色悪いで？」

「え？ いや、気のせいじゃないですか？」

ついさっきまでの俺の心情を言い当てられたみたいで、内心動揺しながらも誤魔化そうとした。その矢先。

「んだこりゃあああああああつ！？」

聞き慣れた男の叫び声が屋敷内に大音量で木霊する。某刑事ドラマばりの台詞で怒声を上げているのは、十中八九張じゅうちゅうはちゅうじゅうだろう。

その絶叫とは対照的に、俺たちの部屋には一時の静寂じやうじやくが満ちる。

「……………」

「……………」

「成実サン」

「何や？」

「…………ガチで筆で落書きしたんですか？」

「張の顔面にな」

差し向かう成実の、最高のどや顔。

「……………」

「……………」

「……………」  
「……………」  
「……って、何やってるんですかあんたっ!?!」  
「ははは、つい」  
「『つい』って……!」

焦る俺とは正反対に成実は愉快そうに笑い声を上げる。

昨晩片手に筆（張の顔落書き用）と紙やすり（張の牙削り用）を持って悪戯をしようとしていた成実だったが、俺が必死で説得して考え直してくれたかと思っていたのに。どうやらただ夜から早朝に悪戯が持ち越されただけのようなのだ。

何で自ら死亡フラグを立てる。

せつかく俺が回収したのに。

スライディング土下座とかジャンピング土下座で、果たして張は許してくれるだろうか。下手したら……………最大の謝罪方法の切腹、とか？

いやいやいや俺にはまだ腹必要だから、色々決意した手前!

そうこうしていると、朝一番の清澄な空気を台無しにしたと言っても過言ではない、ドタバタと騒がしい足音が響き渡る。ちなみにパートツ―。

そしてやはり同じように、今度は俺の部屋に周助（はつすけ）が飛び込んできた。寝巻きじゃなくてちゃんと着物も着ているし早朝を諸共しない相変わらずの軽いフットワークだけど、まだ櫛を入れていないのか首元にかかる黒茶色の髪はどこどころ寝癖で跳ねている。

「今日也、ちよつと匿って!」

アレ、これと同じ台詞をつい今しがた聞いた気がするぞ。

「周助！」

「おーどうしたんや小夜まで」

「小夜じゃない、周助だってば！」

お馴染みのやり取りを成実と交わし、周助は障子の外の気配を気にしながら俺たちの輪の中に加わる。

「あの落書き、成実がやったんでしょまた」

周助は迷惑そうに口を尖らせその大きな瞳を吊り上げて、今に至る経緯を手短に説明してくれた。

「さつき廊下で会ってね、我慢できなくて大笑いしちゃったら追いかけられたんだから、怒った張に」

「当たり前だろ」

至極尤もなツツコミを俺は入れる。

「また」ってことは、結構これは日常茶飯事なわけか？

というかお二人さん、この部屋は緊急避難所でも駆け込み寺でもないんだよ。何だこの無駄なシンクロ率は。

俺まで報復しに来る張のとばっちり喰うだろ！？

案の定、すぐに成実と周助の居場所は張に割れてしまった。

その落書きされた顔を目にし堪え切れず指を指して大爆笑をした俺も、張の怒りに巻き込まれる羽目になったのは言うまでもない。

『成実、勝手場に入るべからず』

恐らく周助が書いたんだろう。少し丸みのある筆字が踊る半紙が、



勝手場の前に立てられた衝立に目立つように貼られている。

書いた本人はというと居間の囲炉裏の前に座って、朝飯を運ぶ手伝いのお呼びがかかるのを待っている。朝陽のせいで体調が思わしくないのか、それとも今朝方の被害にまだ機嫌が悪いのか、押し黙って居間の奥に腰を下ろしている張も一緒だ。

注意書きの内容にあまりにも同意しすぎて俺は苦笑を漏らし、襷を少しまごつきながら掛けて勝手場へと入る。薪の焼ける匂いと米（多分ヒエ米）の炊ける匂いとが混ざり合い、辺りを一杯に満たしていた。火を使っているためか、ここは他より温かい。

土間用の下駄を引つ掛けてみると、上流から汲んできたのだろう水を鍋で沸騰させていた丹優がこちらを振り返り、にっこりと微笑む。どうやら味噌汁を作ろうとしているみたいだ。

「お早うございます、今日也」

「おはよう。ごめん、ちよつと寝坊した」

「いいえ、良くお休みになれましたか？」

「うん、ありがとう。えつと、これ味噌汁の具にするんだよな？」

「ええ。じゃあ私はご飯の火加減を見るので、これを切っておいてもらえますか？」

「いいよ」

「……今日也？」

そう返して、とりあえず手を一度洗おうと水甕を取りかけた俺を止めたのは、意外にも丹優だった。

ん？ と俺は返事と同時に顔を上げる。結びついた視線の先の丹優の表情は、何故だか心配そうなものへと変わっていた。黒目がちの瞳の色は一層深さを増している。

「丹優？」

「……今日也、どこか具合が悪いんですか？」

「……いいや？」

「でも、顔色があまり良くないですよ？」

「……………へ？」

「オレもさっき言っただんやでー」

タイミングを見計らったかのように、勝手場の庭側の入り口から成実が俺たちを覗き込む。張にキレられたことも既にリセットされているようで、出入り口に腕を組んでもたれかかりあっけらかんとした調子だ。それ以上こっちに入っ来て来ないのは、大方衝立の張り紙のせいだろう。

そう言えば成実にも「顔色が悪い」って言われた気が…………。

「氣い遣わんと。どこがどう具合悪いんや？」

何かよく分からないうちに心配され始めているこの状況に、水甕片手に俺は慌てて否定する。

「別にそんなんじゃないって。俺風邪とか病気とか、かかったことないし」

この時代、風邪こじらせて死ぬって珍しいことじゃないからなんだろうけど…………俺は単に、変な夢見ただけだし…………。

そんな独り言を思い浮かべれば、褪せかけていたあの夢と、夢の中の丹優の姿が脳裏をよぎった。それがまた少しだけ、忍び寄る不安の影を心に差す。

少し眉じりを下げ気遣うように、でも安心させるように、丹優が穏やかに口元を持ち上げる。

「念のため、後で何かお薬を作りますね」

「うん、飲んどき。後々医者オレが活躍しすぎるのも考えもんやからな」

氷の膜のように冷たく澄んだ空を仰ぎながら、ぼんやりと「もう小雪こゆきの暦しずくやなあ」と呟いた後で、成実も丹優に同意を示した。

結局、薬師と医者二人を前に誤魔化すも何も上手くいく筈がないのだ。

それにしても、そんなに今日の俺酷い顔してんのか？

たかが夢で………何か微妙な心境だ。

その後、丹優に調合してもらった漢方みたいな薬を飲んで、大分気分は良くなった。

旅の疲れが癒え切っていなかったのか、思っているよりも熟睡できていなかったのか、体は重かったし頭痛もあったのは事実だ。健康体を自負している俺からすれば、珍しいことだと思う。

それにしても、そういったことをちょっと聞いただけで、的確にその症状に合う薬を作る丹優はやっぱり凄い。

雲の切れ間から庭先へと淡い日だまりが落ちてきた昼前。

朝飯も食べ終わり（ちなみにこの時代一日二食が基本で昼飯は食べない）、俺たちは暇を持って余し始めていた。昨日今日まで旅と戦闘とかしていただけに、ゆっくりする時間が取れると逆に何をしたら良いのか分からなくなるのは、皆同じようだ。

というわけで。

薬室で薬草の整理をしている丹優と、気がつけばふらりとどこかへ行ってしまった成実を除く俺たちが、今何をしているのかという

と  
力チヤ。

「あー！ 倒れちゃった……」  
「じゃあ俺の番な」

ガチャ。

「……つと、はい次、張だぞ」  
「おう」

完全に遊んでます。将棋崩しで。

「将棋崩し」ってのは、文字通り将棋の盤と駒を使った遊戯だ。将棋の駒を小さな箱に入れて盤の上で素早くひっくり返し引き上げれば、駒が山のように詰まれた形になる。

順番に、その不規則に盛られた駒を指一本で盤の外まで滑らせ（持ち上げるのは禁止）、自分の手持ちの駒数を増やしていくのだ。でも、動かす時に駒を倒したり崩したりして音を立ててはいけない。そうなった時点で、次の人のターンになる。

これを駒が全部なくなるまでやり、最後に他よりも多く駒を獲得した人が勝利、というルールだ。

半時程前に、暇になり過ぎて辺りを散策していた周助が、どこの部屋からか将棋の盤と駒を見つけてきたのが始まりだった。ちゃっかり丹優に使う許可ももらってきてたし。

ところが、張は将棋のルールどころか駒の文字も読めないし、元々将棋って二人でやるもんだしな……。

そんなわけで、張にもできるような比較的シンプルな将棋崩しをすることになったのだ（このことは張自身には話してないが）。

これが思いがけず、結構白熱したりしている。よく分かった、皆揃いも揃って負けず嫌いなのは。

「オイ、てめえ。何で動かし辛くしやがんだ」

「そういう遊びだから」

「うぜえ小細工すんじゃない」

「いや、これも立派な作戦なんだよ。『水滴石を穿つ』っていうか  
さ」

「てめえじゃ豆腐にも穿てねえよ……周助何だその構えは」

「べつ、別にー？」

「明らかに揺らそうとしてただる」

「気のせいじゃないー？ うりゃっ隙あり！」

「何で俺に手刀！？ ブルータスお前もか！？」

「オラ、黙れ。動かすぞ」

「「はーい」」

無骨な張の人差し指が、将棋盤の上に伸ばされる。散々騒いでいた周助もツツコミを入れていた俺も、自分の番でもないのにこんな場面ではつい息を詰めてしまう。

居間を、一瞬の沈黙と緊張が支配する。そして

「みんなあああああああつ！！！！！！」

遠慮もなく勢いよく居間に走り込んでくる成実。

ガチャンツガラガラガラ……。

なし崩しに崩壊する駒の山。

「「「あー！！！！！！つ！？」」」

「……」  
「……」  
「……」  
「……」  
「はい、張の負けー！」  
「じゃあ罰ゲームな」  
「はあっ！？ 今のは無しだろ！ てめえ成実、やりやがったな！？」

時間が停止したかのような膠着状態が再び動き出す。  
手放して喜ぶ俺と周助。逆に、張は怒りの矛先をたった今部屋に飛び込んで来てその振動でゲームをパーにした金髪の青年へと向けている。

「あー、ごめんごめん」  
絶対に悪いと思っていない。むしろ楽しんでいるように成実はその琥珀色の瞳を細め、わくわくしたような笑顔で言い放った。まるで次の日の遊園地を楽しみにして眠れない子供みたいに。

「そういえば成実、どこ行ってたんですか今まで？」  
「ん？ ああ、ちよつとな」  
「何かうちらに用ー？」  
「馬鹿か聞くんじゃねえ。どうせ祿でもねえことだろ」

「それなんやけど、今からちよつとあることやるうかなって思いついてなー」  
「俺はしねえぞ」  
「やるってー？」  
「何やるんですか？」

「鬼打隊の隊員が集まっとなるんやから、決まっとなるやないか」

「鬼打隊恒例紅白対戦やつ!!」

二十九話（後） 夢の続き - 碧白 - （後書き）

今日也と丹優の朝ごはん作りの共同作業。

「新婚かよっ!?!」と書いていて思ってしまったw  
途中から味噌汁放置されてるし（笑）

さてさて、そろそろ「鬼打隊恒例紅白対戦」イベントに突入したい  
と思います。

ご興味やお時間がありましたら、次回も覗きに来てやって下さい  
ませ。それではノシ



三十話 鬼打隊恒例紅白対戦 く組分け（前書き）

本日10月13日で、『シノキズ - 織豊鬼伝 - 』が一周年を迎えました！

> i 3 2 8 2 1 — 2 7 2 7 <

ひとえに拙作を拝読してくださった皆様のおかげと、感謝と感動で胸いっぱいです。

拙い文章だったり、執筆が遅かったりと色々ありますが、これからもm+y、そして今日也たちを温かく見守っていただければ幸いです。

前文が長くなってしまいました；

それでは、第三十話『鬼打隊恒例紅白対戦 く組分け』、対戦始めるにあたって何だかうだうだしておりますが、どうぞ。

三十話 鬼打隊恒例紅白対戦 く組分け

気がつけばとっくに小雪こゆきの暦しに入っとなるな……。  
となると、そろそろ

もう結構経つんやな、あの日から。  
なあ？ ……ゆき野？

【今日也】

（ 今からちよつとあることやるうかなくなって思いついてなー）  
（ 鬼打隊の隊員が集まっとなるんやから、決まっとなるやないか）

（ 『鬼打隊恒例紅白対戦』 やっ！ ）

そんな件で、あれよこれよという間に庭先にまで集められていた。<sup>くだら</sup>召集をかけた当人の成実を前に、俺、周助、張はとりあえず立ち並んでいる。何故か各自刀も持ってこさせられていたり。薬の整理を終えた丹優も、寄り添う東雲の背を撫でながら縁側に腰掛け、俺たちを見守っている。

屋根の出の更に向こうに望む空は今ひとつ冴えない。痛い程に澄んだ寒風に、俺は思わず首をすくめた。

京都、もとい山城は、沖縄と違って冬は随分冷え込むと聞く。元々寒がりの俺には初冬のこの時点で既に堪えていたりする。風邪こそ引きはしないけど。

とはいえ背に腹は代えられず、俺はまさかのシャツとズボンに、その上から着物を羽織るといふ合わせ技に打って出ている。ちなみに、丹優以外の全員から「変な格好」と称された。

今に見てる。

明治時代とかまでいったらこれが流行の最先端に行くからな！

そんなどうでもいいことに思考の半分を流されながらも、俺は成実の説明に何とか耳を傾けていた。

「鬼打隊恒例紅白対戦」。

文字通り、鬼打隊の隊員たちを紅と白の二つの組に分けて対戦する刀試合のことだ。専ら屋外、それも山中で行われたらしいから、野試合にも似通っているのかもしれない。

ルールは至って簡単。

敵を地面に倒れ伏せさせる、または刀を取り上げて追い詰めるつまり戦闘を続行不能にさせ、先に敵全員を倒した組が勝利となる。その間、何をやっても構わない。

今回は皆初心者コースってことで（ハンデで俺に合わせてくれた）、真剣は禁止。刀は鞘に納めたままで使う。

プラス、全員鳴子を付けるといふ条件も追加された。

この時代、鳴子は田畑に入ってくる鳥獣をその音で追い払うための道具だったらしい。俺の中ではすっかり「よさこい」用のコンパクト木製打楽器のイメージが確立していたんだが……。

てか初心者コースで何で鳴子？

確かにシンプルなルールではあるけど……把握したようなしてないような俺はさておき、逆にこの紅白対戦には馴染みが深いと見える周助と張の反応は対照的だった。

「久しぶりだなあ。これってさあ」

周助は俄然乗る気だ。

「じつちゃんが遊びで作ったのを隊長が気に入って採用しただけなのに、いつの間にか『恒例』になっちゃっててね」

周助は黒茶の髪と襟巻きを風に揺らし、夏の忘れられない楽しい出来事を語る子供のような表情で俺に笑いかける。ちらつと八重歯が見えた。

「へえ……」

先代副隊長「右手周助」、そして周助と成実の伯父　周助の言っている「じつちゃん」とはこの人のことだろう。

そうなると「隊長」ってのは、先代の宿地しゅくち和真隊長のことか。走真の父親で、歴代の鬼打隊隊長の中でも一、二を争う聡明さと人望を誇っていたとされる人物だったと、丹優が以前話してくれたことを思い出す。

うん、でも。

思いつきの産物でそんなゲーム作ったり採用したり……案外お茶目な人たちだったのかもしれない。

目に見えてわくわくしている周助とは反対に、張は明らかに不審がっているようだ。

俺としても剣の鍛錬は絶対にやっておかなければいけない。皆と実戦に近い形で手合わせしてもらえるのなら願ってもない話だ。

それは重々承知なんだが、乗る気とか不審とかとはまた別の次元に今俺はいる。

賛成も反対の声も出せず身を強張らせる俺に、後ろから丹優が「今日也、大丈夫ですか?」と心配げに声をかける。重ねて言うが、俺は寒さにとことん弱い。生まれてから今までずっと沖縄で暮らしていれば、自然とそうなるのだ。

後ろ手に挙げた右の握り拳の親指を立て、意地の「大丈夫」を丹優に示す。サムアップ……あ、この時代じゃあ意味伝わらないか。

「紅白対戦だア?」

張が覆面の奥の瞳を吊り上げ、解せないと言わんばかりの苛立った声を上げた。

「んな面倒な事やってられっか。大体唐突に何だっつんだ」

それに対し、成実は琥珀色の瞳を僅かに翳らせ、不意に人差し指をすつと上に示す。それだけだった。何も言わない。

「……?」

つられてその方向を見上げれば、さっきと変わらない曇り空が広がっているだけだ。煙霧がかかったような、くすんだ乳白色の空が。もしかすると雪でも降るのかもしれない、そうなれば初雪かな、くらいにしか俺は思わなかった。

だが張はそれで、成実がこの対戦を急に始めようと言いだしたいきさつを察したらしく、「ああ……」と思い当たったように小さく呟いた。

それで察したのか、端から分かっていたのかは知る由もないが、

他の皆も同様だった。

呼応するかのように、辺りに一瞬静寂が落ちる。まるで、皆同じ時間の中に佇みながら、俺を取り残して心だけ違う時間を移ろっているかのように。ここではないどこか遠くへ想いを巡らせているかのように。

……………ん？ どうした？

分かってないの、俺だけか……………？

「ま、せつかくやるんやし？」

成実が沈黙の場を取り成して、その金の髪色に負けなくらいの明るい声音で話を再開する。

「勝った組の人には何でも好きな褒美ってのはどうや？ ちなみにオレは、しばらく張がオレからの悪戯のあれやこれを甘んじて受けるうちゅう褒美な！」

それは褒美か……………？ ただの公然の苛めじゃ……………？

「じゃあ俺が勝ったら、成実、甘んじて俺の火竜を受ける てめえのド頭でな」

そして完全に張のスイッチ入ったあああああつ！？

副音声で「成実ブツ殺す」とか聞こえたぞ！？

「うちは、今日也のあれ！ 『けいたい』が欲しい！」

「えー！？ 携帯を！？」

携帯のカメラ機能をいたく気に入っていた周助がしばらくあれを弄らなくなったとは思っていたけど、こんな魂胆があったとは。あんたは追いはぎデス力。

胸中一人ツツコミで捌く俺に、成実がぼんぼんと肩を叩いてくる。季節違いの春の陽光が差すような笑みを一つ浮かべて。

「まあまあ、今日也にはオレの温い羽織あげるから。寒いのが苦手みたいやし。それによく考えてみ。もし首尾良く組が分かれたら」「口端がゆるりと持ち上げられ、その笑顔に驚く程自然に悪戯心と悪巧み顔が上乘せされる。

「あの俺様な張を、対戦を口実に好きなだけド突けるんやで」「やります!!！」

「……てめえ、どついう意味だ」

成実はパンパンと軽快に手を叩いて、俺たちの注意を集める。

「はいじゃあ、皆やる気になったことやし。早速これから組み分けするでー！」

そう言えば組み分けて、どうすんだ……？

そんな俺の心の内の疑問を絶妙の機で読み取ったかのように成実は笑みを返し、「丹優、それじゃあ頼むわ」と後背を振り返った。

「はい」

丹優は腰を上げ縁側からこちらにやって来て、俺たちの前に両腕を淑やかに差し出す。

そこには、白く細い両の指で下端を覆われ、その先だけを覗かせる細長い紙が四枚。いわゆる定番のクジってやつだ。

この準備の良さ……さては成実、丹優にはあらかじめこの対戦の企画を話していたな。

「赤に塗ったものが二本、何も無い白のものが二本ありますから、

こちらでどうぞ」

「『せーの』で引いてなー」

俺たちは自然丹優の周りに集まり、それぞれ目についたクジの先を掴む。

納刀しているとはいえ剣片手に、四人の男女が真剣にクジ引きつて……傍からすればかなりシユールな「王様ゲーム」の図柄だったりするのか？

俺は特に深くは考えず、一番近くの手前のクジを選んだ。引く時に、外気に晒された丹優の手が悴んで寒そうだ、と脈絡なく考えてしまったり。

「それじゃあ、せーの！」

こうして、今回の「鬼打隊恒例紅白対戦」の組み分けが決まったのである。

471

紅組

張 周助

白組

俺 成実

「お、成実とだ」

「よろしゅうな、今日也。にしても、上手いこと張と分かれたな」



「オイてめえ、聞こえてっからな」

「うちと張だつて。この取り合わせはもう固定されてるのかなー？」  
「んなの知るか」

皆の反応をそれぞれに、成実がいつ用意したのか鳴子を通した赤い紐を張と周助に、白い紐を俺に手渡して、自身も腰帯に白のそれを結わえている。軽くアップして体を解していた俺も、倣って白紐をベルトに無造作に結びつけた。

「範囲はこの屋敷から半里内くらいにしようか」。それぞれ分かれて

「半時ほどしたら、わたしが合図しますので」

丹優が成実の言葉の最後を受けるようにして、そう言い終えた。

「はいじゃあ、一旦解散！」

先程と同じく小気味良く響く、手締めめの音。

「周助、場所を移すぞ。とつとと終わらせてえ」

「成実も今日也も、手加減しないからねー！」

革の覆いに仕舞われた大矛を肩に担いだ張と、俺たちに何とも無邪気な宣戦布告を告げた周助の両者は、踵を返し裏の木戸を抜けていく。

俺も手前の木蘭色の背中に続いて、張たちとは方向の違う玄関の門口へと歩み始めた。

何気なく振り返れば、丹優が「頑張つて下さいね」と優しく微笑んで小さく手を振っている。俺も「ああ」と頷いて、脇差の心任を持つ手を少し掲げてみせた。

ひとまずのところ、これにて組み分けは終了。

それから半時程経ち……。

雪曇りの霞んだ空気を貫く、鋭い疾風にも似た音が響き渡る。

これは……矢鳴り？ いつかテレビの時代劇で見た、射る時に音が響く。響を伴う鎗矢の　上空へと凜と射放つ、丹優の弓の音だった。

そしてこれが

始まりの合図だ。

「鬼打隊恒例紅白対戦」。

文字通り、鬼打隊の隊員たちを紅と白の二つの組に分けて対戦する刀試合のことだ。専ら屋外、それも山中で行われたらしいから、野試合にも似通っているのかもしれない。

ルールは至って簡単。

敵を地面に倒れ伏せさせる、または刀を取り上げて追い詰める。つまり戦闘を続行不能にさせ、先に敵全員を倒した組が勝利となる。その間、何をやっても構わない。

口にしてしまえば呆気ないくらいに単純なルールだ。  
ところが、蓋を開ければそんなに甘くはない。

これは一口に剣術の稽古云々の話ではない。鬼を想定した戦いの訓練、障害が多く視界も足場も不安定な地形への適応、そして相手の次の動きを読んで策を謀る戦略術の習得 戦闘に必要とされる全ての要素を統合したものだ。

加えて、「試合中は何をやっても構わない」という暗黙にもなっていない露骨なルールがそのハードさを物語る。今回は真剣不可つてことは、ひっくり返せばそれまでは真剣ありだったということでもある。

そのことに、少なくともこの時の俺はまだ気づいていなかった。

さあ、勝つのはどっちだ？

三十話 鬼打隊恒例紅白対戦 く組分け（後書き）

さあ、どっちが勝つんでしょうね。作者自身にも分かりません（オイ）

そして、第五話で出てきた慶史がくれた着物。そりゃあ麻の着物じやあ今日也寒いわな……；クールビズに最適の繊維だし（笑）

拙作にお付き合いいただき、ありがとうございました！  
また次話でお会いできるのを楽しみにしております^^

> i31980 | 2727 <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2915o/>

---

シノキズ - 織豊鬼伝 -

2011年10月13日09時58分発行